との山・アレキリ遺跡（第１～３次）発掘調査報告

～度会郡玉城町中角～

２０１８（平成30）年11月

三重県埋蔵文化財センター

作業風景（西から）

ＳＫ236遺物出土状況（南東から）

ＳＫ236出土遺物

372底部外面

緑釉陶器

485内面

ロクロ土師器

489

青磁

青磁

例　　言

1．本書は三重県度会郡玉城町中角に所在するとの山・アレキリ遺跡（第１～３次）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、平成27年度に実施した特定農業用管水路対策事業（度会郡玉城町城田・外城田地区）、平成28年度に実施した農業用施設アスベスト対策事業（度会郡玉城町中角地区）に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産部から執行委任を受けて実施した。調査にかかる費用は、文化庁国庫補助金を得て三重県教育委員会が一部を負担し、他は三重県農林水産部が負担した。

3．現地での調査は、平成27～28年度に三重県埋蔵文化財センターが主体となって行った。発掘を行った面積は1,593㎡である。

4．発掘調査は下記の体制で実施した。

第１次　調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課
主　幹　嶋田元彦　　主　査　萩原義彦　中井英幸
技　師　石井智大　渡辺和仁　小原雄也

第２次　調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課
主　幹　谷口一彦　　主　査　萩原義彦　中井英幸
主　任　渡辺和仁　　技　師　鐸木厚太　水谷侃司
研修員　村田雄紀
土工作業受託者　安西工業株式会社

第３次　調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課
主　幹　谷口一彦　　主　査　中井英幸
技　師　鐸木厚太　水谷侃司　研修員　村田雄紀

5．本書に掲載した写真の撮影、遺構・遺物の図面作成は、調査担当者・報告書作成者、業務補助員を中心に行った。
本書の執筆は、第Ⅰ章第１・２節を谷口一彦が、第Ⅳ章を石井智大が行い、それ以外を中井英幸が行った。全体の編集は、中井英幸が行った。

6．現地における発掘調査や整理作業、そして本報告書の作成にあたっては、地元の方々をはじめ、下記の方々や機関にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝いたしたい。　（五十音順、敬称略）
尾野善裕（奈良文化財研究所考古第二研究室長）　鈴木瑞穂（日鉄住金テクノロジー株式会社）
玉城町教育委員会　三重県総合博物館　山本直人（名古屋大学大学院人文学研究科教授）

7．との山・アレキリ遺跡の発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

凡　　例

1．本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「伊勢」（平成10年発行）、2006三重県共有デジタル地図（平成19年測図）などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（承認番号：平成30年４月５日付け　三総合地第１号）。

2．本書で用いた座標は、すべて世界測地系に基づいている。

3．本書で示す方位は、すべて座標北を用いている。

4．本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）1997『新版標準土色帖』（19版）日本色研事業株式会社に拠る。

5．本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。
　ＳＨ：竪穴建物　ＳＡ：柱列　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　ＳＺ：性格不明遺構　Ｐｉｔ：柱穴

6．遺物実測図の縮尺は基本的に1/4としているが、石製品・金属製品などについては1/2、1/3に、大型陶器については1/8にしたものもある。各遺物の縮尺は図中スケール及び図版キャプションにて明示している。

7．写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺構・遺物写真の縮尺は不同である。

8．との山遺跡とアレキリ遺跡は、元来、個別の埋蔵文化財包蔵地として把握されていたが、近年の分布調査によってほぼ一連の遺跡であることが分かった。本書においては、との山・アレキリ遺跡としてまとめて報告することとする。なお、今回の調査区では、調査区２・３・４・７・８がとの山遺跡に、調査区１・５・６がアレキリ遺跡にあたる。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1

第Ⅱ章　位置と環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序 …… 11
第１節　現地調査の方法 …… 11
第２節　基本層序 …… 14

第Ⅳ章　第１次調査 …… 15
第１節　調査区の位置と概要 …… 15
第２節　調査区１ …… 16
第３節　調査区２ …… 19
第４節　調査区３ …… 30
第５節　調査区４ …… 35

第Ⅴ章　第２・３次調査 …… 63
第１節　調査区の位置と概要 …… 63
第２節　調査区５ …… 63
第３節　調査区６ …… 86
第４節　調査区７ …… 99
第５節　調査区８ …… 110

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 130
第１節　分析の目的と分析方法 …… 130
第２節　分析結果および考察 …… 130

第Ⅶ章　調査のまとめと考察 …… 141
第１節　遺構の分布と変遷 …… 141
第２節　遺物について …… 146
第３節　結語 …… 155

図版目次

第Ⅰ章　はじめに

第１図　調査区位置図 …… 4

第Ⅱ章　位置と環境

第２図　との山・アレキリ遺跡周辺の土地条件図 …… 5

第３図　周辺遺跡位置図 …… 8

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序

第４図　調査区土層柱状図① …… 12

第５図　調査区土層柱状図② …… 13

第Ⅳ章　第１次調査

第６図　調査区１平面図 …… 16

第７図　調査区１遺構平面図・断面図 …… 17

第８図　調査区１遺物実測図 …… 18

第９図　調査区２平面図 …… 20

第10図　調査区２遺構平面図・断面図① …… 21

第11図　調査区２遺構平面図・断面図② …… 23

第12図　調査区２遺構平面図・断面図③ …… 24

第13図　調査区２遺構平面図・断面図④ …… 25

第14図　調査区２遺構平面図・断面図⑤ …… 26

第15図　調査区２遺物実測図① …… 27

第16図　調査区２遺物実測図② …… 29

第17図　調査区３平面図 …… 30

第18図　調査区３遺構平面図・断面図① …… 31

第19図　調査区３遺構平面図・断面図② …… 32

第20図　調査区３遺物実測図 …… 34

第21図　調査区４平面図① …… 36

第22図　調査区４平面図② …… 37

第23図　調査区４遺構平面図・断面図① …… 38

第24図　調査区４遺構平面図・断面図② …… 39

第25図　調査区４遺構平面図・断面図③ …… 41

第26図　調査区４遺構平面図・断面図④ …… 43

第27図　調査区４遺構平面図・断面図⑤ …… 44

第28図　調査区４遺構平面図・断面図⑥ …… 45

第29図　調査区４遺構平面図・断面図⑦ …… 47

第30図　調査区４遺構平面図・断面図⑧ …… 48

第31図　調査区４遺物実測図① …… 49

第32図　調査区４遺物実測図② …… 51

第33図　調査区４付近等遺物実測図 …… 53

第Ⅴ章　第２・３次調査

第34図　調査区５平面図① …… 64

第35図　調査区５平面図② …… 65

第36図　調査区５遺構平面図・断面図① …… 66

第37図　調査区５遺構平面図・断面図② …… 67

第38図　調査区５遺構平面図・断面図③ …… 68

第39図　調査区５遺構平面図・断面図④ …… 70

第40図　調査区５遺構平面図・断面図⑤ …… 71

第41図　調査区５遺構平面図・断面図⑥ …… 72

第42図　調査区５遺構平面図・断面図⑦ …… 73

第43図　調査区５遺構平面図・断面図⑧ …… 74

第44図　調査区５遺構平面図・断面図⑨ …… 75

第45図　調査区５遺構平面図・断面図⑩ …… 76

第46図　調査区５遺物実測図① …… 78

第47図　調査区５遺物実測図② …… 80

第48図　調査区５遺物実測図③ …… 81

第49図　調査区５遺物実測図④ …… 84

第50図　調査区６平面図 …… 87

第51図　調査区６遺構平面図・断面図① …… 88

第52図　調査区６遺構平面図・断面図② …… 89

第53図　調査区６遺構平面図・断面図③ …… 90

第54図　調査区６遺構平面図・断面図④ …… 91

第55図　調査区６遺構平面図・断面図⑤ …… 92

第56図　調査区６遺構平面図・断面図⑥ …… 93

第57図　調査区６遺構平面図・断面図⑦ …… 94

第58図　調査区６遺物実測図① …… 96

第59図　調査区６遺物実測図② …… 98

第60図　調査区７・８平面図 …… 100

第61図　調査区７遺構平面図・断面図① …… 101

第62図　調査区７遺構平面図・断面図② …… 102

第63図　調査区７遺構平面図・断面図③ …… 103

第64図　調査区７遺構平面図・断面図④ …… 104

第65図　調査区７遺構平面図・断面図⑤ …… 105

第66図　調査区７遺物実測図① …… 107

第67図　調査区７遺物実測図② …… 109

第68図　調査区７遺物実測図③ …… 110

第69図　調査区８遺構平面図・断面図① …… 111

第70図　調査区８遺構平面図・断面図② …… 112

第71図　調査区８遺構平面図・断面図③ ……113
第72図　調査区８遺物実測図① ……115
第73図　調査区８遺物実測図② ……116
第Ⅵ章　自然科学分析
第74図　蛍光Ｘ線分析結果① ……133
第75図　蛍光Ｘ線分析結果② ……134
第76図　蛍光Ｘ線分析結果③ ……135
第77図　蛍光Ｘ線分析結果④ ……136
第78図　蛍光Ｘ線分析結果⑤ ……137
第79図　蛍光Ｘ線分析結果⑥ ……138
第80図　蛍光Ｘ線分析結果⑦ ……139
第81図　蛍光Ｘ線分析結果⑧ ……140
第Ⅶ章　調査のまとめと考察
第82図　時期別遺構状況① ……142
第83図　時期別遺構状況② ……143
第84図　との山・アレキリ遺跡周辺の土師器台付埦・ロクロ土師器埦・黒色土器埦の出現と消滅 ……147
第85図　風炉の部位別文様 ……152

表　目　次

第１表　との山・アレキリ遺跡第１次調査出土遺物一覧表……55
第２表　との山・アレキリ遺跡第１次調査遺構一覧表……62
第３表　との山・アレキリ遺跡第２・３次調査出土遺物一覧表 ……118
第４表　との山・アレキリ遺跡第２・３次調査遺構一覧表 ……129

写真図版目次

巻頭図版１　作業風景（西から）
ＳＫ236遺物出土状況（南東から）
巻頭図版２　ＳＫ236出土遺物
緑釉陶器
ロクロ土師器
青磁
青磁
写　真　１　地元向け遺跡説明会の様子 …… 2
写真図版１　第１次調査 ……159
調査区１西部遺構掘削状況（北東から）
ＳＫ１・ＳＤ４（北西から）
ＳＤ６（北西から）
ＳＫ１・ＳＤ５（北西から）
ＳＤ４西側肩部土層断面（北西から）
調査区２ＳＤ７付近遺構掘削状況（北東から）
写真図版２　第１次調査 ……160
調査区２Pit52付近遺構掘削状況(南西から)
ＳＨ８（北東から）
ＳＨ８カマド完掘状況（北西から）
ＳＨ８東部土層断面（南東から）
ＳＨ９（北東から）
写真図版３　第１次調査 ……161
ＳＨ９西部土層断面（北西から）
ＳＨ９東部土層断面（北西から）
ＳＨ10東部（北西から）
ＳＨ10西部（北西から）
ＳＫ11土層断面（南東から）
ＳＫ16土層断面（南東から）
ＳＫ15（北東から）
写真図版４　第１次調査 ……162
ＳＫ15東側肩部土層断面（北西から）
ＳＫ15土師器甑出土状況（西から）
ＳＫ15土師器坏出土状況（南西から）
ＳＫ17土層断面（南から）
ＳＫ17（南西から）
ＳＤ18土層断面（南西から）
ＳＤ19土層断面（南東から）
写真図版５　第１次調査 ……163
ＳＤ22（東から）
ＳＤ23（北から）

ＳＫ24（東から）
ＳＫ25（南西から）
ＳＫ26（北東から）
ＳＤ28（東から）
ＳＤ29（東から）
ＳＤ30（北東から）
写真図版６　第１次調査 ……164
調査区４西端付近遺構掘削状況（北東から）
調査区４ＳＫ38付近遺構掘削状況（北東から）
調査区４ＳＡ33付近遺構掘削状況（北東から）
調査区４ＳＫ49付近遺構掘削状況（北東から）
写真図版７　第１次調査 ……165
ＳＨ32（東から）
ＳＨ32土層断面（東から）
ＳＡ33（北東から）
ＳＡ33Pit１土層断面（南東から）
ＳＡ33Pit２土層断面（南東から）
ＳＫ34（南東から）
ＳＫ35（北西から）
写真図版８　第１次調査 ……166
ＳＫ36（北西から）
ＳＫ38（西から）
ＳＫ41西側屑部（南東から）
ＳＫ42（北西から）
ＳＫ44（北から）
写真図版９　第１次調査 ……167
ＳＫ44土師器出土状況（南東から）
ＳＫ43（西から）
ＳＫ45土層断面（北西から）
ＳＫ46（西から）
ＳＫ47（北から）
ＳＫ48（北西から）
ＳＫ49・ＳＫ50（北西から）
ＳＫ51（北から）
写真図版10　第１次調査 ……168
ＳＫ53（東から）
ＳＫ55（北西から）
ＳＤ56（北から）
ＳＤ56土層断面（南西から）
ＳＤ57（北西から）
ＳＤ58（北西から）
ＳＤ59（西から）
ＳＤ60土層断面（北西から）
写真図版11　第１次調査 ……169
ＳＫ54・ＳＤ60（北東から）
Ｔ４Pit17山茶碗出土状況（西から）
Ｔ４Pit52須恵器甕出土状況（南東から）
ＳＤ61（西から）
写真図版12　第１次調査出土遺物① ……170
写真図版13　第１次調査出土遺物② ……171
写真図版14　第１次調査出土遺物③ ……172
写真図版15　第１次調査出土遺物④ ……173
写真図版16　第１次調査出土遺物⑤ ……174
写真図版17　第１次調査出土遺物⑥ ……175
写真図版18　第１次調査出土遺物⑦ ……176
写真図版19　第１次調査出土遺物⑧ ……177
写真図版20　第１次調査出土遺物⑨ ……178
写真図版21　第１次調査出土遺物⑩ ……179
写真図版22　第２・３次調査 ……180
調査区５-①全景（北東から）
調査区５-③全景（北東から）
調査区５-②全景（南東から）
写真図版23　第２・３次調査 ……181
調査区５-④全景（北西から）
調査区５-⑤全景（北西から）
調査区５-⑥全景（南東から）
調査区５-⑤・⑦全景（南西から）
写真図版24　第２・３次調査 ……182
ＳＨ210（北東から）
ＳＫ206・ＳＤ205（南西から）
ＳＫ208土師器甕出土状況（南から）
ＳＫ211（南西から）
ＳＫ213（南西から）
写真図版25　第２・３次調査 ……183
ＳＫ216土師器皿出土状況（南西から）
ＳＫ218（南西から）
ＳＫ219（南東から）

ＳＫ221（南西から）
ＳＫ226（南西から）
写真図版26　第２・３次調査 ……184
ＳＫ228（南西から）
ＳＫ229（南東から）
ＳＫ233（北東から）
ＳＫ235（北東から）
ＳＫ236土師器甕類出土状況（南から）
写真図版27　第２・３次調査 ……185
ＳＫ236土師器甕類出土状況（北西から）
ＳＫ236土師器甕類出土状況（南東から）
ＳＫ236（北東から）
写真図版28　第２・３次調査 ……186
ＳＫ236土層断面（南西から）
ＳＫ236土層断面（西から）
ＳＫ234青磁碗出土状況（東から）
ＳＤ201（北東から）
写真図版29　第２・３次調査 ……187
ＳＤ202土師器甕出土状況（北西から）
ＳＤ202・ＳＤ203（南東から）
ＳＤ204・Ｔ５Ｐｉｔ４（南西から）
ＳＤ207・Ｔ５Ｐｉｔ７（南西から）
ＳＤ209（南西から）
写真図版30　第２・３次調査 ……188
ＳＤ212（南西から）
ＳＤ214（南西から）
ＳＤ215（南東から）
ＳＤ217（南西から）
ＳＤ220・ＳＤ222（南東から）
ＳＤ224・ＳＤ225（南東から）
ＳＤ227（北西から）
写真図版31　第２・３次調査 ……189
ＳＤ230土師器鍋・山茶碗出土状況（東から）
ＳＤ230（南西から）
ＳＤ231・ＳＤ232（南西から）
Ｔ５Ｐｉｔ３土師器皿出土状況（北東から）
写真図版32　第２・３次調査 ……190
調査区６−①全景（北東から）
調査区６−②全景（北東から）
ＳＨ237（南西から）
写真図版33　第２・３次調査 ……191
ＳＨ237カマド跡（北西から）
ＳＨ240土層断面（ｂ’−ｂ間）
ＳＨ239（北東から）
ＳＨ240（南西から）
写真図版34　第２・３次調査 ……192
ＳＫ241南半（南西から）
ＳＫ241北半（南西から）
ＳＫ238（北西から）
ＳＫ242（南西から）
ＳＫ243・ＳＤ244（南西から）
ＳＫ245（南西から）
写真図版35　第２・３次調査 ……193
ＳＫ246・ＳＫ247（南西から）
ＳＤ248（南西から）
ＳＫ249土師器鍋出土状況（北東から）
ＳＤ250（南西から）
ＳＤ251（南西から）
写真図版36　第２・３次調査 ……194
調査区７−①全景（南西から）
調査区７−②全景（北西から）
調査区７−④西部遺構掘削状況（北西から）
調査区７−④東部遺構掘削状況（南東から）
写真図版37　第２・３次調査 ……195
調査区７−③全景（南東から）
ＳＫ252（東から）
ＳＫ253（東から）
ＳＨ303（東から）
写真図版38　第２・３次調査 ……196
ＳＫ254（東から）
ＳＫ255（北西から）
ＳＫ256土層断面（東から）
ＳＫ257土師器鍋出土状況（北西から）
ＳＫ258（南西から）
ＳＫ257（南東から）
ＳＫ301西半（北西から）

ＳＫ302（東から）
写真図版39　第２・３次調査 ……197
ＳＫ274（南西から）
ＳＫ276・ＳＫ277（南西から）
ＳＤ304（東から）
ＳＤ272（南東から）
ＳＤ273土層断面（南西から）
ＳＤ273（南東から）
ＳＤ275・ＳＫ276（南東から）
写真図版40　第２・３次調査 ……198
調査区８全景（北西から）
調査区８全景（南東から）
ＳＫ261・ＳＤ260（南東から）
ＳＫ263（東から）
ＳＫ264（南東から）
ＳＫ266・ＳＫ267（北西から）
写真図版41　第２・３次調査 ……199
ＳＫ268・ＳＫ269・ＳＤ270（北西から）
ＳＫ267土層断面（東から）
写真図版42　第２・３次調査 ……200
ＳＫ268土層断面（北東から）
ＳＤ259土師器鍋出土状況（北西から）
ＳＫ271（南東から）
ＳＤ259（南から）
ＳＤ262土師器鍋出土状況（北東から）
ＳＤ265（北西から）
ＳＤ262（北から）
写真図版43　第２・３次調査出土遺物① ……201
写真図版44　第２・３次調査出土遺物② ……202
写真図版45　第２・３次調査出土遺物③ ……203
写真図版46　第２・３次調査出土遺物④ ……204
写真図版47　第２・３次調査出土遺物⑤ ……205
写真図版48　第２・３次調査出土遺物⑥ ……206
写真図版49　第２・３次調査出土遺物⑦ ……207
写真図版50　第２・３次調査出土遺物⑧ ……208
写真図版51　第２・３次調査出土遺物⑨ ……209
写真図版52　第２・３次調査出土遺物⑩ ……210
写真図版53　第２・３次調査出土遺物⑪ ……211
写真図版54　第２・３次調査出土遺物⑫ ……212
写真図版55　第２・３次調査出土遺物⑬ ……213
写真図版56　第２・３次調査出土遺物⑭ ……214
写真図版57　第２・３次調査出土遺物⑮ ……215
写真図版58　第２・３次調査出土遺物⑯ ……216
写真図版59　第２・３次調査出土遺物⑰ ……217
写真図版60　第２・３次調査出土遺物⑱ ……218

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

本書で報告する調査は、平成27年度特定農業用管水路対策事業（度会郡玉城町城田・外城田地区）および平成28年度農業用施設アスベスト対策事業（度会郡玉城町中角地区）に伴って実施した、埋蔵文化財の記録保存にかかるものである。当事業の主体は、三重県農林水産部、実施機関は県伊勢農林事務所農村基盤室である。なお、本発掘調査に伴う埋蔵文化財の文化財保護法等にかかる諸通知は以下のように行っている。

＜文化財保護法等にかかる諸通知＞

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項通知
　平成27年９月11日付け　勢農第3218号（県教育長あて県知事通知）
・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査実施報告
　平成28年９月16日付け　教理第187号（県教育長あて埋蔵文化財センター所長報告）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定報告
　平成29年２月13日付け　教委第12−4424号（伊勢警察署長あて県教育長通知）

第２節　調査の経過

以下の調査日誌（抄）の通りである。

＜調査日誌（抄）＞

［平成28（2016）年］

９月27日　事前準備開始。調査前風景写真撮影。

10月４日　調査区５−①　重機によるアスファルト撤去。重機による表土掘削開始。遺構検出・掘削開始。調査前風景写真撮影（調査区６−①②・調査区７−②）。

５日　調査区５−①　表土掘削完了、遺構検出・掘削完了。

６日　調査区５−①　平面図および土層断面図完成。全景写真撮影。埋め戻し。

７日　調査区５−②　重機による表土掘削開始。

11日　調査区５−②　重機による表土掘削完了。遺構検出・掘削開始。

12日　調査区５−②　遺構検出完了、遺構掘削開始。

13日　調査区５−②　遺構掘削完了。全景写真撮影。

14日　調査区５−②平面図・土層断面図・遺物出土状況図完成。遺構写真撮影。埋め戻し開始。

17日　雨天のため休工。

（１）第１次調査

現地での立会調査は、平成27年11月26日より開始した。平成28年３月18日には、現地での調査を終了した。

現地調査の開始から終了までの調査進行の概略は、以下の通りである。

［平成27（2015）年］

11月２日　事前準備開始。

26日　調査区１発掘調査開始。

27日　調査区１発掘調査終了。

［平成28（2016）年］

１月13日　調査区２発掘調査開始。

28日　調査区２発掘調査終了。

２月１日　調査区３発掘調査開始。

３日　調査区３発掘調査終了。

２月15日　調査区４発掘調査終了。

３月18日　調査区４発掘調査終了。

（２）第２次調査

現地での発掘調査は、平成28年10月４日より開始した。12月21日には現地での作業を終了した。

現地調査の開始から終了までの調査進行の概略は、

18日　調査区５－② 埋め戻し完了。調査区５－②飛地および調査区５－③ 重機による表土掘削開始。

19日　調査区５－③ 重機による表土掘削完了。遺構検出・掘削開始。

20日　調査区５－③ 掘削完了。全景写真撮影。

21日　調査区５－③ 遺構写真撮影。平面図及び土層断面図完成。埋め戻し完了。

24日　調査区５－④ 重機による表土掘削開始。

25日　調査区５－④ 重機による表土掘削完了。遺構検出・掘削完了。全景写真撮影。調査区５－⑤⑥⑦ 重機によるアスファルト撤去。

26日　調査区５－④遺構写真撮影。平面図・土層断面図・出土状況図完成。調査区５－⑥ 重機による表土掘削開始。

27日　調査区５－④ 埋め戻し完了。調査区５－⑥ 重機による表土掘削完了。

28日　雨天のため休工。

31日　調査区５－⑥ 遺構掘削完了。全景写真撮影。

11月１日　調査区５－⑤ 重機による表土掘削完了。調査区５－⑥ 遺構写真撮影。平面図等完成。

２日　調査区５－⑤ 遺構検出・掘削開始。調査区５－⑥ 埋め戻し完了。

４日　調査区５－⑤ 遺構掘削完了。全景及び遺構写真撮影。

７日　調査区５－⑤平面図および土層断面図完成。埋め戻し開始。調査区５－⑤（一部）、⑥ （飛地）、⑦（一部）の表土掘削開始。

８日　調査区５－⑤（一部）、⑥ （飛地）、⑦（一部）の表土掘削完了、遺構検出。調査区６－①②重機によるアスファルト撤去。

９日　調査区５－⑤（一部）、⑥ （飛地）、⑦（一部）の遺構掘削。調査区５－⑦ 表土掘削完了。

10日　調査区５－⑤（一部）、⑥ （飛地）、⑦遺構掘削完了。全景写真撮影。ＳＫ236で遺物大量出土。平面図等完成。遺構写真撮影。

11日　調査区５－⑦平面図および土層断面図完了。ＳＫ236 遺物出土状況図作成開始。

14日　雨天のため休工。

15日　調査区５－⑤ 埋め戻し完了。調査区６－② 表土掘削完了。遺構検出完了。

16日　調査区５－⑥ ＳＫ236 出土状況図仮完了。調査区６－② 遺構掘削開始

18日　調査区６－② 遺構掘削完了。全景および遺構写真撮影。平面図および土層断面図完成。

19日　地元向け遺跡説明会開催（見学者数31人）

21日　調査区５－⑤ ＳＫ236 遺物取り上げ。調査区６－② 遺構掘削完了。

22日　調査区５－⑦ ＳＫ236ベルト撤去および重機による表土掘削完了。遺構掘削完了。平面図および土層断面図完了。全景写真撮影。埋め戻し完了。調査区６－② 平面図および土層断面図完成。埋め戻し開始。

25日　調査区６－② 埋め戻し完了。調査区６－① 重機による表土掘削完了。遺構検出・掘削開始。

30日　調査区６－① 遺構掘削完了。全景および遺構写真撮影。

12月１日　調査区６－①平面図・土層断面図・出土状況図完成。埋め戻し開始。

２日　調査区６－① 埋め戻し完了。調査区７・８ 重機によるアスファルト撤去。

５日　調査区７－② 重機による表土掘削完了。

６日　調査区７－① 重機による表土掘削開始。調査区７－② 遺構検出・掘削開始。

７日　調査区７－① 遺構検出・掘削完了。調査区７－② 遺構検出・掘削完了。全景および遺構写真撮影。

８日　調査区７－① 全景および遺構写真撮影。

写真１　地元向け遺跡説明会の様子

平面図および土層断面図完成。調査区７－②　平面図・土層断面図完成。調査区８　重機による表土掘削完了。

９日　調査区７－②　埋め戻し完了。調査区８　遺構検出・掘削開始。

12日　調査区７－①　埋め戻し完了。調査区７－③　重機による表土掘削開始。

13日　雨天のため休工。

15日　調査区７－③　重機による表土掘削完了。遺構検出・掘削開始。調査区８　遺構掘削完了。全景および遺構写真撮影。平面図および土層断面図完成。

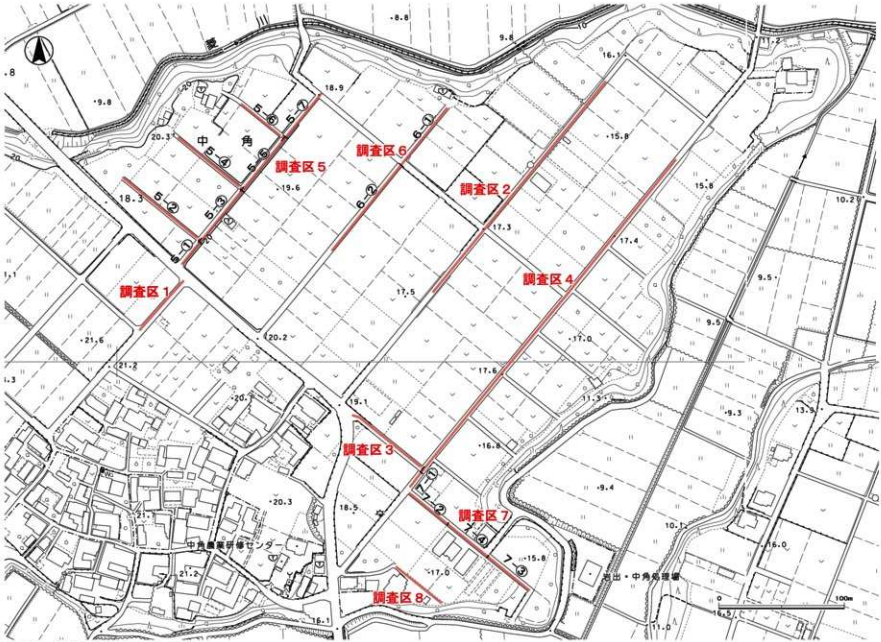
19日　調査区７－③　遺構掘削終了。全景写真撮影。平面図および土層断面図作成。調査区８埋め戻し完了。

20日　調査区７－③　埋め戻し開始。

21日　調査区７－③　埋め戻し完了。

（３）第３次調査

現地での立会調査は、平成29年１月20・21日の２日間で行った。また、３月17日には、追加作業としての測量を行った。

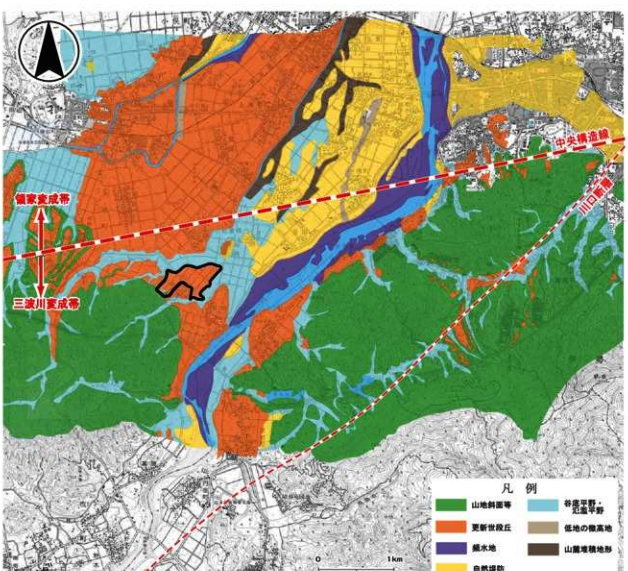


第１図　調査区位置図（1：3,000）

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

との山・アレキリ遺跡（１）は、三重県の南勢地域[1]にあたる度会郡玉城町中角に所在する。玉城町と隣接する市町は、伊勢神宮が所在する伊勢市、斎宮が所在する明和町、度会町および多気町で、この郡域一帯は律令制成立時より伊勢神郡（神三郡とも称される）として定められており、古くから伊勢神宮とのかかわりが強い地域である。中角集落は玉城町の南東、伊勢市との境となる宮川の左岸に位置する。現在、主な地場産業として黒ボク土の土壌特性を生かした花・穀物（イモ類）・米の栽培のほか、伝統工芸のしめ縄製造およびしめ縄用の稲・柑橘類・榊の栽培などが行われている。中角集落の地名はこの野を拓いた草分け的存在である田丸藩地士・中津氏に由来する。野（山裾の傾斜地）を拓いた中津氏にちなんでナカツノの地名となり、中角の字を当てたといわれている[2]。



＊国土地理院土地条件図を基に作成

第２図　との山・アレキリ遺跡周辺の土地条件図（１：50,000）

との山・アレキリ遺跡の北500m付近には、中央構造線が東西に走り、伊勢湾に沿って発達する伊勢平野はおよそこの辺りが南限にあたる。中央構造線以南の紀伊半島は、ほぼ全域を紀伊山地が占めており、さまざまな丘陵が接続しながら東西に延びている。三重県と奈良県との県境には紀伊山地の主峰の1つとして知られる大台ケ原山（1,696m）があり、そこに源を発する宮川は、伊勢湾へと流れ込む間に多くの支川を抱え込みながら大きく発達していく。宮川水系の豊富な水量は紀伊山地全体が日本有数の多雨地域にあたるためであるが、その水量の豊富さゆえ宮川上流域には日本三大渓谷の1つとも称される大杉谷があるように、その浸食活動によって険しい谷が多く発達し、中流域から下流域にかけて多くの谷底平野や氾濫平野がみられる。との山・アレキリ遺跡が所在するのは中角台地と呼ばれる舌状台地の上である。近隣の岩出台地・小社台地とは同じ標高（15～20m）であることからも、かつては一つの同じ河岸段丘であったものが、東の宮川、岩出と中角の間の立梅川、小社の南から東へ流れる汁谷川が長い年月の間に段丘を削り、今の地形になったと思われる[1]。なお、伊勢神宮内宮を流れる五十鈴川も、宮川水系の一つであり、伊勢神宮内宮は川の氾濫による水害の影響を受けない安定した土地として五十鈴川の河岸段丘上に選ばれて位置する。

中角台地の縁辺部は急な傾斜で氾濫平野と接続する。現在の県道717号岩出田丸線は、中角台地を切り込んで傾斜をなだらかにして設置され、現在の中角集落の外縁北側、中角台地の中央部を走る。

中央構造線に近接するこの地は、外帯である三波川変成帯の域内に位置する。三波川変成帯は海洋プレートおよびその付加帯の沈み込みに伴って、内帯である領家変成帯と中央構造線を境にして接触する。そのため、三波川変成帯の岩相としては海底で形成された堆積岩が低温高圧変成化してできた結晶片岩が多く見られる。しかしながら、紀伊半島および伊勢湾は三波川変成帯の地質構造において構造特性の転移点にあたるため[4]、その特性の違いから見られる岩石も異なる。中でも、宮川の右岸に沿って北東－南西に走る川口断層の以東と以西では差異が著しく、川口断層以東の伊勢・宇治・志摩では南部にいわゆる「みかぶ緑色岩類」とも称される緑色片岩が多く分布する一方、との山・アレキリ遺跡の所在する川口断層以西はいわゆる「三波川帯プロパー」な泥質片岩が多く分布する地域となる[5]。

註

1）三重県の伊勢湾および太平洋沿いは、一般的に鈴鹿市以北を北勢地域、津市周辺を中勢地域、松阪市以南を南勢地域と呼び分けられている。三重県はその3つの地域に、伊賀地域、東紀州地域の2つの地域を加えた5つの地域で構成されている。

2）玉城町史編纂委員会1995『三重県 玉城町史』上巻

3）註2）に同じ。

4）原郁夫ほか1977「三波川帯の構造運動」『三波川帯（秀敬編）』広島大学出版研究会

5）武田賢治ほか1977「三波川帯と秩父帯の構造的関係」『三波川帯（秀敬編）』広島大学出版研究会

第2節　歴史的環境

との山・アレキリ遺跡が伊勢平野のおよそ南限にあたることもあり、南方の山間部には周知の遺跡が希薄である一方、北方の平野部には、多くの周知の遺跡が集中している。ここでは、との山・アレキリ遺跡周辺地域を中心とした歴史的環境を時代別に概観してみたい。

（1）旧石器時代

県内の旧石器時代の遺跡は、今のところ約100箇所が確認されているが、その半数近くが、櫛田川と宮川とにはさまれた地域に集中している[1]。

アレキリ遺跡においても、1970年の分布調査によって、チャート製のナイフ形石器、舟底形石器、剥片が確認されている[2][3]。

その他、玉城町内において、岩出遺跡群角垣内地区（旧・蚊山遺跡角垣内地区）（2）[4]では16点のナイフ形石器が、同左郡地区では細石刃核1点が採集されている[5]。東海地方屈指の大規模遺跡とされるカリコ遺跡（3）においても、300点を超すナイフ形石器、舟形石器、掻器、尖頭器、細石刃、細石

刃核などが認められている[6]。ほかにも、上地山遺跡（4）（ナイフ形石器、舟底形石器、掻器、削器、楔形石器ほか出土）、鉄砲塚遺跡（5）（ナイフ形石器、石核・剥片ほか出土）、東伸遺跡（6）（ナイフ形石器、細石刃核、掻器、石核ほか出土）、西世古遺跡（7）（小型切出形のナイフ形石器、舟底形石器などが出土）、ミドロ遺跡（8）（大型の舟底形石器出土）、波瀬B遺跡（9）（ナイフ形石器出土）など、旧石器時代の遺跡が多く分布している[7][8]。

（2）縄文時代

草創期の遺物としては、岩出遺跡群角垣内地区（旧・蚊山遺跡角垣内地区）から草創期と推定される木葉形尖頭器、剥片が見つかっている[9]。また、茶臼山遺跡（10）では有舌尖頭器が出土しているが、この時期の土器は確認されていない[10]。仲野遺跡（11）でも草創期ごろを中心とする石器群が確認されているが、草創期土器群を共伴する例は認められていない[11]。

早期の遺跡としては楠ノ木遺跡（12）がある。楠ノ木遺跡では早期末の土器に伴ってチャート製、サヌカイト製の石器類が見つかっている[12]。

前期の遺跡は今のところ玉城町内には見つかっていない[13]。

中期の遺跡は、明豆遺跡（13）に断片をみるのみで、明豆遺跡自体は後期に降盛する。玉城町近隣においても、この時期をメインとする遺跡に目ぼしい例は見当たらない。

後期の遺跡としては、との山・アレキリ遺跡の西約100mに所在する明豆遺跡、さらに西約50mに狼谷遺跡（14）がある。また、との山・アレキリ遺跡の南東約750m、宮川を挟んだ対岸に佐八藤波遺跡（15）（伊勢市）が存在する。佐八藤波遺跡は縄文時代後半期に繁栄した集落遺跡と考えられる遺跡で[14]、後期初頭堀之内Ⅰ式や中津式類似の土器を最古とし、加曽利B式類似の土器が多く出土している[15]。石棒・岩偶も認められることから比較的安定した集落と予想され[16]、後期を中心とした宮川右岸側の拠点的遺跡と考えられる[17]。宮川右岸側には、この佐八藤波遺跡を核としたキャンプサイト的な様相を示す遺跡として、中ノ越遺跡（16）、中新田遺跡（17）（ともに伊勢市）などがある[18]。

晩期の遺跡については、玉城町内においては、上の山遺跡（18）で晩期末葉の突帯文土器片[19]、酒部屋西遺跡（19）にて小片がわずかに確認されているのみである[20]。

（3）弥生時代

弥生時代の遺跡は、前・中期については希薄な状況である[21]。前期の遺構・遺物が見られる遺跡としては狼谷遺跡、上の山遺跡、仲垣内遺跡（20）が挙げられる。中期においては、月よべ遺跡（21）、離宮院跡遺跡（22）、小社遺跡（23）で後半の土器が発見されているのみである[22][23]。

後期になると遺跡が急激に増加する。特に、汁谷川左岸の中位段丘である小社台地上には、上地山遺跡、ウエ松遺跡（24）、小社遺跡、中楽山遺跡（25）（伊勢市）、野垣外遺跡（26）（伊勢市）、といった大規模な遺跡が帯状に並ぶ[24]。

上地山遺跡は、との山・アレキリ遺跡の西約500mの場所に位置し、竪穴建物が4棟のほか、サヌカイト、チャート、下呂石、貢岩製の石器も多数見つかっている[25]。

小社遺跡は、との山・アレキリ遺跡の北約500m、現在の下外城田小学校周辺にあたり、22棟の竪穴建物、2棟の掘立柱建物が見つかっている[26]。

中楽山遺跡、野垣外遺跡では、竪穴建物や方形周溝墓が検出されている。

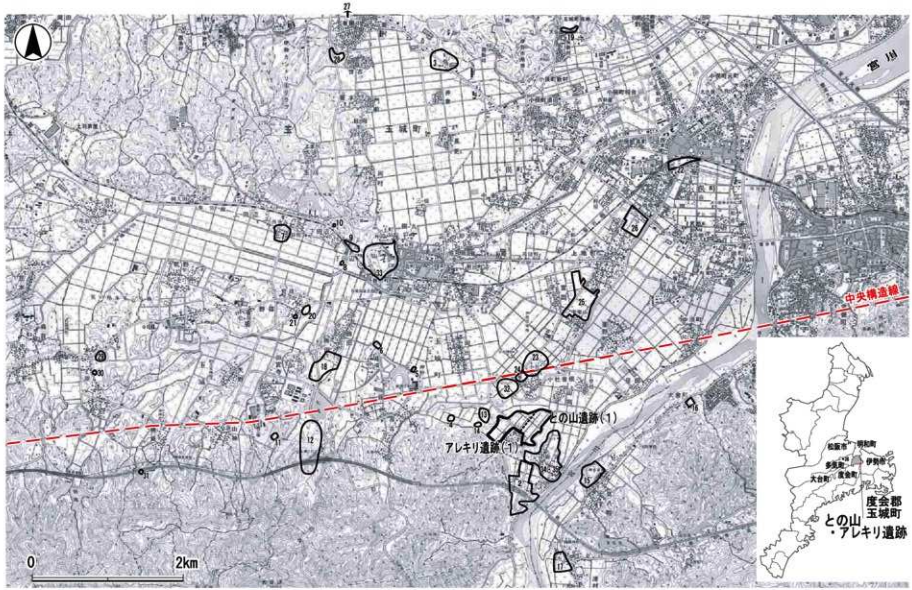
宮川右岸の佐八藤波遺跡では、弥生時代中期中葉の土器まで確認されているが、右岸側では、大規模な遺跡はない[27]。

（4）古墳時代

との山・アレキリ遺跡の南に所在する岩出台地上の左郡古墳群では、5世紀末頃から7世紀前半に築かれたと思われる古墳が23基（円墳14基、方墳7期、墳形不明2基）確認されている[28]。

（5）飛鳥時代～平安時代後期

古代から鎌倉時代にかけて、伊勢国内の櫛田川以南のほとんどの地域は神宮領となっており、伊勢神宮の強い影響下に置かれていた。その中でも特筆す



1 との山・アレキリ遺跡　2 岩出遺跡群　3 カリコ遺跡　4 上地山遺跡　5 鉄砲塚遺跡　6 東伸遺跡　7 西世古遺跡　8 ミドロ遺跡　9 波瀬B遺跡　10 茶臼山遺跡
11 仲野遺跡　12 楠ノ木遺跡　13 明豆遺跡　14 狭谷遺跡　15 佐八原波遺跡　16 中ノ越遺跡　17 中新田遺跡　18 上の山遺跡　19 酒部屋西遺跡　20 仲垣内遺跡
21 月よべ遺跡　22 屋宮院跡遺跡　23 小社遺跡　24 ウエ松遺跡　25 中楽山遺跡　26 野垣外遺跡　27 北野遺跡　28 西垣内遺跡　29 原古窯址群　30 市寄古窯跡
31 泉貫窯跡　32 上黒土遺跡　33 田丸城跡　34 岩出城跡　35 岩出城下町跡　36 新徳寺遺跡

第３図　周辺遺跡位置図（１：50,000）

べきものに明和町の国史跡斎宮跡がある。また、玉城町の北に所在する有爾郷は、土師御薗として神領とみなされ、有爾郷で作られた土師器類は伊勢神宮に奉納されてきた。そのため、古代から土師器・須恵器を作る職業集団の住む集落が多数あったとされる。有爾郷内の北野遺跡（27）（明和町）では、228基を超える奈良時代の土師器焼成坑が見つかっている[28]。奈良時代の土師器焼成坑が見つかった有爾郷内の西垣内遺跡（28）は、土器原料埴（粘土）を取る清浄な土取場があったとされる[30]。

また、との山・アレキリ遺跡の西約５kmのところには、須恵器を焼いたとされる窯跡が多数見つかっている。原古窯址群（29）では飛鳥時代～奈良時代の窯が11基、市斉古窯跡（30）では同時代の窯が数基、泉貫窯跡（31）では10世紀前半ごろの窯が１基見つかっている[31]。これらの地域から多気町野中、森庄、笠木、相可にかけては、「外城田窯跡群」と総称されており、当時この地域は南勢地域最大の須恵器生産地となっていたといわれている[32]。

しかしながら、玉城町は明和町の斎宮跡とも地理的に近い関係にあるものの、奈良時代・平安時代の遺構の発見は少なく、その時代の集落の実態はよくわかっていない[33]。

この時期の町内の代表的な遺跡としては、上の山遺跡で、平安時代の掘立柱建物２棟と鎌倉時代の掘立柱建物３棟などが見つかっている[34]。また、楠ノ木遺跡では、平安時代から室町時代後半にかけての掘立柱建物20棟、井戸８基、中世墓12基などの遺構が見つかっている[35]。

（６）平安時代末期～戦国時代

平安時代末から室町時代にかけて、との山・アレキリ遺跡の南に近接する岩出台地には、神宮祭主の大中臣氏の祭主館があったとされる[36][37]。その岩出地区では、岩出遺跡群において平安時代から室町時代前半にかけて存続した集落の展開が明らかになってきている[38]。

また、との山・アレキリ遺跡の北約300m、小社台地上には上黒土遺跡（32）があり、鎌倉時代前半のものと思われる区画溝や掘立柱建物数棟が見つかっている[39]。

室町時代になり、1336年に田丸城（33）が築城され、北畠氏の拠点の一つとなる。この地における北畠氏の影響力が大きくなるに従って、神領は次第に侵食され、伊勢神宮の力は急速に衰えていく。南北朝時代のはじめ、この岩出から小社にかけては戦場となったとされる[40]。

戦国時代には、動乱の中、岩出城（34）が築かれている。その場所は祭主の館があった場所とされる。岩出城は、中世後期に北畠氏の拠点としていた田丸城の特性を継承する形で機能していたとみられる。そして、最終的には総構えを持つ城下町（岩出城下町跡（35））として成立したと考えられる[41]。しかしながら、関ヶ原の合戦の年には廃城となり、当該地域の中心は田丸城へと移ることになる。岩出城の歴史は25年間と短いが、第二次大戦前まで城址の跡をとどめていた[42]。

註

1）三重県埋蔵文化財センター1993『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　第６分冊　蛟山遺跡左部地区』
2）玉城町史編纂委員会1995『三重県 玉城町史』上巻
3）玉城町教育委員会1985『上地山遺跡発掘調査報告書』
4）岩出地区内の遺跡に関しては、過去には蛟山遺跡として報告書が刊行されたが、岩出地区にある遺跡が地区全域に広がっていることと、遺跡が時代的にも複合的にわたることから1996年当センター刊行の『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』以降は、遺跡名称を次のようにして整理して把握することとしている。
＜岩出地区内遺跡群＞
岩出遺跡群角垣内地区（旧石器）
左部古墳群（古墳）
岩出遺跡群（中世～近世）
岩出城跡・岩出城下町跡（近世初頭）
（三重県埋蔵文化財センター2006『岩出遺跡群（第５・７・８次）発掘調査報告』より）
5）註１）に同じ。
6）註２）に同じ。
7）註２）に同じ。
8）註３）に同じ。
9）三重県埋蔵文化財センター2006『岩出遺跡群（第５・７・８次）発掘調査報告』
10）三重県埋蔵文化財センター1996『岩出地区内遺跡群発掘調査報告　－度会郡玉城町岩出所在、ケカノ辻・

角垣内・蚊山地区の調査－』
11）註２）に同じ。
12）三重県埋蔵文化財センター1991『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　第３分冊　楠ノ木遺跡』
13）註２）に同じ。
14）伊勢市2012『伊勢市史』
15）伊勢市教育委員会1990『佐八藤波遺跡発掘調査報告』
16）註15）に同じ。
17）三重県埋蔵文化財センター1992『上の山遺跡発掘調査報告』
18）註15）に同じ。
19）玉城町教育委員会1995『上ノ山遺跡発掘調査報告』
20）註２）に同じ。
21）三重県埋蔵文化財センター1992『波瀬Ｂ遺跡発掘調査報告』
22）註21）に同じ。
23）三重県教育委員会1979「度会郡玉城町月よべ遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
24）註３）に同じ。
25）註２）に同じ。
26）註２）に同じ。
27）註15）に同じ。
28）註９）に同じ。
29）三重県埋蔵文化財センター2018『安養寺跡（第８次）・古堀遺跡（第９次）・北野遺跡（第９次）・露越遺跡（第10次）発掘調査報告』
30）註２）に同じ。
31）三重県埋蔵文化財センター1992『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　第２分冊　泉貢窯跡・山神城跡』
32）註２）に同じ。
33）註２）に同じ。
34）註17）に同じ。
35）註12）に同じ。
36）註２）に同じ。
37）伊藤裕偉1998「中世岩出の機能と位相」『Mie History』vol. 9　三重歴史文化研究会
38）三重県埋蔵文化財センター1992『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　第４分冊　蚊山遺跡所り垣地区』
39）註２）に同じ。
40）註２）に同じ。
41）瀬古古久ほか1976「岩出の遺跡」『歩跡』第３号　皇学館大学考古学研究会
42）註２）に同じ。

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序

第１節　現地調査の方法

（１）調査区の設定

調査区は農業用水管の架け替え工事によって影響を受ける範囲を中心に設定した（第１図）。特徴としては農業用水管を敷設する箇所の掘削となるため、幅１ｍ前後の細長い調査区を農地改良区全域に亘って広く設定するというものである。

第１次調査については、工事立会調査によって調査を行った。調査区名は便宜上まとまりごと４つに分け、調査区１～４を設定した。面積816㎡（幅1.2m、総延長680m）である。

第２次調査については、範囲確認調査において遺構・遺物が確認された範囲を中心に、736㎡（幅0.9～1.4m、総延長557.1m）の調査区を設定した。調査区名は調査区５～８とし、各調査区の内部は①、②、③…と枝番を付して管理した。

第３次調査については、第２次調査における調査区７－②と調査区７－③区の間の総面積41㎡（幅１m、総延長41m）の区間の工事に関して立会調査するもので、調査区７－④として設定した。

（２）グリッドの設定

第１次調査および第３次調査については、工事の進捗に合わせて１日当たり８～20mを調査した。工事立会調査であったためグリッドについては設定せず、基準ピンを調査区の延長方向に20m間隔でアスファルト上に設置し、それを基にしながら記録を進めていった[1]。

第２次調査については、調査区を設定した後に調査区をさらに５mずつに区切ってグリッドを設定した。各グリッドには、発掘調査の進行方向に合わせて、ア、イ、ウ…とカタカナを補助記号として付与し、それぞれのグリッド名とした（例：５－①ア）。表土掘削および遺構検出段階において出土した遺物はグリッドごとに取り上げた。

（３）掘削

現地調査では、まずアスファルト・砕石・耕作土の表土を重機で除去し、遺構面まで掘り下げた。掘削土は調査区脇の土砂置場に置くようにし、掘削土の量が土砂置場に比して多い場合には近くの土砂置場までダンプトラックで一時的に搬出した。その後、人力によって順次遺構の検出作業を行った。遺構検出後、それぞれの遺構を人力で掘削した。

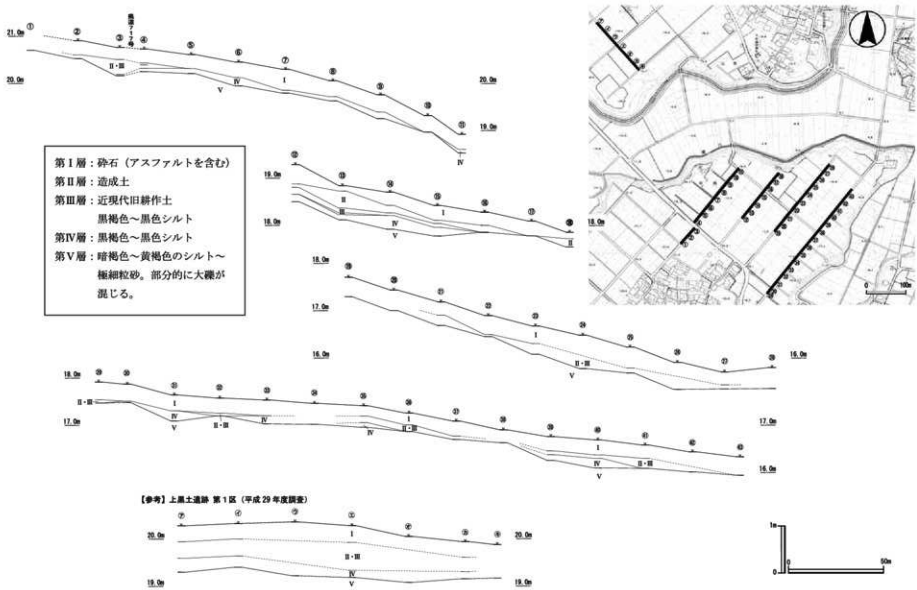
なお、第２次調査については調査区全体の遺構掘削および記録作業が終わった後に埋戻し作業を行ったが、第１次調査および第３次調査については工事立会調査であるため、当日の用水管布設作業までの時間を利用して遺構掘削および記録作業を行い、その日のうちに布設・埋め戻しを完了させた。よって調査区全景の写真撮影はできなかった。

（４）遺構番号の付与

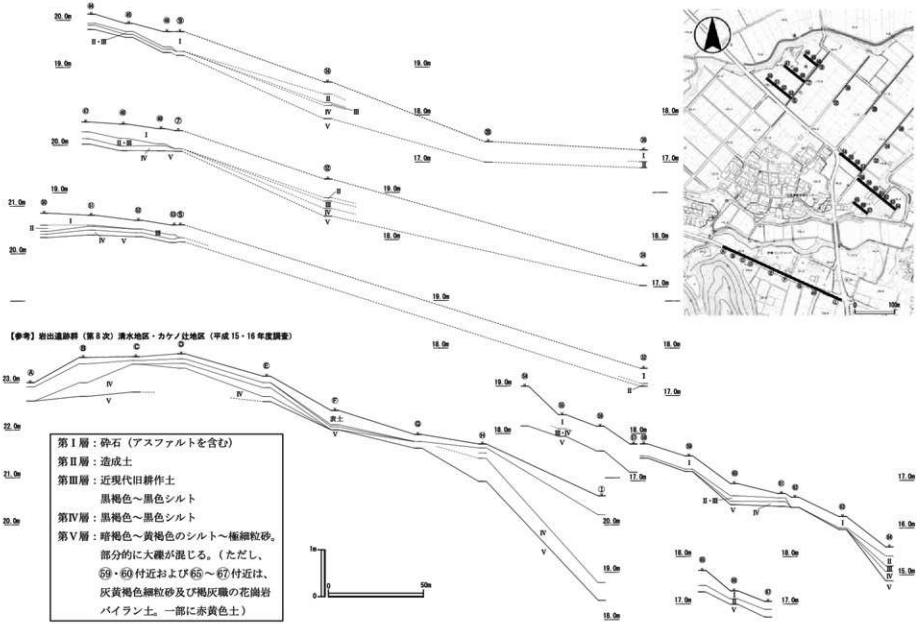
第１次調査においては現場での調査の効率を考慮し、現地では遺構別に番号を付けて管理した。表記時には遺構番号の前に凡例で示したＳＨ、ＳＫ、ＳＤなどの遺構の略称を付した。今回、報告書にまとめるにあたり、通し番号での管理に変更するため、遺構番号の変更を行っている。変更については遺構一覧表（第２表）にて示している。

第２次および第３次調査においては、すべての種類の遺構に通し番号で遺構番号を付与した。第１次調査から第３次調査のどの調査において検出された遺構なのかが分かるように、第２次調査においては201から順に200番台からの番号を、第３次調査においては301から順に300番台からの番号を付与することにした。

ピットの遺構番号は調査区ごとの通し番号としている。名称としては番号の前に調査区名略称の「Ｔ○」をつけて表記した（例：Ｔ５Ｐｉｔ１）。ただし、便宜上、遺構図内および図版内においては「Ｐｉｔ○」、調



第４図　調査区土層柱状図①（平面図１：10,000、断面図水平1：2,000、垂直１：80）



第５図　調査区土層柱状図②（平面図１：10,000、断面図水平1：2,000、垂直１：80）

査区平面図においては「P○」と記している。

（5）写真撮影

遺構および遺物の写真撮影は、すべてデジタルカメラを用いた。使用したカメラはニコンD800E、ニコンD3300である。補助的にコンパクトデジタルカメラ（オリンパスTG-835）を用い、主に日常的な調査記録に活用した。

註

1）ただし、調査区２～４では、基準ピンの座標測量を行う前に、工事によってピンがほとんど撤去されてしまったため、正確な座標の記録をとることができなかった。調査区全体図に示した座標は、メモや写真などを利用して復元したものである。

第２節　基本層序

当地の基本層序は、以下の通りである。

第Ⅰ層：アスファルト下の砕石

第Ⅱ層：造成土

第Ⅲ層：近現代旧耕作土と思われる黒褐色～黒色シルト。部分的に２～３層存在する。

第Ⅳ層：いわゆる「黒ボク土」とされる黒褐色～黒色シルト。（第Ⅳ層と第Ⅴ層は漸移的に土色が変化していく）

第Ⅴ層：暗褐色～黄褐色のシルト～極細粒砂。部分的に大礫が混じる。ただし、調査区７－②の一部および調査区８においては、灰黄褐色細粒砂および褐灰色の花崗岩バイラン土で、一部にラテライト性土壌に似た赤黄色土[1]が見られる。（遺構検出層・基盤層）

今回の調査では、第Ⅳ層と第Ⅴ層との境を遺構検出面とした。本来なら、第Ⅳ層上が遺構面にあたるが、第Ⅳ層と遺構埋土の土色が類似しているため遺構検出が難しく、正確な遺構検出を行うために土色の違いが明確になるこの層上を検出面とした。

との山・アレキリ遺跡は、舌状の段丘（中角台地）上に所在しており、舌状の先端部にあたる北東方向にむけて、緩やかな傾斜が見られる。近現代の大規模な圃場整備によって削平されているものの、いまだ緩やかな傾斜が残っている。

地形の形成としては、中角台地と近隣の小社台地・岩出台地は、一連の河岸段丘として同時期に形成されており、その後の河川の開析により各台地に分断され現在に至る。

註

1）日本の赤黄色土は、著しい風化作用と洗脱作用によって生成され、その生成過程から見て、土壌分類学上、湿潤温帯の褐色森林土と、熱帯・亜熱帯のラテライト性土壌の中間的位置を占める土壌型としてみられ、菅野一郎により「赤黄色土」と命名されている。（松井健1976「赤黄色土」『アーバンクボタ』No.13　株式会社クボタ）

第Ⅳ章　第１次調査

第１節　調査区の位置と概要

第１次調査では、大きく分けて４箇所で工事に伴って調査を行った。それぞれの工事箇所を調査区とし、調査区１～４と呼称する[1]。

調査区１　第１～３次調査の中で、最も西側に位置する調査区である。県道717号から西へのびる道路敷の北側部分にあたる。

東西方向に直線的にのびる調査区で、面積は62.4㎡（延長52m、幅1.2m）である。

地表下0.4～0.5mほどで遺構が検出された。検出された遺構としては、土坑、溝、ピットがある。

全体的にピットは少なく、深い土坑や溝が目立つ。

調査区２　県道717号から東へのびる道路敷の南側部分に位置する。

東西方向に直線的にのびる調査区で、途中、既設管等のため掘削できなかった部分もあるが、それも含めて面積273.6㎡（延長228m、幅1.2m）である。

地表下0.4～0.5mほどで遺構が検出された。遺構検出面の標高は西へ行くほど高くなり、東端と西端とでは1.9mほどの差がある。

検出された遺構としては、竪穴建物、土坑、溝、ピットがある。遺構密度は比較的高い。ピットには柱痕らしいものが認められたものもあり、掘立柱建物を構成する可能性もあるが、調査区の幅が狭いため、確認することができなかった。

なお、先行して行った範囲確認調査では当該調査区より西側と東側では遺構が確認できなかったため、その範囲については調査対象外としたが、実際に調査区の東西両端付近では遺構密度が薄くなる状況が確認できた。

調査区３　県道717号から南へ下る道路敷の東側部分に位置する調査区である。

南北方向にのびる調査区で、北部で西に向かって屈曲しており、面積は84㎡（延長70m、幅1.2m）である。南端は調査区４に接しているが、調査区４とは個別に調査を行ったことや、境界付近に撹乱が存在したことなどから、両調査区間の遺構の連続性は十分に確認できなかった。

調査区南部では地表下0.5mほどで遺構が検出されたが、北部では道路建設等に伴う造成土が厚く、遺構検出面は地表下１mほどと深い。

検出された遺構としては、土坑、溝、ピットがある。深い土坑や溝が目立つが、調査区北部では、やや遺構密度が低い。

調査区４　との山・アレキリ遺跡の遺跡範囲の南縁部付近に位置する調査区で、東西方向にのびる道路敷の北側部分にあたる。

東西方向に直線的にのびる調査区で、面積は396㎡（延長330m、幅1.2m）である。西端は第２次調査の調査区７－①へと連続する。

地表下0.3～0.5mほどで遺構が検出された。遺構検出面の標高は西へ行くほど高くなり、東端と西端とでは1.4mほどの差がある。

検出された遺構としては、竪穴建物、柱列、土坑、溝、ピットなどがある。調査区東端や、西端から東へ90m付近では若干遺構密度が低いが、全体的に遺構密度は高く、多くの遺構が検出されている。ピットには掘立柱建物を構成する可能性があるものもみられたが、調査区の幅が狭いため、確認することができなかった。また、深い土坑や溝も多い。

この調査区では、縄文時代の遺構が検出されたことが特筆される。縄文時代の遺構は土坑２基で、いずれも調査区東部で検出された。他に、縄文時代の遺構の可能性がある落ち込みも検出されている。第２・３次調査も含め、他の調査区では、確実な縄文時代の遺構は検出されていない。

註

１）調査区の番号は、調査を行った順に付している。調査時には「T１～４と呼称していたが、報告にあたって「T」を「調査区」に変更しただけで、番号は変更していない。

第２節　調査区１

（１）遺構

①土坑

ＳＫ１（第７図）　調査区中央部で検出された、長径0.6m以上、短径0.6mほどの不整形な楕円形の土坑である。深さは0.4mほどで、壁面がややオーバーハングする袋状の土坑である。ＳＤ４埋没後に、ＳＤ４肩部を一部壊す形で掘削されている。

埋土中からは、土師器の皿や鍋などが出土した。出土遺物から、鎌倉～室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ２（第７図）　調査区中央部で、ＳＤ５と重複して検出された、長径0.7m以上、短径0.7mほどの土坑である。深さは0.6mほどで、壁面がややオーバーハングする袋状の土坑である。ＳＫ１と似た形態の土坑であるが、深さはＳＫ２の方が深い。

埋土中からは、土師器の皿や鍋、山茶碗が出土した。出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ３（第７図）　調査区東端部で検出された土坑である。径１mほどの円形の土坑と考えられるが、北側は調査区外にのびており、また東側は既設の排水溝によって撹乱を受けているため、全体の形状は不明である。深さは0.6mほどである。土層断面図は作成していないが、埋土はＳＫ１・２と類似する。

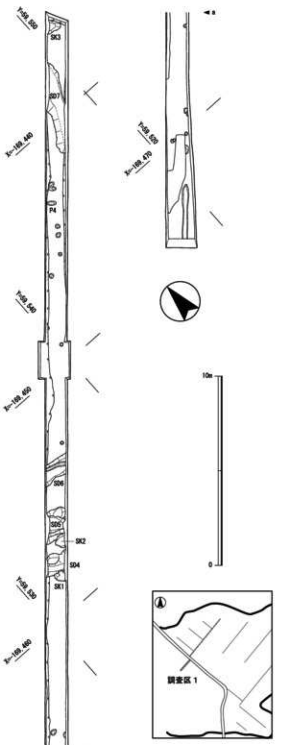
埋土中からは、土師器の皿や鍋が出土した。出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

②溝

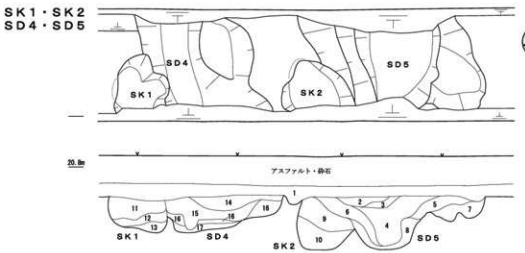
ＳＤ４（第７図）　調査区中央やや西よりで検出された、調査区を横断する溝である。ＳＫ１により、肩部を一部壊されている。幅約1.3mで、調査区内では長さ1.2mほどを検出した。深さは0.6mほどである。

埋土中からは、山茶碗が出土している。出土遺物から、鎌倉時代の遺構と考えられる。

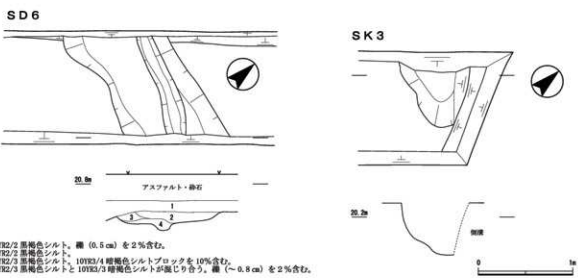
ＳＤ５（第７図）　ＳＤ４の東側で検出された、調査区を横断する溝である。溝ではなく、大型の土坑の可能性もある。ＳＫ２埋没後、その上部を壊す形で掘り込まれている。幅約1.6mで、調査区内では長さ1.2mほどを検出した。深さは0.6mほどで、両肩部はやや段状に浅くなっている。



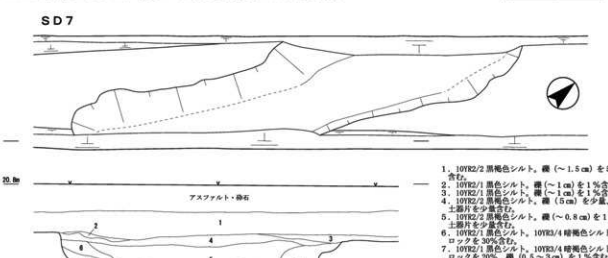
第６図　調査区１平面図（１：200）



1．10YR2/2 黒褐色シルト。礫（～0.5cm）を2％含む。
2．10YR2/1 黒色シルト。［SD5埋土］
3．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロックを10%含む。［SD5埋土］
4．10YR2/1 黒色シルト。土器片を含む。［SD5埋土］
5．10YR2/1 黒色シルト。礫（～0.4cm）を1％含む。［SD5埋土］
6．10YR2/1 黒色シルト。土器片を含む。［SD5埋土］
7．10YR2/3 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロックを5％含む。［SD5埋土］
8．10YR2/3 黒褐色シルトと 10YR4/6 褐色シルトが混じり合う。礫（～0.8cm）を1％含む。［SD5埋土］
9．10YR2/1 黒色シルト。礫（～1.5cm）を1％、土器片を少量含む。［SK2埋土］
10．10YR2/1 黒色シルト。礫（～1cm）を1％、土器片を少量含む。［SK2埋土］
11．10YR2/1 黒色シルト。［SK1埋土］
12．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロックを40%含む。［SK1埋土］
13．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロックを10%含む。［SK1埋土］
14．10YR2/1 黒色シルト。土器片を少量含む。［SD4埋土］
15．10YR2/2 黒褐色シルト。［SD4埋土］
16．10YR2/2 黒褐色シルトと 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～褐細粒砂が混じり合う。［SD4埋土］
17．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロックを5％含む。［SD4埋土］



1．10YR2/2 黒褐色シルト。礫（0.5cm）を2％含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。
3．10YR2/3 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロックを10%含む。
4．10YR2/3 黒褐色シルトと 10YR3/3 暗褐色シルトが混じり合う。礫（～0.8cm）を2％含む。



1．10YR2/2 黒褐色シルト。礫（～1.5cm）を5％含む。
2．10YR2/1 黒色シルト。礫（～1cm）を1％含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。礫（～1cm）を1％含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト。礫（5cm）を少量、土器片を少量含む。
5．10YR2/2 黒褐色シルト。礫（～0.8cm）を1％、土器片を少量含む。
6．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロックを30%含む。
7．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロックを30%、礫（0.5～3cm）を1％含む。
8．10YR2/3 黒褐色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトが混じり合う。礫（0.5～4cm）を少量含む。

第7図　調査区1遺構平面図・断面図（1：40）

埋土中からは、土師器の小皿や皿、鍋が出土している。出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

ＳＤ６（第７図）　調査区中央で検出された、ほぼ東西方向へのびる溝である。幅約１ｍで、調査区内では長さ1.8mほどを検出した。深さは0.1～0.2mほどと浅く、底にはさらに細い溝が認められる。

埋土中からは、土師器の鍋や山茶碗が出土した。出土遺物から、鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＤ７（第７図）　調査区東部で検出された、南北方向にのびる溝である。幅約１ｍで、調査区内では長さ4.8mほどを検出した。深さは約0.5mあり、断面形が台形をなす、しっかりとした溝である。埋土の状況からは、滞水や流水があったとは考えがたい。また、第５層中には大型の礫が複数含まれており、中には長さ40cm以上ある先端が尖った片岩の礫もあった。人為的に入れられたものと思われるが、加工痕や使用痕はなく、意図的に配置された状況も認められなかった。

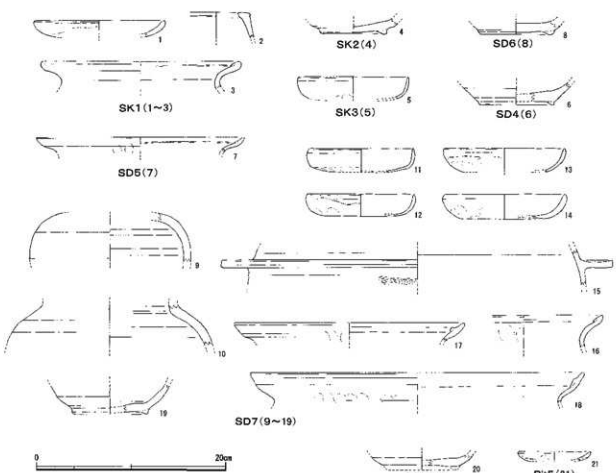
埋土中からは、土師器の皿や羽釜、鍋、山茶碗など多量の遺物が出土したが、小片が多く、図化できたのはごく一部のみである。最も多く出土しているのは室町時代の土師器であり、その頃の遺構と思われる。奈良～平安時代のものと思われる須恵器や、鎌倉時代の山茶碗なども出土しているが、小片で量的にも少ないため、埋没時の混入と思われる。

（２）遺物

①土坑出土遺物

ＳＫ１出土遺物（第８図１～３）　１～３は土師器である。

１は皿で、器壁はやや厚く、口縁端部は丸く収める。外面には粘土接合痕が残る。２は羽釜の口縁部



第８図　調査区１遺物実測図（１：４）

片で、口縁端部は面をなす。3は鍋で、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。いずれも13～14世紀代のものと思われる。

ＳＫ２出土遺物（第８図４）　４は山茶碗である。底部片で、底部外面には糸切り痕が残る。

ＳＫ３出土遺物（第８図５）　５は土師器皿である。器壁は薄く、底部から体部にかけて緩やかに内湾する。14世紀代のものと思われる。

②溝出土遺物

ＳＤ４出土遺物（第８図６）　６は山茶碗である。底部は厚く、底部と体部との境は屈曲する。13世紀代のものと思われる。

ＳＤ５出土遺物（第８図７）　７は土師器鍋の口縁部片である。口縁端部は内側に折り返し、ナデ付けて肥厚させている。14世紀後半のものと思われる。

ＳＤ６出土遺物（第８図８）　８は山茶碗である。底部の小片で、底部外面には糸切り痕が残る。

ＳＤ７出土遺物（第８図９～19）　９・10は須恵器である。９は長頸壺の肩部の破片と思われる。かなり丸みを帯びる。10は壺の肩部片で、内面には墨状の黒色物が付着している。９は８～９世紀代のものと思われる。

11～18は土師器である。11～14は皿で、いずれも器壁が薄く、底部から体部にかけて緩やかに内湾している。12や14は口縁部外面に明瞭なヨコナデが施されている。15は羽釜の鍔部片である。16～18は鍋で、いずれも口縁端部を内側に折り返し、ナデ付けて肥厚させている。土師器はすべて14世紀代のものと思われる。

19は山茶碗である。底部内面には使用による摩耗が認められる。

③ピット出土遺物

Ｔ１Ｐｉｔ４出土遺物（第８図20）　20は山茶碗の底部片である。高台は剥離しており、底部外面には糸切り痕が残る。13世紀代のものと思われる。

Ｔ１Ｐｉｔ５出土遺物（第８図21）　21は土師器小皿の口縁部片である。器壁はやや厚く、外面にはユビオサエの痕跡や粘土接合痕が明瞭に残る。11～12世紀代のものと思われる。

第３節　調査区２

（１）遺構

①竪穴建物

ＳＨ８（第10図）　調査区２で検出された３棟の竪穴建物のうち、最も西側に位置する竪穴建物である。一辺３ｍ以上の平面形が方形の建物と考えられるが、大部分が調査区外に出ているため、全体の形状は不明である。

床面には整地土ないし貼床が施されており（第７・８層）、壁沿いには壁際溝が認められる（第５・６層）。主柱穴は明確ではないが、建物内で検出されたＴ２Ｐｉｔ24などが主柱穴の可能性がある。

また、建物東壁沿いでカマドを検出した。カマドは遺存状況が悪く、袖部はほとんど遺存していない。カマド下の掘り込み内からは、支脚として使用された可能性がある礫が検出されている。

埋土中から遺物は出土しなかったが、Ｔ２Ｐｉｔ24はこの建物に伴うピットである可能性がある。Ｔ２Ｐｉｔ24からの出土遺物も土師器坏の小片１点のみであるが、これを積極的に評価すれば、飛鳥～奈良時代の遺構の可能性が考えられる。

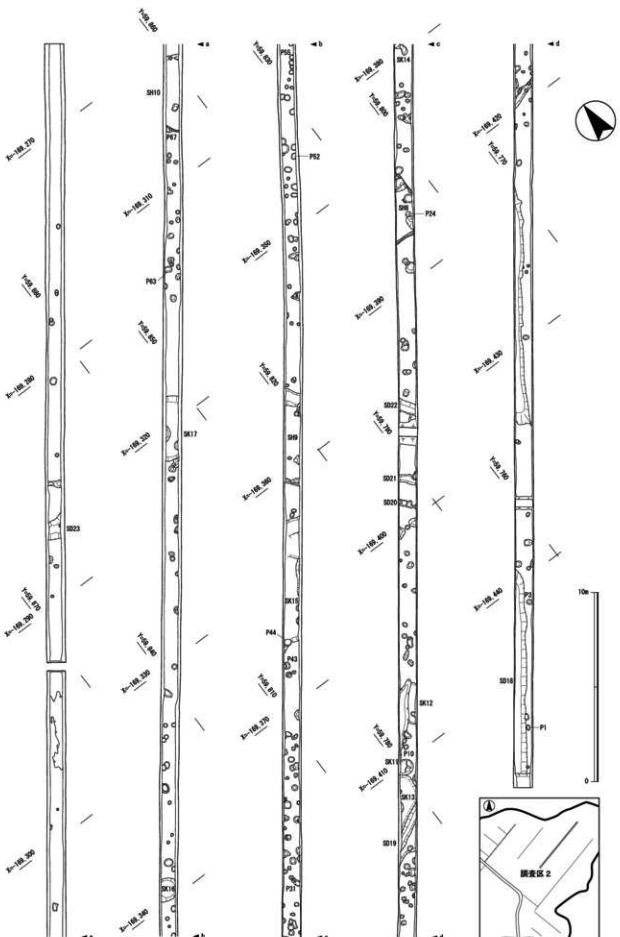
ＳＨ９（第10図）　ＳＫ15の東側に位置する竪穴建物である。一辺4.７ｍほどの平面形が方形の建物と考えられるが、大部分が調査区外に出ているため、全体の形状は不明である。

床面の貼床は明瞭には検出できなかった。壁沿いには壁際溝がみられるが、やや不整形である。

カマドは調査区内では検出されなかったが、東側の壁際溝付近から焼土塊が少量検出されており、付近にカマドが存在した可能性がある。

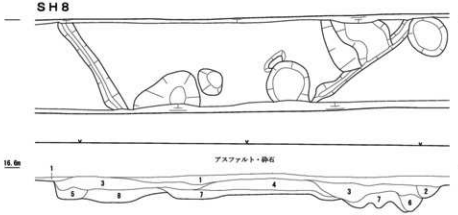
埋土中からは、土師器の坏や甕、須恵器の坏蓋などが出土した。遺物は、東側の焼土塊検出位置付近で比較的多く出土している。出土遺物はいずれも小片で時期の比定が困難であるが、古墳時代中期後半～後期の遺構の可能性が高いと考えられる。

ＳＨ10（第10図）　調査区２で検出された竪穴建物のうち、最も東側に位置する竪穴建物である。一辺４ｍほどの建物と考えられるが、大部分が調査区外



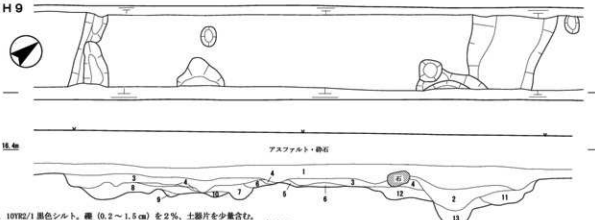
第９図　調査区２平面図（１：200）

SH8



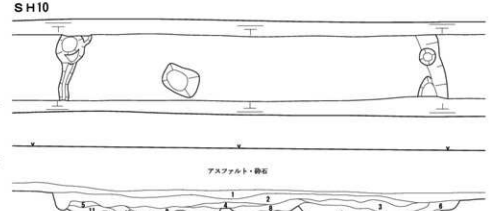
1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～1.5cm）を2%、土器片を少量含む。
2．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.4cm）を1%含む。粘質。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～1cm）を3%含む。粘質。
4．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～7cm）を20%含む。
5．10YR2/1 黒色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトが混じり合う。
6．10YR2/1 黒色シルトと 10YR3/3 暗褐色シルトが混じり合う。
7．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR4/4 褐色シルトブロック（～1cm）を 40%含む。
8．10YR4/4 褐色シルト、10YR2/2 黒褐色シルトブロック（～8cm）を 30%含む。

SH9



1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～1.5cm）を2%、土器片を少量含む。
2．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/4 褐色シルトブロック（～1cm）を5～10%含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.5cm）を10%含む。
4．2.5Y6/4 にぶい黄色シルト～極細粒砂、10YR3/4 暗褐色シルトを部分的に、礫（0.2～0.4cm）を5～10%含む。【貼床？】
5．10YR3/3 暗褐色シルトと 10YR4/4 褐色シルトが混じり合う。焼土塊（0.5cm）を少量含む。
6．10YR3/3 暗褐色シルトと 10YR4/4 褐色シルトが混じり合う。
7．10YR3/2 黒褐色シルト。
8．10YR4/6 褐色シルト、10YR3/2 黒褐色シルトを斑状に 10%含む。
9．10YR3/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトを縞状に 10%含む。
10．2.5Y5/3 黄褐色シルト、10YR2/2 黒褐色シルトを部分的に含む。
11．10YR3/2 黒褐色シルト。
12．10YR2/1 黒色シルトと 10YR4/4 褐色シルトが斑状に混じり合う。
13．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を10～15%含む。

SH10



1．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルト～中粒砂ブロック（～3cm）を1%、7.5YR4/6 暗褐色シルトブロック（～1cm）を1%、礫（0.2～3cm）を5%含む。
2．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/1 黒褐色シルトブロック（～1cm）を2%、焼土塊（～0.5cm）を1%含む。粘質。
3．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～1cm）を2%、10YR2/1 黒色シルトブロック（～2cm）、焼土塊（0.5～1cm）を2%含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～5cm）を40%、焼土塊（～0.4cm）を1%含む。
5．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（0.5～3cm）を10%、10YR4/4 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を5%含む。粘質。
6．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～1cm）を20%、焼土塊（～0.5cm）を1%未満含む。
7．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（2～3cm）を5%、10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.3cm）を2%含む。粘質。
8．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～8cm）を20%、10YR3/4 暗褐色シルトブロック（2～4cm）を20%、10YR1.7/1 黒色シルトブロック（2～4cm）を5%含む。粘質。
9．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（3～8cm）を30%、10YR4/4 褐色シルトブロック（2～12cm）を30%含む。粘質。
10．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.8cm）を5%、10YR2/3 黒褐色シルトブロック（～0.3cm）を3%、10YR1.7/1 黒色シルトブロック（～2cm）を2%含む。粘質。
11．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（2～5cm）を30%、10YR2/3 黒褐色シルトブロック（1～3cm）を20%、10YR1.7/1 黒色シルトブロック（1～3cm）を5%含む。

第10図　調査区2遺構平面図・断面図①（1：40）

に出ているため、全体の形状は不明である。

床面には整地土と考えられる土層がみられ（第９～11層）、その上には貼床と考えられる土層も確認できる（第５層）。第４層も貼床の可能性があるが、カマドに由来する可能性もある細かな焼土塊を含んでおり、問題を残す。壁沿いには壁際溝がみられるが、東側については不明瞭である。建物内で検出されたピットはしっかりしたもので、主柱穴の可能性がある。カマドは調査区内では検出されなかった。

埋土中からは、土師器の坏や甕、管状土錘が出土した。出土遺物から、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と考えられる。

②土坑

ＳＫ11（第11図）　径0.85mほどの平面形が円形の土坑である。深さは0.42mほどであるが、床面の一部はピット状に凹んでいる。隣接するＳＫ13との先後関係は不明である。

埋土中からは、土師器の坏や甕、管状土錘が出土した。出土遺物から、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と考えられる。

ＳＫ12（第11図）　径2.1mほどの土坑である。深さは0.1mほどで浅い。南側は調査区外へとのびており、また北側は撹乱によって破壊されているため、全体の形状は不明であるが、平面形は円形に近いものと推定される。床面にはピット状の掘り込みがみられる。

埋土中からは土師器の皿や鍋と思われる細片が出土した。出土遺物から、鎌倉～室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ13（第11図）　長径２m以上、短径1.5m以上の大型の土坑である。深さは0.2～0.35mほどである。隣接するＳＤ19の埋没後に掘り込まれている。調査区内では一部のみの検出にとどまり、また東側の一部を重機で掘削してしまったため、平面形は不明であるが、隅丸方形の土坑となる可能性がある。また、調査区壁面で見る限り、東側の掘形はＳＤ19の肩部と平行しているようであり、ＳＤ19の存在を意識して掘られた可能性も考えられる。

底面は平坦ではなく、浅い落ち込みやピット状の掘り込みもみられる。埋土には全体的に小さな焼土塊が含まれている。

埋土中からは土師器の小皿や鍋、須恵器の甕、鉄滓などが出土したが、小片で図化できるものはなかった。出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ14（第11図）　長径0.8m以上、短径約0.3mの不整形な小型の土坑である。深さは北側の一段深くなった部分で0.25mほどある。

埋土中から遺物は出土しなかった。

ＳＫ15（第12・13図）　径６m以上の非常に大きな土坑である。調査区内で検出されたのはごく一部であるため、全体の形状などは不明である。深さは0.4～0.6mほどと深く、壁はほぼ垂直に掘り込まれる。床面にはピットや土坑状の掘り込みがみられ、特に、東側床面ではかなり深い土坑状の掘り込みが検出された[1]。これら床面の掘り込みについては、埋土の状況からみて人為的に埋められた可能性がある。

また、東側に堆積した焼土を多く含む土層（第14層）からは、土師器の甑や須恵器の甕の破片、大型の礫などがまとまって出土している[2]。土師器の甑は、少なくとも２個体分の破片が入り混じった状況で出土しており、一部は礫の下からも出土している。

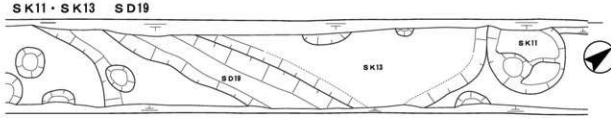
土器とともに検出された礫は、いずれも片岩である。長さ40cmほどの被熱した棒状礫が直立した状態で埋没している状況もみられた。これらの礫は、人為的に埋められた可能性が高い。

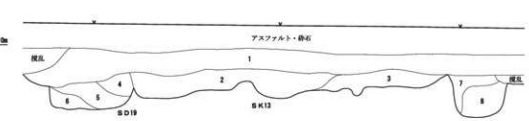
ＳＫ15の性格は不明であるが、規模や掘形の形態などから竪穴建物の可能性も考えられる。床面の掘り込みも、貯蔵穴や主柱穴である可能性もあろう。ただし、他の竪穴建物よりかなり深く掘り込まれている点などは違和感がある。

なお、埋没過程では、再度部分的に掘り込みが行われたことが、土層の堆積状況等から窺われる。埋没した後にも、その上面からピットがいくつか掘り込まれている。西側肩部のＴ２Pit44もそのうちの一つである。

埋土中からは、下層から中層を中心に、土師器の坏や甑、甕、須恵器の無蓋高坏など多量の遺物が出土している。これらの出土遺物から、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と考えられる。また、埋土上層からは平安～鎌倉時代の土師器の小皿や甕、山茶碗などが出土しており、鎌倉時代頃に最終的に埋没した

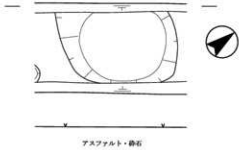
SK11・SK13　SD19





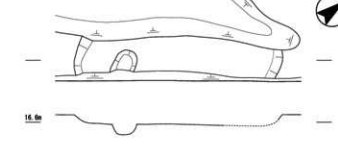
1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～1cm）を1%含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～10cm）を50%含む。上位に撹土を少量含む。［SK13 埋土］
3．10YR2/1 黒色シルトと10YR3/3 暗褐色シルトが混じり合う。撹土を1%未満含む。［SK13 埋土］
4．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/3 暗褐色シルトブロック（～1cm）を1%未満含む。［SD19 埋土］
5．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/6 褐色シルトブロック（～7cm）を20%含む。［SD19 埋土］
6．10YR2/1 黒色シルト。2.5Y4/6 オリーブ褐色シルトブロック（～3cm）を2%含む。［SD19 埋土］
7．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/3 暗褐色シルトブロック（～2cm）を3%含む。［SK11 埋土］
8．10YR2/1 黒色シルトと10YR3/3 暗褐色シルトが混じり合う。撹土を1%含む。［SK11 埋土］

SK16



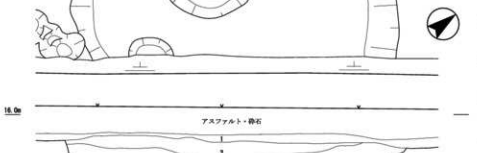
1．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂ブロック（1～4cm）を2%、礫（0.2～1.5cm）を1%、土器片を少量含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロック（～2cm）を3%、10YR3/3 暗褐色シルトブロック（～1cm）を30%、礫（0.2～1.5cm）を5%含む。
3．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR2/1 黒色シルトブロック（2～5cm）を10%、10YR4/6 褐色シルト～中粒砂を縞状に2%含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR4/4 褐色シルト～中粒砂ブロック（～3cm）を30%、礫（0.2～2cm）を1%含む。
5．10YR2/1 黒色シルト、10YR4/4 褐色シルト～中粒砂ブロック（～1cm）を5%、礫（0.2～1cm）を3%含む。粘質。
6．10YR2/1 黒色シルト、礫（0.2～1cm）を2%含む。粘質。

SK12



SK14

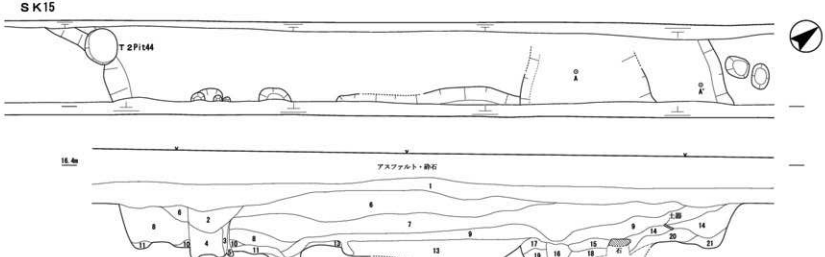
SK17



1．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルト～中粒砂ブロック（～3cm）を1%、7.5YR5/8 暗褐色シルトブロック（～1cm）を1%、礫（0.2～3cm）を5%、土器片を少量含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/6 褐色シルトが混じり合うブロック（～5cm）を10%、10YR2/1 黒色シルトブロック（～4cm）を3%含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR1.7/1 黒色シルトブロック（～5cm）を5%、7.5YR5/8 明褐色シルトブロック（～5cm）を1%未満、礫（0.2～0.6cm）を1%未満含む。
4．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂ブロック（～3cm）を少量、7.5YR5/6 明褐色シルトブロック（～0.4cm）を少量、土器片を少量含む。
5．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルト～粗粒砂ブロック（～5cm）を50%含む。

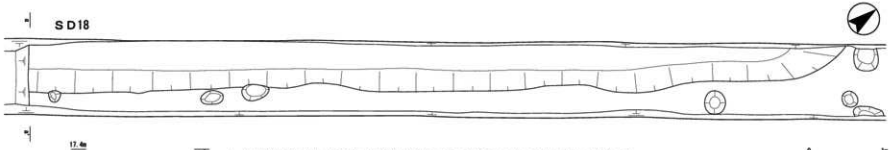
第11図　調査区2遺構平面図・断面図②（1：40）

SK15



1. 10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.5 cm）を1％、土器片を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～2 cm）を3％、炭化物（～1 cm）を1％未満含む。[土坑埋土]
3. 10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～2 cm）を1％含む。[土坑埋土]
4. 10YR2/2 黒褐色シルト。10YR5/6 黄褐色シルトブロック（～10 cm）を20%含む。[土坑埋土]
5. 10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.2 cm）を1％未満含む。[土坑埋土?]
6. 10YR2/1 黒色シルト。10YR4/6 褐色シルトブロック（～0.3 cm）を3％、礫（0.2～1 cm）を少量、土器片を少量含む。
7 8. 10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.2 cm）を1％、礫（0.2～0.8 cm）を1％未満含む。粘質。
8 7. 10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.8 cm）を5％、礫（0.2～1 cm）を1％未満含む。粘質。
9 12. 10YR2/2 黒褐色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロック（1～3 cm）を3％、10YR4/6 褐色シルトブロック（～3 cm）を5％含む。
10. 10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～3 cm）を30%含む。粘質。
11. 10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～10 cm）を30%、10YR2/1 黒色シルトブロック（5～8 cm）を20%含む。
12. 10YR2/3 黒褐色シルトと 10YR5/6 黄褐色シルトが混じり合う。
13. 10YR5/6 黄褐色シルト。10YR3/3 暗褐色シルトブロック（1～2 cm）を10%、10YR2/1 黒色シルトブロック（1～3 cm）を3%、礫（0.2～0.6 cm）を5％含む。
14. 2.5Y6/2 灰黄色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロックを5％、焼土塊を多量、土器片を少量含む。
15. 10YR4/1 灰褐色シルト。
16. 10YR2/1 黒褐色シルト。2.5Y7/4 浅黄色シルトブロックを5％含む。
17. 2.5Y7/4 浅黄色シルト。2.5Y4/1 黄灰色シルトブロックを40％含む。
18. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロックを40％含む。
19. 2.5Y2/1 黒色シルト。2.5Y7/4 浅黄色シルトブロックを5％含む。
20. 7.5YR4/1 褐灰色シルト。7.5YR5/3 にぶい褐色シルトブロックを10%、10YR2/1 黒色シルトブロックを5％含む。
21. 10YR4/1 褐灰色シルト。2.5Y6/2 灰黄色シルトブロックを5％含む。

SD18



1. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1 cm）を3％、礫（1～10 cm）を2～5％含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（1～3 cm）を20%含む。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（1～2 cm）を10%含む。

第12図　調査区２遺構平面図・断面図③（１：40、ＳＤ18平面図１：50）

ＳＫ15（遺物出土状況）

第13図　調査区２遺構平面図・断面図④（１：20）

ものと考えられる。

ＳＫ16（第11図）　長径1.2m以上、短径1.2mほどの平面形が楕円形になると思われる土坑である。北側は調査区外にのびている。深さは0.6mほどあり、かなり深い。土層の堆積状況からは、埋没後に再度掘り返されている可能性が考えられる。

埋土中からは、土師器の皿や鍋、須恵器の甕などが出土した。出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ17（第11図）　径3.4mほどの大型の土坑である。調査区内で検出されたのはごく一部であるため、全体の形状は不明であるが、円形に近い平面形の土坑である可能性が高い。深さは0.5～0.6mほどで、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

床面には浅い落ち込み状の凹凸がみられ、平坦ではない。

埋土中からは、土師器の坏、皿、甕、須恵器の壺ないし鉢などが出土した。主に第４層の下部から出土している。出土遺物には奈良時代のものが多い。鎌倉～室町時代の土師器も出土しているが、ごくわずかで埋没過程における混入と考えられるため、奈良時代の遺構と考えられる。

③溝

ＳＤ18（第12図）　調査区西端部で検出された溝と思われる遺構である。調査区北壁に沿ってのびており、北半分は調査区外となっている。深さは0.2mほどと浅い。同様の溝が７mほど東側で検出されているが、その溝は底面に重機の爪痕と思われる凹凸があり撹乱とみられるため、ＳＤ18も同様の撹乱の可能性もある。

埋土中からの出土遺物は少なく、山茶碗の破片１点のみである。撹乱でなければ、鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＤ19（第11図）　東西方向にのびる溝である。隣接するＳＫ13に先行する遺構である。幅約0.5mで、調査区内では長さ2.7mほどを検出した。深さは0.4mほどあり、断面形が箱形を呈するしっかりした溝である。

埋土中からは、飛鳥～奈良時代の土師器甕や、室町時代の土師器皿が出土した。飛鳥～奈良時代の遺構の可能性もあるが、出土遺物が少なく時期の比定は困難であり、肩部が室町時代の遺構と考えられるＳＫ13の掘形と平行することなどから、ＳＫ13と時期的に近い平安～鎌倉時代の遺構で、室町時代の遺物はＳＫ13からの混入と考えておきたい。

ＳＤ20（第14図）　ほぼ南北方向にのびる不整形な溝もしくは土坑と考えられる遺構である。幅約0.3mで、調査区内では長さ0.8mほどを検出した。深さは0.15mほどと浅い。底面には凹凸がある。

埋土中からは、土師器の細片が少量が出土した。出土遺物からは時期の比定は困難であるが、奈良～室町時代の遺構と考えられる。

ＳＤ21（第14図）　ＳＤ20の東側に位置する、調査区を横断する溝である。幅約0.4mで、調査区内では長さ0.9mほどを検出した。深さは0.2mほどである。

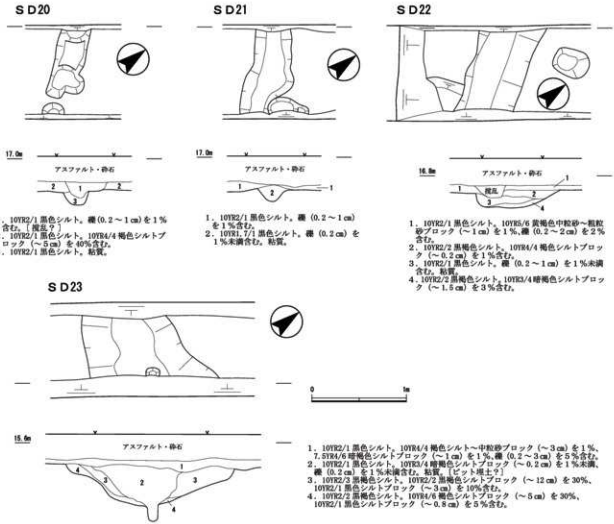
埋土中からは、土師器の細片が少量が出土した。出土遺物からは時期の比定は困難であるが、奈良～室町時代の遺構と考えられる。

ＳＤ22（第14図）　既設排水溝の東側で検出した、調査区を横断する溝である。幅約0.8mで、調査区内では長さ1.2mほどを検出した。深さは0.2mほどである。

埋土中からは土師器の鍋が出土した。出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

ＳＤ23（第14図）　調査区東端部付近で検出された、調査区を横断する溝である。幅約１mであるが、南東方向に向かうにつれ幅が広がる。調査区内では長さ0.6mほどを検出した。深さは0.45mほどである。

断面形は浅いU字形を呈しており、土層の堆積状況からは埋没後に再度掘削されたことが窺われる。



第14図　調査区２遺構平面図・断面図⑤（１：40）

全体を再掘削したのではなく、一部にピットないしは土坑を新たに掘り込んだ可能性もあるが、平面検出の段階で認識することができなかった。

埋土中から遺物は出土しなかった。

（２）遺物

①竪穴建物出土遺物

ＳＨ９出土遺物（第15図22～24）　22・24は土師器である。22は坏である。器面は風化し、調整は不明瞭である。23は甕の口縁部片で、口縁部は上方へ立ち上がり、口縁端部は面をなす。

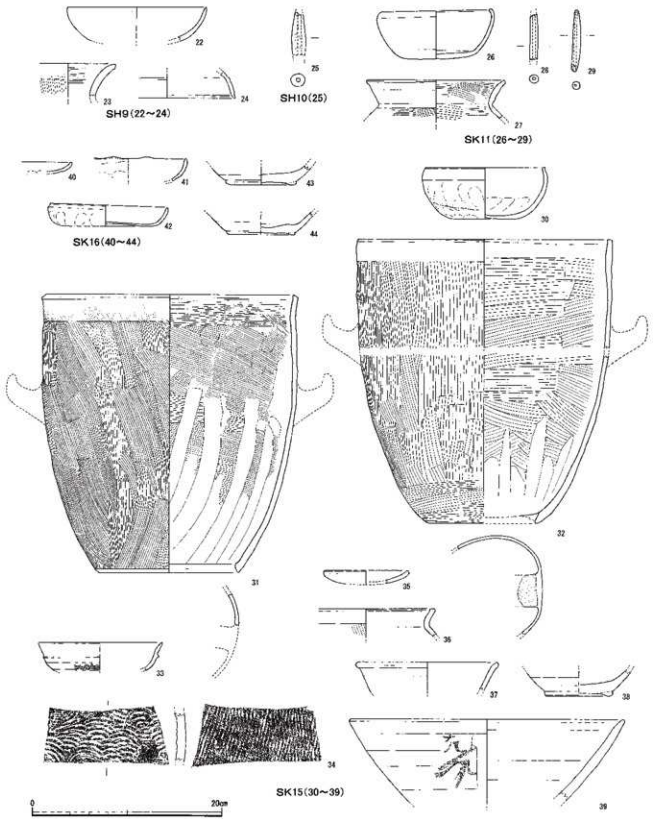
24は須恵器の坏蓋の口縁部片である。口縁部と天井部との境は明瞭な稜をなす。口縁端部には段が認められる。小片のため不確実ながら口径は14cmほどになるとみられ、陶邑編年ＴＫ23～ＭＴ15型式期に相当する可能性が高く、５世紀後半～６世紀前半のものと思われる[3]。

ＳＨ10出土遺物（第15図25）　25は管状土錘である。半分程度を欠損する。最大径は1.5cmほどあるが、両端に向かって徐々に窄まり、細長い紡錘形を呈する。

②土坑出土遺物

ＳＫ11出土遺物（第15図26～29）　26・27は土師器である。26はやや深い坏で、口縁部は内湾し、口縁端部は丸く収められる。底部と体部との境はやや屈曲し、底は平底に近い。内外面ともナデによって調整されていると思われる。27は甕で、口縁部はやや上方に立ち上がり、口縁端部は面をなす。口縁部内面にはハケが施されている。いずれも６～７世紀代のものと思われる。

28・29は管状土錘である。いずれもかなり細身のものである。



第15図　調査区２遺物実測図①（１：４）

ＳＫ15出土遺物（第15図30～39）　30～32は土師器である。30はやや深い坏で、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁端部は面をなす。内面下半は工具ナデによって調整されている。31・32は甕である。いずれも把手が２箇所に付くと思われるが、全て欠損しており、実際に付けられていた位置は不明である。32は底部に２孔を設けており、31も同様であると思われる。これらは６～７世紀代のものと思われる。

33・34は須恵器である。33は無蓋高坏の坏部片で、口縁部と体部との境に稜を設け、外面には波状文が施されている。口径や坏部の深さなどからみて、６世紀後半に位置付けられる可能性が高い。34は甕もしくは広口壺の体部片である。

35・36は土師器である。35は浅い小皿で、口縁端部はやや上方に肥厚する。36は甕で、口縁端部は内側に肥厚している。10～11世紀代のものと思われる。

37・38は山茶碗である。37は口縁部片で、口縁端部はやや外反する。38は底部片で、底部はやや厚い。いずれも13世紀代のものと思われる。

39は陶器の片口鉢と思われる。片口部は遺存していない。内面には使用による摩耗が認められる。外面には墨書と思われる痕跡が残るが不鮮明である。12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。

ＳＫ16出土遺物（第15図40～44）　40～42は土師器である。40は小皿である。口縁端部は丸く収められ、底部外面にはユビオサエの痕跡が残る。41・42は皿で、器壁は薄く、口縁部外面には明瞭なヨコナデが施されている。41は口縁部の歪みが大きい。いずれも13世紀後半～14世紀前半のものと思われる。

43・44は山茶碗である。いずれも底部と体部との境が屈曲し、高台は矮小である。13世紀後半のものと思われる。

ＳＫ17出土遺物（第16図45～51）　45～51は土師器である。45は甑の底部片である。底に２孔を設けるタイプのものであろう。46～50は甕である。いずれも口縁端部は面をなし、上方に摘まみあげられている。また、47～49は口縁部内面にハケを施した後に、ヨコナデを施している。これらはいずれも７～８世紀代のものと思われる。51は鍋である。口縁部は受口状を呈する。14世紀前半のものと思われる。

③溝出土遺物

ＳＤ18出土遺物（第16図52）　52は山茶碗の口縁部片である。口縁端部はやや外反し、面をなす。13世紀前半のものと思われる。

ＳＤ19出土遺物（第16図53・54）　53は土師器甕である。外面はタテハケ、内面はヨコハケによって調整される。口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。６世紀後半～７世紀前半のものと思われる。

54は土師器皿である。器壁は薄く、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。器壁は風化しており、調整は不明瞭である。14世紀後半～15世紀前半のものと思われる。

ＳＤ22出土遺物（第16図55）　55は土師器鍋の口縁部の小片である。口縁端部は内側に折り返してナデ付け肥厚させている。外面にはススが付着する。14世紀後半～15世紀前半のものと思われる。

④ピット出土遺物

Ｔ２Pit１出土遺物（第16図56）　56は山茶碗の底部片である。底部は厚く、高台は底部脇に貼り付けられる。高台畳付には籾殻痕が残る。13世紀前半のものと思われる。

Ｔ２Pit３出土遺物（第16図57）　57は土師器坏である。器壁は厚く、口縁端部は丸く収められる。外面にはユビオサエの痕跡が残るが、口縁部付近にはヨコナデが施されている。11世紀前半のものと思われる。

Ｔ２Pit10出土遺物（第16図58）　58は土師器小皿である。口縁部の小片で、底部と口縁部の境は屈曲し、屈曲部の外面は稜をなす。11～12世紀のものと思われる。

Ｔ２Pit24出土遺物（第16図59）　59は土師器坏である。口縁端部は丸く収められる。外面にはユビオサエの痕跡が残るが、口縁部付近にはヨコナデが施されている。小片のため時期は判断しがたいが、やや深い椀形を呈する点や、外面にユビオサエが残る点、口縁部直下に粘土接合痕が残る点などから、飛鳥～奈良時代のものである可能性が考えられる。

Ｔ２Pit31出土遺物（第16図60）　60は土師器坏である。口縁端部は丸く収められる。外面にはユビオサエの痕跡が残るが、口縁部付近にはヨコナデが施

されている。また、内面には一部に工具ナデらしい痕跡も見られるが、不明瞭である。11世紀前半のものと思われる。

Ｔ２Pit43出土遺物（第16図61）　61は土師器壺である。口縁端部はやや外反し、丸く収められる。外面にはユビオサエの痕跡が残るが、口縁部付近にはヨコナデが施されている。10世紀後半～11世紀前半のものと思われる。

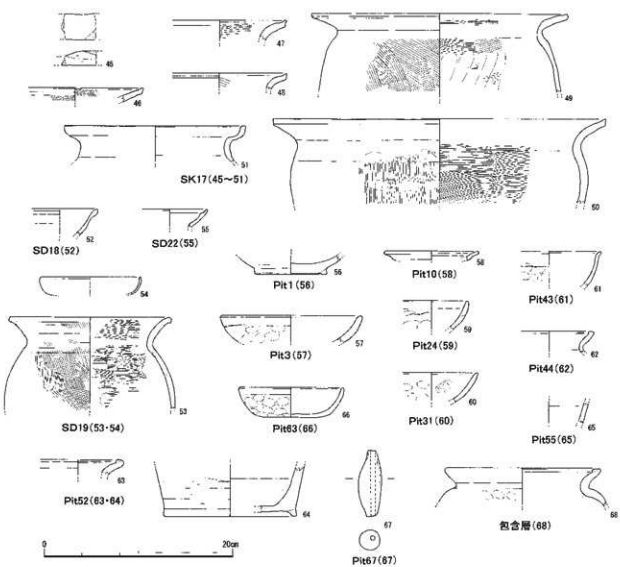
Ｔ２Pit44出土遺物（第16図62）　62は土師器甕である。口縁部は全体に内湾し、口縁端部は内側に肥厚する。10世紀後半のものと思われる。

Ｔ２Pit52出土遺物（第16図63・64）　63は土師器甕である。口縁部の小片で、口縁端部は内側へ折り返され肥厚する。

64は灰釉陶器の壺である。底部と体部の境は明瞭に屈曲し、高台は屈曲部に貼り付けられている。底径はかなり大きい。体部外面には浅いロクロケズリが施され、破片の外面上部には釉が残る。また、底部内面には自然釉が付着している。猿投編年のO53～H72窯式期あたりに位置付けられ、10世紀代のものと思われる[4]。

Ｔ２Pit55出土遺物（第16図65）　65は灰釉陶器の壺の体部片である。外面には釉が施されている。

Ｔ２Pit63出土遺物（第16図66）　66は土師器坏である。器壁はやや厚く、口縁端部は丸く収められる。外面にはユビオサエの痕跡が残るが、口縁部付近に



第16図　調査区２遺物実測図②（１：４）

はヨコナデが施されている。11世紀前半のものと思われる。

Ｔ２Pit67出土遺物（第16図67）　67は管状土錘である。完形で、最大径が2.4cmと太身のものである。両端に向かって急速に窄まり、紡錘形を呈する。外面にはユビオサエの痕跡が残る。

⑤その他出土遺物

包含層出土遺物（第16図68）　68は包含層から出土した土師器甕である。Pit51の付近から出土しており、本来はこのピットに伴う遺物であった可能性がある。口縁端部は内側へ折り返され肥厚する。頸部外面にはユビオサエの痕跡が残る。外面にはススが付着する。11世紀前半のものと思われる。

註

1）この土坑状の掘り込みはかなりの深さがあったため、工事による掘削の影響が及ぶ深さまでの調査にとどめ、完掘していない。

2）ほぼ同じ層位で完形の土師器坏１点も出土している（第13図）。包含されている土層は特定できなかったが、第15層中に包含されていた可能性が高い。

3）本報告において、須恵器の編年は以下の文献を参考にした。
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

4）本報告において、灰釉陶器の編年は以下の文献を参考にした。
山下峰司1995「４．灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

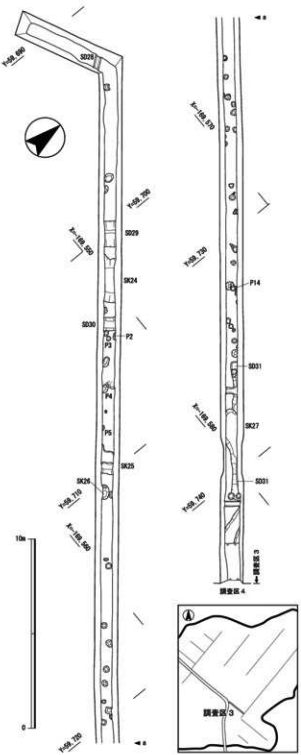
第４節　調査区３

（１）遺構

①土坑

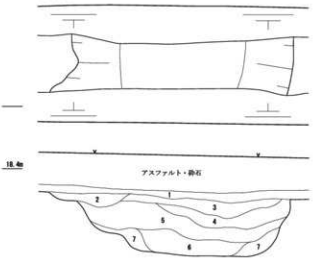
ＳＫ24（第18図）　径2.5mほどの大型の土坑である。調査区内で検出されたのはごく一部であるため全体の形状は不明である。深さは0.6mほどである。断面形は逆台形を呈し、西側壁面は段状をなす。底は平坦である。

埋土中からは、土師器の小皿、皿、鍋、器台、須恵器の壺、甕、緑釉陶器の碗ないし皿、灰釉陶器の碗、壺、山茶碗、陶器の甕など、多量の遺物が出土した。出土遺物には奈良時代から室町時代に及ぶ幅



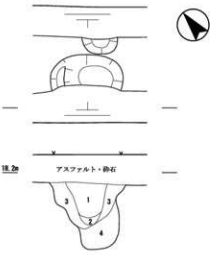
第17図　調査区３平面図（１：200）

ＳＫ24



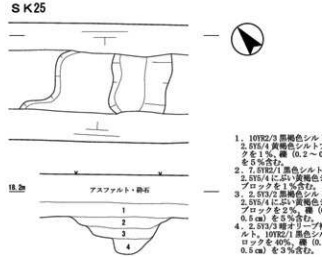
1．10YR2/3 黒褐色シルト。礫を５～10%、土器片を少量含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。
3．10YR2/1 黒色シルト。
4．10YR3/1 黒褐色シルト。
5．7.5YR3/1 黒褐色シルト。礫を５～10%含む。
6．7.5YR2/2 黒褐色シルト。
7．2.5Y5/3 黄褐色シルト～中粒砂。7.5YR2/2 黒褐色シルトブロックを 10%、礫を 10%含む。

ＳＫ26



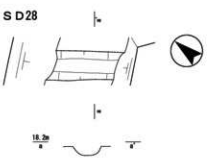
1．10YR2/1 黒色シルト。焼土塊（～1.5 cm）を５%、礫（0.2～0.5 cm）を２%、土器片を少量含む。
2．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/3 暗褐色シルト～中粒砂ブロック（～1.5 cm）を５%、焼土塊（0.5～1 cm）を１%未満、礫（0.2～0.5 cm）を１%未満含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/3 暗褐色シルト～極粗粒砂ブロック（～5 cm）を５%、10YR1.7/1 黒色シルトブロック（～0.8 cm）を３%、礫（0.2～0.8 cm）を３%含む。
4．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/3 暗褐色シルト～極粗粒砂ブロック（～5 cm）を 40%、10YR1.7/1 黒色シルトブロック（～3 cm）を５%、礫（0.2～0.8 cm）を３%含む。

ＳＫ25

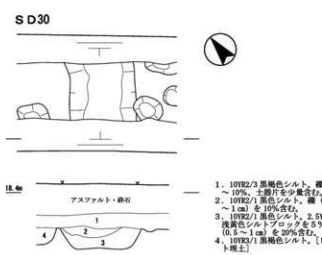


1．10YR2/3 黒褐色シルト。2.5Y5/4 黄褐色シルトブロックを１%、礫（0.2～0.5 cm）を５%含む。
2．7.5YR2/1 黒色シルト。2.5Y5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを１%含む。
3．2.5Y3/2 黒褐色シルト。2.5Y5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを２%、礫（0.2～0.5 cm）を５%含む。
4．2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロックを 40%、礫（0.2～0.5 cm）を３%含む。

ＳＤ28

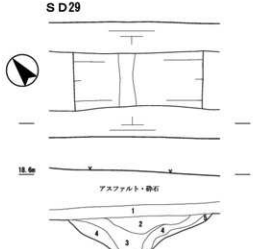


ＳＤ30



1．10YR2/3 黒褐色シルト。礫を５～10%、土器片を少量含む。
2．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.5～1 cm）を 10%含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。2.5Y7/3 浅黄色シルトブロックを５%、礫（0.5～1 cm）を 20%含む。
4．10YR3/1 黒褐色シルト。［ピット埋土］

ＳＤ29



1．10YR2/3 黒褐色シルト。礫を少量、土器片を少量含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。
3．10YR3/3 暗褐色シルト。
4．10YR3/2 黒褐色シルト。
5．7.5YR2/3 極暗褐色シルト。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロックを含む。

0　1m

第18図　調査区３遺構平面図・断面図①（１：40）

広い時期のものがみられるが、鎌倉～室町時代の遺物が最も多く、この時期の遺構と考えられる。

ＳＫ25（第18図）　径1.2mほどの土坑である。北側の掘形はやや不整形で、全体の形状は不明である。深さは最も深い部分で0.4mほどある。北側は段状に浅くなっており、南側のみ溝状に深くなっている。

埋土中からは、土師器の小皿、鍋、山茶碗、陶器の片口鉢などが出土した。出土遺物から、鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＫ26（第18図）　ＳＫ25の南側で検出された、長径0.8m、短径0.4m以上の平面形が楕円形の土坑である。深さは0.7mほどである。

埋土の堆積状況からは、埋没後に再度掘り返されている状況が確認できる。当初の規模は径0.4～0.5mほどであったとみられ、柱穴が柱の抜き取り等によって土坑状になったものであるとも考えられる。

埋土中からは、土師器の皿、甕、灰釉陶器の碗、壺などが出土した。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

ＳＫ27（第19図）　調査区南部でＳＤ31と重複して検出された、径２mほどの土坑である。ＳＤ31の埋没後に掘削されている。東半分は調査区外に出ているため、全体の形状は不明であるが、平面形は不整形な楕円形を呈する可能性が高い。深さは0.2mほどと浅い。

埋土中からは、土師器の甕が出土した。出土遺物はごく少量で図化できるものもなかったため、時期の比定は困難であるが、ＳＤ31との重複関係などから鎌倉～室町時代の遺構の可能性が考えられる。

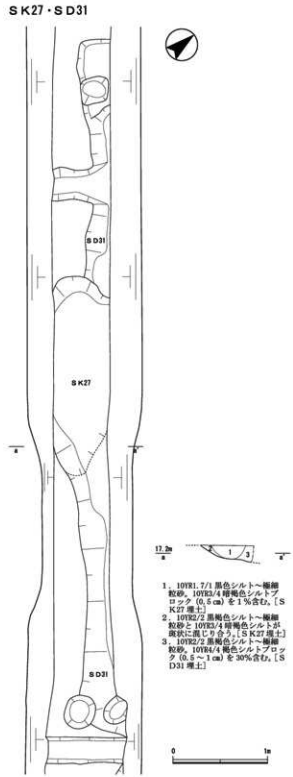
②溝

ＳＤ28（第18図）　調査区の屈曲部より西側で検出された、南北方向にのびる溝である。幅約0.3mで、調査区内では長さ0.7mほどを検出した。深さは0.1mほどと浅い。

埋土中からは土師器の皿が出土した。出土遺物はごく少量であるが、室町時代の遺構と考えられる。

ＳＤ29（第18図）　調査区を横断する溝である。幅約1.5mで、調査区内では長さ0.6mほどを検出した。深さは0.45mほどである。

断面形はＶ字形を呈しており、幅広で比較的深い、非常にしっかりした溝である。自然に埋没したもの



第19図　調査区３遺構平面図・断面図②（１：40）

と思われ、埋土は黒ボク土由来の安定した土層で、地山のブロックをほとんど含まない。

埋土中からは灰釉陶器の壺や山茶碗が出土した。出土遺物から、鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＤ30（第18図）　ＳＫ24の南側で検出された、調査区を横断する溝である。幅約0.8mで、調査区内では長さ0.6mほどを検出した。深さは0.2mほどである。

断面形は逆台形を呈しており、しっかりした溝である。

埋土中からは、土師器の皿、甕、鍋、山茶碗、陶器の壺、須恵器の蓋などが出土した。出土遺物には奈良時代から鎌倉時代に及ぶ幅広い時期のものがみられるが、鎌倉時代の遺物が最も多く、この時期の遺構と考えられる。

ＳＤ31（第19図）　調査区南端付近で調査区東壁に沿って検出された溝と思われる遺構である。長さは約7.4mで、東半部が調査区外にのびているため、幅は不明である。ＳＤ31南端部で検出された細い溝より南側へと連続している可能性もあるが、確実ではない。深さは0.2mほどで、断面形は浅い皿形を呈する。溝ではなく、浅い落ち込み状の遺構とも考えられる。

埋土中からは、土師器の皿や甕などが出土した。いずれも小片で時期の比定は困難であるが、平安～鎌倉時代の遺構と考えられる。

（２）遺物

①土坑出土遺物

ＳＫ24出土遺物（第20図69～96）　69～71は須恵器である。69は盤もしくは皿の口縁部片と思われる。口縁部と底部との境は明瞭に屈曲して稜をなし、口縁部はやや外反する。底部外面にはケズリが施されている。８世紀代のものと思われる。70は広口壺である。体部外面には平行タタキが施されている。71は甕である。口縁端部は面をなし、下方に垂下する。口縁部内面には何らかの工具の痕跡とも思われる刺突痕が点々と残されている。

72は緑釉陶器の底部片である。素地は硬質で、内外面に淡緑色の釉が施されている。貼付高台である可能性が高い。

73は灰釉陶器の壺の体部片である。内外面に釉が施されている。

74～87は土師器である。74～77は小皿である。74・75・77は浅い小皿であるが、76は底部から体部にかけて緩やかに内湾し、やや深くなる。78～80は皿である。いずれも器壁は薄く、底部から体部にかけて緩やかに内湾する。79は小片で口縁部の歪みも大きい。81～86は鍋である。81～84・86は口縁部を内側に大きく折り返し、ナデ付けて肥厚させている。85・86は体部下半の内外面にケズリを施しており、外面にはススが明瞭に付着する。87は器台である。脚柱部のみが遺存しており、坏部と脚裾部は剥離している。中心部には縦に孔があるが斜め方向においており、脚の中心軸からずれている。土師器はいずれも14世紀代のものと思われる。

88～95は山茶碗である。88～90は口縁部から体部にかけての破片で、90は口縁部がやや外反し、口縁端部は丸く収められている。91～95は底部片である。92・93は底部と体部との境が明瞭に屈曲する。94・95は高台径が他のものよりやや大きく、底部と体部との境は屈曲しない。95の底部内面には黒色物が付着する。いずれも13世紀代のものと思われる。

96は陶器の広口壺である。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部は丸く収められる。常滑産で、12世紀後半のものと思われる。

ＳＫ25出土遺物（第20図97～99）　97は緑釉陶器の碗である。体部片で、内面には圏線が認められる。素地はやや硬質で、内外面に釉が施されている。やや小型で、10世紀代のものと思われる。

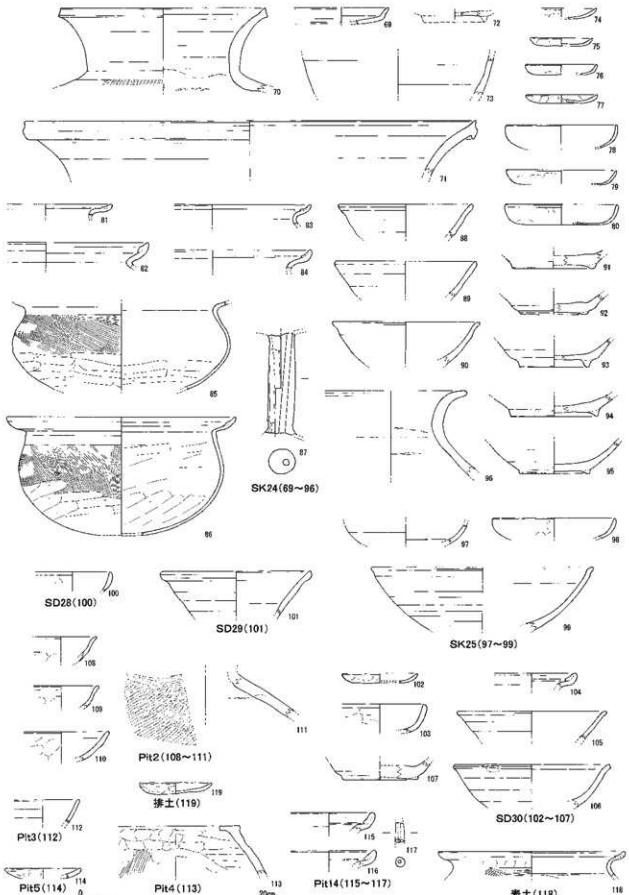
98は土師器皿である。底部から体部にかけて緩やかに内湾する。13世紀後半～14世紀前半のものと思われる。

99は陶器片口鉢である。片口部は遺存していない。体部は緩やかに内湾し、口縁端部は強いナデにより外方へ屈曲する。12世紀後半のものと思われる。

②溝出土遺物

ＳＤ28出土遺物（第20図100）　100は土師器皿の口縁部小片である。緩やかに内湾する。14世紀代のものと思われる。

ＳＤ29出土遺物（第20図101）　101は山茶碗である。体部は直線的に開き、口縁部外面には強いナデが施



第20図　調査区３遺物実測図（１：４）

され、やや凹む。口縁端部は不明瞭な面をなす。13世紀代のものと思われる。

ＳＤ30出土遺物（第20図102～107）　102～104は土師器である。102は浅い小皿で、外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。103は皿で、口縁端部外面には明瞭なヨコナデが施されている。13世紀代のものと思われる。104は鍋の口縁部小片である。口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。14世紀代のものと思われる。

105～107は山茶碗である。105は器壁が薄く、体部から口縁部にかけて直線的に開く。106は口縁部がやや外反し、口縁端部は面をなす。口縁部には輪花が１箇所遺存している。12世紀後半のものと思われる。

③ピット出土遺物

Ｔ３Ｐｉｔ２出土遺物（第20図108～111）　108～110は土師器坏である。いずれも口縁部にヨコナデが施される。108はやや器壁が薄く、体部と口縁部との境がやや屈曲し、口縁部が外反する。110はやや器壁が厚く、口縁部は外反しない。いずれも10世紀代のものと思われる。

111は須恵器甕である。外面には平行タタキが施されている。内面はナデが施されており、当て具痕は認められない。

Ｔ３Ｐｉｔ３出土遺物（第20図112）　112は灰釉陶器碗の口縁部片である。口縁部は直線的にのび、口縁端部は丸く収められる。外面には一部にロクロケズリが認められる。内面及び、外面の口縁部付近には釉が施されている。おそらく、10世紀代のものと思われる。

Ｔ３Ｐｉｔ４出土遺物（第20図113）　113は土師器の竈と思われるものである。口縁部は内側に突出し、上面はナデによって平坦に整形されている。外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内面は工具ナデによって調整され、ススが付着している。

Ｔ３Ｐｉｔ５出土遺物（第20図114）　114は土師器小皿である。器壁は厚く、口縁端部は丸く収められる。外面にはユビオサエの痕跡が残る。おそらく、12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。

Ｔ３Ｐｉｔ14出土遺物（第20図115～117）　115・116は土師器鍋である。いずれも口縁部の小片で、口縁端部は内側へ大きく折り返してナデ付けて肥厚させており、口縁部はやや受口状を呈する。14世紀代のものと思われる。

117は管状土錘である。両端を大きく欠損した小片である。最大径は１cmで、やや細身のものである。

④その他出土遺物

表土出土遺物（第20図118）　118は土師器鍋である。頸部は緩やかに屈曲し、口縁端部は内側へ大きく折り返してナデ付けて肥厚させている。口縁部はやや受口状を呈する。器壁はやや薄く、外面にはヨコハケが施されている。14世紀後半のものと思われる。

排土出土遺物（第20図119）　119は土師器小皿である。口縁部は丸く収められる。外面にはユビオサエの痕跡が残るが、口縁部外面にはヨコナデが施されている。口縁部は歪みが大きい。おそらく、12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。

第５節　調査区４

（１）遺構

①竪穴建物

ＳＨ32（第23図）　一辺5.2mほどの平面形が方形の竪穴建物と思われるが、大部分が調査区外に出ているため、全体の形状は不明である。

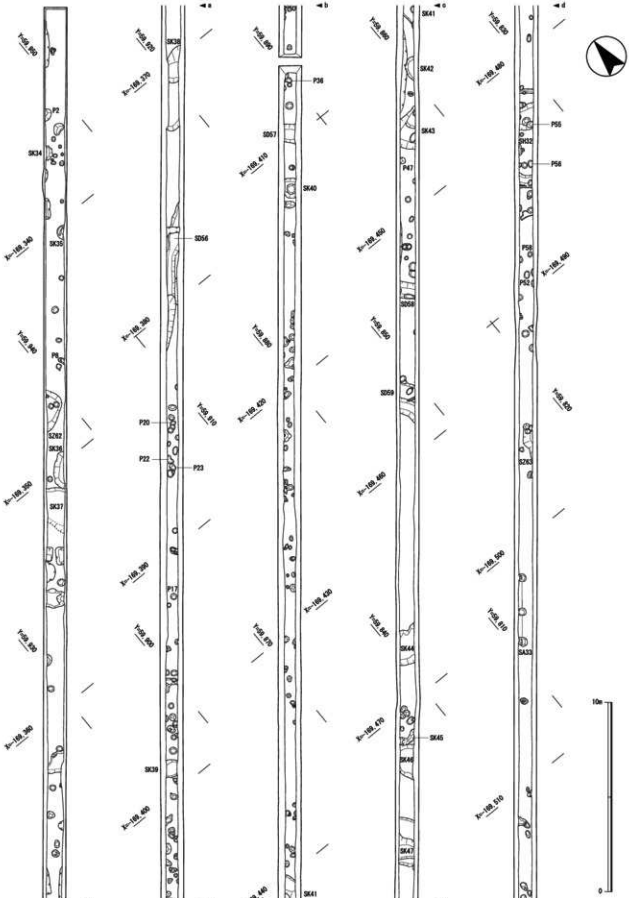
床面には貼床が施されており（第10層）、部分的に硬化面も確認できた。壁沿いには壁際溝がみられる。建物内からは主柱穴の可能性があるピットがいくつか検出されているが、中には建物埋没後に掘り込まれたものもあり、主柱穴の特定には至らなかった。

カマドは調査区内では確認できなかったが、第６層には微細な焼土塊が含まれており、建物内にカマドが存在した可能性が高い。

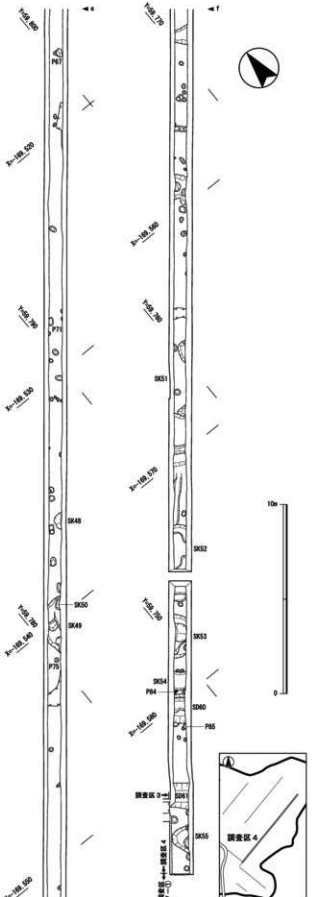
埋土中からは、土師器甕が出土したが、いずれも細片で図化できるものはなかった。出土遺物から、飛鳥～奈良時代の遺構と考えられる。

②柱列

ＳＡ33（第23図）　３基の柱穴からなる柱列である。



第21図　調査区４平面図①（１：200）



第22図　調査区４平面図②（１：200）

柱間は約1.5m、1.7mとやや不統一で、柱痕も確認できなかったが、柱穴の規模や埋土の類似性から、一連の柱列とした。調査区内では他に関連する柱穴は確認できなかったが、掘立柱建物の一部の可能性もある。

柱穴のうち、ＳＡ33Pit３からは土師器皿の破片が出土した。ＳＡ33Pit２からも土師器の細片が出土している。出土遺物から、平安時代後期～鎌倉時代の遺構と考えられる。

③土坑

ＳＫ34（第23図）　調査区東端付近で検出された径0.8mほどの土坑である。北側は調査区外へとのびるが、平面形は円形ないし楕円形になると思われる。深さは0.2mほどである。埋土には微細な炭化物が少量含まれており、第３層には焼土塊も混じる。

当該土坑付近は旧地表面の削平が著しく、地山上に堆積した黒ボク土層が完全に削平されていたため、掘り込み面と黒ボク土層との関係は不明である。

埋土中からは、縄文土器と磨石が出土した。遺物は主に第２～４層で出土しており、磨石は第２層から出土している。出土遺物と、他の時期の遺物が出土しなかったことからみて、縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。

ＳＫ35（第23図）　調査区東部で検出された径0.8mほどの土坑である。ＳＫ34の3.5mほど西に位置する。南側は調査区外へのびるが、平面形は円形になると思われる。深さは0.3mほどである。

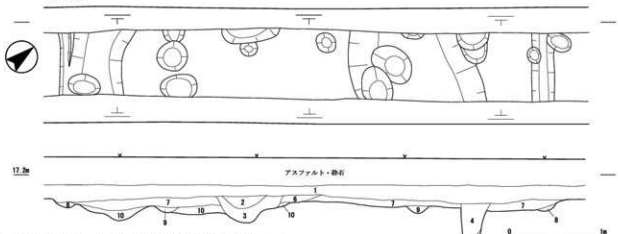
ＳＫ34と同じく、旧地表面の削平のため掘り込み面と黒ボク土層との関係は不明である。

埋土中からは、縄文土器と敲石が出土した。第２・３層から出土している。また、図化していないが、上面が平滑な台石と思われる石器の破片も出土している。出土遺物と、他の時期の遺物が出土しなかったことからみて、縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。

ＳＫ36（第24図）　長径1.95m、短径0.6m以上の土坑である。隣接するＳＫ37に先行して掘り込まれている。南側は調査区外へとのびる。深さは0.4mほどである。

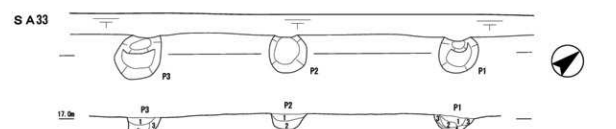
埋土中からは、土師器の甕、須恵器の坏、甕、山茶碗などが出土した。出土遺物から、平安～鎌倉時

S H32



1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（1～5cm）を 20%、礫（0.5～3cm）を 5～10%含む。[掘乱]
2．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。[ピット埋土]
3．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5cm）を 1～3%含む。[ピット埋土]
4．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/4 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を 30～40%含む。[ピット埋土]
5．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂と 10YR4/4 褐色シルトが斑状に混じり合う。[ピット埋土]
6．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（～0.5cm）を 1～3%、焼土塊（～0.5cm）を 1～3%含む。
7．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を 3～5%含む。
8．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂、10YR4/4 褐色シルトブロックを部分的に含む。[壁際埋土]
9．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。[柱穴埋土？]
10．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を 10%含む。[貼床？]

S A33



<P1>
1．10YR2/1 黒色シルト、10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロックを 2%含む。
2．2.5Y2/1 黒色シルト、10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロックを 5%含む。
3．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロックを 20%含む。
4．10YR4/3 にぶい黄橙色シルト～細粒砂。10YR2/2 黒褐色シルトブロックを 5%含む。

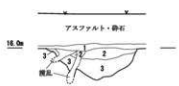
<P2>
1．2.5Y2/1 黒色シルト、10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロックを 50%含む。
2．10YR2/2 黒色シルト、10YR6/4 にぶい黄橙色シルトを 50%含む。

<P3>
1．2.5Y2/1 黒色シルト、10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロックを 10%含む。
2．10YR2/1 黒色シルト、10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロックを 20%含む。
3．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロックを 20%含む。

S K34

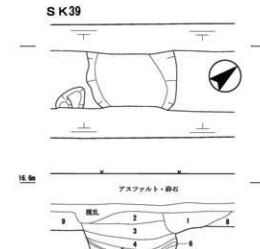
1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、炭化物（～0.2cm）を 1%未満含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂と 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂が混じり合うブロック（5～6cm）を 40%、礫（0.2cm）を 1%、炭化物（～0.2cm）を 1%未満含む。
3．10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂、焼土塊（～0.5cm）を少量、炭化物（～0.3cm）を 1%未満含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト～中粒砂と 10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂が混じり合う。礫（～0.5cm）を 1%未満含む。

S K35



1．10YR3/3 暗褐色シルト、7.5YR5/6 明褐色シルトブロックを 5%含む。
2．10YR2/1 黒色シルト、10YR4/4 褐色シルトブロックを 1%、土器片を少量含む。
3．7.5YR3/2 黒褐色シルト、10YR5/4 にぶい黄橙色シルトブロックを 3%、土器片を少量含む。

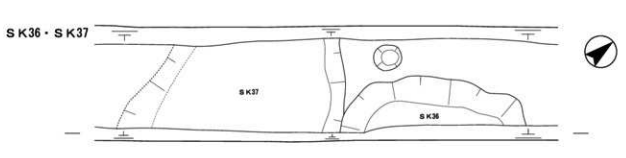
S K39



1．10YR2/1 黒色シルト、10YR4/3 にぶい褐色シルトブロック（4～10cm）を 10%、10YR2/3 黒褐色シルトブロック（10～15cm）を 10%含む。
2．10YR2/1 黒色シルト、10YR4/6 褐色シルトブロック（～0.3cm）を 2%、礫（0.2～0.3cm）を 1%未満含む。
3．10YR2/1 黒色シルト、10YR4/6 褐色シルトブロック（～1cm）を 3%、礫（0.2～0.6cm）を 1%含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～8cm）を 5%、10YR4/6 褐色シルトブロック（～2cm）を 3%含む。
5．10YR2/1 黒色シルト、10YR2/1 黒色シルトを壁状に部分的に含む。
6．10YR4/6 褐色シルトと 10YR2/2 黒褐色シルトが混じり合う。
7．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR4/6 褐色シルトブロック（～2cm）を 3%含む。
8．10YR2/1 黒色シルト、礫（0.2～0.6cm）を 1%含む。
9．10YR2/1 黒色シルト、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロックを 10%含む。

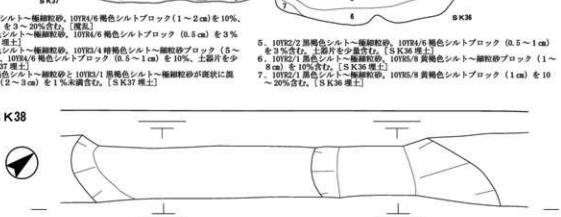
第23図　調査区４遺構平面図・断面図①（1：40）

ＳＫ36・ＳＫ37



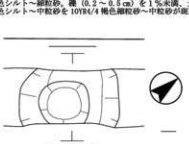
1．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（1～2cm）を10%、礫（1～3cm）を3～20%含む。［撹乱］
2．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5cm）を3%含む。［ＳＫ37 埋土］
3．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂、10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロック（5～10cm）を10%、10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を10%、土器片を少量含む。［ＳＫ37 埋土］
4．10YR5/8 黄褐色シルト～細粒砂と 10YR2/1 黒褐色シルト～極細粒砂が斑状に混じり合う。礫（2～3cm）を1%未満含む。［ＳＫ37 埋土］
5．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を3%含む。土器片を少量含む。［ＳＫ36 埋土］
6．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂、10YR5/8 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（1～8cm）を10%含む。［ＳＫ36 埋土］
7．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂、10YR5/8 黄褐色シルトブロック（1cm）を10～20%含む。［ＳＫ36 埋土］

ＳＫ38



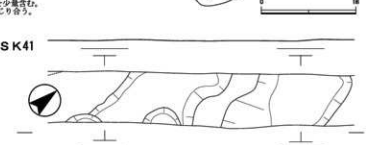
1．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂、10YR5/6 黄褐色細粒砂ブロック（～1.5cm）を部分的に、礫（0.2～3cm）を1%、土器片を少量含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/4 褐色細粒砂ブロック（～3cm）を5%、土器片を少量含む。
3．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂ブロック（～3cm）を10%、礫（0.2～1cm）を1%、土器片を少量含む。
4．10YR4/4 褐色細粒砂～中粒砂と 10YR2/3 黒褐色細粒砂～中粒砂が斑状に混じり合う。
5．10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂、礫（0.2～0.5cm）を1%未満、土器片を少量含む。
6．10YR2/2 黒褐色シルト～中粒砂を 10YR4/4 褐色細粒砂～中粒砂が斑状に混じり合う。

ＳＫ40



1．5Y4/1 灰色シルト、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（3cm）を1%含む。
2．5Y3/1 オリーブ黒色シルト、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（1～3cm）を5%含む。
3．5Y3/1 オリーブ黒色シルト、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（1～3cm）を20%含む。
4．2.5Y3/1 黒褐色シルト、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（5cm）を1%含む。
5．2.5Y2/1 黒色シルト、2.5Y7/3 浅黄色シルトブロックを1%、礫（0.5cm）を5%含む。

ＳＫ41



1．10YR2/1 黒色シルト、礫（0.2～3cm）を5%含む。［撹乱］
2．10YR1.7/1 黒色シルト、礫（0.2～0.3cm）を1%未満含む。
3．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR4/6 褐色シルトブロック（～6cm）を30%含む。
4．10YR2/1 黒色シルト、礫（0.2～0.4cm）を1%未満含む。
5．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂、礫（0.2cm）を1%未満含む。
6．10YR2/2 黒褐色シルト、10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.3cm）を2%、礫（0.2～0.5cm）を1%含む。
7．10YR2/1 黒色シルト、10YR4/4 褐色シルトブロック（～6cm）を40%含む。
8．10YR2/1 黒色シルト、10YR4/4 褐色シルトブロック（～5cm）を20%含む。
9．10YR2/1 黒色シルト、10YR4/4 褐色シルトブロック（～6cm）を40%含む。
10．10YR4/4 褐色シルトと 10YR2/1 黒色シルトが斑状に混じり合う。

第24図　調査区４遺構平面図・断面図②（１：40）

代の遺構と考えられる。

ＳＫ37（第24図）　径2.3mほどの大型の土坑である。隣接するＳＫ36の埋没後に掘り込まれている。西側の肩部は重機掘削により破壊してしまったため、規模等は南北の土層断面から復元している。深さは0.2mほどで、断面形は浅い皿形を呈する。

埋土中からは、土師器の坏、皿、甕、須恵器の壺ないし甕などが出土した。出土遺物は奈良時代のものがほとんどを占めるが、わずかに山茶碗の細片と思われるものを含んでおり、ＳＫ36との重複関係からみても鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＫ38（第24図）　径3.5m以上の大型の土坑である。調査区内ではごく一部の検出にとどまったため、全体の形状は不明であるが、平面形が円形ないし楕円形の土坑と思われる。東側に向かって深くなっており、最も深い部分では深さ0.8mほどとなっている。

埋土中からは、土師器の坏、甕、須恵器の壺ないし甕などが出土した。出土遺物から、奈良時代～平安時代前期の遺構と考えられる。

ＳＫ39（第23図）　径0.95mほどの平面形が円形ないし楕円形と思われる土坑である。深さは0.6mほどで、壁面は垂直に近く一部はややオーバーハングし袋状を呈する。

埋土中からは、土師器の皿や甕が出土した。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

ＳＫ40（第24図）　径1.05mほどの平面形が円形と思われる土坑である。中央部は一段深くなっており、最も深い部分では深さ0.6mほどとなっている。

埋土中からは、土師器の細片や、須恵器の壺と思われる破片が出土した。出土遺物はいずれも小片で時期の比定は困難であるが、飛鳥～奈良時代の遺構の可能性が考えられる。

ＳＫ41（第24図）　径２mほどの大型の土坑である。大部分が調査区外に出ているため、全体の形状は不明であるが、平面形が隅丸方形の土坑となる可能性がある。深さは0.3～0.4mほどで、床面には緩やかな凹凸がみられる。また、土層の堆積状況からみて埋没過程で部分的に掘り返された可能性がある。

埋土中からは、土師器の甕や、須恵器の坏蓋が出土した。出土遺物から、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構と考えられる。

ＳＫ42（第25図）　径1.3m以上の土坑である。南側は調査区外へのびており、北側も一部を撹乱によって壊されているため全体の形状は不明であるが、平面形は円形ないし楕円形を呈すると思われる。深さは0.2mほどと浅い。

埋土中からは、土師器の小皿ないし皿が出土した。出土遺物から、鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＫ43（第25図）　径1.5m以上の土坑である。調査区内で検出されたのはごく一部であるため、全体の形状は不明である。深さは0.4mほどで、断面形は皿形を呈する。埋没過程で一部が掘り返された可能性がある。

埋土中からは土師器の甕が出土した。出土遺物はごく少量で小片のみのため、時期の比定は困難であるが、飛鳥～奈良時代の遺構と考えられる。

ＳＫ44（第25図）　径1.8mほどの土坑である。大部分が調査区外に出ているため全体の形状は不明である。東側の掘形はやや不整形である。深さは0.6mほどである。

土層の堆積状況から、埋没した後に東側を中心に再掘削が行われたと考えられる。東側の掘形が不整形であるのは、この再掘削によると思われる。

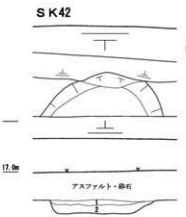
第６層からは、少なくとも９個体以上の土師器の甕が出土した。これらの甕は、土坑西半部の調査区北壁沿いで集中して検出されている。

出土した甕には146のように完形に近いものもあるが、全体を復元できるほど破片が揃う個体はほとんどない[1]。どちらかと言えば、完形品ではなく破損したものが集積され、折り重なっているような状況である。また、第６層には焼土塊に由来すると考えられる褐色シルトが部分的に含まれており、甕の集積とも関係する可能性がある。

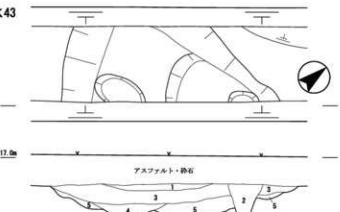
なお、ピット状の穴がＳＫ44埋土上層から土師器甕の集中部に向かって掘り込まれている（第２・３層）。遺構掘削中には認識できなかったが、ピットよりも広い範囲に破片が広がるため、甕はこのピットに包含されていたものではない。

埋土中からは、土師器甕のみが出土している。出土遺物から、奈良時代の遺構と考えられる。

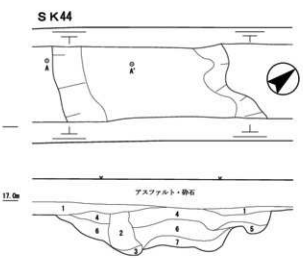
ＳＫ45（第25図）　ＳＫ46に隣接する、長径0.8m



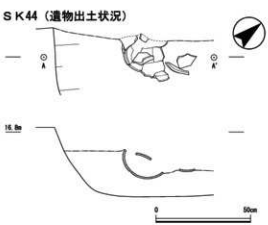
1．10YR2/1 黒色シルト。10YR5/6 黄褐色シルトブロックを 10%。礫（0.2～0.3 cm）を 20%含む。
2．2.5Y2/1 黒色シルト。10YR5/6 黄褐色シルトブロックを 25%。礫（0.2～0.3 cm）を 10%含む。



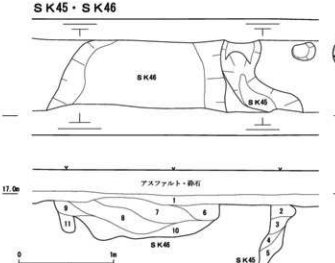
1．10YR3/2 黒褐色シルト。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 10%含む。
2．2.5Y2/1 黒色シルト。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 10%含む。［ピット埋土］
3．10YR2/2 黒褐色シルト～細砂粒。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを 5%含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/2 灰褐色シルトブロックを 20%含む。
5．10YR4/2 灰黄褐色シルト。10YR2/2 黒褐色シルトブロックを 10%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 5%含む。



1．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（1～3 cm）を 3～5 %、礫（0.5～1 cm）を 1 %含む。［掘乱］
2．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR5/8 黄褐色シルト～極粒砂ブロック（1～1.5 cm）を 10～15%含む。［ピット埋土？］
3．10YR4/6 褐色シルト～細粒砂と 10YR3/3 黒褐色シルト～極細粒砂が斑状に混じり合う。［ピット埋土？］
4．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1 cm）を 1 %含む。



5．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5 cm）を 30%含む。
6．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR5/8 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5 cm）を 1 %、7.5YR4/4 褐色シルトを層状に部分的に、土器片を多量に含む。
7．10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂。10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂を斑状に 30%、礫（0.2～0.5 cm）を 3 %含む。



1．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（1～3 cm）を 3～5 %、礫（0.5～1 cm）を 1 %含む。［掘乱］
2．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5 cm）を 3 %、礫（0.2～0.5 cm）の礫を 1～2 %含む。［SK45 埋土］
3．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1 cm）を 5～10%含む。締まり弱い。［SK45 埋土］
4．10YR4/6 褐色シルト～細粒砂と 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂が混じり合う。締まり弱い。［SK45 埋土］
5．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1 cm）を 5～10%、礫（10 cm）を下位に部分的に含む。［SK45 埋土］
6．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.5 cm）の礫を 1 %含む。［SK46 埋土］
7．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～1 cm）を 10%、礫（0.2～0.8 cm）を 3%含む。［SK46 埋土］
8．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂と 10YR4/6 褐色シルト～細粒砂が斑状に混じり合う。礫（0.2～1 cm）を 3 %含む。［SK46 埋土］
9．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（1 cm）を 1～3%、礫（0.2～0.8 cm）を 1 %含む。［SK46 埋土］
10．10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂。10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂を斑状に 30%、礫（0.2～0.5 cm）を 3 %含む。［SK46 埋土］
11．2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細粒砂～極細粒砂。［掘乱か地山の変化？］

第25図　調査区４遺構平面図・断面図③（１：40、ＳＫ44遺物出土状況は１：20）

以上、短径0.25mの不整形な土坑である。ＳＫ46との先後関係は不明である。南側は幅が狭くなる上に非常に深く、深さ0.7mほどとなっている。

埋土中からは、土師器の細片が出土したのみで、時期の比定は困難であるが、平安～鎌倉時代の遺構の可能性が考えられる。

ＳＫ46（第25図）　ＳＫ45の西側に位置する径1.8m以上の土坑である。大部分が調査区外に出ているため全体の形状は不明である。深さは0.4mほどで、断面形は逆台形を呈する。

埋土中からは、土師器の甕が出土したが、いずれも細片で図化できるものはなかった。出土遺物から、奈良～平安時代の遺構と考えられる。

ＳＫ47（第26図）　径2.5mほどの土坑である。大部分が調査区外に出ているため全体の形状は不明である。掘形はやや不整形で、床面には凹凸がある。最も深い部分で、深さ0.4mほどである。

埋土中からは、土師器の皿、甕、灰釉陶器の碗が出土した。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

ＳＫ48（第26図）　径0.9mほどの土坑である。半分以上が調査区外に出ているが、平面形は円形に近いものと思われる。深さは0.35mほどである。

埋土中からは、土師器の皿や鍋が出土した。出土遺物から、鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＫ49（第26図）　径2.8m以上の大型の土坑である。大部分が調査区外に出ているため、全体の形状は不明であるが、平面形は方形に近いものと思われる。深さは0.5mほどで、床面には緩やかな凹凸がみられる。

埋土中からは、土師器の甕、ロクロ土師器の台付皿などが出土した。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる[2]。

ＳＫ50（第26図）　径0.6mほどの平面形が隅丸方形になると考えられる土坑である。ＳＫ49の埋没後に、ＳＫ49埋土上層から掘り込まれている。深さは0.7～0.8mほどと深く、ＳＫ49の底面を掘り抜いている。

埋土中からは、土師器の甕などが出土したが、いずれも細片で図化できるものはなかった。時期比定は困難であるが、出土遺物から平安時代の遺構の可能性が考えられる。

ＳＫ51（第28図）　径8.0mほどあると思われる、非常に大型の土坑である。東側の掘形が撹乱によって破壊されているため、正確な規模は不明である。深さは最も深い西側部分で0.6mほどあるが、東側では浅くなり0.2mほどである。

床面には、浅い土坑や溝、ピット状の凹凸が複数見られるが、土層の堆積状況からは、掘り返しなどが行われた形跡は確認できない。

埋土中からは、土師器の坏、甕、須恵器の坏、高坏、管状土錘などが出土した。出土遺物から、飛鳥時代の遺構と考えられる。

ＳＫ52（第26図）　調査区西部で検出された、径3.9mほどの大型の土坑である。大部分が調査区外に出ているため全体の形状は不明であるが、平面形は円形に近いものと思われる。深さは深い部分で0.4mほどある。

底面の東壁沿いには、浅い溝状の落ち込みが認められる。また、西側の底面にも不整形な浅い落ち込みが見られる。土層の堆積状況からは、一度埋没した後に西側に新たに土坑が掘り込まれていることが窺われ、本来は２基の土坑が重複したものである可能性が考えられる。

埋土中からは、土師器の皿、甕が出土した。出土遺物から、奈良時代の遺構と考えられる。

ＳＫ53（第27図）　ＳＫ52のすぐ西側に位置する、径３m以上の大型の土坑である。大部分が調査区外に出ているため全体の形状は不明であるが、平面形は円形に近いものと思われる。掘形はやや段状になり、最も深い箇所で深さ0.5mほどある。

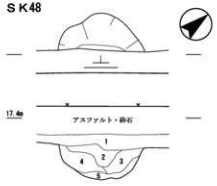
土層の堆積状況からは、埋没過程で掘り返しが行われたり、ピット状の穴が掘り込まれたりした可能性が考えられる。

埋土中から遺物は出土しなかったが、形態や埋土の類似性などから、ＳＫ52と近い時期の遺構と推定される。

ＳＫ54（第27図）　ＳＫ52・53のすぐ西側に位置する、径１mほどの土坑である。全体の形状は不明であるが、平面形は不整形な楕円形となる可能性が高い。深さは0.35mほどである。

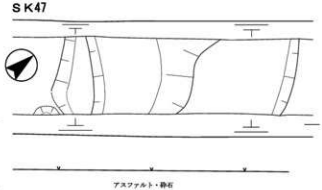
埋土中から土師器の皿、甕、管状土錘などが出土

ＳＫ48



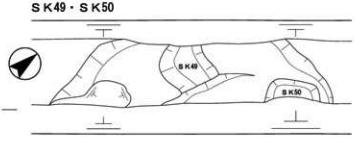
1．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR4/4 褐色シルトブロック（1～5㎝）を 10%，礫（1～3㎝）を 2～5％含む。［撹乱］
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。土器片を少量含む。
3．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。
4．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR5/6 黄褐色シルトブロック（0.5～1㎝）を 2～10%含む。
5．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂と 10YR4/6 褐色シルトが斑状に混じり合う。

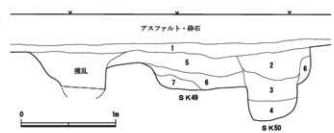
ＳＫ47



1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR4/6 褐色シルトブロック（1～5㎝）を 20%，礫（0.5～3㎝）を 5～10%含む。［撹乱］
2．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR5/8 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5㎝）を 1%，礫（0.2～0.5㎝）を 1%含む。［ピット埋土］
3．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR4/6 褐色シルトブロック（1～5.5㎝）を 10～20%含む。
4．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR5/8 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～1㎝）を 1%，土器片を少量含む。
5．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～1㎝）を 3%含む。
6．10YR4/6 褐色シルト～粗粒砂と 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂が斑状に混じり合う。礫（0.2～0.5㎝）を 3～5％含む。
7．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂，礫（0.2～0.5㎝）を 1％含む。［撹乱かピット埋土？］

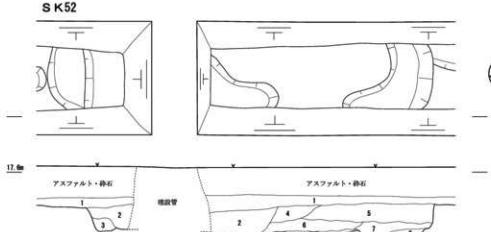
ＳＫ49・ＳＫ50





1．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR4/4 褐色シルトブロック（1～5㎝）を 10%，礫（1～3㎝）を 2～5％含む。［撹乱］
2．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR4/6 褐色シルトブロック（1～3㎝）を 15%含む。［ＳＫ50 埋土］
3．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR5/8 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（1～2㎝）を 3％含む。［ＳＫ50 埋土］
4．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。［ＳＫ50 埋土］
5．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂，礫（0.2～0.4㎝）を 1～2％含む。［ＳＫ49 埋土］
6．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロック（1～3㎝）を 3％含む。［ＳＫ49 埋土］
7．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂と 10YR5/8 黄褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う。［ＳＫ49 埋土］

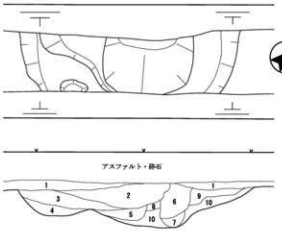
ＳＫ52



1．10YR3/3 暗褐色シルト～粘粒砂，10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 20%含む。
2．10YR2/1 黒色シルト，10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを 5%含む。
3．2.5Y2/1 黒色シルト，10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを 10%含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト，10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを 5%含む。
5．10YR2/1 黒色シルト，10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを 20%含む。
6．2.5Y2/1 黒色シルト，10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを 30%含む。
7．10YR2/1 黒褐色シルト，10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを 50%含む。
8．10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトが斑状に混じり合う。
9．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト，10YR3/1 黒褐色シルトブロックを 10%含む。

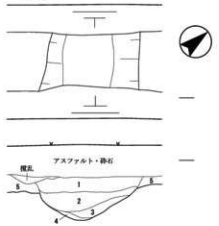
第26図　調査区４遺構平面図・断面図④（１：40）

ＳＫ53



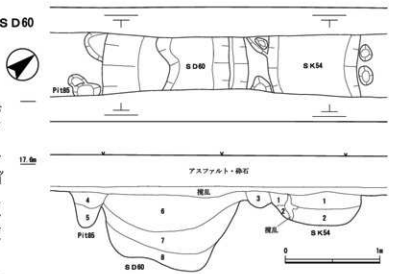
1．10YR3/3 暗褐色シルト～粘粒砂。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 20%含む。
2．10YR2/1 黒色シルト～粘粒砂。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 10%含む。
3．10YR3/2 黒褐色シルト～粘粒砂。10YR4/2 灰黄褐色シルトブロックを 20%含む。
4．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。10YR3/2 黒褐色シルトブロックを 20%含む。
5．10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。10YR4/2 灰黄褐色シルトブロックを 2%含む。
6．2.5Y3/1 黒褐色シルト～粘粒砂。
7．10YR2/1 黒色シルト～粘粒砂。
8．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～粘粒砂。
9．10YR3/1 黒褐色シルト～粘粒砂。
10．10YR4/2 灰黄褐色シルト～粘粒砂。

ＳＤ57



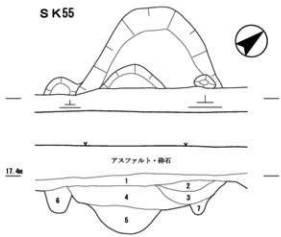
1．2.5Y2/1 黒色シルト。2.5Y7/3 浅黄色シルトブロックを 1%、礫(0.5 cm)を 1%含む。
2．2.5Y2/1 黒色シルト。10YR5/6 黄褐色シルトブロックを 2%含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 1%含む。
4．2.5Y3/1 黒褐色シルト。2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトブロックを 10%含む。
5．10YR2/3 黒褐色シルト。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを 30%含む。

ＳＫ54・ＳＤ60



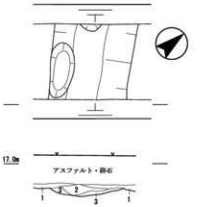
1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.4 mm）を 1%含む。粘質。［ＳＫ54 埋土］
2．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～3 cm）を 30%。礫（0.2～0.6 cm）を 1%含む。粘質。［ＳＫ54 埋土］
3．10YR1.7/1 黒色シルト。粘質。［ピット埋土］
4．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～3 cm）を 20%含む。［Pit85 埋土］
5．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～2 cm）を 60%。土器片が多数含む。［Pit85 埋土］
6．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.4 cm）を 1%、土器片をやや含む。［ＳＤ60 埋土］
7．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（2～5 cm）を 1%未満、礫（0.2～0.4 cm）を 1%、土器片をやや含む。［ＳＤ60 埋土］
8．10YR1.7/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.8 cm）を部分的に、土器片を多く含む。粘質。［ＳＤ60 埋土］

ＳＫ55



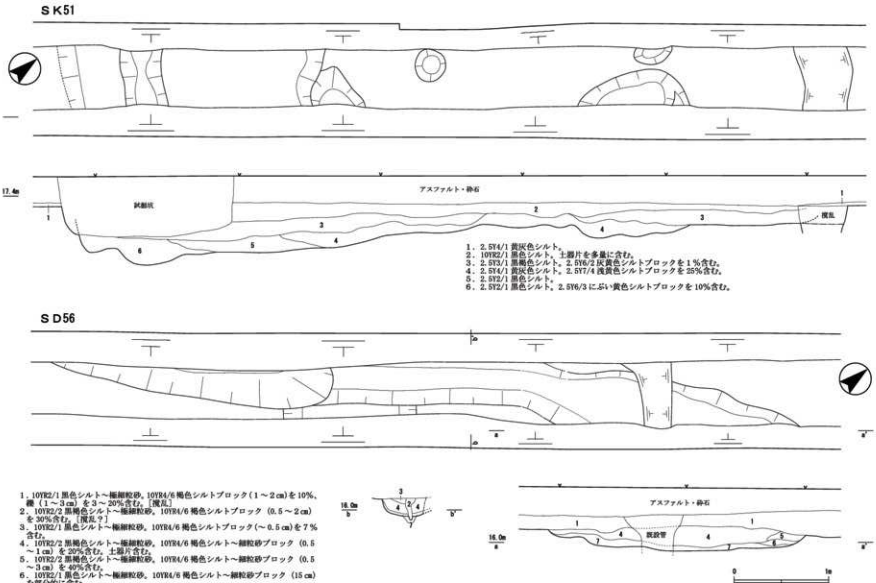
1．10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒砂。［造成土］
2．2.5Y2/1 黒色シルト～粗粒砂。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 5%含む。
3．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 5%含む。
4．10YR2/1 黒色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 5%含む。
5．10YR1.7/1 黒色シルト。
6．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 20%含む。［ピット埋土］
7．10YR3/1 黒褐色シルト 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを 5%含む。［ピット埋土］

ＳＤ58



1．7.5YR3/2 黒褐色シルト。10YR5/6 黄褐色シルトブロックを 2%含む。［造成土］
2．7.5YR2/2 黒褐色シルト。7.5YR4/6 褐色シルトブロックを 1%含む。
3．10YR2/3 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロックを 1%含む。

第27図　調査区４遺構平面図・断面図⑤（１：40）


SK51
12.4m
試掘坑
アスファルト・砕石
撹乱
1
2
3
4
5
6
1．2.5Y4/1 黄灰色シルト。
2．10YR2/1 黒色シルト。土器片を多量に含む。
3．2.5Y3/1 黒褐色シルト。2.5Y6/2 灰黄色シルトブロックを１%含む。
4．2.5Y4/1 黄灰色シルト。2.5Y7/4 浅黄色シルトブロックを25%含む。
5．2.5Y2/1 黒色シルト。
6．2.5Y2/1 黒色シルト。2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロックを10%含む。
SD56
a
a'
b
b'
16.0m
1．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（１～２cm）を10%、礫（１～３cm）を３～20%含む。［撹乱］
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～２cm）を30%含む。［撹乱？］
3．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（～0.5cm）を７%含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～１cm）を30%含む。土器片含む。
5．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～３cm）を40%含む。
6．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（15cm）を部分的に含む。
7．10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂と 10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂が斑状に混じり合う。やや砂質。
アスファルト・砕石
撹乱管
0
1m

した。出土遺物からは奈良時代の遺構とも思われるが、ＳＤ60などの遺構との重複関係からは、鎌倉～室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ55（第27図）　調査区西端で検出された径1.6m以上の土坑である。全体の形状は不明であるが、平面形は円形に近いものと思われる。深さは0.55mほどである。

底面の西壁付近はピット状に落ち込んでいる。また、土層の堆積状況から、埋没後に東側が掘り返されているものと思われる。

埋土中からは、土師器坏、皿、甕、須恵器蓋などが出土した。出土遺物から、奈良時代の遺構と考えられる。

④溝

ＳＤ56（第28図）　ほぼ東西方向にのびる溝である。幅約0.6mで、調査区内では長さ7.8mほどを検出した。東側では南へ緩やかに方向を変えている。深さは0.25mほどで、西側は浅い土坑状に緩やかに凹んでいる。

埋土中からは土師器の皿、甕、須恵器の坏、蓋などが出土した。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

ＳＤ57（第27図）　調査区を横断する溝である。幅約１mで、調査区内では長さ0.6mほどを検出した。深さは0.5mほどで、断面形が緩やかなU字形を呈するしっかりとした溝である。

埋土中からは、山茶碗と思われる細片が出土したのみで、図化できるものはなかった。時期の比定は困難であるが、出土遺物から鎌倉時代の遺構の可能性が考えられる。

ＳＤ58（第27図）　調査区を横断する溝である。幅約0.8mで、調査区内では長さ0.8mほどを検出した。深さは0.1mほどと浅く、断面形は浅い皿形を呈している。

埋土中からは土師器の坏、甕などが出土した。出土遺物から、奈良時代の遺構と考えられる。

ＳＤ59（第29図）　調査区を横断する溝である。幅約1.6mで、調査区内では長さ1.5mほどを検出した。西側の方がやや深くなっており、最も深い部分で深さ0.5mほどである。底面にはピットや細い溝状の凹凸がみられる。

土層の堆積状況からみて、埋没後に東側肩部に沿って再掘削がなされた可能性が高い。西側がやや深くなっているのは、再掘削された東側より、元の溝が深かったことによると思われる。

埋土中からは、土師器の甕が出土した。出土遺物はごく少量で図化できるものもなかったため、時期の比定は困難であるが、平安時代の遺構の可能性が考えられる。

ＳＤ60（第27図）　調査区西部で検出された、調査区を横断する溝である。幅約1.4mで、調査区内では長さ１mほどを検出した。深さは0.8mほどとかなり深く、断面形は逆台形に近い。東側の壁面はやや段状をなす。

埋土中からは、土師器の皿、甕、管状土錘などが出土した[3]。特に、第８層に多く遺物が含まれていた。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

ＳＤ61（第29図）　調査区西端付近で検出された、調査区を横断する溝である。幅約1.4mで、調査区内では長さ１mほどを検出した。深さは0.85mほどとかなり深く、断面形は逆台形を呈しており、しっかりとした溝である。

位置からみると調査区３のＳＤ31へとつながる可能性もあるが、形態等がかなり異なるため、別の遺構と考えておきたい。その場合、ＳＤ61はやや北へ向きを変えているか、調査区北側で東方向へ屈曲している可能性がある。

埋土中からは、土師器の坏、甑、甕、ロクロ土師器の台付皿、須恵器の坏蓋、管状土錘などが出土した。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

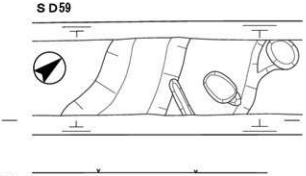
⑤落ち込み等

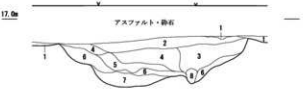
ＳＺ62（第29図）　調査区東端付近で検出された、径2.2m以上、深さ0.1～0.15mほどの浅い皿状の落ち込みである。掘形は不明瞭で、床面にはかなり凹凸があり、ピット状の凹みもいくつか検出されたが、いずれも浅く柱穴とは考えがたい。

縄文時代の竪穴建物の可能性も考えたが、第４層中から古代のものと思われる土器片が出土したことなどから、古代の遺構とした。古代の竪穴建物の一部である可能性も残されている。

埋土中からは、土師器の皿、甕や、縄文土器の可能性があるものなどが出土した。出土遺物から、奈

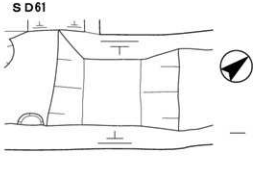
ＳＤ59

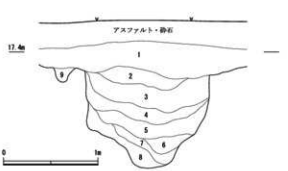




1．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（1～3cm）を3～5％、礫（0.5～1cm）を1％含む。［撹乱］
2．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（～0.5cm）を1％、土器片を少量含む。
3．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。
4．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～2cm）を1～3％、礫（0.2～0.4cm）を1％含む。
5．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を1％含む。
6．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～1cm）を7～10％含む。
7．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂と 10YR4/6 褐色シルト～細粒砂が斑状に混じり合う。
8．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。締まり弱い。［撹乱？］

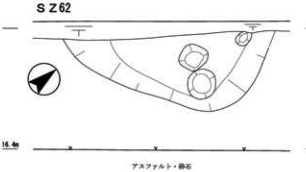
ＳＤ61





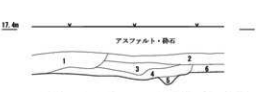
1．10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒砂。［造成土］
2．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを5％含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを2％含む。
4．10YR2/2 黒色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを20％含む。
5．10YR1.7/1 黒色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを10％含む。
6．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを20％含む。
7．10YR2/1 黒色シルト。
8．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを10％含む。
9．10YR3/1 黒褐色シルト。10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを50％含む。
［ピット埋土］

ＳＺ62



1．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（1～2cm）を10％、礫（1～3cm）を3～20％含む。［撹乱］
2．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5cm）を10％含む。［撹乱？］
3．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を40％含む。［撹乱？］
4．10YR1.7/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5cm）を1％、土器片を少量含む。
5．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を5～7％含む。
6．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂と 10YR4/6 褐色シルトが斑状に混じり合う。
7．10YR4/6 褐色シルト～極細粒砂。10YR2/1 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック（1～1.5cm）を 10％含む。
8．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。

ＳＺ63



1．2.5Y2/1 黒色シルト。礫（0.3～0.5cm）を多量に含む。［撹乱］
2．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（1～5cm）を 20％、礫（0.5～3cm）を5～10％含む。［撹乱］
3．2.5Y4/1 黄灰色シルト。2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロックを20％含む。
4．5Y2/1 黒色シルト。2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロックを1％含む。
5．10YR3/1 黒褐色シルト。2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロックを20％含む。
6．10YR5/1 褐灰色シルト。

第29図　調査区４遺構平面図・断面図⑦（１：40）

良～平安時代の遺構と考えられる。

ＳＺ63（第29図）　幅1.7m、深さ0.15mほどの浅い皿状の落ち込みである。大部分が調査区外に出ており、全体の形状は不明である。東側の掘形付近には、埋没後に２基のピットが掘り込まれ、形状が不明となっている。

埋土中からは、土師器の羽釜や、陶器の緑釉小皿などが出土した。出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

⑥ピット

Ｔ４Pit17（第30図）　調査区東部で検出された、平面形が円形を呈するピットである。底面は一部が一段深くなっており、深さは最も深い部分で0.45mほどである。

埋土はほぼ黒色土で、底面付近の埋土のみ黄褐色土ブロックを含んでいた。柱痕は認められなかった。

埋土中からは、遺存状況のよい山茶碗が１点出土したほか、土師器細片が少量出土している。出土遺物から、鎌倉時代の遺構と考えられる。

Ｔ４Pit52（第30図）　調査区中央部やや西寄りで検出された、平面形が不整形な楕円形を呈するピットである。深さは0.35mほどである。柱痕は認められなかった。

埋土中からは、須恵器甕の破片が２点出土した。２点とも検出面に近い深さから出土しており、底面からは0.2mほど浮いている。出土遺物から、飛鳥～奈良時代の遺構と考えられる。

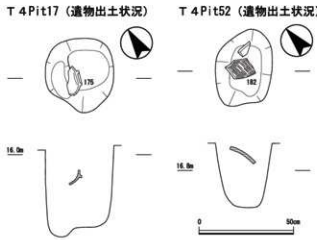
（２）遺物

①柱列出土遺物

ＳＡ33出土遺物（第31図120）　120は土師器皿である。口縁部の小片で、ＳＡ33Pit３から出土した。器壁はやや厚く、口縁部付近で肥厚し、口縁端部は丸く収められる。時期比定は困難であるが、おそらく11世紀代のものと思われる。

②土坑出土遺物

ＳＫ34出土遺物（第31図121・122）　121は縄文土器深鉢である。第４層から出土した。口縁部片で、口縁端部は面をなし、内側に肥厚する。外面には櫛状工具による条線文が施されている。福田ＫⅡ式から北白川上層式にかけて多くみられる文様であるが、



第30図　調査区４遺構平面図・断面図⑧（１：20）

口縁部の形態も考慮すると福田ＫⅡ式に併行する可能性が高く、縄文時代後期前葉のものと思われる[4]。

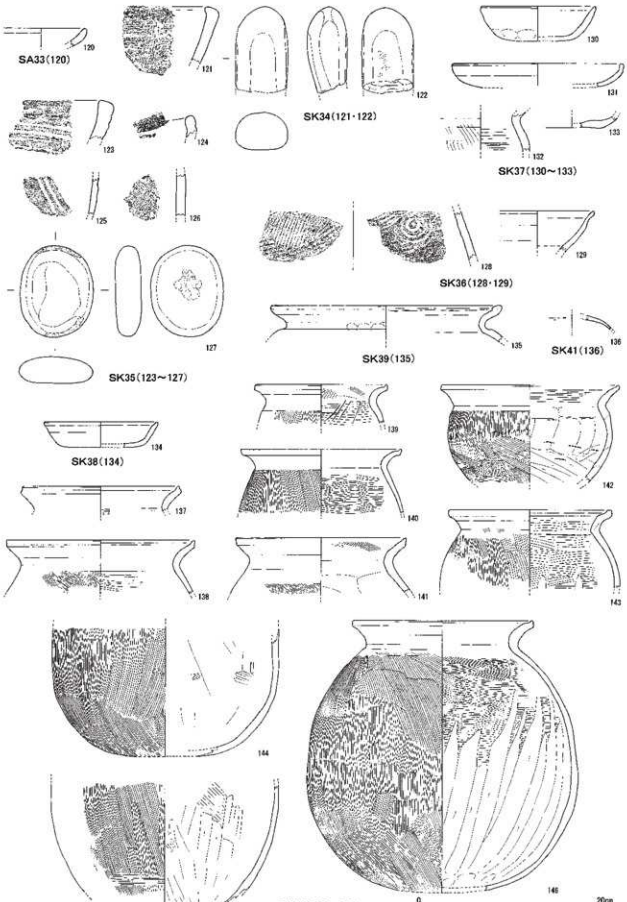
122は磨石である。第２層から出土した。半分近くを欠損する。片面が使用によりかなり摩滅し、平滑になっている。砂岩製と思われる。

ＳＫ35出土遺物（第31図123～127）　123～126は縄文土器の深鉢ないし浅鉢である。123・124は口縁部片で、口縁部直下に沈線が施されている。123は平口縁と思われ、口縁端部は面をなす。第３層から出土した。124は波状口縁で、口縁端部は丸く収められる。125は体部片で、123・124と同様の沈線が施されている。126も体部片で、ＳＫ34出土の121と同様の交差する条線文が施されている。接合しないが同様の破片がもう１片出土している。文様や胎土から、121と同一個体の可能性もある。これらは縄文時代後期前葉のものと思われる。

127は敲石である。扁平な円礫で、一端に明瞭な敲打痕が認められる。また、片面の中央部にも不明瞭ながら敲打痕と思われるものが残る。

ＳＫ36出土遺物（第31図128・129）　128は須恵器甕もしくは壺の体部片である。外面には平行タタキが施されており、内面には同心円状の当て具痕が認められる。

129は山茶碗の口縁部片である。口縁部は強いナデによって外反し、口縁端部は面をなす。13世紀前半のものと思われる。



第31図　調査区４遺物実測図①（１：４、121・123～126は１：３）

ＳＫ37出土遺物（第31図130～133）　130～132は土師器である。130は坏である。底部と体部との境は緩やかに屈曲し、口縁端部は丸く収められる。131は皿で、口縁部は緩やかに内湾し、口縁端部はやや肥厚する。底部外面にはケズリが施されている可能性がある。132は甕である。肩部の小片で、内外面ともハケで調整される。いずれも８世紀代のものと思われる。

133は須恵器坏である。底部の小片で、底部はヘラ切り後無調整である。７～８世紀のものと思われる。

ＳＫ38出土遺物（第31図134）　134は土師器坏である。底部と体部との境は屈曲し、口縁端部の内面には回線が巡らされている。内外面ともナデによって調整されている。８世紀後半～９世紀前半のものと思われる。

ＳＫ39出土遺物（第31図135）　135は土師器甕である。口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。頸部外面にはユビオサエの痕跡が残る。外面にはススが付着する。11世紀代のものと思われる。

ＳＫ41出土遺物（第31図136）　136は須恵器坏蓋の天井部の小片である。外面にはロクロケズリが施されている。おそらく６～７世紀のものと思われる。

ＳＫ44出土遺物（第31図137～146）　137～146は土師器甕である。142は器高が低く鉢に近い。また146は球胴であるが、144・145はやや長胴となる可能性がある。口縁端部はいずれも面をなし、上方へ摘まみあげられている。139・141～143は口縁部内面をハケで調整した後にヨコナデを施している。146はほぼ全形が復元できたもので、外面は前面をハケで調整し、内面はヨコハケで調整した後に下半部にケズリを施している。144・145にも同様の調整がみられる。器形や口縁端部の形態等から、いずれも８世紀のものと思われる。

ＳＫ47出土遺物（第32図147）　147は灰釉陶器碗の口縁部片である。口縁部は外反し、口縁端部は丸く収められる。器壁は薄い。内外面に釉が施されている。９世紀後半～10世紀のものと思われる。

ＳＫ49出土遺物（第32図148）　148は土師器甕の口縁部片である。口縁部は短く外反し、口縁端部は丸く収められ、肥厚する。

ＳＫ51出土遺物（第32図149～154）　149・150は土師器である。149は坏である。口縁部は丸く収める。器壁は内外面とも風化しており、調整は不明瞭である。150は甕である。口縁端部は面をなし、やや上方へ摘まみあげられる。

151～153は須恵器である。151・152は坏の底部片である。151の底部外面はヘラ切り後無調整で、やや平底状となる。152の底部は丸底に近く、やや厚い。153は高坏の脚部である。遺存している部分から、二段三方向の透孔があけられていたとみられる。上下の透孔の間には２条の回線を施す。これらは７世紀前半のものと思われる。

154は管状土錘である。やや細身で、両端に向かって窄まり、細長い紡錘形を呈する。

ＳＫ52出土遺物（第32図155～157）　155～157は土師器である。155は皿で、底部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁端部は丸く収められる。底部外面はケズリによって調整される。156・157は甕の口縁部片である。両方とも口縁端部は面をなす。157は口縁部内面をヨコハケで調整した後にヨコナデを施している。

これらはいずれも８世紀代のものと思われる。

ＳＫ54出土遺物（第32図158）　158は管状土錘である。完形で、最大径1.3㎝のやや細身のものである。ユビオサエの痕跡が残るなど不整形であるが、両端の端面はきれいに調整されている。

ＳＫ55出土遺物（第32図159・160）　159は土師器皿である。口縁部は底部から短く屈曲して立ち上がり、口縁部内面には浅い回線が巡らされている。底部外面はケズリによって調整される。

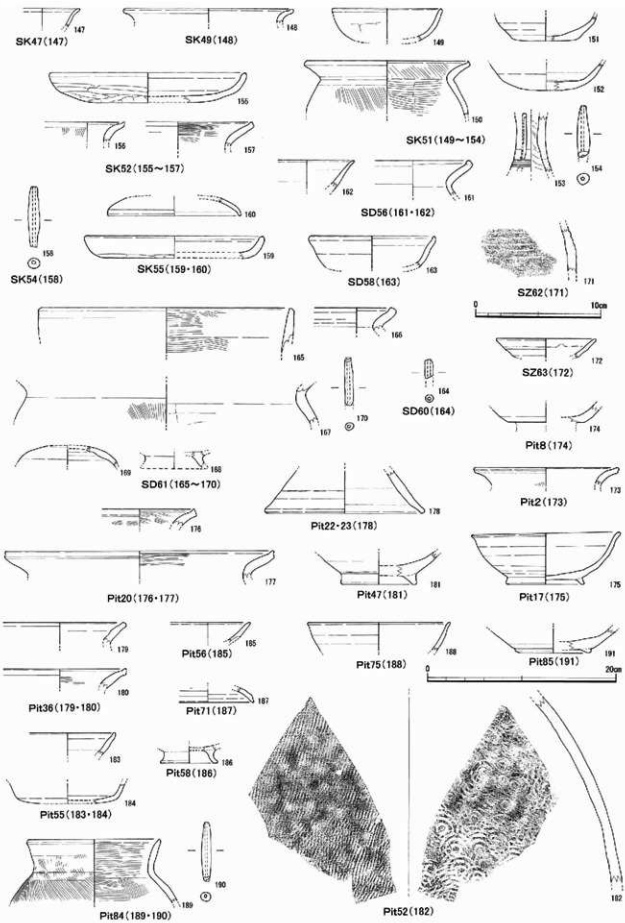
160は須恵器の蓋である。全体に緩やかに内湾し、口縁部は短くやや屈曲する。口縁部しか遺存していないが、天井部に摘まみが付くものであろう。

これらは８世紀代のものと思われる。

③溝出土遺物

ＳＤ56出土遺物（第32図161・162）　161は土師器甕である。口縁端部は短く内側に折り返されて肥厚する。外面にはヨコハケが施されている。９世紀後半～10世紀前半のものと思われる。

162は須恵器坏の口縁部片である。口縁部はわず



第32図　調査区４遺物実測図②（１：４、171は１：３）

かに外反し、口縁端部は丸く収められる。時期比定は困難であるが、おそらく9世紀後半頃のものと思われる。

ＳＤ58出土遺物（第32図163）　163は土師器坏である。口縁部は外反し、口縁端部付近で若干内湾する。口縁端部は丸く収められる。調整は不明瞭であるが、口縁部付近にはヨコナデが施されているようである。8世紀後半～9世紀前半のものと思われる。

ＳＤ60出土遺物（第32図164）　164は管状土錘である。細身のもので、半分以上を欠損している。

ＳＤ61出土遺物（第32図165～170）　165～167は土師器である。165は甕の口縁部片である。口縁端部は面をなす。166・167は甕である。166は口縁端部を若干内面に肥厚させている。167の頸部内面は工具ナデによって調整されている。

168はロクロ土師器の台付椀である。高台の小片で、高台は外方へハの字状に開く。

169は須恵器坏蓋である。天井部片で、外面にはロクロケズリが施されている。

170は管状土錘である。細身で両端に向かって窄まる。一端を欠損している。

④落ち込み等出土遺物

ＳＺ62出土遺物（第32図171）　171は縄文土器と思われるものであるが、胎土や焼成などから、弥生土器や土師器の可能性も考えられる。外面には5本の平行沈線が認められる。外面にはミガキが施されているようにも見える。縄文土器とすれば、縄文時代中期～後期のものと思われる。

ＳＺ63出土遺物（第32図172）　172は陶器の緑釉小皿である。口縁部付近の内外面に灰釉が施されている。古瀬戸で15世紀代のものと思われる。

⑤ピット出土遺物

Ｔ４Pit２出土遺物（第32図173）　173は土師器甕である。口縁部の小片で、口縁端部は面をなす。外面にはハケが一部遺存する。7～8世紀のものと思われる。

Ｔ４Pit８出土遺物（第32図174）　174は須恵器の壺と思われる。脚部もしくは高台が付くと思われるが、欠損しており不明である。外面にはロクロケズリが施されている。

Ｔ４Pit17出土遺物（第32図175）　175は山茶碗である。半分程度が遺存している。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く収められる。底部内面には重ね焼き痕が認められる。12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。

Ｔ４Pit20出土遺物（第32図176・177）　176・177は土師器甕である。176は口縁部の小片で、口縁端部は面をなし、上方へやや肥厚する。内外面にハケが施されている。177も口縁部の破片で、口縁端部は面をなし、やや上方に摘まみあげられている。内面はヨコハケの後にヨコナデを施している。これらは7～8世紀のものと思われる。

Ｔ４Pit22・23出土遺物（第32図178）　178は土師器高坏の脚部と思われる。脚裾部径が16.2cmとややや大型で、別の器種の可能性もある。ハの字状に直線的に開くが、脚端部付近はやや内湾する。外面には粘土接合痕が明瞭に残る。内外面ともナデによって調整される。6～7世紀のものと思われる。

Ｔ４Pit36出土遺物（第32図179・180）　179・180は土師器甕である。180は口縁端部が面をなし、やや上方へ摘まみあげられる。内面にはハケが施されている。179は口縁端部の面が不明瞭である。いずれも7～8世紀のものと思われる。

Ｔ４Pit47出土遺物（第32図181）　181は山茶碗である。底部はやや厚く、高台は高い。12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。

Ｔ４Pit52出土遺物（第32図182）　182は須恵器甕の体部片である。外面には擬格子状のタタキが施され、内面には同心円状の当て具痕が認められる。また、外面には刻線が1本施されているが、意図的なものか不明である。

Ｔ４Pit55出土遺物（第32図183・184）　183・184は土師器坏である。183は口縁部片で、口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は丸く収められる。ヨコナデによって調整されている。184は底部から体部にかけての破片である。底部と体部との境は屈曲している。風化しており、器壁の調整は不明瞭である。いずれも8世紀後半～9世紀前半のものと思われる。

Ｔ４Pit56出土遺物（第32図185）　185は土師器坏である。口縁部の小片で、口縁端部内面はやや面をなす。10世紀代のものと思われる。

Ｔ４Pit58出土遺物（第32図186）　186はロクロ土

師器台付埦である。外反しながらハの字状に開く、高い高台を貼り付けている。11～12世紀のものと思われる。

Ｔ４Pit71出土遺物（第32図187）　187は須恵器蓋と思われるものである。口縁部の小片で、別の器種の可能性もある。外面にはロクロケズリが施されている。

Ｔ４Pit75出土遺物（第32図188）　188は灰釉陶器の碗である。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸く収める。内外面に釉が施されている。10世紀代のものと思われる。

Ｔ４Pit84出土遺物（第32図189・190）　189は土師器甕である。口縁部はやや直立気味に上方へのび、口縁端部は面をなす。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが施されている。外面にはススが付着する。６～７世紀のものと思われる。

190は管状土錘である。ほぼ完形であるが、一端をわずかに欠損する。最大径は１㎝で、細身のものである。

Ｔ４Pit85出土遺物（第32図191）　191は山茶碗である。高台は低く、底部外面には糸切り痕が認められる。また、底部内面は摩耗している。13世紀前半のものと思われる。

⑥その他出土遺物

表面採集遺物（第33図192～207）　192～197は調査区４付近で表面採集された遺物である。

192・193は須恵器である。192は坏蓋の天井部片で、外面にはロクロケズリが施されている。６世紀後半～７世紀前半のものと思われる。193は蓋の摘まみである。扁平なボタン状を呈する。８世紀のものと思われる。

194は灰釉陶器碗である。高台は三日月高台に近い輪高台で、器壁はかなり薄い。９世紀後半～10世紀前半のものと思われる。

195・196は山茶碗である。いずれも底部片で、195は高台が剥離して欠損している。196は器壁が薄く、高台はナデ付けられて矮小化している。

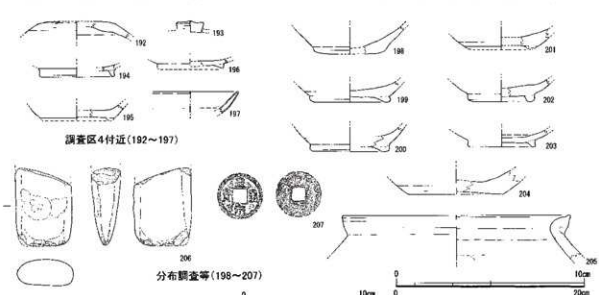
197は青磁皿の口縁部の小片である。体部中位で屈曲しており、屈曲部の外面は稜をなす。屈曲部内面には圏線が認められる。形態や釉調などから龍泉窯系のものと思われる。

198～207は平成26年度の分布調査等で表面採集された遺物である。

198は土師器の壺の底部である。器壁は風化しており、調整等は不明瞭である。

199～203は山茶碗である。いずれも底部片である。

204・205は陶器である。204は片口鉢等の底部片と思われる。高台はなく、平底である。器壁は厚く、体部外面はロクロケズリ、底部外面はナデによって調整されている。205は甕の口縁部片である。口縁端部は大きく拡張されて頸部と接着し、縁帯となる。常滑産で、15世紀前半のものと思われる。



第33図　調査区４付近等遺物実測図（１：４、206は１：３、207は１：２）

206は磨製石斧である。第２次調査の調査区８付近で採集されている。基部側の半分程度を欠損している。側縁に明瞭な面は見られず、断面形は楕円形を呈する。片面には敲打痕とみられる痕跡があり、刃部にも刃潰し状の剥離があるため、敲石に転用された可能性がある。風化しやすい緑色岩のような石材が用いられており、表面はかなり風化している。形態から、縄文時代のものと思われる。

207は銭貨である。北宋の皇宋通宝で、背面は無文である。

註

1）土師器甕の破片の広がりは調査区外へと続いていたが、今回の調査では調査区壁面に露出した破片の回収にとどめた。そのため破片が不足している可能性もあるが、出土状況から見て破片化した状態で埋没したことは確実と考えられる。

2）ＳＫ50の上半部はＳＫ49と一連で掘削を行ったため、ＳＫ49出土遺物の中に、本来はＳＫ50に包含されていた遺物が混じり込んでいる可能性がある。ただし、大きく時期が異なるものは認めがたいため、ＳＫ49・50ともに平安時代の遺構とした。

3）ＳＤ60とＳＤ61は、いずれも調査時に「ＳＤ３」と同じ遺構番号が付されており、遺物についても、どちらもＳＤ３として取り上げられていた。ただし、両遺構は掘削日が異なるため、遺物ラベルに記入された日付を元に、ＳＤ60とＳＤ61の出土遺物として区別した。

4）ＳＫ34・35出土土器の条線文と類似する文様を施した深鉢片が新徳寺遺跡ＳＫ201で出土しており、福田ＫⅡ式に比定される深鉢を伴う。（三重県埋蔵文化財センター1997『新徳寺遺跡』）

第１表　との山・アレキリ遺跡第１次調査出土遺物一覧表

【凡例】
※挿図番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。
※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。
※胎土・釉薬の色調は『新版　標準土色帖』に拠る。
※土器・陶器等の残存度については、復元される口縁部ないし底部を12分割したうちの残存度を記している。「小片」としたものは、細片のため残存度が示せなかったものである。

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
1	001-02	1	SK1	土師器	皿	口径　13.4	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
2	001-03	1	SK1	土師器	羽釜	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	
3	001-01	1	SK1	土師器	鍋	口径　20.6	外：ヨコナデ 内：ナデ	外：褐10YR4/6 内：浅黄橙10YR8/4	口縁部 3/12	外面スス付着
4	001-04	1	SK2	陶器	碗（山茶碗）	高台径　6.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	外：灰褐5YR5/2 内：灰黄褐10YR6/2	底部 2/12	
5	001-05	1	SK3	土師器	皿	口径　11.4	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	
6	001-07	1	SD4	陶器	碗（山茶碗）	高台径　7.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白5Y7/1	底部 2/12	
7	001-06	1	SD5	土師器	鍋	口径　21.8	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	
8	002-02	1	SD6	陶器	碗（山茶碗）	高台径　7.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰黄2.5Y7/2	底部 2/12	
9	004-01	1	SD7	須恵器	長頸壺	体部径　17.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	外：灰5Y5/1 内：黄灰2.5Y6/1	肩部 2/12	
10	003-02	1	SD7	須恵器	壺	頸部径　14.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y6/1	肩部 2/12	内面黒色物付着
11	002-07	1	SD7	土師器	皿	口径　10.8 器高　2.5	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 5/12	
12	002-06	1	SD7	土師器	皿	口径　11.2 器高　2.3	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 5/12	
13	002-08	1	SD7	土師器	皿	口径　12.6 器高　2.5	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 4/12	
14	002-05	1	SD7	土師器	皿	口径　12.6 器高　2.6	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
15	003-01	1	SD7	土師器	羽釜	鍔部径　41.2	外：ヨコハケ・ヨコナデ 内：工具ナデ	外：灰黄褐10YR5/2、浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/4	鍔部 1/12	外面スス付着
16	002-04	1	SD7	土師器	鍋	—	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙10YR7/4	口縁部 小片	
17	002-03	1	SD7	土師器	鍋	口径　24.0	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	外面スス付着
18	002-01	1	SD7	土師器	鍋	口径　35.0	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	外面スス付着
19	003-03	1	SD7	陶器	碗（山茶碗）	高台径　7.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰黄2.5Y6/2	底部 2/12	底部内面摩耗
20	004-02	1	T1Pit4	陶器	碗（山茶碗）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	外：灰5Y6/1 内：灰白2.5Y7/1	底部 4/12	高台剥離
21	004-03	1	T1Pit5	土師器	小皿	口径　7.6	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
22	005-02	2	SH9	土師器	坏	口径　14.4	外：ナデ？ 内：ナデ？	橙7.5YR6/8	口縁部 1/12	カマド周辺
23	005-01	2	SH9	土師器	甕	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	
24	005-03	2	SH9	須恵器	坏蓋	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	褐灰10YR5/1	口縁部 小片	
25	005-04	2	SH10	土製品	管状土錘	残存長　4.6 最大径　1.5	ユビオサエ・ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	半欠	
26	005-05	2	SK11	土師器	坏	口径　11.7 器高　5.3	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ヨコナデ	橙7.5YR6/6	口縁部 12/12	
27	005-07	2	SK11	土師器	甕	口径　14.4	外：ヨコハケ・ナデ 内：ヨコハケ	にぶい黄橙10YR8/4	口縁部 3/12	
28	005-08	2	SK11	土製品	管状土錘	残存長　4.8 最大径　0.8	ユビオサエ・ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	半欠	
29	005-06	2	SK11	土製品	管状土錘	残存長　6.6 最大径　0.8	ユビオサエ・ナデ	浅黄橙10YR8/3、橙7.5YR6/6	一部欠	
30	007-03	2	SK15	土師器	坏	口径　12.4 器高　5.5	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部 12/12	取り上げ№12

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
31	009-01	2	SK15	上師器	甕	口径 26.2 器高 29.6 底部径 14.8	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ヨコハケ・ケズリ・ヨコナデ	橙7.5YR6/6	口縁部 4/12	東側土器集中 ①・⑤・⑨・⑩、肥手欠損
32	010-01	2	SK15	上師器	甕	口径 26.4 底部径 11.0	外：ヨコハケ・タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ケズリ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 3/12	東側土器集中 ②・⑥・⑦・⑧、肥手欠損
33	012-06	2	SK15	須恵器	無蓋高坏	口径 10.4	外：ロクロナデ・波状文 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y4/1	口縁部 2/12	最下層、2片あり
34	007-06	2	SK15	須恵器	甕	—	外：撮格子タタキ 内：同心円当て具痕	外：オリーブ黒5Y3/1 内：灰5Y5/1	体部小片	東側土器集中 ①・③、2片あり
35	007-05	2	SK15	上師器	小皿	口径 8.8	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	上層
36	012-02	2	SK15	上師器	甕	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	上層
37	007-04	2	SK15	陶器	碗（山茶碗）	口径 14.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	上層
38	007-02	2	SK15	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	上層
39	008-01	2	SK15	陶器	片口鉢	口径 28.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y6/1	口縁部 1/12	上層、内面摩耗、外面墨書？
40	006-04	2	SK16	上師器	小皿	—	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	口縁部歪み大きい
41	006-05	2	SK16	上師器	皿	—	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	口縁部歪み大きい
42	006-01	2	SK16	上師器	皿	口径 12.2 器高 2.3	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 7/12	
43	006-03	2	SK16	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.5	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	
44	006-02	2	SK16	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.0	外：ロクロナデ 内：ナデ・ロクロナデ 底：糸切り	灰黄2.5Y7/2	底部 4/12	高台大部分剥離
45	012-05	2	SK17	上師器	甕	—	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい橙7.5YR7/4	底部小片	
46	012-03	2	SK17	上師器	甕	—	外：ハケ・ヨコナデ 内：ハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部小片	
47	012-01	2	SK17	上師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部小片	
48	012-04	2	SK17	上師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ハケ・ヨコナデ	にぶい橙5YR6/4	口縁部小片	
49	011-02	2	SK17	上師器	甕	口径 27.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
50	011-01	2	SK17	上師器	甕	口径 35.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
51	011-03	2	SK17	上師器	鍋	口径 19.0	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	外面スス付着
52	006-06	2	SD18	陶器	碗（山茶碗）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2	口縁部小片	
53	006-08	2	SD19	上師器	甕	口径 17.2	外：ハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ・ヨコハケ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12	
54	006-07	2	SD19	上師器	皿	口径 11.4	外：ナデ？ 内：ナデ？	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
55	007-01	2	SD22	上師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	外面スス付着
56	013-02	2	T2P1t1	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	黄灰2.5Y5/1	底部 12/12	
57	013-09	2	T2P1t3	上師器	坏	口径 14.8	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
58	013-06	2	T2P1t10	上師器	小皿	口径 9.8	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	
59	013-07	2	T2P1t24	上師器	坏	—	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部小片	
60	013-08	2	T2P1t31	上師器	坏	—	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部小片	
61	014-01	2	T2P1t43	上師器	碗	—	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部小片	
62	014-02	2	T2P1t44	上師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙5YR6/4	口縁部小片	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
63	014-05	2	T2Pi1.52	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部小片	
64	014-04	2	T2Pi1.52	灰釉陶器	壺	高台径 14.0	外：ロクロケズリ・施釉 内：ロクロナデ 底：ナデ	黄灰2.5Y6/1	底部1/12	
65	014-06	2	T2Pi1.55	灰釉陶器	壺	—	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ	胎：灰白2.5Y7/1 釉：灰黄2.5Y6/2	体部小片	
66	014-07	2	T2Pi1.63	土師器	坏	口径 10.9 器高 3.2	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部6/12	
67	013-01	2	T2Pi1.67	土製品	管状土錘	長さ 7.1 最大径 2.4	ユビオサエ・ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	完存	
68	014-03	2	包含層	土師器	甕	口径 16.0	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12	外面スス付着、Pi1.51付近
69	016-09	3	SK24	須恵器	盤？	—	外：ロクロケズリ・ロクロナデ 内：ロクロナデ	にぶい褐7.5YR5/3	口縁部小片	皿？
70	017-02	3	SK24	須恵器	広口壺	口径 21.4	外：平行タタキ・ロクロナデ 内：同心円当て具痕・ロクロナデ	灰N5/0、灰N4/0	口縁部1/12	
71	017-01	3	SK24	須恵器	甕	口径 47.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白2.5Y8/2	口縁部1/12	口縁部内面刺突状痕跡
72	017-04	3	SK24	緑釉陶器	椀？	—	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：褐灰7.5YR4/1 釉：オリーブ黄7.5Y6/3	底部小片	高台欠損、貼付高台？
73	016-10	3	SK24	灰釉陶器	壺	—	外：ロクロケズリ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：灰白5Y7/1 釉：浅黄2.5Y7/3	体部小片	
74	016-02	3	SK24	土師器	小皿	—	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部小片	
75	016-04	3	SK24	土師器	小皿	口径 6.5 器高 0.9	外：ユビオサエ・ナデ 内：工具ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部2/12	
76	016-07	3	SK24	土師器	小皿	口径 7.4 器高 1.1	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	灰白10YR8/2	口縁部1/12	
77	016-08	3	SK24	土師器	小皿	口径 7.4 器高 0.9	外：ユビオサエ・ナデ 内：工具ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部5/12	
78	016-06	3	SK24	土師器	皿	口径 11.5	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12	
79	016-05	3	SK24	土師器	皿	口径 11.7	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	灰白10YR8/2	口縁部1/12	
80	016-03	3	SK24	土師器	皿	口径 11.6 器高 2.2	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	灰白2.5Y8/2	口縁部1/12	
81	016-01	3	SK24	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	外面スス付着
82	015-03	3	SK24	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部小片	
83	015-04	3	SK24	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部小片	
84	015-05	3	SK24	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部小片	外面スス付着
85	015-02	3	SK24	土師器	鍋	体部径 23.0	外：ケズリ・タテハケ・ヨコナデ 内：ケズリ・工具ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	体部3/12	外面スス付着
86	015-01	3	SK24	土師器	鍋	口径 24.2	外：ケズリ・タテハケ・ヨコナデ 内：ケズリ・工具ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部3/12	外面スス付着
87	019-03	3	SK24	土師器	器台	脚部径 2.8	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	脚柱部12/12	孔あり
88	019-04	3	SK24	陶器	碗（山茶碗）	口径 14.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白N8/0	口縁部1/12	
89	019-02	3	SK24	陶器	碗（山茶碗）	口径 14.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	褐灰10YR6/1	口縁部1/12	
90	019-01	3	SK24	陶器	碗（山茶碗）	口径 15.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白N7/0	口縁部1/12	
91	018-06	3	SK24	陶器	碗（山茶碗）	高台径 8.0	外：ロクロナデ 内：ナデ・ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白N7/0	底部2/12	
92	018-05	3	SK24	陶器	碗（山茶碗）	高台径 6.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白N8/0	底部5/12	
93	018-02	3	SK24	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白N8/0	底部1/12	
94	018-03	3	SK24	陶器	碗（山茶碗）	高台径 8.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白2.5Y7/1	底部1/12	
95	018-04	3	SK24	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白N8/0	底部4/12	内面摩耗、底部内面黒色物付着

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
96	017-03	3	SK24	陶器	広口壺	—	外：ロクロナデ 内：ナデ・ロクロナデ	にぶい赤褐2.5YR5/3	口縁部小片	常滑産？
97	021-08	3	SK25	緑釉陶器	椀	—	外：ロクロケズリ・ロクロナデ？・施釉 内：ロクロナデ・圏線・施釉	胎：黄褐2.5Y5/3 釉：オリーブ黄5Y6/4	体部小片	
98	019-05	3	SK25	土師器	皿	口径　12.8	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	橙5YR7/6	口縁部1/12	
99	018-01	3	SK25	陶器	片口鉢	口径　23.3	外：ロクロケズリ・ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白N8/0	口縁部1/12	
100	019-06	3	SD28	土師器	皿	—	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	
101	020-01	3	SD29	陶器	椀（山茶椀）	口径　15.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰5Y6/1	口縁部1/12	
102	020-06	3	SD30	土師器	小皿	口径　8.0 器高　1.0	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	
103	020-07	3	SD30	土師器	皿	—	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	橙5YR6/6	口縁部小片	
104	020-05	3	SD30	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部小片	
105	020-03	3	SD30	陶器	椀（山茶椀）	口径　15.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12	
106	020-02	3	SD30	陶器	椀（山茶椀）	口径　16.1	外：ロクロナデ・輪花 内：ロクロナデ	灰白10YR7/1	口縁部2/12	
107	020-04	3	SD30	陶器	椀（山茶椀）	高台径　8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白2.5Y7/1	底部2/12	
108	013-03	3	T3Pi12	土師器	坏	—	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR5/3	口縁部小片	
109	013-04	3	T3Pi12	土師器	坏	—	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰黄褐10YR5/2	口縁部小片	
110	020-08	3	T3Pi12	土師器	坏	—	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部小片	
111	034-05	3	T3Pi12	須恵器	甕	—	外：平行タタキ・ロクロナデ 内：ナデ	外：にぶい褐7.5YR6/3 内：灰N6/1	肩部小片	
112	013-05	3	T3Pi13	灰釉陶器	椀	—	外：ロクロケズリ・ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	灰黄2.5Y7/2	口縁部小片	
113	021-01	3	T3Pi14	土師器	竈？	—	外：ユビオサエ・タテハケ・ナデ 内：工具ナデ	にぶい橙5YR6/4	口縁部小片	内面スス付着
114	021-02	3	T3Pi15	土師器	小皿	口径　7.8	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部4/12	
115	021-03	3	T3Pi114	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部小片	
116	021-04	3	T3Pi114	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3、にぶい黄橙10YR7/3	口縁部小片	
117	021-05	3	T3Pi114	土製品	管状土錘	残存長　2.1 最大径　1.0	ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	小片	
118	021-07	3	表土	土師器	鍋	口径　19.5	外：ヨコハケ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12	
119	021-06	3	排土	土師器	小皿	口径　7.5 器高　1.2	外：ユビオサエ 内：工具ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部6/12	
120	022-01	4	SA33	土師器	皿	—	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部小片	Pit3
121	022-02	4	SK34	縄文土器	深鉢	—	外：ナデウ・条線文 内：ヨコミガキ	にぶい黄橙10YR5/3	口縁部小片	第４層
122	023-01	4	SK34	石製品	磨石	残存長　9.0 幅　5.5 厚さ　4.2 重量　323.9	擦痕・摩滅		半欠	砂岩、第２層
123	022-06	4	SK35	縄文土器	深鉢？	—	外：沈線 内：ミガキ	灰褐7.5YR4/2	口縁部小片	平口縁？、第３層
124	022-04	4	SK35	縄文土器	深鉢	—	外：ミガキ・沈線 内：ミガキ	にぶい褐7.5YR5/4	口縁部小片	波状口縁
125	022-05	4	SK35	縄文土器	深鉢？	—	外：沈線 内：ヨコミガキ	にぶい黄橙10YR6/3	体部小片	
126	022-03	4	SK35	縄文土器	深鉢	—	外：ナデウ・条線文 内：ミガキ	外：灰黄褐10YR6/2 内：褐7.5YR6/8	体部小片	２片あり
127	023-02	4	SK35	石製品	敲石	残存長　9.7 幅　7.7 厚さ　2.7 重量　326.3	敲打痕		完存	
128	024-03	4	SK36	須恵器	甕	—	外：平行タタキ 内：同心円当て具痕	外：灰N4/0 内：灰7.5Y5/1	体部小片	
129	024-07	4	SK36	陶器	椀（山茶椀）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄褐10YR5/2	口縁部小片	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
130	025-01	4	SK37	上師器	坏	口径 12.0 器高 3.7	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
131	025-03	4	SK37	上師器	皿	口径 18.0	外：ケズリ？・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	
132	025-05	4	SK37	上師器	甕	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	橙7.5YR7/6	頸部 小片	
133	024-05	4	SK37	須恵器	坏	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：ヘラ切り・ナデ	灰5Y6/1	底部 小片	
134	024-02	4	SK38	上師器	坏	口径 12.0 器高 2.7	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部 1/12	
135	025-02	4	SK39	上師器	甕	口径 24.0	外：ナデ？・ヨコナデ 内：工具ナデ？・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
136	024-04	4	SK41	須恵器	坏蓋	—	外：ロクロケズリ・ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1	天井部 小片	
137	031-02	4	SK44	上師器	甕	口径 16.4	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
138	028-02	4	SK44	上師器	甕	口径 19.8	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	取り上げ№４・５より南
139	026-02	4	SK44	上師器	甕	口径 13.8	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4、にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 5/12	取り上げ№５より南
140	028-03	4	SK44	上師器	甕	口径 17.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	外面スス付着、取り上げ№５・５より南
141	026-01	4	SK44	上師器	甕	口径 18.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ナデ・ハケ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 12/12	取り上げ№３・５より南
142	026-03	4	SK44	上師器	甕	口径 18.8	外：ハケ・タテハケ・ヨコナデ 内：ケズリ・工具ナデ・ヨコハケ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 8/12	取り上げ№４
143	028-01	4	SK44	上師器	甕	口径 17.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ケズリ・ヨコナデ	灰褐7.5YR5/2	口縁部 5/12	外面スス付着、取り上げ№４
144	029-01	4	SK44	上師器	甕	体部径 23.8	外：タテハケ・ヘラ記号？ 内：工具ナデ	浅黄橙10YR8/3	体部 2/12	外面スス付着、取り上げ№４
145	030-01	4	SK44	上師器	甕	体部径 20.0	外：タテハケ・ヨコハケ 内：ケズリ・ハケ	にぶい橙7.5YR6/4	体部 2/12	取り上げ№４
146	027-01	4	SK44	上師器	甕	口径 19.2 器高 28.8	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ニビオサエ・ヨコハケ・ケズリ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 9/12	外面スス付着、取り上げ№２・４
147	033-05	4	SK47	灰釉陶器	椀	—	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	灰黄2.5Y7/2	口縁部 小片	
148	031-06	4	SK49	上師器	甕	口径 17.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	
149	031-05	4	SK51	上師器	坏	口径 11.4	外：ナデ？・ヨコナデ？ 内：ヨコナデ？	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	
150	031-03	4	SK51	上師器	甕	口径 17.2	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ハケ・ヨコナデ	灰黄褐10YR6/2	口縁部 1/12	
151	033-03	4	SK51	須恵器	坏	底部径 3.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・ナデ 底：ヘラ切り	灰白5Y8/1	底部 5/12	
152	033-04	4	SK51	須恵器	坏	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2	底部 3/12	
153	033-06	4	SK51	須恵器	高坏	—	外：ロクロナデ 内：シボリ痕	灰N4/0	脚柱部 3/12	二段三方透孔
154	032-06	4	SK51	上製品	管状土錘	残存長 5.4 最大径 1.3	ニビオサエ・ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	一部欠	
155	031-01	4	SK52	上師器	皿	口径 20.6 器高 3.1	外：ケズリ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	橙2.5YR6/6	口縁部 2/12	
156	032-02	4	SK52	上師器	甕	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	
157	032-01	4	SK52	上師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 小片	
158	032-07	4	SK54	上製品	管状土錘	長さ 6.3 最大径 1.3 重さ 6.3	ニビオサエ・ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	完存	
159	031-04	4	SK55	上師器	皿	口径 18.6 器高 2.3	外：ケズリ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
160	033-01	4	SK55	須恵器	蓋	口径 13.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	外：灰白2.5Y7/1 内：褐灰10YR5/1	口縁部 1/12	
161	025-04	4	SD56	上師器	甕		外：ヨコハケ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 小片	
162	024-06	4	SD56	須恵器	坏	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	外：灰褐5YR5/2 内：にぶい赤褐5YR5/3	口縁部 小片	
163	024-01	4	SD58	上師器	坏	口径 13.0	外：ナデ・ヨコナデ？ 内：ナデ・ヨコナデ？	橙5YR6/6	口縁部 1/12	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
164	032-10	4	SD60	土製品	管状土錘	残存長 2.0 最大径 0.8	ユビオサエ・ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	小片	
165	032-04	4	SD61	土師器	甕	口径 26.2	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部1/12	
166	032-03	4	SD61	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	
167	032-05	4	SD61	土師器	甕	頸部径 29.4	外：タテハケ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/4	頸部1/12	
168	034-02	4	SD61	ロクロ土師器	台付椀	—	外：ナデ・ロクロナデ 内：ロクロナデ	浅黄橙7.5YR8/4	底部小片	
169	033-02	4	SD61	須恵器	坏蓋	—	外：ロクロケズリ・ロクロナデ？ 内：ロクロナデ	灰5Y6/1	天井部小片	
170	032-08	4	SD61	土製品	管状土錘	残存長 5.0 最大径 0.9	ユビオサエ・ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	一部欠	
171	034-03	4	SZ62	縄文土器？	深鉢？	—	外：ミガキ？・沈線 内：ナデ？	橙7.5YR7/6	体部小片	
172	034-04	4	SZ63	陶器	緑釉小皿	口径 10.4	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：灰白10YR8/1 釉：灰白7.5Y7/2	口縁部1/12	
173	037-03	4	T4Pit12	土師器	甕	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	
174	034-06	4	T4Pit18	須恵器	壺	—	外：ロクロケズリ・ロクロナデ 内：ロクロナデ	外：暗灰N3/0 内：灰N5/0	底部1/12	
175	034-01	4	T4Pit17	陶器	碗（山茶碗）	口径 15.6 器高 5.6 高台径 8.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白5Y8/1	口縁部6/12	
176	034-07	4	T4Pit20	土師器	甕	—	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ハケ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部小片	
177	035-01	4	T4Pit20	土師器	甕	口径 28.2	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部1/12	
178	035-02	4	T4Pit1 22・23	土師器	高坏	脚部径 16.2	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	脚部2/12	
179	035-04	4	T4Pit36	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部小片	
180	035-03	4	T4Pit36	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部小片	
181	035-05	4	T4Pit47	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y8/1	底部3/12	
182	036-01	4	T4Pit52	須恵器	甕	—	外：擬格子タタキ 内：同心円当て具痕	外：黄灰2.5Y5/1 内：灰N6/0	体部小片	
183	035-07	4	T4Pit55	土師器	坏	—	外：ヨコナデ？ 内：ナデ・ヨコナデ？	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部小片	
184	035-06	4	T4Pit55	土師器	坏	—	外：ナデ 内：ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	底部1/12	
185	037-01	4	T4Pit56	土師器	坏	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部小片	
186	037-02	4	T4Pit58	ロクロ土師器	台付椀	高台径 5.9	外：ヨコナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	底部3/12	
187	037-04	4	T4Pit71	須恵器	蓋？	—	外：ロクロケズリ？・ロクロナデ 内：ロクロナデ	褐灰10YR5/1、褐灰10YR6/1	口縁部小片	
188	037-05	4	T4Pit75	灰釉陶器	碗	口径 15.0	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	灰白2.5Y7/1	口縁部1/12	
189	037-06	4	T4Pit84	土師器	甕	口径 13.8	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部1/12	
190	037-07	4	T4Pit84	土製品	管状土錘	長さ 6.3 最大径 1.0 重さ 5.7	ナデ	橙7.5YR6/6、浅黄橙10YR8/3	ほぼ完存	
191	037-08	4	T4Pit85	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白10YR7/1	底部4/12	底部内面摩耗
192	038-02	4	表採	須恵器	坏蓋	—	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	灰5Y5/1	天井部小片	
193	038-03	4	表採	須恵器	坏蓋	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y6/1	摘まみ	
194	038-05	4	表採	灰釉陶器	碗	高台径 8.0	内：ロクロナデ	褐灰10YR6/1	底部1/12	
195	038-01	4	表採	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白2.5Y7/1	底部4/12	
196	038-04	4	表採	陶器	碗（山茶碗）	高台径 6.8	内：ロクロナデ 底：糸切り	褐灰10YR6/1	底部2/12	底部内面摩耗
197	038-06	4	表採	青磁	皿	—	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：内N6/0 釉：オリーブ灰10Y5/2	口縁部小片	
198	039-07	—	表採	土師器	壺	底部径 7.6	外：ナデ 内：ナデ	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/2	底部4/12	
199	039-01	—	表採	陶器	碗（山茶碗）	高台径 8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰黄2.5Y7/2	底部8/12	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
200	039-02	—	表採	陶器	碗（山茶碗）	高台径　7.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り？	灰白2.5Y7/1	底部 4/12	
201	039-04	—	表採	陶器	碗（山茶碗）	高台径　7.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	黄灰2.5Y5/1	底部 5/12	
202	039-03	—	表採	陶器	碗（山茶碗）	高台径　6.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	底部内面摩耗
203	040-02	—	表採	陶器	碗（山茶碗）	高台径　7.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y6/2	底部 3/12	
204	039-06	—	表採	陶器	片口鉢？	底部径　10.0	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ 底：ナデ	灰白2.5Y7/1	底部 1/12	
205	039-05	—	表採	陶器	甕	口径　24.0	外：ヨコナデ 内：ニビオサエ・ナデ・ヨコナデ	外：褐灰10YR5/1 内：灰褐5YR5/2	口縁部 1/12	常滑産
206	040-01	—	表採	石製品	磨製石斧	残存長　6.2 幅　4.6 厚さ　2.3 重量　104.6	研磨・敲打痕？		半欠	緑色岩？
207	039-08	—	表採	金属製品	銭貨（皇宋通宝）	径　1.5 厚　0.12			完存	

第２表　との山・アレキリ遺跡第１次調査遺構一覧表

遺構名	種別	調査区	規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	時期	調査時遺構名	備考
ＳＫ１	土坑	調査区１	0.6以上×0.6	0.4	土師器	鎌倉時代～室町時代	ＳＫ１	
ＳＫ２	土坑	調査区１	0.7以上×0.7	0.6	土師器、山茶椀	室町時代	ＳＫ２	ＳＤ５に切られる
ＳＫ３	土坑	調査区１	1.0以上	0.6	土師器	室町時代	ＳＫ３	
ＳＤ４	溝	調査区１	1.3×－	0.6	山茶椀	鎌倉時代	ＳＤ１	ＳＫ１に切られる
ＳＤ５	溝	調査区１	1.6×－	0.6	土師器	室町時代	ＳＤ２	
ＳＤ６	溝	調査区１	1.0×－	0.1～0.2	土師器、山茶椀	鎌倉時代	ＳＤ３	
ＳＤ７	溝	調査区１	1.0×－	0.5	土師器、須恵器、山茶椀	室町時代	ＳＤ４	
ＳＨ８	竪穴建物	調査区２	3.0以上×－	0.3	なし	飛鳥時代～奈良時代	ＳＨ１	カマドあり
ＳＨ９	竪穴建物	調査区２	4.7×－	0.3	土師器、須恵器	古墳時代中期後半～後期	ＳＨ２	
ＳＨ10	竪穴建物	調査区２	4.0以上×－	0.25	土師器、土錘	古墳時代後期～飛鳥時代	ＳＨ３	
ＳＫ11	土坑	調査区２	0.85×0.7以上	0.4	土師器、土錘	古墳時代後期～飛鳥時代	ＳＫ１	
ＳＫ12	土坑	調査区２	2.1×－	0.1	土師器	鎌倉時代～室町時代	ＳＫ２	
ＳＫ13	土坑	調査区２	2.0以上×1.5以上	0.2～0.35	土師器、須恵器	室町時代	ＳＫ３	調査時遺構名重複
ＳＫ14	土坑	調査区２	0.8以上×0.3	0.25	なし	時期不明	ＳＤ６	
ＳＫ15	土坑	調査区２	6.0以上×－	0.4～0.6	土師器、須恵器、山茶椀	古墳時代後期～飛鳥時代	ＳＤ７	土師器最複数出土 竪穴建物の可能性あり
ＳＫ16	土坑	調査区２	1.2以上×1.2	0.6	土師器、須恵器	室町時代	ＳＫ３	調査時遺構名重複
ＳＫ17	土坑	調査区２	3.4×－	0.5～0.6	土師器、須恵器	奈良時代	ＳＤ８	
ＳＤ18	溝	調査区２	0.7以上×－	0.2	山茶椀	鎌倉時代？	ＳＤ１	現乱の可能性あり
ＳＤ19	溝	調査区２	0.5以上×－	0.4	土師器	平安時代～鎌倉時代？	ＳＤ２	ＳＫ13に切られる
ＳＤ20	溝	調査区２	0.3×－	0.15	土師器	奈良時代～室町時代	ＳＤ３	
ＳＤ21	溝	調査区２	0.4×－	0.2	土師器	奈良時代～室町時代	ＳＤ４	
ＳＤ22	溝	調査区２	0.8×－	0.2	土師器	室町時代	ＳＤ５	
ＳＤ23	溝	調査区２	1.0×－	0.45	なし	時期不明	ＳＤ９	
ＳＫ24	土坑	調査区３	2.5×－	0.6	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、山茶椀	鎌倉時代～室町時代	ＳＫ１	
ＳＫ25	土坑	調査区３	1.2×－	0.4	土師器、山茶椀、陶器	鎌倉時代	ＳＫ２	
ＳＫ26	土坑	調査区３	0.8×0.4以上	0.7	土師器、灰釉陶器	平安時代	ＳＫ３	
ＳＫ27	土坑	調査区３	2.0×－	0.2	土師器	鎌倉時代～室町時代	ＳＫ４	
ＳＤ28	溝	調査区３	0.3×－	0.1	土師器	室町時代	ＳＤ１	
ＳＤ29	溝	調査区３	1.5×－	0.45	灰釉陶器、山茶椀	鎌倉時代	ＳＤ２	
ＳＤ30	溝	調査区３	0.8×－	0.2	土師器、須恵器、山茶椀、陶器	鎌倉時代	ＳＤ３	
ＳＤ31	溝	調査区３	0.3以上×－	0.2	土師器	平安時代～鎌倉時代	ＳＤ４	ＳＫ27に切られる
ＳＨ32	竪穴建物	調査区４	5.2×－	0.2	土師器	飛鳥時代～奈良時代	ＳＨ１	
ＳＡ33	柱列	調査区４	3.8×－	0.2	土師器	平安時代後期～鎌倉時代	ＳＢ１	
ＳＫ34	土坑	調査区４	0.8×0.35以上	0.2	縄文土器、磨石	縄文時代後期前葉	ＳＫ１	
ＳＫ35	土坑	調査区４	0.8×0.35以上	0.3	縄文土器、敲石、台石	縄文時代後期前葉	ＳＫ２	
ＳＫ36	土坑	調査区４	1.95×0.6以上	0.4	土師器、須恵器、山茶椀	平安時代～鎌倉時代	ＳＫ３	ＳＫ37に切られる
ＳＫ37	土坑	調査区４	2.3×－	0.2	土師器、須恵器、山茶椀	鎌倉時代	ＳＫ４	
ＳＫ38	土坑	調査区４	3.5以上×－	0.8	土師器、須恵器	奈良時代～平安時代前期	ＳＫ５	
ＳＫ39	土坑	調査区４	0.95×0.6以上	0.6	土師器	平安時代	ＳＫ７	
ＳＫ40	土坑	調査区４	1.05×0.6以上	0.6	土師器、須恵器	飛鳥時代～奈良時代	ＳＫ８	
ＳＫ41	土坑	調査区４	2.0以上×－	0.3～0.4	土師器、須恵器	古墳時代後期～飛鳥時代	ＳＫ９	
ＳＫ42	土坑	調査区４	1.3以上×－	0.2	土師器	鎌倉時代	ＳＫ10	
ＳＫ43	土坑	調査区４	1.5以上×－	0.4	土師器	飛鳥時代～奈良時代	ＳＫ11	
ＳＫ44	土坑	調査区４	1.8×－	0.6	土師器	奈良時代	ＳＫ14	土師器塵多数集積
ＳＫ45	土坑	調査区４	0.8以上×0.25	0.7	土師器	平安時代～鎌倉時代？	ＳＫ15	
ＳＫ46	土坑	調査区４	1.8以上×－	0.4	土師器	奈良時代～平安時代	ＳＫ16	ＳＫ45に切られる
ＳＫ47	土坑	調査区４	2.5×－	0.4	土師器、灰釉陶器	平安時代	ＳＫ17	
ＳＫ48	土坑	調査区４	0.9×0.4以上	0.35	土師器	鎌倉時代	ＳＫ18	
ＳＫ49	土坑	調査区４	2.8以上×－	0.5	土師器	平安時代	ＳＫ19	ＳＫ50に切られる
ＳＫ50	土坑	調査区４	0.6×－	0.7～0.8	土師器	平安時代？	ＳＫ20	
ＳＫ51	土坑	調査区４	8.0×－	0.2～0.6	土師器、須恵器、土錘	飛鳥時代	ＳＤ２	
ＳＫ52	土坑	調査区４	3.9×－	0.4	土師器	奈良時代	ＳＫ21	
ＳＫ53	土坑	調査区４	3.0以上×－	0.5	なし	奈良時代？	ＳＫ22	ＳＫ52と類似
ＳＫ54	土坑	調査区４	1.0×－	0.35	土師器、土錘	鎌倉時代～室町時代？	ＳＫ23	
ＳＫ55	土坑	調査区４	1.6以上×－	0.55	土師器、須恵器	奈良時代	ＳＫ24	
ＳＤ56	溝	調査区４	0.6×－	0.25	土師器、須恵器	平安時代	ＳＫ６	
ＳＤ57	溝	調査区４	1.0×－	0.5	山茶椀	鎌倉時代	ＳＤ１	
ＳＤ58	溝	調査区４	0.8×－	0.1	土師器	奈良時代	ＳＫ12	
ＳＤ59	溝	調査区４	1.6×－	0.5	土師器	平安時代？	ＳＫ13	
ＳＤ60	溝	調査区４	1.4×－	0.8	土師器、土錘	平安時代	ＳＤ３	調査時遺構名重複
ＳＤ61	溝	調査区４	1.4×－	0.85	土師器、須恵器、土錘	平安時代	ＳＤ３	調査時遺構名重複
ＳＺ62	落ち込み	調査区４	2.2以上×－	0.1～0.15	縄文土器？、土師器	奈良時代～平安時代	ＳＺ１	
ＳＺ63	落ち込み	調査区４	1.7×－	0.15	土師器、陶器	室町時代	ＳＺ２	

※規模や深さについては代表的な数値を記入している。

第Ⅴ章　第２・３次調査

第１節　調査区の位置と概要

第２次および第３次調査では、大きく分けて４箇所に調査区を設定して調査を行った。それぞれ調査区５～８とした。

調査区５　遺跡の北西部にあたる調査区で、県道717号から北東にのびる道路敷の南東部分に位置する。北東－南西方向にのびる調査区５－①③⑤⑦から、直交する調査区５－②④⑥が北西－南東方向にのびる。

調査区５－①③⑤⑦は面積200.64㎡（総延長167.2m、幅1.2m）で、南西端と北東端とで1.8mほどの標高差があり、調査区５－⑦に向かって低くなる。調査区東壁沿いに、近現代の耕作による撹乱溝が並走する。

調査区５－②は面積79.31㎡（延長72.1m、幅1.1m）で調査区５－④は面積49.39㎡（延長44.9m、幅1.1m）で、調査区５－⑥は面積59.08㎡（延長42.2m、幅1.4m）で、ともに台地縁辺部の北西に向かって標高がやや高くなっている。調査区５－⑥においては、調査区西壁沿いに、近現代の耕作による撹乱溝が並走する。

地表下0.4～0.6mほどで遺構が検出された。検出された遺構は、竪穴建物、土坑、溝、ピットである。北東端にあたる調査区５－⑦では、遺構密度が薄くなる状況が見られた。

調査区６　遺跡の中央部にあたり、南北にのびる面積562.38㎡（総延長145m、幅1.2m）の調査区である。調査区のほとんどに既設管設置時の撹乱溝が並走している。

地表下0.3～0.8mほどで遺構が検出された。検出された遺構は、竪穴建物、土坑、溝、ピットである。

この調査区では、竪穴建物が複数棟認められたことが特筆される。

調査区７　遺跡の南西部にあたる調査区で、調査区７－①のみ北東－南西方向にのび、調査区４へと連続する。調査区７－②③④は北西－南東方向にのびる。調査区７－④が第３次調査区（立会調査）にあたり、調査区７－②と③の間に位置する。面積は164.88㎡（総延長141.2m、幅0.9～1.3m）である。

調査区７－②④③では地表下0.3～0.4mほどで遺構が検出された。検出された遺構は、竪穴建物、土坑、溝、ピットである。舌状台地の端部にあたるこの調査区では、調査区７－②から④、そして③へと傾斜し、北西端と南東端とでは２m以上の標高差がある。すでに調査区の大部分が現況の道路整備の際に遺構面まで削平されており、調査区７－③の南東端においてのみ、地形の大きな落ち込みが確認された。また、調査区のほとんどの範囲において、既設管設置時の撹乱溝が並走している。

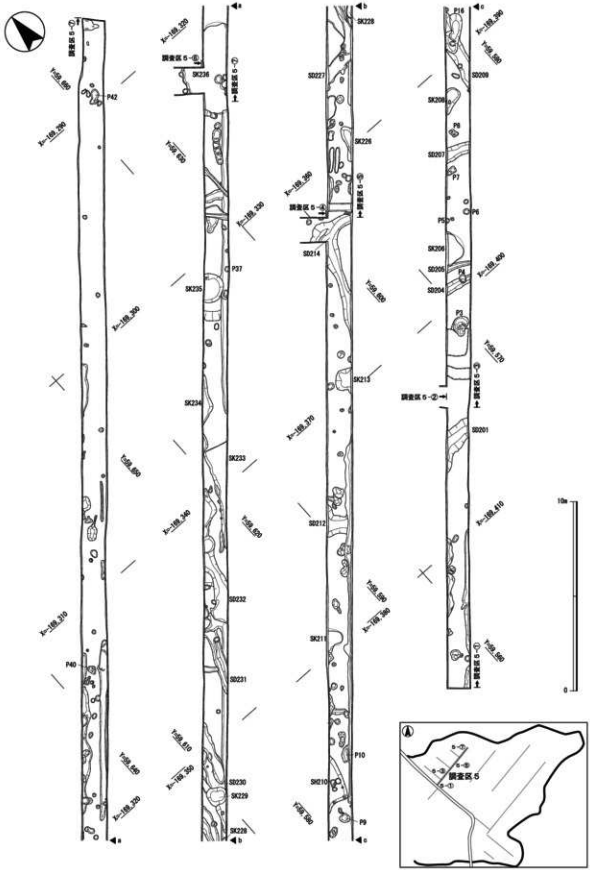
調査区８　遺跡の南西部にあたり、東西にのびる面積51.1㎡（総延長36.5m、幅1.4m）の調査区である。地表下0.4mほどで遺構が検出されたが、遺構面の土層は未熟土の花崗岩バイラン土で、他の調査区とは特徴が異なる。検出された遺構は、土坑、溝、ピットである。土坑の一つには、井戸ではないかと思われるものもある。

第２節　調査区５

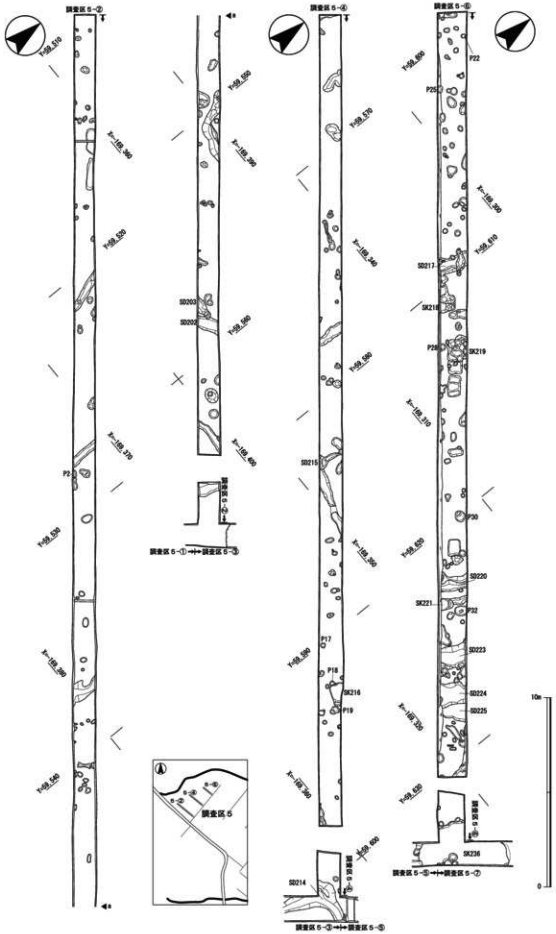
（１）遺構

①竪穴建物

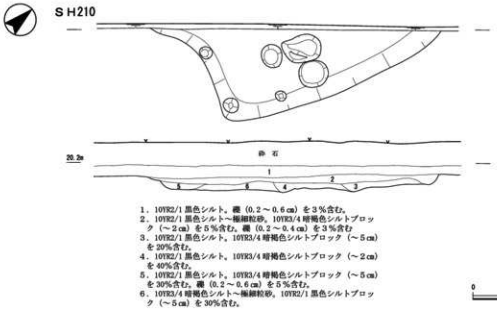
ＳＨ210（第36図）　調査区５－③中央で検出された隅丸方形の竪穴建物である。調査区西壁にかかるため全体の規模については不明である。南北長2.8m以上が確認されている。建物内で検出されたピットは径0.2～0.3mの円形を呈し、主柱穴の可能性が高い。壁沿いには壁際溝が見られ、小さいピットがいくつか確認された。これらの小ピットは屋根や壁等の構造物と関係する可能性がある。内部からカマドは検出されなかった。埋土からは土師器甕の頸部



第34図　調査区５平面図①（１：200）



第35図　調査区５平面図②（１：200）



第36図　調査区５遺構平面図・断面図①（１：40）

片が出土しており、飛鳥時代～奈良時代前半の遺構と考えられる。

②土坑

ＳＫ206（第34図）　調査区５－③で検出された径1.5mほどの円形の土坑である。深さは約0.6mで、側壁がオーバーハングする袋状の土坑である。埋土は礫を含む黒褐色粘質土の単一層で、その形状から風倒木痕であると考えられる。鎌倉時代以降の溝ＳＤ205に切られる。埋土からは山茶碗、建具金物などが出土した。

ＳＫ208（第37図）　調査区５－③で検出された土坑である。長径1.5m以上の遺構であるが調査区西壁にかかるため全体の形状は不明である。遺構の底部（埋土第３層）からは土師器甕が出土した。出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

ＳＫ211（第34図）　調査区５－③で検出された土坑である。調査区西壁にかかるため全体の形状は不明である。埋土は黒褐色粘質土の単一層で、側壁がオーバーハングしており、風倒木痕である可能性が高い。埋土に包含される遺物から鎌倉時代以降のものと考えられる。

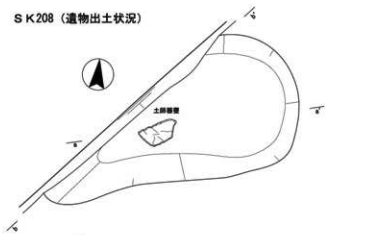
ＳＫ213（第38図）　調査区５－③で検出された土坑である。長径約１mの遺構であるが、調査区東壁にかかるため全体の形状は不明である。埋土からは土師器鍋が出土しており、鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＫ216（第37図）　調査区５－④で検出された土坑である。長径約1.2mの遺構で、下層から13世紀代の土師器皿が２点出土した。なお、平面検出時には遺構として認識できなかったが、壁面の精査によってこの土坑の上部には落ち込みが見られた。落ち込みにあたる部分の埋土には土器破片が集中する箇所があり、11世紀中頃～14世紀前半の様相を呈する６個体分の土師器鍋が確認された。便宜上ＳＫ216出土遺物として取り上げたが、この落ち込みが人為的な掘り返しによるものか自然にできたものかは不明で、厳密にはＳＫ216の遺物ではない可能性も考えられる。ＳＫ216自体は鎌倉時代後半の遺構と考えられる。

ＳＫ218（第35図）　調査区５－⑥で検出された土坑である。長さ1.6m、深さ0.1m以下の浅い土坑である。調査区北壁にかかるため全体の形状は不明である。調査区北壁に並行する近現代の撹乱溝に切られる。出土遺物から、平安時代末～鎌倉時代の遺構と思われる。

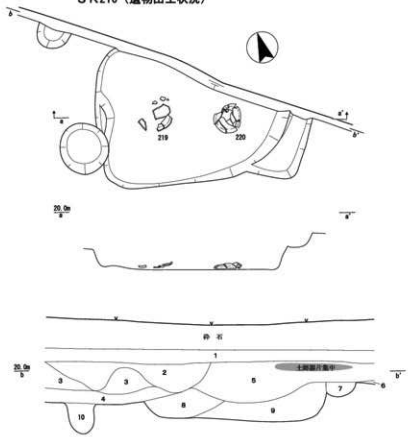
ＳＫ219（第38図）　調査区５－⑥で検出された土坑である。長径1.4mの土坑であるが、調査区北壁にかかるため全体の形状は不明である。出土遺物か

ＳＫ208（遺物出土状況）



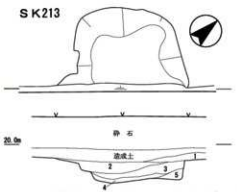
1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.6cm）を３%含む。
2．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～2 cm）を５%含む。礫（0.2～0.4cm）を３%含む。
3．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～0.3cm）を５%含む。

ＳＫ216（遺物出土状況）

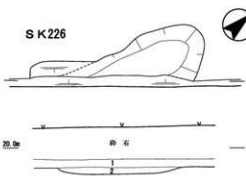


1．10YR2/2 黒褐色シルト。礫（0.2～0.6cm）を２%含む。［造成土］
2．10YR2/1 黒色極細粒砂～シルト。［掘乱］
3．10YR3/2 黒褐色細粒砂～シルト。円礫（0.2～3 cm）を少量含む。［掘乱］
4．10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック（～1 cm）を 10%含む。［掘乱または旧耕作土］
5．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.5cm）を１%含む。土師器片が上層部に集中。［落ちこみ埋土］
6．10YR3/3 暗褐色シルト。礫（0.2～0.6cm）を２%含む。
7．10YR2/3 黒褐色極細粒砂～シルト。［ＳＫ216 埋土］
8．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～0.3cm）を１%含む。［ＳＫ216 埋土］
9．10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.5cm）を 20%含む。［ＳＫ216 埋土］
10．10YR2/1 黒色シルトと 10YR3/4 暗褐色シルトが斑状に同程度混じり合う。［ピット埋土］

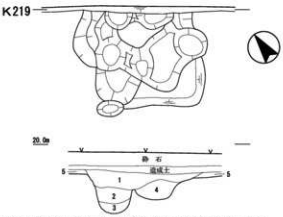
第37図　調査区５遺構平面図・断面図②（１：20）



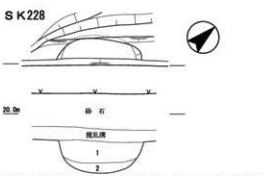
1．10YR2/2 黒褐色シルト。円礫（0.1～0.3cm）を10%含む。部分的に10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロックがレンズ状（2cm厚，60～80cm長）に入り込む。
2．10YR2/1 黒色シルト。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～2cm）を40%含む。
4．10YR2/1 黒色シルト。
5．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～5cm）を30%含む。



1．10YR2/2 黒褐色シルト。円礫（1～3cm）を10%含む。部分的に10YR 4/3 にぶい黄褐色シルトブロックがレンズ状（2cm厚，60～80cm長）に入り込む。［造成土］
2．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/6 褐色シルトブロック（～2cm）を10%含む。



1．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR3/3 暗褐色シルトブロック（～1cm）を5%含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR3/3 暗褐色シルトブロック（～1cm）を部分的に含む。
3．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。
4．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～5cm）を10%含む。
5．10YR2/3 黒褐色シルト。礫（0.2～0.6cm）を2%含む。［下に向かうほど褐色がかる。］



1．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～3cm）を5%含む。礫（0.2～0.4cm）を1%未満含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（～0.5cm）を1%含む。

第38図　調査区５遺構平面図・断面図③（１：40）

ら鎌倉時代以降の遺構と思われる。

ＳＫ221（第42図）　調査区５－⑥で検出された土坑である。長さ0.6m、深さ0.35mの土坑であるが、調査区西壁にかかるため全体の形状は不明である。埋土は礫を含む黒褐色粘質土の単一層である。室町時代の溝ＳＤ222を切る形で形成されていることから、室町時代以降の遺構と考えられる。平安時代末～鎌倉時代の出土遺物は埋土に混入したものと考えられる。

ＳＫ226（第38図）　調査区５－⑤で検出された土坑である。深さ約0.05mの浅い土坑で、調査区東壁にかかるため全体の形状は不明である。埋土からは山茶碗が出土し、鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＫ228（第38図）　調査区５－⑤で検出された土坑である。径0.95m、深さ0.35mの円形土坑で、側壁は一部オーバーハングする。調査区東壁にかかるため全体の形状は不明である。出土遺物から鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＫ229（第34図）　調査区５－⑤で検出された土坑である。径１m、深さ0.4mの円形の土坑で、ＳＤ230に切られる。深さはＳＫ229の方が深い。出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

ＳＫ233（第34図）　調査区５－⑤で検出された遺構である。20cmを超す大礫や巨礫が遺構底部に多く見られた。当初は土坑として認識した遺構であるが、調査区東壁に見られる撹乱溝との境が不明瞭で、なおかつ北側で浅くなり消失していくことから、土坑である可能性は低く、自然の落ち込みまたは撹乱溝の広がりであると考えられる。土師器小片が出土したが、おそらく撹乱溝埋土からの紛れ込みであろう。

ＳＫ234（第34図）　調査区５－⑤で検出された土坑である。径2.5m、深さ0．1m以下の浅い土坑で、調査区西壁にかかるため全体の形状は不明である。埋土から青磁碗の破片が出土しており、鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＫ235（第34図）　調査区５－⑤で検出された土坑である。径1.6m、深さ0.6mの円形の土坑で、調査区西壁にかかるため全体の形状は不明である。埋土からは近世以降の陶器片や錆化した鉄釘、小鉄板が出土しており、当初は近世土坑と認識していた。その後の分析で、鉄釘をＸ線撮影したところ洋釘であることが分かった。このことから明治期以降の撹乱坑と考えられる。

ＳＫ236（第39・40図）　調査区５－⑤⑥⑦の３調査区に渡る径約4.8m、深さ0.55mの大型の土坑である。側壁は垂直またはオーバーハングしており、土層の様子からは何度か掘り起こしては埋め戻しを行った様子がうかがえる。

この土坑西部の一角より土師器の甑２点（239・240）、長胴甕２点（246・247）、把手付鍋１点（245）、小型の甕３点（241～243）の計８点の煮炊具が集中して出土した。一式の煮炊具を廃棄したものと考えられる。煮炊具は形態的特徴から古墳時代後期～奈良時代前半のものと見られるが、土師器皿類や須恵器などが共伴しないため、年代をさらに絞り込むことは難しい。当遺跡で検出されている竪穴建物群が同時期に収まることから、これらの建物と関連の深い土坑であると推測される。

注目すべきは、煮炊具の出土状況から推定される土器の廃棄の在り方である。煮炊具の集中する場所は土層断面で掘り返しの認められた場所にあたり、同じレベルで堆積している埋土第５・６・９層に相当する層ですべて出土した。どの遺物も破片が大きく離れることなくまとまった状態で見つかり、接合すると多くの遺物がほぼ完形に復元できた。無造作に捨てられたというより、丁寧に土坑内に置かれた印象を受ける。他の遺物の出土がほとんど見られないこともあり、これらの土器を廃棄をするために掘り返した可能性が高い。これらの煮炊具が祭祀に用いられ、その後にまとめて廃棄した可能性についても推測される（第Ⅶ章参照）。

なお、大型土坑であるものの、集中的に出土した煮炊具８点以外の遺物は乏しい。煮炊具の出土した土層よりサヌカイト製の凹基無茎式石鏃とチャートの剥片が各１点、土坑北東部より小型の甕の口縁部片（244）が１点、埋土最上層の第２層より深鉢体部と思われる縄文土器片が数点出土したのみである。いずれも埋土への混ざり込みと考えられる。

Ｔ５Pit16（第34図）　調査区５－③で検出された土坑である。鎌倉時代以降の溝ＳＤ209に切られる。検出時には径が１mに満たない不整円形のピットとして認識していたが、精査しながら掘削を進めていくと、最終的には長径約２m、短径約0.８m、深さ約0.４mの不整楕円形の土坑であることが分かった。埋土は黒褐色のシルトの単一層で、埋土中より磨石が出土した。他の遺物はなく、縄文時代の遺構である可能性が考えられる。

③溝

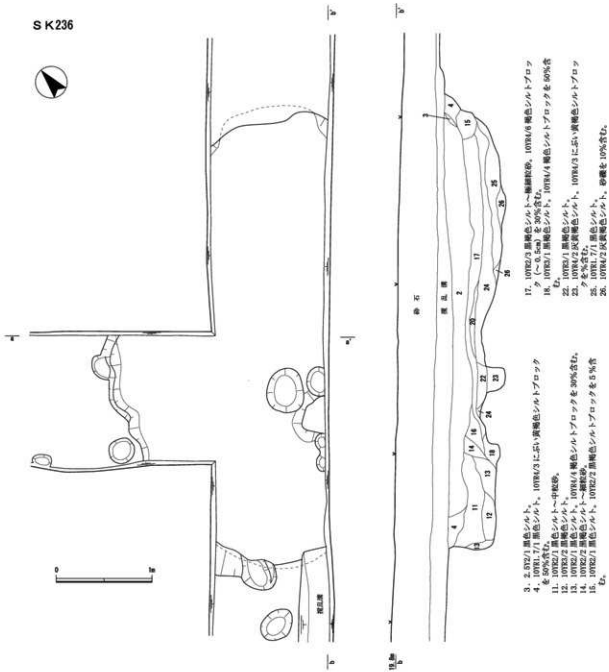
ＳＤ201（第41図）　調査区５－①北部で検出された東西方向にのびる溝である。幅約１m、深さ0.４mの溝で、埋土上層から常滑産の陶器甕が出土した。出土遺物から鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＤ202（第41図）　調査区５－②で検出された北西－南東方向にのびる幅0.８m、深さ0.５mの溝である。埋土は単一層で、廃棄されたと思われる土師器の破片が埋土の上部で集中して出土した。接合復元すると約80%が遺存する土師器甕であった。甕は形態的特徴から飛鳥時代～奈良時代前半のものとみられることから、その時期以降の遺構であると考えられる。ＳＤ203の廃絶後に形成された遺構である。

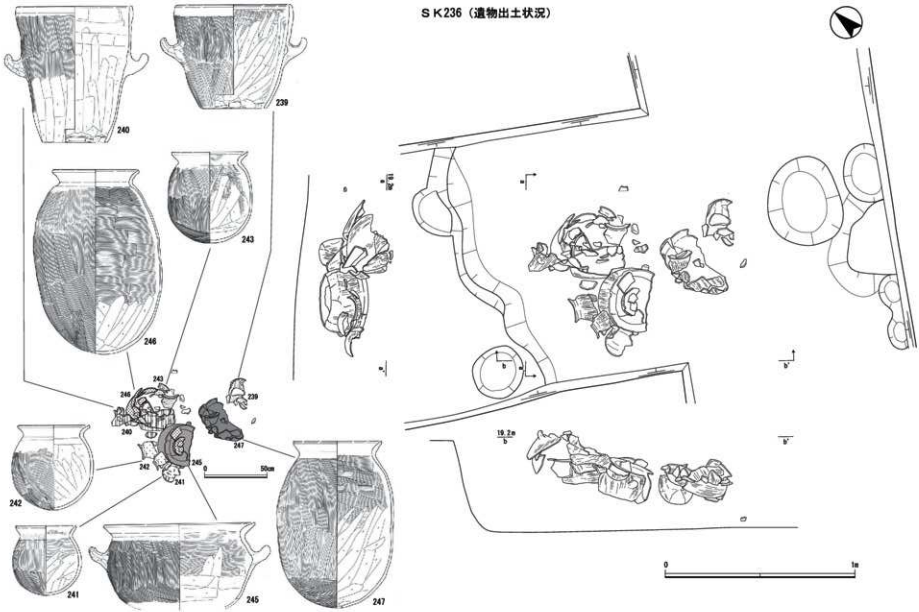
ＳＤ203（第41図）　調査区５－②で検出された南北方向にのびる溝である。ＳＤ202に切られるが、ＳＤ202とほぼ同時期の土師器甕の破片が出土しており、大きな時期差がないものと思われる。なお、出土した土師器甕の破片は体部のものであり、細片のために図化できなかった。

ＳＤ204（第34図）　調査区５－③で検出された東西方向にのびる溝である。幅0.４m～0.５m、深さ0.15～0.17mで、山茶碗が出土したＴ５Pit４に切られる。山茶碗の細片が出土しており、鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

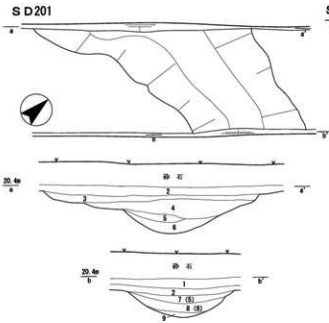
ＳＤ205（第34図）　調査区５－③で検出された溝



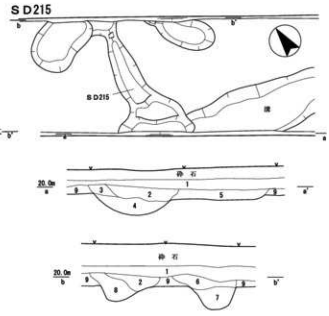
第39図　調査区５遺構平面図・断面図④（１：40）



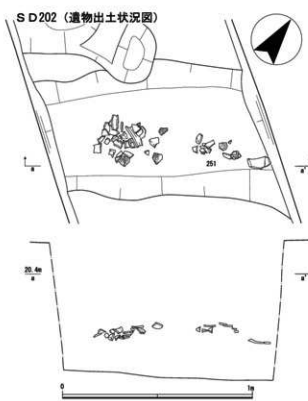
第40図　調査区５遺構平面図・断面図⑤（１：20、１：30）

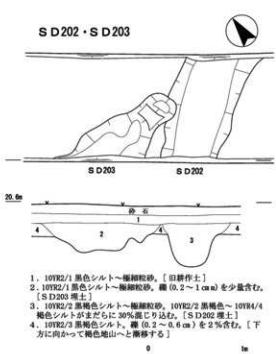


1．10YR2/2黒褐色シルト，円礫（1～3cm）を10%含む。部分的に10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックがレンズ状（2cm厚，60～80cm）に入り込む。［造成土］
2．10YR2/1黒色シルト。角礫（0.2～0.6cm）を2%含む。
3．10YR2/1黒色極細粒砂～シルト。10YR3/4暗褐色シルトブロック（～0.3cm）を2%含む。
4．10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト。礫（1～3cm）を3%含む。
5．10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトと10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトが同程度斑状に混じり合う。
6．10YR2/2黒褐色シルト～極細粒砂。
7．10YR2/1黒色シルト。10YR3/4暗褐色シルトブロック（～0.5cm）を1%未満含む。礫（2～3cm）を少量含む。［6層に相当］
8．10YR2/1黒色極細粒砂～シルト。角礫（～1cm）を少量含む。［6層に相当］
9．10YR2/1黒色シルト～極細粒砂。



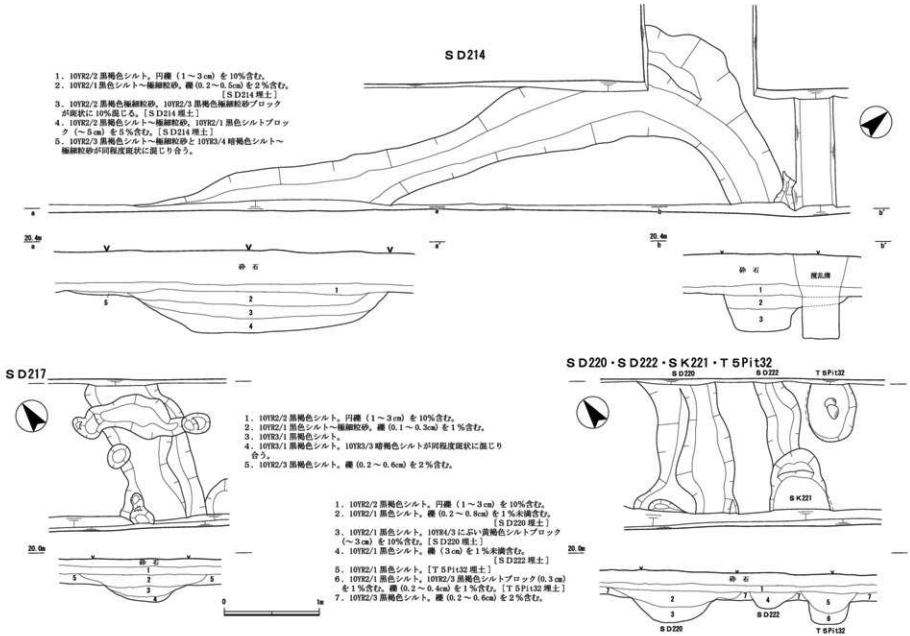
1．10YR2/2黒褐色シルト～極細粒砂。10YR3/3暗褐色シルトブロック（～0.2cm）を1%未満含む。［旧耕作土］
2．10YR2/1黒色シルト。［SD215埋土］
3．10YR2/1黒色シルト。10YR2/3黒褐色シルトブロック（～0.5cm）を10%含む。［SD215埋土］
4．10YR2/2黒褐色シルト～極細粒砂。［SD215埋土］
5．10YR2/1黒色シルト。10YR2/3黒褐色～10YR4/4褐色のシルトブロック（～5cm）を20%含む。［漸移土］
6．10YR2/2黒褐色シルト。［ピット埋土］
7．10YR3/3暗褐色シルト。［ピット埋土］
8．10YR3/4暗褐色シルト。礫（0.2～1cm）を少量含む。［ピット埋土］
9．10YR2/3黒褐色シルト。礫（0.2～0.6cm）を2%含む。［下方に向かって褐色地山へと漸移する］





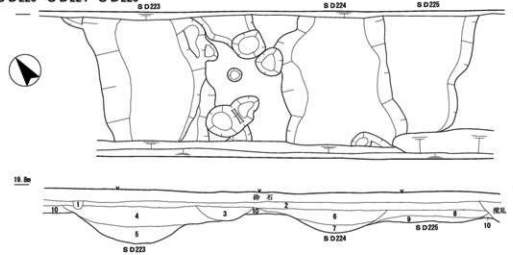
1．10YR2/1黒色シルト～極細粒砂。［旧耕作土］
2．10YR2/1黒色シルト～極細粒砂。礫（0.2～1cm大）を少量含む。［SD203埋土］
3．10YR2/2黒褐色シルト～極細粒砂。10YR2/2黒褐色～10YR4/4褐色シルトがまだらに30%混じり込む。［SD202埋土］
4．10YR2/3黒褐色シルト。礫（0.2～0.6cm）を2%含む。［下方に向かって褐色地山へと漸移する］

第41図　調査区5遺構平面図・断面図⑥（1：40、SD202遺物出土状況図は1：20）



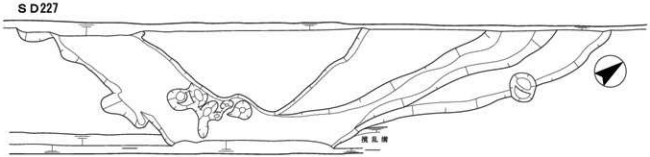
第42図　調査区５遺構平面図・断面図⑦（１：40）

ＳＤ223・ＳＤ224・ＳＤ225



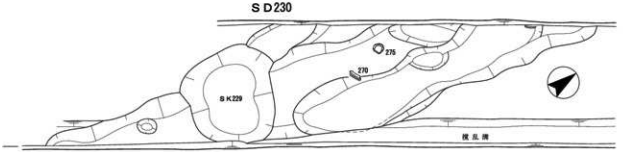
1．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/3 に近い黄褐色シルトブロック（0.3cm）を 10%含む。［撹乱］
2．10YR2/2 黒褐色シルト。円礫（1～3cm）を 10%含む。［旧耕作土］
3．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.5cm）を 1％未満含む。［ピット埋土］
4．10YR2/1 黒色シルト。礫（1～3cm）を 10%含む。［ＳＤ225 埋土］
5．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.3cm）を 1％含む。礫（0.2～1cm）を 1％含む。［ＳＤ223 埋土］
6．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。礫（0.2～1cm）を 1％含む。［ＳＤ224 埋土］
7．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.3cm）を 1％含む。礫（0.2～0.3cm）を 1％未満含む。［ＳＤ224 埋土］
8．10YR2/1 黒色極細粒砂～シルト。礫（3cm）を 1％未満含む。［ＳＤ225 埋土］
9．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（3cm）を 20%含む。［ＳＤ225 埋土］
10．10YR2/3 黒褐色シルト。礫（0.2～0.6cm）を 2％含む。

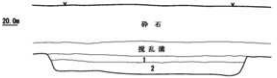
ＳＤ227



1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（1cm 程度）を 1％未満含む。
2．10YR2/3 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～2cm）を 10%含む。
3．10YR2/2 黒褐色シルト。

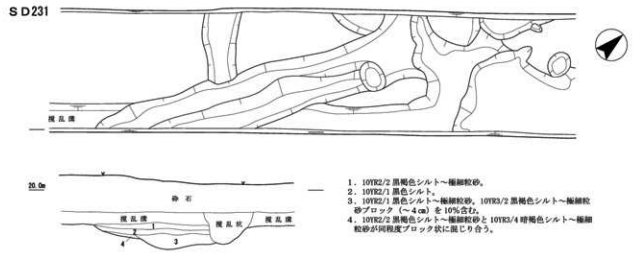
ＳＤ230

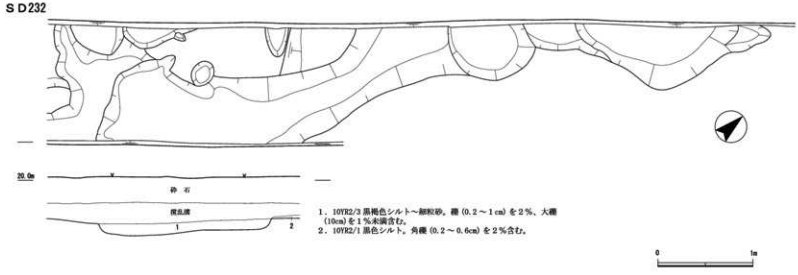




1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.5cm）を 2％含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトが 20%程度に混じり込む。

第43図　調査区５遺構平面図・断面図⑧（１：40）





第44図　調査区５遺構平面図・断面図⑨（１：40）

である。ＳＤ204と並行するようにのび、調査区東壁付近でほぼ消失する浅い溝構である。鎌倉時代の土坑ＳＫ206を切る形で存在し、重複関係から鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＤ207（第34図）　調査区５－③で検出された北西・南東方向にのびる幅0.8m、深さ0.25mの溝である。埋土は単一層の黒褐色シルトで、出土遺物から鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＤ209（第34図）　調査区５－③で検出された南北方向にのびる幅0.8m、深さ0.1m程度の浅い溝である。埋土は単一層の黒色シルトで、縄文時代の遺構の可能性があるＴ５Pit16を切る。出土遺物には時期幅があるが、その下限から鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＤ212（第34図）　調査区５－③で検出された幅0.8～1.7m、深さ0.1mの浅い溝である。調査区東壁に並行してのびる撹乱溝に切られる。埋土は単一層の黒色シルトで、土師器片が出土したが細片のために図化できなかった。詳細な時期は不明である。

ＳＤ214（第42図）　調査区５－③・④にかけて検出された溝である。幅0.8m、深さ0.5m、断面形が逆台形を呈するしっかりとした溝で、南北方向から東西方向にＬ字状に屈曲している。区画溝の機能をもっていた可能性が考えられる。土師器皿片が出土したが、細片のために図化できなかった。時期の比定は困難であるが、周囲の遺構の分布などから、鎌倉時代以降の遺構である可能性がある。

ＳＤ215（第41図）　調査区５－④で検出された南北方向にのびる幅0.1～0.6m、深さ0.4mの溝である。東西方向にのびる浅い溝を切る形で形成されている。出土遺物から鎌倉時代後期以降の溝と考えられる。

ＳＤ217（第42図）　調査区５－⑥で検出された南西－北東方向にのびる幅0.8m、深さ0.2mの溝である。土師器片や近世の施釉陶器鉢片が出土したが、細片のために図化できなかった。江戸時代以降の遺構と考えられる。

ＳＤ220（第42図）　調査区５－⑥で検出された南西－北東方向にのびる幅１m、深さ0.2mの溝である。この溝とＳＤ222、ＳＤ223、ＳＤ224、ＳＤ225はほぼ並行にのびる。出土遺物から室町時代以降の遺構と考えられる。

ＳＤ222（第42図）　調査区５－⑥で検出された幅0.4m、深さ0.2mの溝である。土坑ＳＫ221に切られ、深さはＳＫ221の方が深い。出土遺物から平安時代末～鎌倉時代の遺構と考えられる。

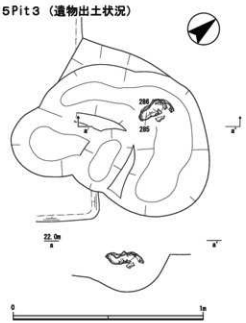
ＳＤ223（第43図）　調査区５－⑥で検出された幅1.2m、深さ0.35mの溝である。出土遺物から鎌倉～室町時代の遺構と考えられる。

ＳＤ224（第43図）　調査区５－⑥で検出された幅1.2m、深さ0.3mの溝である。鎌倉～室町時代の溝ＳＤ225の廃絶後にそれを掘り直す形で形成されている。埋土から山茶碗片が出土したが細片で図化できなかった。ＳＤ225に近い時期の遺構と考えられる。

ＳＤ225（第43図）　調査区５－⑥で検出された幅0.8m以上、深さ0.15mの浅い溝である。ＳＤ224に切られるため溝の幅は不明である。出土遺物から鎌倉時代～室町時代の遺構と考えられる。

ＳＤ227（第43図）　調査区５－⑤で検出された幅１m、深さ0.2mの浅い溝で、南北方向から東西方向にＬ字に屈曲している。埋土からは土師器皿片が出土したが、細片で図化できなかった。出土遺物から平安時代末～鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＤ230（第43図）　調査区５－⑤で検出された幅0.6m、深さ0.2mの浅い溝で、南北方向の溝ＳＤ227



第45図　調査区５遺構平面図・断面図⑩（１：20）

に並行してのびる。ＳＫ229を切る形で形成される。出土遺物から鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

ＳＤ231（第44図）　調査区５－⑤で検出された幅0.6m、深さ0.3mの溝で、南北方向にのびる。撹乱溝、撹乱坑によって切られる。出土遺物から室町時代の遺構と考えられる。

ＳＤ232（第44図）　調査区５－⑤で検出された幅0.5～1.2m以上、深さ0.15mの浅い溝で、南北方向にのびる。出土遺物から近世以降の遺構と考えられる。

④ピット

Ｔ５Ｐｉｔ３（第45図）　調査区５－③で検出されたピットである。径約１m、深さ0.3～0.4mの不整円形のピットで、２点の土師器坏が重なって出土した。出土遺物より鎌倉時代の遺構であると思われる。

（２）遺物

①竪穴建物出土遺物

ＳＨ210出土遺物（第46図208）　208は土師器甕である。頸部から体部にかけての破片で、体部外面は粗いハケによって調整され、ススが付着する。飛鳥～奈良時代のものと考えられる。

②土坑出土遺物

ＳＫ206出土遺物（第46図209～213）　209は土師器坏または皿である。器壁はやや厚みがあり体部が内湾する。口縁端部はヨコナデによって調整され、面を有する。

210～212は山茶碗である。210は底部の破片で、底部外面には糸切り痕が見られる。見込みには自然釉が見られる。胎土は精良で灰白色を呈しており、灰釉陶器碗とも考えられる。11世紀後半～12世紀前半に位置づけられよう。211と212は口縁部から体部にかけての破片で、ともに口縁部はやや外反する。12世紀～13世紀前半のものと思われる。211の口縁部はやや肥厚し、端部に沈線が見られる。

213は中世の鉄製品で、建具金物の受け壺であると考えられる。錆によって膨張するが、Ｘ線透過写真からは掛け金具を受けるための頭部の加工状況が推定できる。棒状素材を内径6mmほどの輪形に曲げた後、首部において余分な部分をタガネを用いて切断したと思われる。先端部は欠損している。胴部の断面は一辺３mmの方形である。

ＳＫ208出土遺物（第46図214）　214は土師器皿である。底部から体部にかけての器壁がやや厚い。体部外面にユビオサエが見られる。10～11世紀代に位置づけられよう。

図化できなかったが、第37図にみられる土師器甕は底部から体部にかけての破片で、体部径が25cmを越すものと考えられる。外面には斜め方向の細かいハケが施されており、焼成時の黒斑も見られる。底部は平底に近く、奈良時代後期のものと考えられる。

ＳＫ211出土遺物（第46図215～217）　215・216は土師器である。215は皿の破片である。底部から体部にかけての器壁が厚い。12～13世紀代に位置づけられよう。216は鍋である。口縁部の破片で、端部は内側に折り返してナデ付けられ肥厚する。13世紀のものと考えられる。

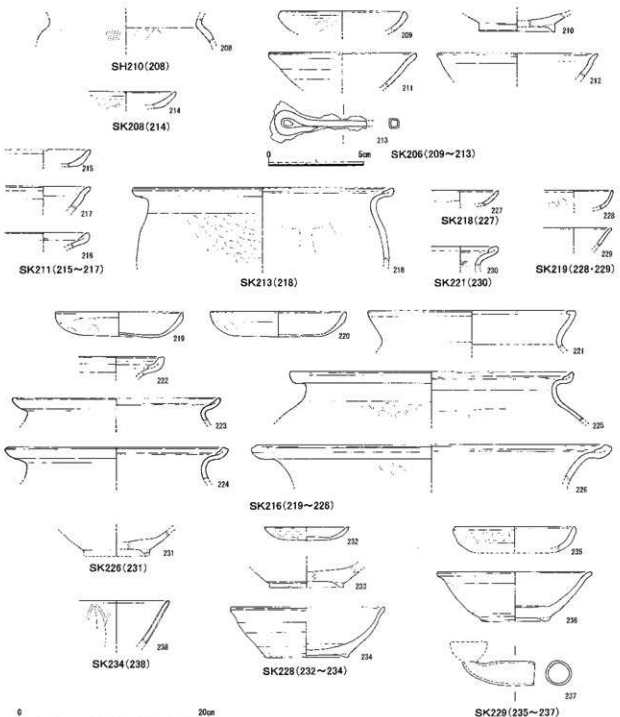
217は山茶碗の口縁部の破片である。体部は緩やかに内湾し、口縁端部は外反する。13世紀代のものと考えられる。

ＳＫ213出土遺物（第46図218）　218は土師器鍋である。体部から頸部の屈曲は緩やかながら、口縁部の外反が強い。口縁端部は内側に折り返してナデ付けられ肥厚する。体部外面にはハケによる調整は見られず、ユビナデとユビオサエのみである。体部内面には炭化物の付着が、外面にはススの付着が見られる。13世紀のものと考えられる。

ＳＫ216出土遺物（第46図219～226）　219～226は土師器である。

219・220は皿である。埋土最下層より出土した。口径が13～14cmの南伊勢系の皿で、13世紀代の様相を呈する。219の器壁は全体的に薄く、口縁部のみやや肥厚する。外面には粘土紐の継ぎ目が見られる。220の器壁も底部は薄く、口縁部が肥厚する。221は土師器甕である。頸部から口縁部にかけての屈曲はかなり緩やかに立ち上がり、口縁端部は内側に折り返されて大きく摘まみ出されている。外面にはススの付着が見られる。11世紀中頃のものと考えられる。

222～226は鍋である。13世紀～14世紀前半のものである。222は口縁部片で、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。223と224は小型の鍋で、頸部の屈曲が大きい。口縁端部は内側に折り返されて肥厚



第46図　調査区５遺物実測図①（１：４、213・237は１：２）

する。225は中型の鍋で、口縁部は頸部から急に屈曲して受口状を呈する。口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。体部外面にはススの付着が見られる。226は大型の鍋で、頸部から口縁部は緩やかにのび、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。

なお、この遺構からは鉄滓（写真図版43鉄滓①）も出土した。重量は3.9ｇで、自然科学分析の結果からは鍛冶滓とは言い難く、その成因は不明である（第Ⅵ章 第81図）。

ＳＫ218出土遺物（第46図227）　227は土師器小皿である。器壁の厚さは一定である。12世紀後半～13世紀前半に位置づけられよう。

ＳＫ219出土遺物（第46図228・229）　228は土師器皿である。内面はユビナデ、外面はユビナデとユビ

オサエが施される。

229は山茶碗である。口縁端部はわずかに外反している。体部外面にはススの付着が見られる。13世紀代に位置づけられよう。

ＳＫ221出土遺物（第46図230）　230は土師器鍋である。口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。頸部内面にはハケが見られる。外面にはススが付着している。11～12世紀に位置づけられる。

ＳＫ226出土遺物（第46図231）　231は山茶碗である。底部外面には糸切り痕が見られ、高台が貼り付けられている。13世紀代に位置づけられる。

ＳＫ228出土遺物（第46図232～234）　232は土師器小皿である。器壁はやや厚い。体部外面全体にユビオサエが見られる。

233・234は山茶碗である。233の底部はやや厚い。底部外面には糸切り痕が見られ、断面が台形の高台が貼り付けられる。12世紀代のものと思われる。234は完形に近く、口縁部から底部までが遺存している。底部から体部にかけて緩やか屈曲し、口縁部はわずかに外反する。底部外面には糸切り痕をユビナデにより消した痕があり、低い高台の畳付には籾殻圧痕が残る。12～13世紀のものと思われる。

ＳＫ229出土遺物（第46図235～237）　235は土師器皿である。器壁は厚く、口縁端部はわずかに面をなす。外面にはユビオサエが残る。

236は山茶碗である。底部は厚く、底部と体部の境が屈曲する。口縁部はやや外反し、高台は矮小である。12世紀代のものと思われる。

237は甕管の雁首である。火皿を欠く。肩部がなく、脂返しの湾曲が小さいことから、18世紀後半のものであると推測される[11]。材質は、蛍光Ｘ線の定量分析により、真鍮であることが判明している（第77・78図）。なお、ＳＫ229の出土遺物として取り上げたが、造成土中の遺物が混入したものと思われる。

ＳＫ234出土遺物（第46図238）　238は青磁碗である。外面には鎬蓮弁文が施されている。13世紀の龍泉窯のものである。

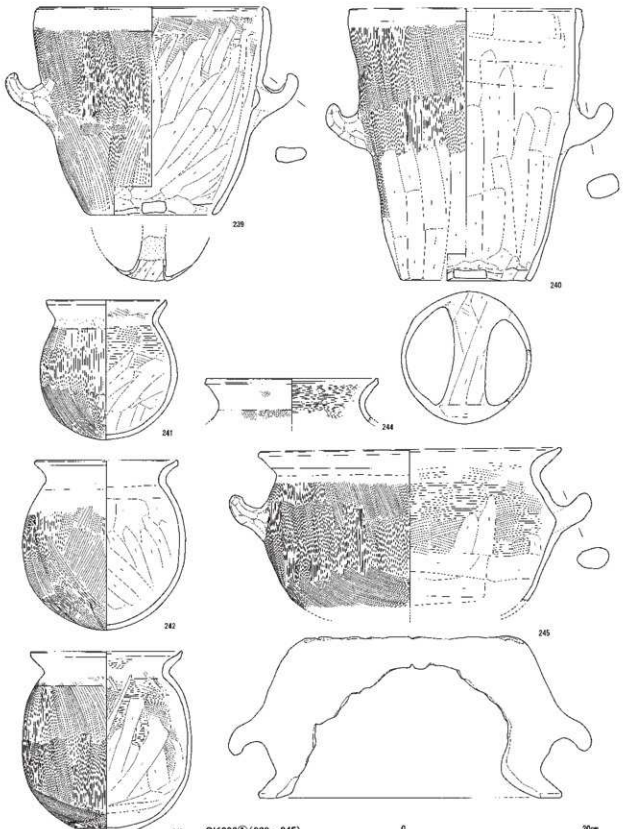
ＳＫ236出土遺物（第47図239～245、第48図246～249）

239～247は土師器である。いずれも７世紀～８世紀前半のものと考えられる。

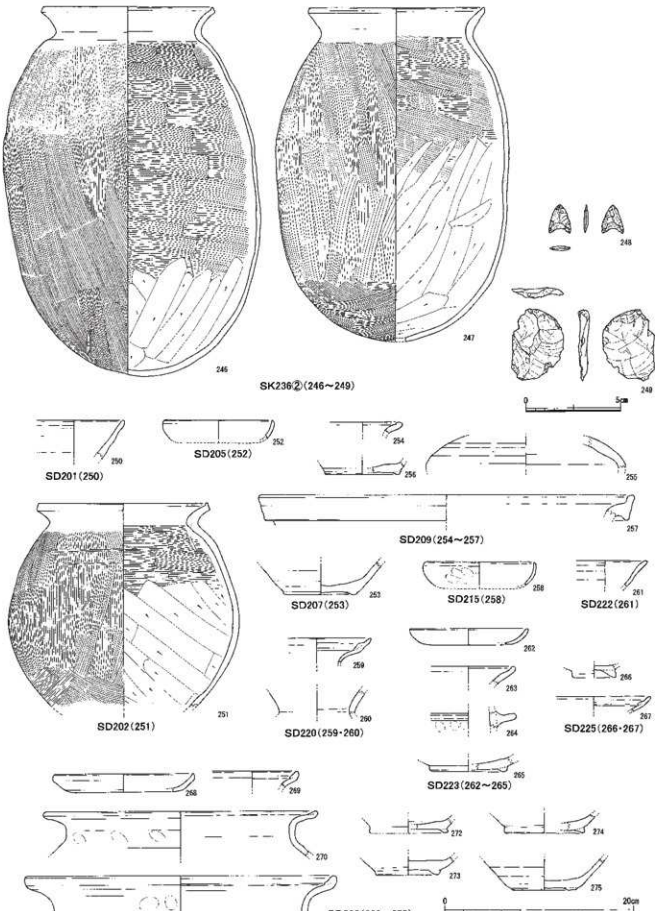
239・240は甑である。器高は異なるが、ともに口径23.4cmと底径約13cmで、ほぼ同じ大きさである。239は体部外面に上下２段のハケが見られる。上段のハケの方が細かく、その後下段に粗いハケが施されている。体部内面には外面の下段と似たハケを横方向に施した後、底部から口縁部に向かってヘラケズリが施されている。底部には中央を橋梁状に残して２つの半円形の蒸気孔を設けている。240は239より器高が高く、体部は湾曲せずにまっすぐ立ち上がる。内面には粘土紐接合痕が残り、口縁部付近には工具ナデが薄く残る。下位から上方に向かってヘラケズリが施されている。外面はハケを数段に施し、下半分にはヘラケズリが見られる。底部には２つの半円形の蒸気孔を設けている。

241～244は小型の甕である。244のみ遺構の北東部で出土し、241～243はまとめて廃棄されたもので、ほぼ完形で出土した。241の体部内面には粘土紐接合痕が見られる。横方向にハケを施し、その後２段階のヘラケズリが見られる。ヘラケズリは、まず底部内面中心付近を反時計回りに施し、その後、体部下部から中央部にかけて時計回りに右斜め上へと施している。また、頸部内面付近に炭化物の付着が見られる。体部外面には被熱による剥離が著しい部分が見られる。242の体部内面にも粘土紐接合痕が見られ、横方向の工具ナデとヘラケズリが施されている。一部に炭化物が付着する。体部外面には一方向ではない縦～斜め方向のハケが施され、底部外面には線刻が見られる。243の体部内面には横方向にハケが施され、その後、底部から口縁部に向かってヘラケズリが施されている。頸部には工具が当たった痕が見られる。体部外面には主に３段階のハケが施されている。体部上位に粗めのハケが縦方向にされた後、体部下位に細かいハケが縦方向に施され、さらにその後、底部に横方向のハケが施されている。体部中位から口縁部にかけてススの付着が見られる。244は口縁部から頸部にかけての破片である。内面には横方向の、外面には縦方向のハケが見られる。他の土師器甕類と離れた場所で出土したが、ほぼ同時期のものである。

245は把手付鍋である。特徴的な再加工が施されており、ほぼ完形で出土した。口縁端部はヨコナデ



第47図　調査区５遺物実測図②（１：４）



第48図　調査区５遺物実測図③（１：４、248・249は１：２）

でやや面をなすように調整され、わずかに摘まみあげられている。頭部の器壁は厚い。底部は径24cmの円形に意図的に打ち欠かれ、また、口縁部から体部にかけてもU字形に大きく打ち欠かれている。逆位にすると移動式竈のような形態となる。しかしながら、内面にはススの付着や被熱痕が見られず、移動式竈として実際に使用した痕跡は見られない。また、円形に打ち欠かれた部分を竈の掛口とした場合、同時に出土した小型甕とは大きさが合致せず、長胴甕の重さを支える十分な強度もない。こうしたことから、祭祀用の移動式竈として使われた、あるいは移動式竈のような使用目的を持って整形されたものの実際には使用されなかったものと考えられる（第Ⅶ章参照）。

246・247は長胴甕である。ともに口径は17～18cmである。246はほぼ完形で出土した。器壁は薄く、体部内面に横方向のハケが施された後、底部周辺にヘラケズリが施されている。体部外面は全面に細かいハケが施されるが、使用および風化による剥離が著しい。一部に黒斑が見られる。口縁端部はナデによって面をなし、摘まみあげられている。甑240と重なるように出土しており、対で使用された可能性が高い。247は246に比べ器壁が厚く、頸部の屈曲は緩やかである。口縁部の器壁は厚く、口縁端部はナデによって面をなす。体部内面は横方向にやや粗いハケが施された後に、底部から上方向にヘラケズリが施されている。粘土紐接合痕も見られる。体部外面においては、まず上位に細かいハケが、次に中位にやや粗いハケが縦に施され、その後底部に細かいハケが横方向に施されている。全体的にススが薄く付着している。甑239と近い場所で出土しており、対で使用された可能性が高い。

248は全長1.5cmの凹基無茎式石鏃である。側縁は緩やかな曲線を描くように調整されており、剥離調整の痕跡が鋭く残る。縄文時代のものと思われる。材質はサヌカイトで、重量は0.30gである。

249は剥片である。暗灰色のチャートの転石を利用したとみられ、一部に自然面が残る。表面には二次加工痕が見られるが、端部には細かな剥離調整は見られない。重量は4.71gである。

③溝出土遺物

ＳＤ201出土遺物（第48図250）　250は山茶碗の口縁部から体部にかけての破片である。体部は外反せずにまっすぐにのびる。13世紀代のものと考えられる。

ＳＤ202出土遺物（第48図251）　251は土師器甕である。体部内面には横方向のハケ、ヘラケズリが施される。外面にはハケの上に、口縁部と平行に刻まれた線刻が２本見られる。口縁端部はヨコナデによって面をなし、摘まみあげられている。７世紀～８世紀前半のものと考えられる。

ＳＤ205出土遺物（第48図252）　252は土師器皿である。体部は内湾する。口縁端部はヨコナデによって調整される。13世紀前半のものと考えられる。

ＳＤ207出土遺物（第48図253）　253は山茶碗の底部片である。見込みから体部にかけて屈曲し、体部は内湾せずにまっすぐのびる。底部外面には糸切り痕が見られ、粗雑な高台が貼りつけられている。13世紀代のものと考えられる。

ＳＤ209出土遺物（第48図254～257）　254は土師器甕の口縁部の破片である。口縁端部は内側に折り返して肥厚させ、丸く収められている。10世紀代に位置づけられる。

255は須恵器の坏身もしくは坏蓋と思われる。天井部から体部の境は大きく屈曲する。外面にはロクロケズリが施される。６世紀のものである可能性が考えられる。

256は山茶碗の底部の破片である。底部は厚く、底部外面には糸切り痕が見られ、粗雑な高台が貼りつけられている。13世紀代のものと思われる。

257は陶器壺の口縁部の破片である。口縁部は縁帯が上下に突き出し、断面はN字形を呈する。口縁部内面には自然釉が見られる。13世紀代の常滑産広口壺であると考えられる。

ＳＤ215出土遺物（第48図258）　258は土師器皿である。体部は内湾しながら立ち上がる。14世紀後半～15世紀前半のものと思われる。

ＳＤ220出土遺物（第48図259・260）　259は土師器鍋である。器壁は薄く、口縁端部は折り返して強くナデ付けられ肥厚する。南伊勢系の鍋で、14世紀後半～15世紀に位置づけられよう。

260は陶器壺の頸部の破片である。内面は口縁部から頸部にかけて施釉されている。

ＳＤ222出土遺物（第48図261）　261は山茶碗の口縁部片である。口縁部はやや外反し、端部付近の器壁はやや厚い。12世紀～13世紀前半のものと考えられる。

ＳＤ223出土遺物（第48図262～265）　262～264は土師器である。262は皿である。器壁はやや厚めで、器高は低い。歪みが大きく、内外面とも摩耗が著しい。263は甕の口縁部の破片である。口縁端部は丸く収めわずかに内湾させる。264は羽釜の鍔部片である。内外面とも摩耗が著しいが、鍔の下部にはユビオサエが見られる。破断面からは体部外面に鍔を貼り付けた痕が観察できる。14世紀代のものと考えられる。

265は山茶碗の底部の破片である。底部外面には糸切り痕が確認でき、貼り付けられた高台には籾殻圧痕が見られる。13世紀代のものと考えられる。

また、この遺構からは青磁碗（写真図版47）の破片も出土した。体部内面には劃花文と思われる文様が施されており、13世紀の龍泉窯のものと推測される。

ＳＤ225出土遺物（第48図266・267）　266は土師器坏または台付皿の底部片である。に忝い橙色を呈し、底部内面には布目圧痕が見られる。底部外面には、三角形の高めの高台が貼り付けられている。11～12世紀のものと考えられる。

267は土師器鍋の口縁部の破片である。口縁端部は折り返しナデ付けられ肥厚する。13～14世紀のものと考えられる。

ＳＤ230出土遺物（第48図268～275）　268～271は土師器である。268は皿である。器壁は厚めで、口縁端部はナデによって面をなす。内外面にはススが付着する。269～271は鍋である。いずれの口縁端部も内側に折り返しナデ付けられ肥厚する。13世紀代に位置すると考えられる。269は口縁部片で、やや受口状である。270の頸部は緩やかに立ち上がり、口縁部は大きく外反する。頸部外面にはユビオサエが認められ、体部外面にはススが厚く付着する。271は大型の鍋で器壁が厚い。口縁部は受口状に立ち上がる。外面には全体的にススが付着している。

272～275は山茶碗である。いずれも底部から体部にかけての破片で13世紀代のものと考えられる。272は断面形が台形の高台が貼り付けられている。273の底部は厚く、見込みと体部との境が屈曲する。断面が三角形の高台が貼り付けられている。274も断面が三角形の高台が貼り付けられており、ややハの字形に開く。275は見込みと体部との境が屈曲し、体部がまっすぐにのびる。低く粗雑な高台が貼り付けられている。

ＳＤ231出土遺物（第49図276～278）　276～278は土師器小皿である。276の体部は内湾して立ち上がる。体部外面には粘土紐接合痕が残る。277の器壁は底部が薄く、口縁部に向かって厚くなる。体部の内湾が強く、口縁端部はヨコナデによりやや面をなす。278の体部の立ち上がりは弱い。13世紀後半～14世紀のものと考えられる。

ＳＤ232出土遺物（第49図279・280）　279は山茶碗の底部から体部にかけての破片である。底部は厚く、底部外面には糸切り痕が残り、断面形が台形の高台が貼り付けられている。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

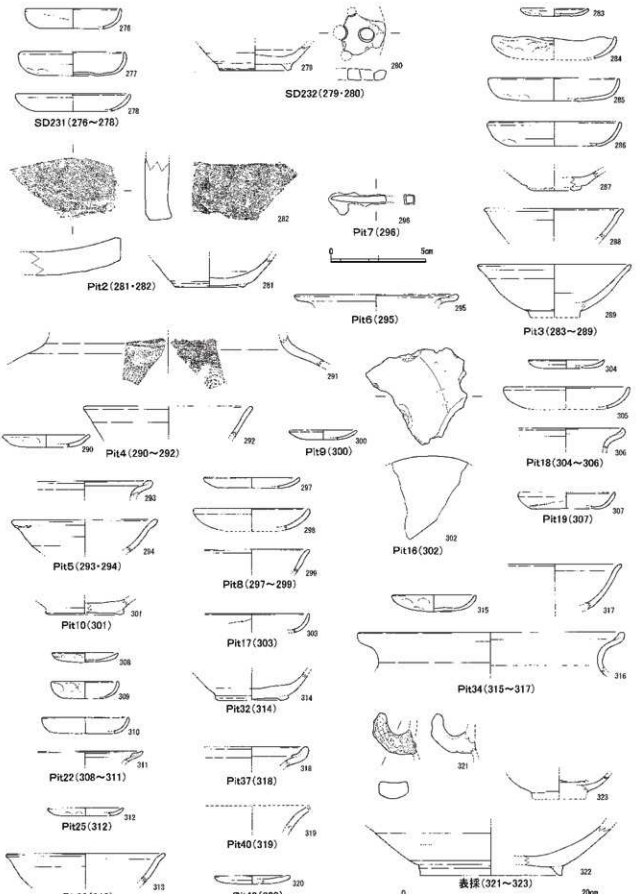
280は近世の土師質土器の目皿である。被熱痕が見られないため、火鉢やセ輪などの模受けといったものではない可能性がある。残存する部分から径５cmほどの円形のものであったことが分かる。

④ピット

ＴＳPit２出土遺物（第49図281・282）　281は山茶碗である。内面は緩やかに内湾する。糸切り痕が残る底部外面には、やや内側に粗雑な低い高台が貼り付けられている。13世紀代に位置づけられる。

282は平瓦である。凹面にはコビキ痕が見られ、凸面には板ナデが見られる。

ＴＳPit３出土遺物（第49図283～289）　283～286は土師器である。283は小皿である。体部の立ち上がりが弱い小皿で、器壁の厚さは一定である。284～286は皿である。284は口縁部が歪んでおり、外面には粘土紐接合痕が見られる。底部の器壁は薄いが、体部の器壁は口縁部に近いほど厚い。285・286ともに器壁は薄く一定で、２枚が重なって出土した。体部は内湾して立ち上がる。いずれも13世紀代のものと考えられる。



第49図　調査区５遺物実測図④（１：４、296は１：２）

287～289は山茶碗である。287は底部片で、底部内面には自然釉が認められ、底部外面には籾殻圧痕が残る潰れた高台が貼り付けられている。288の体部はわずかに内湾し、口縁部はやや外反する。289は器壁が厚めで、体部は緩やかに内湾する。12世紀～13世紀代前半に位置づけられる。

Ｔ５Pit４（第49図290～292）　290は土師器小皿である。器壁は厚めで、器高は低い。体部外面のヨコナデがやや強く、わずかに外反する。

291は須恵器甕の頸部から肩部にかけての破片である。体部内面には同心円状の当て具痕が、体部外面には疑格子状のタタキが見られる。

292は山茶碗である。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収められている。12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。

Ｔ５Pit５出土遺物（第49図293・294）　293は土師器鍋の口縁部片である。口縁端部は内側に折り返して丸く収めている。12～13世紀に位置づけられる。

294は山茶碗である。器壁はやや厚めで体部は緩やかに湾曲し、口縁部は外反する。内面には自然釉が見られ、口縁部付近の外面には重ね焼き痕が確認できる。12～13世紀前半に位置づけられる。

Ｔ５Pit６出土遺物（第49図295）　295は小型の土師器鍋である。大きく外反した口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。13世紀代に位置するものと考えられる。

Ｔ５Pit７出土遺物（第49図296）　296は中世の鉄釘であると考えられる。折損しているため全形は不明である。透過Ｘ線写真により釘先であることが判明した。断面は一辺0.5cmの方形で、錆で肥厚する。

Ｔ５Pit８出土遺物（第49図297～299）　297・298は土師器である。297は小皿である。体部の立ち上がりが弱い小皿で、器壁の厚さは一定である。298は皿である。体部は内湾し緩やかに立ち上がる。口縁端部外面はヨコナデが施されており、若干の面をなす。

299は山茶碗の口縁部片である。口縁部は外反する。12～13世紀前半に位置づけられる。

Ｔ５Pit９出土遺物（第49図300）　300は土師器小皿である。体部の立ち上がりが弱い小皿で、器壁の厚さは一定である。

Ｔ５Pit10出土遺物（第49図301）　301は山茶碗の底部片である。底部は厚く、外面には糸切り痕が残る。高台は底部脇に貼り付けられている。見込みには自然釉のかかる箇所が見られる。13世紀前半のものと考えられる。

Ｔ５Pit16出土遺物（第49図302）　302は磨石と考えられる。使用面が２面確認でき、１面は凸状で自然面が一部に残り（Ａ面）、もう１面は使用によって平滑となる（Ｂ面）。安山岩の転石を利用したものであるが、破損しているため全形は不明である。被熱痕が確認できる。

Ｔ５Pit17出土遺物（第49図303）　303は土師器皿である。体部は内湾して立ち上がる。体部外面に粘土紐接合痕が残る。13世紀代に位置づけられる。

Ｔ５Pit18出土遺物（第49図304～306）　304～306は土師器である。304は小皿である。体部の立ち上がりが弱い。外面にはススが付着している。305は皿である。体部は内湾して立ち上がる。13世紀代に位置づけられる。306は鍋である。口縁部はやや受口状で、その端部は内側に折り返して強くナデ付けられ肥厚する。外面にはススが付着する。13世紀代に位置づけられる。

Ｔ５Pit19出土遺物（第49図307）　307は土師器皿である。底部と体部の境は屈曲し、体部はやや内湾する。体部外面には粘土紐接合痕が残る。13世紀代のものと考えられる。

Ｔ５Pit22出土遺物（第49図308～311）　308～311は土師器である。308～310は小皿である。308の底部は薄く、体部はやや厚い。309の体部はやや厚く、内湾して立ち上がる。310の体部は内湾して立ち上がる。13世紀代のものと考えられる。311は鍋である。口縁端部は内側に折り返して強くナデ付けられ肥厚する。15世紀代のものと思われる。

Ｔ５Pit25出土遺物（第49図312）　312は土師器小皿である。体部の立ち上がりの弱い小皿で、器壁はやや厚い。

Ｔ５Pit28出土遺物（第49図313）　313は山茶碗である。体部は内湾し、口縁部は外反する。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

Ｔ５Pit32出土遺物（第49図314）　314は山茶碗の底部から体部にかけての破片である。底部は厚く、

外面には糸切り痕が残り、粗雑な高台が貼り付けられている。見込みには墨のような黒色物が付着しており、硯として転用された可能性が考えられる。13世紀代のものと考えられる。

Ｔ５Pit34出土遺物（第49図315～317）　315・316は土師器である。315は小皿である。器壁の厚さは一定で、体部は内湾する。13世紀代に位置づけられよう。316は鍋である。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部はやや内湾して受口状を呈する。口縁端部は内側に折り返して肥厚させている。13世紀のものと考えられる。

317は山茶碗である。体部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

Ｔ５Pit37出土遺物（第49図318）　318は土師器鍋の口縁部片である。口縁端部は内側に折り返し、強くナデ付けられ肥厚する。13世紀のものと考えられる。

Ｔ５Pit40出土遺物（第49図319）　319は土師器甕の口縁部片で、緩やかに外反する。口縁端部は欠損している。

Ｔ５Pit42出土遺物（第49図320）　320は土師器小皿である。器壁は厚めで、体部の立ち上がりは弱い。

⑤表採（第49図321～323）

321は土師器甑または鍋の把手である。調査区脇で採集したものである。剥離が著しい。

322は陶器片口鉢である。見込みから体部にかけては緩やかに屈曲する。底部外面には糸切り痕が見られ、断面が三角形の高台が貼り付けられている。見込みは使用による摩耗で器面が滑らかになっている。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

323は青磁碗である。見込み付近には劃花文の一部と思われる三本の直線が水平方向に描かれている。13世紀代の龍泉窯のものと思われる。

註

1）古泉弘1987『考古学ライブラリー48　江戸の考古学』ニュー・サイエンス社

第３節　調査区６

（１）遺構

①竪穴建物

調査区６では、可能性にとどまるものも含めて４棟の竪穴建物が確認された。すべて調査区壁にかかるため全体の形状は不明ではあるが、平面形は方形を呈し主軸方向を揃える。ＳＫ241のみやや時代が新しく飛鳥時代～奈良時代前半のもので、残る３棟（ＳＨ237、ＳＨ239、ＳＨ240）は古墳時代末～飛鳥時代のもので同時期に存在した可能性も考えられる。

ＳＨ237（第51図）　調査区６－②中央部で検出された南北長約3.6mの方形を呈する竪穴建物である。調査区壁にかかり、また撹乱溝で切られているため、全体の形状は不明である。南壁中央付近にカマドを設ける。焚口にあたる床面は焼土塊を含む堆積層が認められ、床面は凹凸が著しい。袖の基底部は遺存していない。袖の一部はブロック土として埋土に混ざり、カマド内に堆積していた。

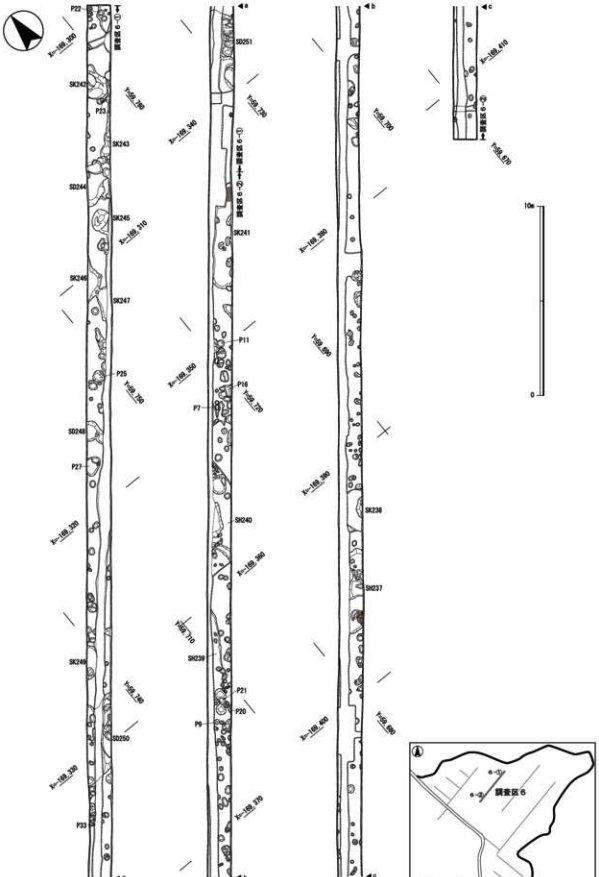
中央部と北東隅には径１m以上の土坑が掘り込まれる。土坑の深さは0.1～0.15mで、さらに土坑内には不整円形の小穴が散見される。壁際溝にあたるような明瞭な溝や貼床は認められなかった。

カマド付近の埋土第４層から須恵器坏片や土師器甕片が、土坑内第11層からは須恵器坏片が、土坑内第11層からは土師器甕片が出土しており、古墳時代末～飛鳥時代の遺構と考えられる。

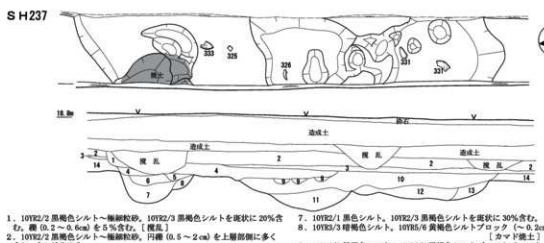
また、北東すぐ脇にＳＫ238が存在する。ほぼ同時期の出土遺物が認められており、竪穴建物との関連も考えられる。

ＳＨ239（第51図）　調査区６－②ＳＨ237の北東約35mで検出された竪穴建物で、建物の東壁部分のみが確認された。大部分が調査区外に出ているため全体の形状は不明であるが、平面形は南北長4.8m以上の方形を呈すると考えられる。東壁付近には径0.2～0.3mの小穴が複数存在しており、建物の屋根や壁等の構造物に関係する可能性がある。主柱穴とみられるものは確認されなかった。南東隅には径約65cmの不整円形の土坑が存在し、貯蔵穴としての使用も考えられる。

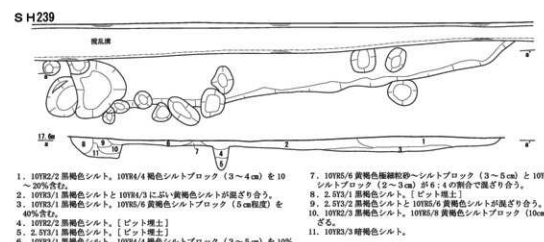
出土遺物として土師器甕・須恵器坏蓋が認められ、



第50図　調査区６平面図（１：200）



1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR2/3 黒褐色シルトを斑状に 20%含む。礫（0.2～0.6cm）を 5%含む。［攪乱］
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。円礫（0.5～2cm）を上層部側に多く含む。［旧耕作土］
3．10YR2/1 黒色～10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂。礫（0.2～0.5cm）を 1%含む。［旧耕作土］
4．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロック（5cm）を 30%含む。礫（0.2～0.4cm）を 5%含む。
5．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロック（5cm）を 20%含む。礫（0.2～0.4cm）を 3%含む。
6．10YR3/3 暗褐色シルト。10YR5/6 黄褐色シルトブロック（～0.2cm）を 5%含む。［カマド焼土］
7．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトを斑状に 30%含む。
8．10YR3/3 暗褐色シルト。10YR5/6 黄褐色シルトブロック（～0.2cm）を 10%含む。［カマド焼土］
9．10YR3/2 黒褐色シルト。10YR2/2 黒褐色シルトブロック（0.5cm）を 20%含む。
10．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.7cm）を 2%含む。
11．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。角礫（0.2～0.5cm）を 5%含む。
12．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。角礫（0.2～0.5cm）を 5%含む。
13．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR2/1 黒色シルトブロック（～10cm）を 5%、10YR4/4 褐色シルト～中粒砂ブロック（～8cm）を 5%含む。
14．10YR2/1 黒色シルト～細粒砂。礫（0.2～0.5cm）を 1%含む。



1．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（3～4cm）を 10～20%含む。
2．10YR3/1 黒褐色シルトと 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトが混ざり合う。
3．10YR3/1 黒褐色シルト。10YR5/6 黄褐色シルトブロック（5cm程度）を 40%含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト。［ピット埋土］
5．2.5Y3/1 黒褐色シルト。［ピット埋土］
6．10YR3/1 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（3～5cm）を 10%含む。
7．10YR5/6 黄褐色極細粒砂～シルトブロック（3～5cm）と 10YR3/2 黒褐色シルトブロック（2～3cm）が 6：4 の割合で混ざり合う。
8．2.5Y3/1 黒褐色シルト。［ピット埋土］
9．2.5Y3/2 黒褐色シルトと 10YR5/6 黄褐色シルトが混ざり合う。
10．10YR2/3 黒褐色シルト。10YR5/8 黄褐色シルトブロック（10cm 程度）が混ざる。
11．10YR3/3 暗褐色シルト。

0　1m

第51図　調査区６遺構平面図・断面図①（１：40）

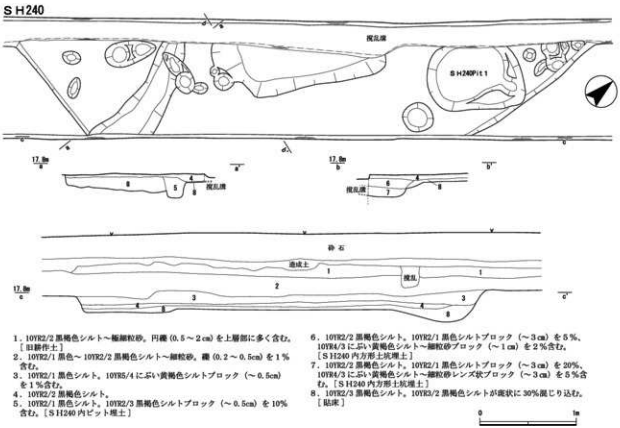
古墳時代末～飛鳥時代の遺構と考えられる。

ＳＨ240（第52図）　調査区６－②ＳＨ239の北東に隣接するように検出された竪穴建物である。調査区壁にかかり、また撹乱溝に切られるため全体の形状不明であるが、平面形は南北長５ｍ以上、東西長3.6ｍ以上の方形を呈すると考えられる。建物内には南壁から北方向に向けて溝状の掘り込みが見られ、その溝の以西と以東では底面の深さが異なっている。その高低差を埋めるように粘質ブロック土が斑状に混じる土が敷き均されており、貼床であったと考えられる（埋土第８層）。

東壁付近に径約１ｍ、深さ約0.35ｍの不整円形の土坑ＳＨ240Pit１が確認された。埋土からは６世紀代の様相を呈する土師器坏、須恵器坏身・坏蓋が出土した。土坑の規模から貯蔵穴としての使用も考えられる。それ以北の床面は、中央部の床面の高さより約0.15ｍ低く掘り込まれていた。

また、ＳＨ240Pit１の南側に径0.3ｍ、深さ約0.2ｍのピットを確認した。主柱穴の可能性がある。さらに、遺構中央では一辺１.８ｍ以上、深さ約0.2ｍの方形と思われる土坑が確認された。貼床を施した後に掘り込まれたものである。

出土遺物として土師器坏、土師器甕、須恵器坏身が認められ、古墳時代末～飛鳥時代の遺構であると



1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。円礫（0.5～2cm）を上層部に多く含む。［目跡作土］
2．10YR2/1 黒色～10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂。礫（0.2～0.5cm）を1％含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（～0.5cm）を1％含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト。
5．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（～0.5cm）を10％含む。［S H240 内ピット埋土］
6．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロック（～3cm）を5％、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック（～1cm）を2％含む。［S H240 内方形土拡埋土］
7．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロック（～3cm）を20％、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂レンズ状ブロック（～3cm）を5％含む。［S H240 内方形土拡埋土］
8．10YR2/3 黒褐色シルト。10YR3/2 黒褐色シルトが斑状に30％混じり込む。［貼床］

第52図　調査区６遺構平面図・断面図②（１：40）

考えられる。

ＳＫ241（第53図）　調査区６－②ＳＨ240の北東約８ｍで検出された竪穴建物と思われる遺構である。現況農道の交差点に差し掛かる場所にあるため、発掘調査の進行上の問題から遺構全体の把握が難しく、検出時には土坑として扱った。

調査区壁にかかり、撹乱溝によって大部分を切られている。平面形は方形を呈しているように見え、南北長は約4.5ｍである。北東隅には焼土塊が集積する部分があり、カマド跡と思われたが、調査区壁にかかるうえ撹乱溝の影響が大きく、袖の遺存状況やカマドの形状を確認するまでは至らなかった。

また、建物南壁にあたる部分には調査区壁にかかるピットが確認された。深さは約0.7ｍで建物の主柱穴にもなり得る位置と規模である。貼床については確認されなかった。

埋土からは土師器甕、管状土錘２点が出土しており、飛鳥時代～奈良時代前半の遺構であると考えられる。

②土坑

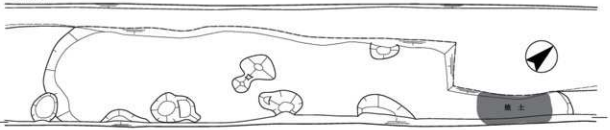
ＳＫ238（第53図）　調査区６－②ＳＨ237の北東すぐ脇で検出された径2.2ｍ、深さ約0.9ｍの土坑である。調査区壁にかかるため全体の形状は不明である。断面は不整形で、埋土の堆積状況から一度掘り直されていると思われる。埋土から、近接するＳＨ237とほぼ同時期の土師器甕が出土しており、飛鳥時代～奈良時代前半の遺構と考えられる。住居との関連も考えられる。

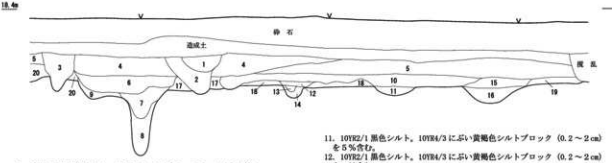
ＳＫ242（第53図）　調査区６－①の北東端近くで検出された径1.8ｍ以上の土坑である。埋土は単一層で、埋土からは土師器坏、土師器鍋、須恵器、山茶碗が出土したが、細片のため図化できなかった。風倒木痕の可能性が高く、出土遺物の下限から鎌倉時代以降のものと考えられる。

ＳＫ243（第54図）　調査区６－①の北東部で検出された径2.0ｍ以上、深さ0.3ｍの土坑である。調査区壁にかかり、埋土の堆積状況から掘り直された様子がうかがえる。埋土からは土師器壺、管状土錘が出土した。古墳時代の遺構と考えられる。

ＳＫ245（第50図）　調査区６－①の北東部で検出された径1.4ｍ、深さ0.45ｍの不整円形の土坑であ

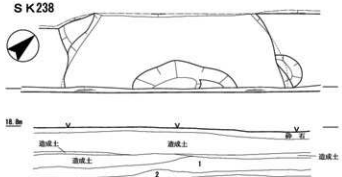
ＳＫ241





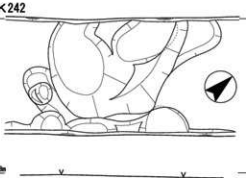
1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.5cm）を3％含む。
［ピット埋土］
2．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（0.2～0.4cm）を1％含む。礫（0.2～0.4cm）を1％含む。［ピット埋土］
3．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を3％含む。10YR4/6 褐色シルトブロック（～0.8cm）を5％含む。［ピット埋土］
4．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.3cm）を1％含む。［旧耕作土］
5．10YR2/1 黒色～10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂。礫（0.2～0.5cm）を1％含む。
［旧耕作土］
6．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.3cm 程度）を2％含む。礫（0.2～0.3cm）を3％含む。
7．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/3 暗褐色シルトブロック（～1cm）を10％含む。
8．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.2～0.4cm）を3％含む。
9．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～2cm）を20％含む。
10．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.3cm 程度）を2％含む。礫（0.2～0.3cm）を3％含む。
11．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック（0.2～2cm）を5％含む。
12．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック（0.2～2cm）を1％含む。
13．10YR2/1 黒色シルト。
14．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック（0.2～0.3cm）を1％含む。
15．10YR3/3 暗褐色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロック（5～10cm）を30％含む。中央から下層部にかけて 10YR5/4 にぶい黄褐色被熱シルトブロック（1～2cm）が散在。［カマド掘土？］
16．10YR3/3 暗褐色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロック（～10cm）を10％含む。全体的に10YR5/4 にぶい黄褐色被熱シルトブロック（～0.4cm）を3％含む。
［カマド掘土？］
17．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～2cm）を20％含む。
18．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（～2cm）を20％含む。
19．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/3 暗褐色シルトブロック（0.2～0.4cm）を1％含む。
20．10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂。［土層下部は 10YR3/3 暗褐色へと漸移的に土色が変化する。］

ＳＫ238



＜ＳＫ238＞
1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。円礫（0.5～2cm）を上層部に多く含む。［旧耕作土］
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。［旧耕作土］
3．10YR2/1 黒色～10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.5cm）を1％含む。
4．10YR2/1 黒色シルト。角礫（0.2～1cm）を5％含む。10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～粗粒砂ブロック（20cm）を10％含む。
5．10YR2/3 黒褐色シルトと 10YR2/1 黒色シルトが 10cm のブロック状で同程度混じり合う。
6．10YR1.7/1 黒色シルト。礫（0.2～0.4cm）を2％含む。
7．10YR2/1 黒色シルト。角礫（0.2～1cm）を5％含む。10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～粗粒砂ブロック（20cm）が散在。
8．10YR1.7/1 黒色シルト～細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を3％含む。
9．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.5cm）を5％含む。10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～粗粒砂ブロック（2cm）を30％含む。
10．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（径2～5mm）を10％含む。

ＳＫ242

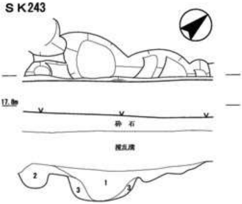


＜ＳＫ242＞
1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/4 褐色シルトと 10YR3/3 暗褐色シルトが同程度混ざり合ったブロック（～3cm）を 20％含む。

0　1m

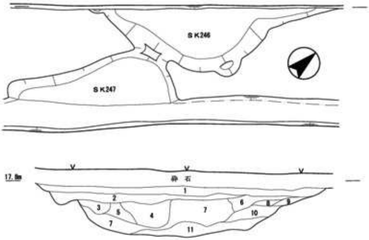
第53図　調査区６遺構平面図・断面図③（１：40）

ＳＫ243



<ＳＫ243>
1．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトが斑状に20%混じり込む。
2．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.2～0.4cm）を１%含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/6 褐色シルトブロック（5～10 cm）を 20%含む。

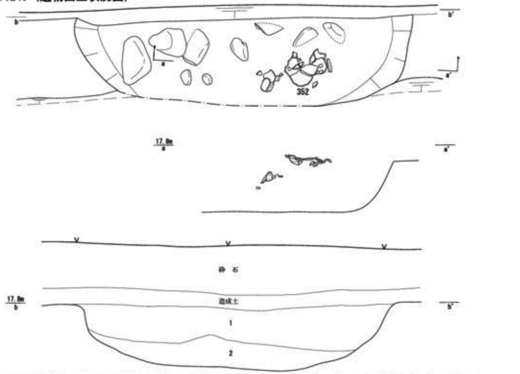
ＳＫ246・ＳＫ247



<ＳＫ246>
1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.4cm）を３%含む。土器片を含む。
2．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.2cm）を３%含む。礫（0.2～0.3cm）を２%含む。土器片を含む。
3．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/4 褐色シルトブロック（5 cm）を１%未満含む。土器片を含む。
4．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.1～0.5cm）を 10%含む。
5．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.8cm）を１%含む。
6．10YR2/2 黒褐色シルト。角礫（0.2～0.6cm）を 10%含む。
7．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂ブロック（10 cm）を 10%含む。
8．10YR2/1 黒色シルトと 10YR2/2 黒褐色シルトが同程度ブロック状に混じり合う。
9．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（0.2～1 cm）を５%含む。
10．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR2/1 黒色シルトブロック（～5 cm）を 10%含む。土器片を含む。
11．10YR2/1 黒色シルトと 10YR4/4 褐色シルトが同程度ブロック状に混じり合う。

0　1m

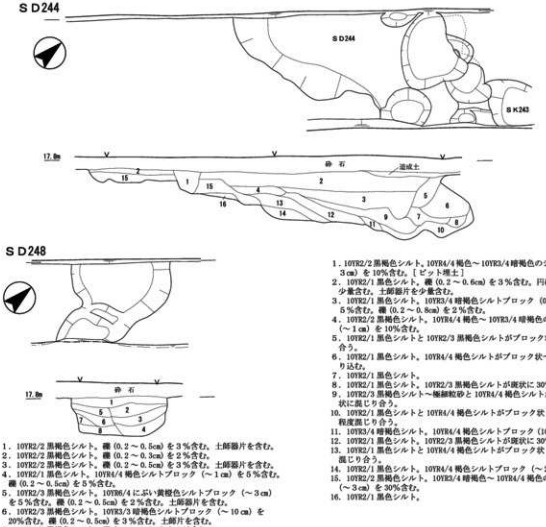
ＳＫ249（遺物出土状況図）



1．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（0.2～1 cm）を 10%含む。礫（0.2～0.4cm）を 10%含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（0.2～0.4cm）を７%含む。円礫（5～8 cm）を 10%含む。

0　1m

第54図　調査区６遺構平面図・断面図④（１：40、ＳＫ249遺物出土状況図は１：20）



1．10YR2/2黒褐色シルト。礫（0.2～0.5cm）を３%含む。土師器片を含む。
2．10YR2/2黒褐色シルト。礫（0.2～0.3cm）を２%含む。
3．10YR2/2黒褐色シルト。礫（0.2～0.5cm）を３%含む。土師器片を含む。
4．10YR2/1黒色シルトと、10YR4/4褐色シルトブロック（～1cm）を５%含む。礫（0.2～0.5cm）を５%含む。
5．10YR2/3黒褐色シルト。10YR6/4にぶい黄橙色シルトブロック（～3cm）を５%含む。礫（0.2～0.5cm）を２%含む。土師器片を含む。
6．10YR2/3黒褐色シルト。10YR3/3暗褐色シルトブロック（～10cm）を20%含む。礫（0.2～0.5cm）を３%含む。土師片を含む。
7．10YR2/2黒褐色シルト。礫（0.2～0.5cm）を２%含む。
8．10YR2/1黒色シルト。礫（0.2～0.5cm）を３%含む。

1．10YR2/2黒褐色シルト。10YR4/4褐色～10YR3/4暗褐色のシルトブロック（～3cm）を10%含む。［ピット埋土］
2．10YR2/1黒色シルト。礫（0.2～0.6cm）を３%含む。円礫（5～10cm）を少量含む。土師器片を少量含む。
3．10YR2/1黒色シルト。10YR3/4暗褐色シルトブロック（0.2～0.5cm）を５%含む。礫（0.2～0.8cm）を２%含む。
4．10YR2/2黒褐色シルト。10YR4/4褐色～10YR3/4暗褐色のシルトブロック（～1cm）を10%含む。
5．10YR2/1黒色シルトと10YR2/3黒褐色シルトがブロック状に同程度混じり合う。
6．10YR2/1黒色シルト。10YR4/4褐色シルトがブロック状～斑状に40%混じり込む。
7．10YR2/1黒色シルト。
8．10YR2/1黒色シルト。10YR2/3黒褐色シルトが斑状に30%混じり込む。
9．10YR2/3黒褐色シルト～極細粒砂と10YR4/4褐色シルトが同程度ブロック状に混じり合う。
10．10YR2/1黒色シルトと10YR4/4褐色シルトがブロック状（5～8cm）に同程度混じり合う。
11．10YR3/4暗褐色シルト。10YR4/4褐色シルトブロック（10cm）を70%含む。
12．10YR2/1黒色シルト。10YR2/3黒褐色シルトが斑状に30%混じり込む。
13．10YR2/1黒色シルトと10YR4/4褐色シルトがブロック状（5cm）に同程度混じり合う。
14．10YR2/1黒色シルト。10YR4/4褐色シルトブロック（～2cm）を５%含む。
15．10YR2/2黒褐色シルト。10YR3/4暗褐色～10YR4/4褐色のシルトブロック（～3cm）を30%含む。
16．10YR2/1黒色シルト。

0　1m

第55図　調査区６遺構平面図・断面図⑤（１：40）

る。撹乱溝に切られる。出土遺物から鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

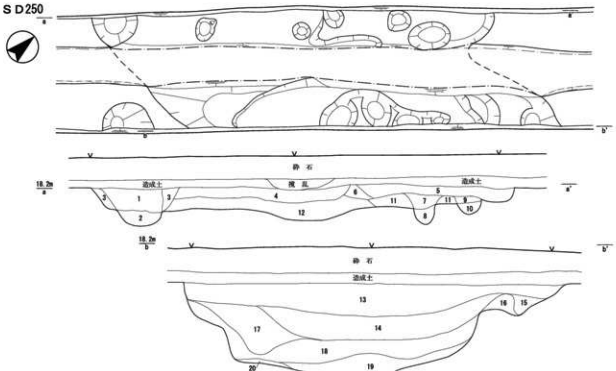
ＳＫ246（第54図）　調査区６－①北東部で検出された土坑で、ＳＫ247と接する。規模は径2.6m以上、深さ0.5mで、調査区壁にかかるため全体の形状は不明である。埋土の堆積状況から何度か掘り直された様子がうかがえる。埋土からは土師器碗、土師器甕、須恵器甕が出土しており、古墳～飛鳥時代の遺構と思われる。

ＳＫ247（第54図）　調査区６－①ＳＫ246と接する土坑で、撹乱溝に切られるため全体の形状は不明である。径1.8mほどの規模の土坑であると思われる。埋土からはＳＫ246と近い時期の土師器甕が出土しており、古墳～飛鳥時代の遺構と思われる。

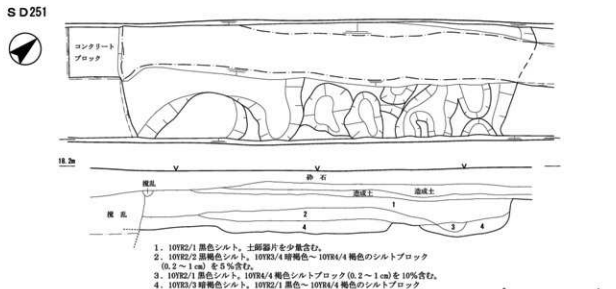
ＳＫ249（第54図）　調査区６－①の中央部で検出された径1.8m、深さ0.35mの土坑である。撹乱溝に切られ、調査区壁面にかかるため全体の形状は不明である。土坑内には中～大礫が散在し、鎌倉時代の土師器鍋が出土した。鎌倉時代の遺構と考えられる。

③溝

ＳＤ244（第55図）　調査区６－①北東部で検出された幅約２m、深さ約0.7mの溝状の遺構である。東西方向にのびると考えられたため溝として扱ったが、土坑である可能性も否めない。北側壁は袋状にオーバーハングしており、遺構の最も深い場所にあたる。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考えられる。



1．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（0.1～0.2cm）を7％含む。［ビット埋土］
2．10YR3/2 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（0.1～0.2cm）を30％含む。［ビット埋土］
3．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/4 褐色シルトブロック（0.1～0.2cm）を3％含む。［ビット埋土］
4．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（0.1～3cm）を5％含む。10YR2/1 黒色シルトブロック（0.1～0.5cm）を1％含む。
5．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを10％含む。礫（0.1～1cm）を1％含む。
6．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（0.3～3cm）を10％含む。10YR3/3 暗褐色シルトブロック（0.5～1cm）を5％含む。炭化物（0.5～1cm）を1％含む。
7．10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（0.3～0.5cm）を3％含む。
8．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（1～5cm）を40％含む。焼土（7.5YR5/6 明褐色）を下層に含む。
9．7.5YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを5％含む。
10．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックを30％含む。10YR6/6 黄橙色シルトブロックを1％含む。10YR4/4 褐色シルトブロックを1％含む。
11．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（0.3～3cm）を10％含む。
12．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（0.1～3cm）を15％含む。炭化物（0.5～1cm）を3％含む。
13．10YR2/1 黒色シルト。
14．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（～0.3cm）を10％含む。
15．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック（0.2～0.4cm）を5％含む。
17．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（～0.2cm）を2％含む。
18．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（～0.3cm）を5％含む。10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック（10cm）が散在。
19．10YR2/1 黒色シルト。10YR2/3 黒褐色シルトブロック（～1cm）を5％含む。
20．5YR4/4 にぶい赤褐色シルト。



1．10YR2/1 黒色シルト。土師器片を少量含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。10YR3/4 暗褐色～10YR4/4 褐色のシルトブロック（0.2～1cm）を5％含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（0.2～1cm）を10％含む。
4．10YR3/3 暗褐色シルト。10YR2/1 黒色～10YR4/4 褐色のシルトブロック（0.5～3cm）を40％含む。

第56図　調査区６遺構平面図・断面図⑥（１：40）

ＳＤ248（第55図）　調査区６－①中央部で検出された幅約１m、深さ約0.７mの溝である。調査区を横断する。断面形が箱形を呈するしっかりとした溝である。埋土の堆積状況から一度掘り直した様子がうかがえる。埋土からは土師器甕が出土しており、平安時代の遺構と考えられる。

ＳＤ250（第56図）　調査区６－①南東部で検出された幅４mの溝状の遺構で、調査区を横断する。一定の方向にのびる傾向が見られたため検出時には溝として扱ったが、遺構の中心を横切る撹乱溝の北西と南東の埋土状況の差異が大きいことから、撹乱溝部分で２つの遺構が接しているものと見ることもできる。

撹乱溝より南東は深さが約１mと深い。底部に一部被熱した部分が見られる。掘り直した様子もうかがえる。出土遺物のほとんどは撹乱溝の以南の埋土から出土したもので、飛鳥～奈良時代前半の様相を示す。同じ調査区の竪穴建物よりやや新しい時期に形成されたと考えられる。

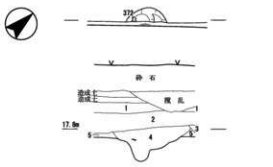
撹乱溝より北西は深さが約0.３mで、埋土最下層には炭化物が一定程度含まれている。埋土からは小型土師器甕の体部片が出土したが、図化できなかった。埋土の堆積状況から竪穴建物である可能性も疑われるが、検出された面積が狭く決め手に欠く。最も近い竪穴建物ＳＫ241からは13mほど離れた場所に位置する。

ＳＤ251（第56図）　調査区６－①南東端で検出された溝状の遺構である。三方を調査区壁面および撹乱溝に切られ、さらに遺構の中央を撹乱溝が走るため、全体の形状は不明である。深さ0.65m、幅４m以上の遺構であることが確認できる。特に遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。土層断面の様子から竪穴建物である可能性も疑われるが、検出された面積が狭く決め手に欠く。最も近い竪穴建物ＳＫ241からは５mほど離れた場所に位置し、ＳＤ250との中間にあたる。

④ピット

Ｔ６Pit20（第57図）　調査区６－②ＳＨ239の南すぐ脇で検出された径0.５m、深さ0.５mのピットである。緑釉陶器の小片が出土しており、10世紀代の遺構であると思われる。

Ｔ６Pit20（遺物出土状況）



第57図　調査区６遺構平面図・断面図⑦（１：40）

（２）遺物

①竪穴建物出土遺物

ＳＨ237出土遺物（第58図324～333）　324～328は土師器である。324～327は甕である。いずれも６～７世紀に位置づけられるものと考えられる。324は頸部の破片で、口縁部にかけて緩やかに外反する。325は口縁部から頸部にかけての破片で、頸部は緩やかに湾曲する。口縁端部外面は面をなし、摘まみあげられている。内面にはハケが見られ、炭化物の付着が確認できる。326の頸部の屈曲は緩やかで広口の口縁部を持つ。器壁の厚さは一定である。327は口縁部片である。粘土紐の接合部で剥離している。口縁端部外面は面をなし、摘まみあげられている。328は甑または鍋の把手である。ユビナデ、ユビオサエで調整されるが、粘土が剥離した箇所が多くみられる。

また、図化できなかったが他にも土師器甕あるいは甑の体部片が２～４個体分出土した。体部外面のハケの細かさに差異はあるが、ほぼ同時期のものと考えられる。

329～333は須恵器である。いずれも陶邑編年ＴＫ10～ＴＫ43型式期に併行する可能性が高く、６世紀後半のものと思われる。329～331は坏蓋である。329の天井部外面にはロクロケズリが見られる。体

部は短く、天井部との境は緩やかに屈曲する。330の天井部外面にもロクロケズリが見られる。天井部と体部との境は屈曲し、明確な稜をなす。口縁端部はわずかに外反する。331の天井部外面にはロクロケズリを施した後に、不定方向の手持ちヘラケズリで調整される。体部はほぼ垂直に立ち上がり、天井部との境は屈曲して稜をなす。332・333は坏身である。332は底部外面にロクロケズリが見られる。333は底部外面にロクロケズリが見られる。受部が張り出し、たちあがりはやや内傾する。

ＳＨ239出土遺物（第58図334・335）　334は土師器壺あるいは甕である。頸部から口縁部にかけて器壁は厚く、内外面ともにハケを施している。口縁端部外面は面をなす。６世紀代のものと考えられる。

335は須恵器坏蓋の天井部の破片である。緩やかに内湾し、外面にはロクロケズリが見られる。６世紀後半のものと思われる。

ＳＨ240出土遺物（第58図336～339）　336～338は土師器である。336は埦である。体部は内湾して立ち上がる。口縁端部外面はヨコナデにより若干の面をなす。体部外面は橙色を呈し、粘土紐接合痕が見られる。６～７世紀代に位置づけられよう。337・338は甕である。337は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部は面をなし、わずかに摘まみあげられている。338は器壁が厚く、頸部は緩やかに屈曲する。口縁端部付近は強く外反し、端部は面をなす。いずれも６～７世紀代に位置づけられよう。

339は須恵器坏身である。ＳＨ237の坏身333より一回り小さい。底部外面をロクロケズリで調整し、底部と受部は一体的に成形されている。たちあがりは内傾すると思われるが、欠損のため高さは不明である。７世紀代のものと思われる。

ＳＫ241出土遺物（第58図341～344）　341・342は土師器である。341は坏である。器壁の厚さは一定で、内湾する体部は口縁部から外反する。９世紀代に位置づけられよう。342は甕である。頸部は大きく屈曲し、口縁部は外反して大きく広がる。器壁の厚さは一定で、口縁端部は面をなす。体部内面には粘土紐接合痕が見られる。７～８世紀前半のものと考えられる。

343・344は管状土錘である。どちらも折損しており全形は不明である。343の最大径は1.4cmで、やや細身のものである。344の最大径は0.9cmで、細身のものである。

また、他にも図化できなかったが別個体の土師器甕が２個体確認された。１点は大型の甕で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、外面には縦方向のハケが施されている。器高25cm以上、体部径約30cmで、長胴の印象を持つ。もう１点は明赤褐色の小型の甕で、体部外面には縦方向のハケが施されているが摩耗が激しい。いずれも７世紀～８世紀前半に位置づけられよう。

②土坑出土遺物

ＳＫ238出土遺物（第58図340）　340は土師器甕の口縁部の破片である。器壁は厚く、頸部は緩やかに屈曲する。口縁端部はナデにより面をなし、小さく摘まみあげられる。

他にも図化できなかったが、別個体の小型の甕も認められた。いずれも７～８世紀前半のものと考えられる。

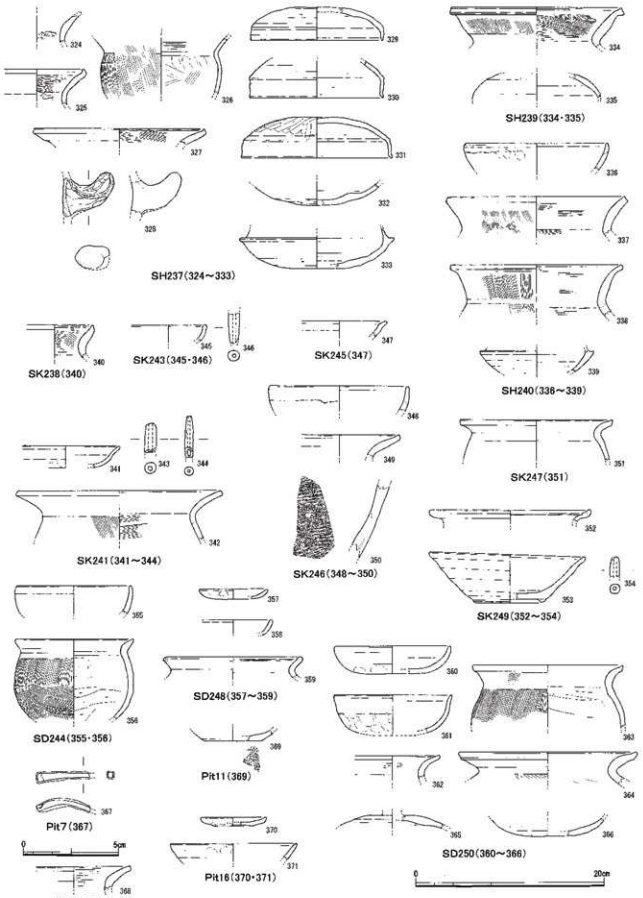
ＳＫ243出土遺物（第58図345・346）　345は土師器埦である。器壁の厚さは均一でヨコナデが施されている。体部は湾曲して立ち上がり、その端部は丸みを持ち肥厚する。６世紀代に位置づけられる可能性があろう。

346は管状土錘である。折損しており全形は不明である。最大径は1.2cmで、やや細身のものである。

ＳＫ245出土遺物（第58図347）　347は山茶碗の口縁部の破片である。口縁端部は強いナデにより外反する。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

ＳＫ246出土遺物（第58図348～350）　348・349は土師器である。いずれも７世紀代に位置づけられるものと考えられる。348は埦である。にぶい橙色を呈し、体部は内湾する。体部外面には粘土紐接合痕が見られる。349は甕である。口縁部は外反し、端部は面をなすが摩耗が著しい。

350は須恵器甕の体部の破片と思われる。内面にはユビナデが施され、当て具痕が消されている。外面には平行タタキの後にタテハケが施される。破断面には粘土紐接合痕が見られる。時期の比定は困難であるが、おそらく７世紀代のものであろう。



第58図　調査区６遺物実測図①（１：４、367は１：２）

ＳＫ247出土遺物（第58図351）　351は土師器甕である。頸部から口縁部にかけて器壁は厚く、口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をなし、摘まみあげられている。外面には縦方向のハケが見られるが摩耗が激しい。７世紀代に位置づけられよう。

ＳＫ249出土遺物（第58図352～354）　352は土師器鍋の口縁部片である。大きく外反した口縁端部は内側に折り返して肥厚する。13世紀代のものと考えられる。

353は山茶碗である。体部はまっすぐに開き、口縁端部はナデにより若干の面をなす。底部外面には糸切り痕、高台畳付には籾殻圧痕が見られる。13世紀代のものと考えられる。

354は管状土錘である。折損しており全形は不明である。最大径は１㎝で、やや細身のものである。

③溝出土遺物

ＳＤ244出土遺物（第58図355・356）　355・356は土師器である。355は碗である。橙色を呈し、体部は湾曲して立ち上がる。７世紀代のものと思われる。356は小型の甕である。全体的に器壁は厚めで、頸部から口縁部にかけてはさらに厚みを増す。頸部の屈曲は緩やかで、口縁端部は薄く面を持たない。体部外面には摩耗が著しい部分が見られる。７世紀代に位置づけられよう。

ＳＤ248出土遺物（第58図357～359）　357～359は土師器である。357は小皿である。内面にはユビナデ、外面にはユビナデ、ユビオサエが見られる。358は皿である。器壁は厚めで、底部と体部の境は屈曲し、体部がまっすぐにのびる。359は甕である。口縁端部は内側に折り返して丸く収める。10～11世紀代のものと考えられる。

ＳＤ250出土遺物（第58図360～366）　360～364は土師器である。360は坏である。器壁は厚く、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。７世紀代に位置づけられると思われる。361は碗である。にぶい橙色を呈し、体部は内湾し、口縁端部でわずかに外反する。７世紀代のものと考えられる。362～364は甕である。いずれも７世紀～８世紀前半のものと考えられる。362は口縁部片である。口縁端部は若干の面をなす。363の頸部は厚く緩やかに湾曲し、口縁端部はヨコナデにより面をなし、摘まみあげられる。364は頸部が大きく屈曲する。口縁端部はヨコナデにより面をなす。

365・366は須恵器である。365は坏蓋で、天井部外面中央には宝珠つまみの痕跡が見られる。366は坏身または坏蓋である。底部（天井部）外面にはロクロケズリによる調整が見られる。

④ピット出土遺物

Ｔ６Ｐｉｔ７出土遺物（第58図367）　367は中世の鉄釘である。透過Ｘ線写真からは釘の端部を折り返して頭部を成形している様子が認められた。断面は一辺0.3cmの方形を呈す。折損により先端部の形態は不明である。

Ｔ６Ｐｉｔ９出土遺物（第58図368）　368は土師器甕の口縁部の破片である。内面には横方向の粗いハケが残る。口縁端部は摩耗するが、面をなす。

Ｔ６Ｐｉｔ11出土遺物（第58図369）　369はロクロ土師器の小皿である。底部外面には糸切り痕が残る。12世紀代のものと考えられる。

Ｔ６Ｐｉｔ16出土遺物（第58図370・371）　370・371は土師器である。370は小皿である。器壁は厚く、底部外面のユビオサエが特徴的である。371は坏の口縁部片である。体部は口縁部に向かってまっすぐに開く。

Ｔ６Ｐｉｔ20出土遺物（第59図372）　372は緑釉陶器である。小碗であると思われる。釉は風化や摩耗によって部分的に剥離している。見込みには圏線が見られ、その外側にトチンの痕跡が１箇所見られる。高台端部は摩耗等により原形が分からない状態である。底部外面の施釉部分も摩耗による剥離が見られる。10世紀の東海産のものと考えられる。

Ｔ６Ｐｉｔ21出土遺物（第59図373）　373は土師器坏である。体部内面にはハケのような工具痕が、体部外面には粘土紐接合痕が見られる。

Ｔ６Ｐｉｔ22出土遺物（第59図374）　374は土師器坏である。器壁はやや厚めで、体部は底部との境から緩やかに内湾する。12～13世紀のものと考えられる。

Ｔ６Ｐｉｔ23出土遺物（第59図375）　375は土師器皿であると思われる。口縁端部外面はヨコナデにより面をなす。

Ｔ６Ｐｉｔ25出土遺物（第59図376）　376は土師器甕の口縁部片である。口縁部はやや内湾し、端部は丸

く収める。

Ｔ６Pit27（第59図377～381）　377～380は土師器小皿である。377・378は歪みが激しく不整形である。379の器壁の厚さは均一で口縁端部はやや肥厚する。380は器高が低く、口縁端部を薄く仕上げた浅い小皿である。

381は須恵器坏身または坏蓋である。天井部（底面）外面にはロクロケズリが見られる。

Ｔ６Pit33出土遺物（第59図382）　382は土師器塊または坏であると思われる。ヨコナデによって調整されるが、特に口縁部内面は強いヨコナデによりやや凹む。

⑤表土（第59図383）

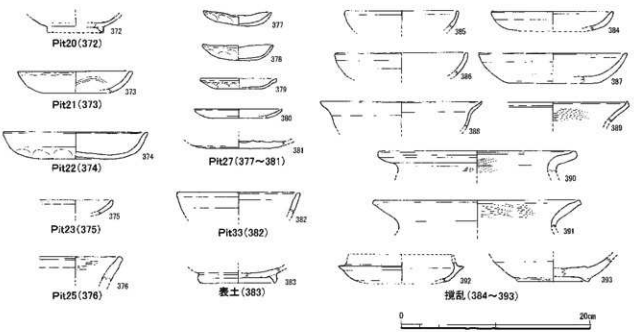
383は灰釉陶器碗と思われる。見込みおよび高台畳付には自然釉が見られる。底部外面にはロクロケズリが施され、三日月高台に近い三角高台を貼り付けている。９世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。

⑥撹乱（第59図384～393）

384～391は土師器である。384は皿である。器壁は厚めで、体部は緩やかに内湾する。385～387は坏である。385・386の体部は内湾して立ち上がる。387の底部は厚く、体部は緩やかに内湾する。388は鉢である。橙色を呈し、器壁は薄く均一である。体部は内湾するが中位で外反し、口縁部で再度内湾する。12世紀末に位置づけられるものと考えられる。389～391は甕である。389の器壁は薄く、まっすぐにのびた口縁端部はナデによって面をなし、摘まみあげられる。口縁端部内面にはうすく炭化物が付着している。390の器壁は肥厚し、頭部で大きく屈曲する。口縁端部は丸く収める。391は口縁部片である。頭部に比べ器壁はやや厚い。口縁端部は面をなす。

392は須恵器坏身である。底部外面にはロクロケズリが見られる。たちあがりは内傾するが、欠損している。６～７世紀代に位置づけられよう。

393は山茶碗である。底部は厚く、見込みと体部の境は屈曲する。体部はやや内湾する。底部外面には糸切り痕、高台畳付には籾殻圧痕が見られる。12世紀～13世紀前半に位置づけられよう。



第59図　調査区６遺物実測図②（１：４）

第４節　調査区７

（１）遺構

①竪穴建物

ＳＨ303（第61図）　調査区７－④南東部で検出された竪穴建物である。調査区両壁面にかかるため全体の形状は不明である。径3.6m以上、深さ約0.15mである。調査区東壁付近（ＳＨ303Pit１）および調査区中央に見られる２つのピットは、前者が長径0.5m、深さ0.4mで、後者が長径0.3m、深さ0.19mであり、主柱穴とも考えられる。他方、調査区東壁の土層断面にかかる大小２つのピットは、このＳＨ303が形成される以前のものである。埋土第４層が貼床に相当し、貼床構築後に掘り込まれたと考えられる壁際溝が建物東壁沿いに見られる（埋土第２・３層）。出土遺物は、ＳＨ303Pit１から土師器坏が、その他の遺構埋土から土師器片が出土したが、いずれも細片で図化できなかった。古代の遺物の可能性があるが、時期決定までは至らない。

②土坑

ＳＫ252（第62図）　調査区７－②北西端で検出された径約3.5m、深さ0.2mの浅い土坑である。埋土からは、土師器坏、灰釉陶器あるいは山茶碗と思われる陶器片が出土した。平安時代末～鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＫ253（第62図）　調査区７－②北西部のＳＫ252の南東すぐ脇で検出された径3.2m、深さ0.3mの不整形の土坑である。調査区両壁面にかかり、撹乱溝が遺構の中央を横切る。埋土の堆積状況から溝である可能性がある。埋土からは土師器片が出土したが、細片のため図化できなかった。詳しい時期については不明である。

ＳＫ254（第62図）　調査区７－②北西部のＳＫ253の南東脇で検出された径1.1m、深さ0.15mの土坑である。形状と埋土の堆積状況から溝である可能性もある。埋土からは灰釉陶器碗と青磁片が出土した。出土遺物の下限から鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＫ255（第62図）　調査区７－②北西部、ＳＫ254の南東側で検出された径４m、深さ0.6mの土坑である。形状と埋土の堆積状況から溝である可能性もある。遺構は北西部と南東部が深く掘り込まれており、北西部の掘り込みの方が古い。出土遺物についてはやや時期幅があり、その下限から平安時代以降の遺構と考えられる。

ＳＫ256（第63図）　調査区７－②中央部で検出された径7.2m、深さ0.6mの大型の土坑である。形状と埋土の堆積状況から溝である可能性もある。遺構は東部が深く掘り込まれている。出土遺物から、室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ257（第63図）　調査区７－②南東部で検出された径約2.2m、深さ約0.6mの不整円形の土坑である。この辺りは遺構面の土質が他と異なり、未熟土である花崗岩バイラン土の上に遺構が形成されている。埋土からは多数の土師器、須恵器が出土しており、廃棄土坑であった可能性がある。出土遺物の下限から室町時代の遺構であると思われる。

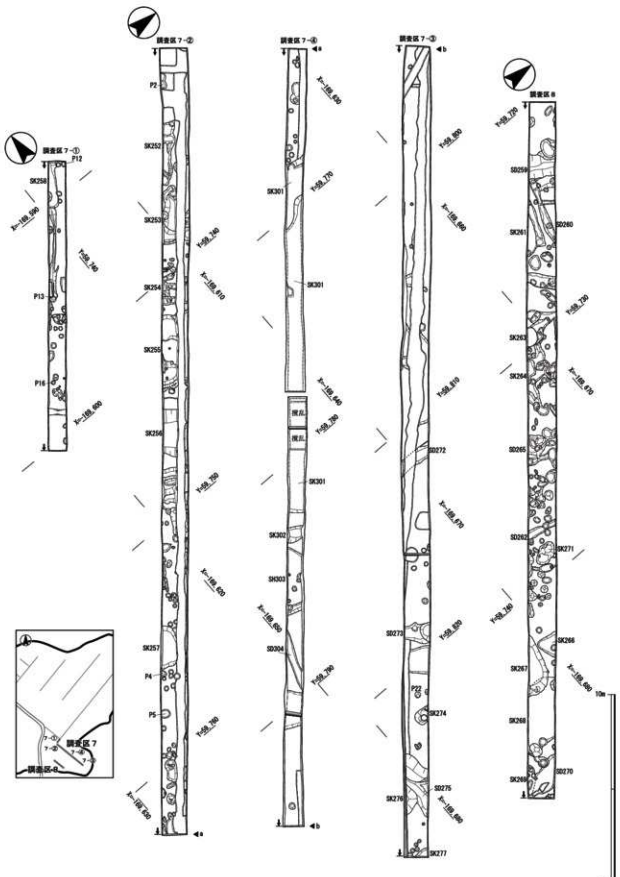
ＳＫ258（第63図）　調査区７－①北東端で調査区西・北壁にかかる形で検出された深さ約0.4mの土坑である。埋土からは土師器甕、須恵器坏身が出土しており、古墳時代～奈良時代前半の遺構と考えられる。

ＳＫ301（第60図）　調査区７－④北西部で検出された、長径約19m、深さ50cm以上の大型の土坑である。掘削深度を超えるため完掘できなかった。遺構の中央には、排水管設置のための撹乱溝が横切る。埋土には古代から近世までの遺物が混在し、近世の遺構または近代の撹乱坑と考えられる[1]。

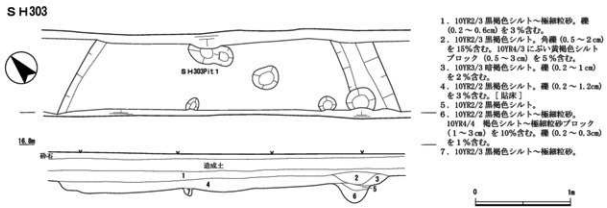
ＳＫ302（第63図）　調査区７－④中央部で検出された、径0.8m以上、深さ0.5mの土坑である。形状と埋土の堆積状況から溝の可能性がある。底面には被熱痕が残る。埋土からは14世紀代の土師器鍋が出土したが、細片のために図化できなかった。室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ274（第60図）　調査区７－③南東部で検出された、径0.8m以上の不整形な楕円形の土坑である。深さは約0.35mで、埋土は角礫を多く含む黒褐色粘質土の単一層で、土師器皿や鍋体部が出土した。室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ276（第64図）　調査区７－③南東部で検出さ



第60図　調査区７・８平面図（１：200）



第61図　調査区７遺構平面図・断面図①（１：40）

れた土坑である。台地の端部に向かって傾斜している地形の場所に形成された遺構で、溝ＳＤ275に切られる。調査区南壁にかかるため全体の形状は不明だが、径1.2m以上、深さ約0.8mが確認されている。埋土からは土師器甕片などが出土したが、細片のため図化できなかった。出土遺物から古代以降の遺構と考えられる。

ＳＫ277（第64図）　調査区７－③南東端で検出された土坑である。平面の形状は不明だが、深さは約0.8mと深く、側壁は垂直に立ち上がる。埋土からは土師器片、管状土錘が出土した。古代以降の遺構と考えられる。

③溝

ＳＤ304（第65図）　調査区７－④南東部で検出された東西方向にのびる溝である。幅は約0.4m、深さ約0.3mの遺構で、溝の中央に掘り直した痕跡が見られる。出土遺物から近世の遺構と考えられる。

ＳＤ272（第65図）　調査区７－③中央部で検出された南北方向にのびる溝で、撹乱溝が横切る。幅は0.6～0.8m、深さは約0.2mである。埋土からは13～14世紀代の土師器皿片が出土したが、細片のために図化できなかった。中世以降の遺構と考えられる。

ＳＤ273（第65図）　調査区７－③中央部で検出された北東－南西方向にのびる溝である。幅0.7～１mの遺構で、調査区北壁にかかる部分が深く掘り込まれている。深さは0.8mで、埋土から土器片が集中して出土した。土器が廃棄されたと推測される。埋土第４層からは多数の土師器小皿・坏が出土した。いずれも13世紀までに収まるものとみられる。第３層からは土師器鍋、土師器皿等が出土した。土器類の廃棄を２度に分けて行ったものと推測される。甑と思われる土師器は埋土に混入したものと思われ、鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＤ275（第65図）　調査区７－③南東端で検出された東西方向にのびる溝である。幅１～1.6m、幅約0.8mの遺構で、微傾地に形成され、古代の土坑ＳＫ276を切る。細片のために図化できなかったが、土師器片が出土した。古代以降の遺構と考えられるが、遺構の詳細な時期は不明である。

④ピット

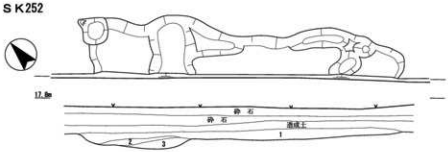
Ｔ７Pit12（第60図）　径0.3m、深さ0.3mのピットである。柱列や掘立柱建物の柱穴と考えられる。埋土からは灰釉陶器模倣のロクロ土師器[51]の碗が出土した。祭祀として柱抜き取り後にロクロ土師器碗入れた可能性が考えられる。出土遺物から10世紀後半～11世紀前半のものと推測される。

（２）遺物

①土坑出土遺物

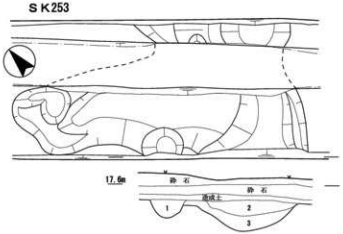
ＳＫ252出土遺物（第66図394）　394は土師器皿と

ＳＫ252



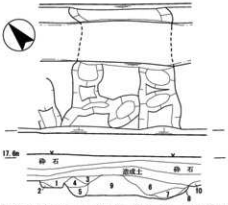
1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.4cm）を２％含む。土師器片を少量含む。
2．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（２～５cm）を 40％含む。礫（0.2～0.8cm）を１％含む。
3．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（１～３cm）を１％含む。

ＳＫ253



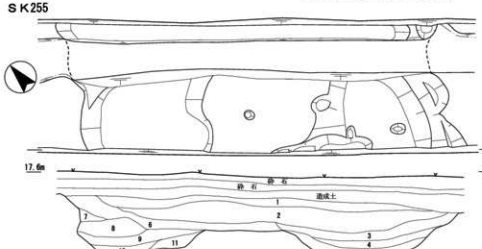
1．10YR2/3 黒褐色シルト。［ピット埋土］
2．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～1cm）を３％含む。土師器片を少量含む。［ＳＫ253 埋土］
3．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を１％含む。［ＳＫ253 埋土］

ＳＫ254



1．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を１％未満含む。［環埋土］
2．10YR2/1 黒色シルト。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（５cm）を 40％含む。［環埋土］
3．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を１％未満含む。土師器片を少量含む。
4．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.5～1cm）を 10％含む。
5．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（１～２cm）を 30％含む。
6．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（１～３cm）を 10％含む。
7．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.4cm）を１％含む。
8．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（１～３cm）を 20％含む。
9．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.6cm）を２％含む。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.2～0.3cm）を２％含む。
10．10YR2/1 黒色シルト。［ピット埋土］

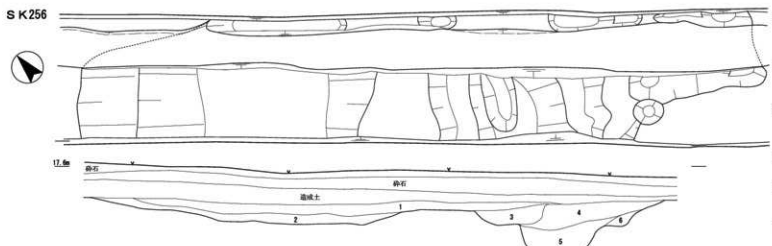
ＳＫ255



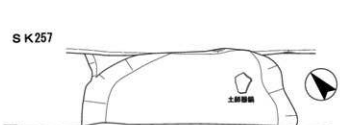
1．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～0.4cm）を１％含む。土師器片を少量含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.6cm）を２％含む。
3．10YR2/3 黒褐色シルト。礫（0.2～0.4cm）を１％含む。10YR3/4 暗褐色シルトブロック（0.3～0.5cm）を 10％含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト。
5．10YR2/1 黒色シルト。礫（0.2～1cm）を３％含む。
6．10YR2/3 黒褐色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（１～５cm）を 10％
7．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.2～0.3cm）を 10％含む。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.3cm）を１％未満含む。
8．10YR2/1 黒色シルト。土師器片を少量含む。
9．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（１～３cm）を 30％含む。
10．10YR2/1 黒色シルト。
11．10YR2/1 黒色シルト。10YR4/4 褐色シルトブロック（１～３cm）を 20％含む。

0　1m

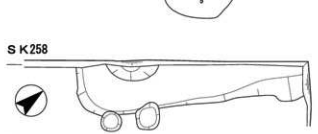
第62図　調査区７遺構平面図・断面図②（１：40）



1．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂ブロック（0.2～1cm）を 10%含む。礫（0.2～0.6cm）を 3%含む。
2．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂ブロック（1～3cm）を 10%含む。礫（0.2～3cm）を 5%含む。
3．10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂，10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂ブロック（0.3～0.5cm）を 1%含む。中礫岩（3cm）少量含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を 1%含む。
5・10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR3/3 暗褐色シルトブロック（～0.5cm）を 3%含む。礫（0.2～0.3cm）を 1%含む。
6．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.5cm）を 5%含む。



1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂，5YR4/8 赤褐色シルトブロック（0.2～0.3cm）を 1%含む。礫（0.2～0.3cm）を 1%含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR4/6 褐色シルト～粗粒砂ブロック（3～10cm）を 30%含む。5YR4/8 赤褐色シルトブロック（0.5 ～1.5cm）を 1%未満含む。
3．10YR2/1 黒色シルト～中粒砂，10YR4/6 褐色シルトブロック（3cm）を 1%未満含む。礫（0.2～1cm）を 10%含む。
4．10YR2/1 黒色シルト～極粗粒砂・10YR4/6 褐色シルトブロック（10cm）を少量含む。角礫（～3cm）を 30%含む。

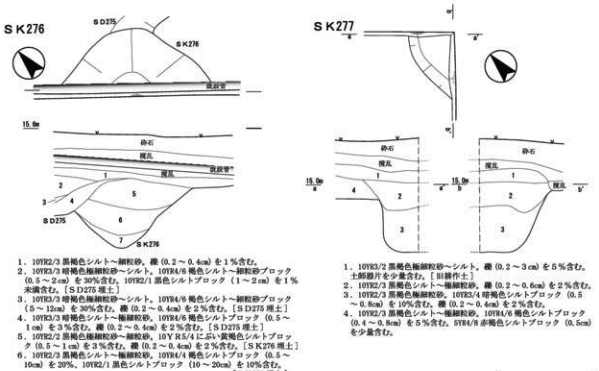


1．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR3/2 黒褐色シルトブロック（0.2～0.4cm）を 2%含む。礫（0.2～0.5cm）を 2%含む。土師器片を少量含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR2/2 黒褐色シルトブロック（0.2～0.3cm）を 10%含む。
3．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR3/4 暗褐色シルトブロック（5～8cm）を 20%、10YR3/2 黒褐色シルトブロック（0.2～0.4cm）を 10%含む。10YR2/1 黒色シルトブロック（1cm）と 5YR4/6 赤褐色シルトブロック（0.3cm）を少量含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR3/4 暗褐色～ 10YR4/6 褐色のシルトブロック（3～5cm）を 60%、10YR2/1 黒色シルトブロック（3～5cm）を 10%含む。

1．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.6cm）を 3%含む。
2．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を 1%含む。土師器片を少量含む。
3．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂，10YR4/4 褐色シルトブロック（1～2cm）を 10%含む。礫（0.2～2cm）を 2%含む。
4．10YR2/2 黒褐色シルト，礫（0.2～0.3cm）を 1%含む。土師器片を少量含む。
5．10YR2/2 黒褐色シルト，礫（0.2～0.4cm）を 1%含む。木炭粒（0.8～1cm）を 5%含む。土師器片を少量含む。

0　1m

第63図　調査区７遺構平面図・断面図③（１：40）



第64図　調査区７遺構平面図・断面図④（１：40）

思われる。口縁部の小片である。

図化できなかったが、灰釉陶器あるいは山茶碗と思われる陶器片も出土した。

ＳＫ254出土遺物（第66図395）　395は灰釉陶器皿であると考えられる。体部は口縁部に向かってまっすぐに開く。器壁には薄く施釉されている。９世紀後半のものである可能性が考えられる。

他にも、図化できなかったが青磁碗の体部片が出土した。体部外面には運弁文と思われる文様が施されており、13世紀代の龍泉窯のものと推測される。

ＳＫ255出土遺物（第66図396～401）　396～398は土師器甕である。396は頸部の湾曲が緩やかで、口縁部は上方に立ち上がる。口縁端部は内側に巻き込まれて丸く収まる。外面にはススの付着が確認できる。11～12世紀のものと考えられる。397の口縁部は外反し、口縁端部は内側に折り返されて丸く肥厚する。11～12世紀のものと考えられる。398は口縁部が外反し、口縁端部は面をなす。７～８世紀のものと思われる。

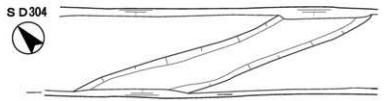
399・400は須恵器である。399は壺の頸部である。頸部内面の上部および外面には自然釉が付着する。時期は不明である。400は壺の底部と思われる。体部外面の下部にはロクロケズリが見られる。底部外面にはロクロナデが施され、断面が台形の高台が貼り付けられる。底部内面には自然釉が付着する。時期は不明である。

401は灰釉陶器段皿の底部片である。内外面とも体部下位まで施釉が見られる。細身ながら高めの輪高台を持つ。Ｏ53号窯式期に相当する10世紀代のものと推測される。

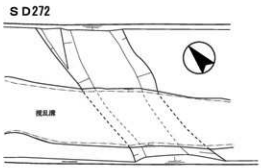
その他、図化できなかったが２点の灰釉陶器片が出土した。

ＳＫ256出土遺物（第66図402～405）　402・403は土師器鍋である。402は口縁部が大きく外反する。器壁の厚さは薄く均一で、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。13世紀代のものと思われる。403は器壁が薄く、口縁端部は内側に折り返され、摘まみあげるようにしてヨコナデされている。16世紀代のものと思われる。

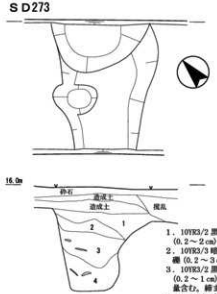
404は青磁碗である。体部は内湾することなくまっすぐにのび、体部内面には劃花文が施されている。13世紀の龍泉窯のものと思われる。



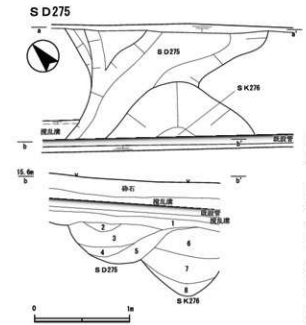
1．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.2～0.6cm）を3％含む。
2．10YR2/2 黒褐色シルト。礫（0.2～0.4cm）を3％含む。礫石（5cm）を1％未満含む。［S D304 埋土］
3．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（0.5～1cm）を3％含む。［S D304 埋土］
4．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/4 褐色シルトブロック（10cm）を10％含む。礫（0.2～0.6cm）を5％含む。［S D304 埋土］

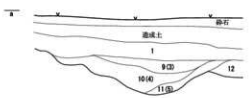


1．7.5YR3/1 黒褐色シルト。7.5YR4/3 褐色シルトブロック（3cm）を3％含む。
2．7.5YR2/2 黒褐色シルト。不定形の 10YR3/3 暗褐色シルトブロックを斑状に5％含む。



1．10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒砂。角礫（0.2～2cm）を30％含む。締まりやや弱い。
2．10YR3/3 暗褐色極細粒砂～極粗粒砂。角礫（0.2～3cm）を40％含む。締まり弱い。
3．10YR3/2 黒褐色極細粒砂～粗粒砂。角礫（0.2～1cm）を30％含む。土師器片を少量含む。締まりやや弱い。
4．10YR3/3 暗褐色極細粒砂～中粒砂。角礫（0.2～1.5cm）を20％含む。土師器片を少量含む。締まりやや弱い。





1．10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂。礫（0.2～0.4cm）を1％含む。［旧耕作土］
2．10YR3/2 黒褐色シルト。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（1～3cm）が散在。礫（0.2～0.6cm）を3％含む。［S D275 埋土］
3．10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルト。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～2cm）を30％含む。10YR2/1 黒色シルトブロック（1～2cm）を1％未満含む。［S D275 埋土］
4．10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルト。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（5～12cm）を30％含む。礫（0.2～0.4cm）を2％含む。［S D275 埋土］
5．10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を3％含む。礫（0.2～0.4cm）を2％含む。［S D275 埋土］
6．10YR2/2 黒褐色極細粒砂～細粒砂。10Y R5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（0.5～1cm）を3％含む。礫（0.2～0.6cm）を2％含む。［S K276 埋土］
7．10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/4 褐色シルトブロック（0.5～10cm）を20％、10YR2/1 黒色シルトブロック（10～20cm）を10％含む。［S K276 埋土］
8．10YR2/1 黒褐色シルト。礫（0.2～0.4cm）を1％未満含む。［S K276 埋土］
9．10YR2/3 黒褐色極細粒砂。礫（0.2～0.8cm）を3％含む。土師器片を少量含む。［S D275 埋土、第3層に相当］
10. 10YR3/4 暗褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.5～1cm）を3％含む。礫（0.2～0.4cm）を2％含む。［S D275 埋土、第4層に相当］
11. 10YR2/3 黒褐色極細粒砂～シルト。10YR4/6 褐色シルト～極細粒砂ブロック（1～2cm）を20％含む。礫（0.2～0.6cm）を1％含む。［S D275 埋土、第5層に相当］
12. 10YR3/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 褐色シルトブロック（0.4～0.8cm）を5％、10YR4/8 赤褐色シルトブロック（0.5cm程度）を少量含む。

第65図　調査区7遺構平面図・断面図⑤（1：40）

405は陶器甕と思われる。口径72cmのかなり大型のもので器壁も厚く、口縁端部は丸く仕上げられている。

ＳＫ257出土遺物（第66図406～413）　406～413は土師器である。406～411は小皿、412は皿である。406～408はほぼ同じ法量のもので、408のみ器壁が厚い。410～412は体部が内湾して立ち上がる。13世紀後半～14世紀前半のものと考えられる。413は鍋である。口縁端部は内側に折り返し強くナデ付けられ肥厚する。14世紀代のものと考えられる。

他にも、図化できなかったが古代の土師器甕片、須恵器甕片が出土した。

ＳＫ258出土遺物（第66図414・415）　414は土師器甕である。頸部はやや窄み、口縁部は大きく外反する。口縁端部は面をなし、摘まみあげられる。６～７世紀代のものと考えられる。

415は須恵器坏身である。底部外面には中心から受部方向に向かって「一」のような線刻が見られる。受部はやや端部が丸く、たちあがりは内傾する。口縁端部は丸く収められ、段は見られない。陶邑編年ＴＫ10型式期に併行するものと考えられ、６世紀中頃にあたるものと思われる。

他にも、図化できなかったが土師器甕の底部片が出土した。底部外面はヘラケズリの後ナデによって調整されており、７世紀～８世紀前半のものと推測される。

ＳＫ274出土遺物（第66図416）　416は土師器皿である。薄い器壁で、体部は湾曲して立ち上がる。13世紀代に位置づけられよう。

ＳＫ277出土遺物（第66図417）　417は管状土錘である。最大径は1.7cmで、端部が折損している。孔は中心からややずれている。

ＳＫ301出土遺物（第66図418～438、第67図439～441）

418はロクロ土師器皿と思われる。黄橙色を呈し、底部外面には糸切り痕が見られるが、ナデか摩耗のために不明瞭である。11世紀代に位置づけられよう。

419～438は土師器である。419は小皿である。口径に対して、器高が低い。420は皿である。薄い器壁で体部は湾曲して立ち上がる。13世紀代のものと考えられる。421・422は茶釜の口縁部片である。いずれも14世紀代のものである。421の口縁部はわずかに外傾し、口縁端部は内側に摘まみ出されて水平な面を持つ。422の口縁部はわずかに内傾し、口縁端部は外側に折り返されて水平な面を持つ。423～425は羽釜である。423は口縁部片で、口縁部は内傾し、口縁端部は外側に折り返されて水平な面を持つ。424と425は鍔部片で、破断面からは体部に貼り付けて成形された様子が観察できる。いずれも15～16世紀のものと考えられる。426～438は鍋である。13世紀代から16世紀代のものが混在する。430は体部に大きく外折した口縁部がつく。13世紀末～14世紀前半のものと考えられる。432は直立した体部に短く外折する口縁部が接続する。16世紀の南伊勢系土師器鍋に見られる半球形体部を持つ鍋であると考えられる。

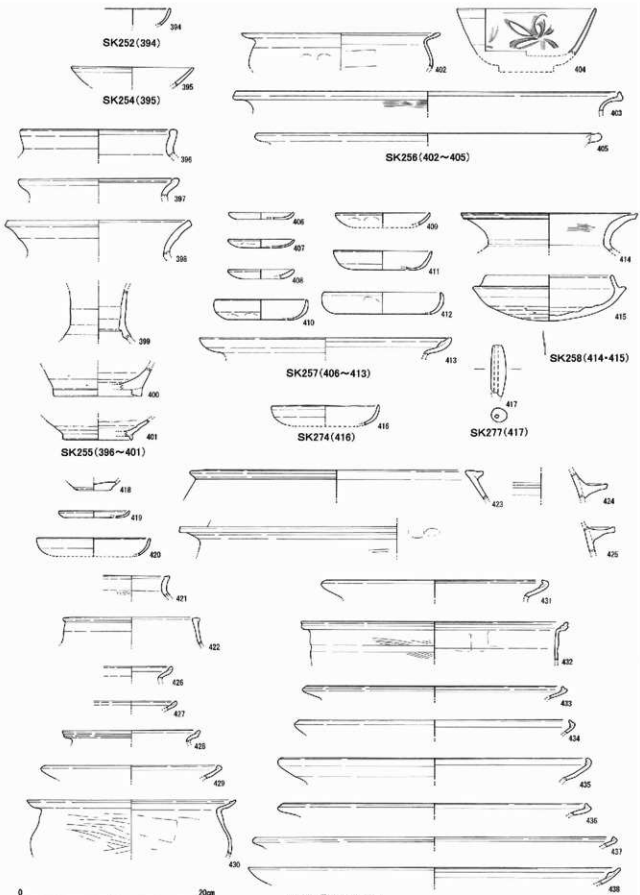
439は須恵器甕の体部である。内面には同心円状当て具痕、外面には擬格子タタキが見られる。

440は陶器甕である。外面は押印文が施されている。内面には粘土紐接合痕が見られる。12～13世紀のものである。

441は加工円盤である。近世の瀬戸産の陶器擂鉢を転用している。

②溝出土遺物

ＳＤ273出土遺物（第67図442～477）　442～477は土師器である。442～447は小皿または皿である。小片であるため口径が不明である。448～456は小皿である。いずれも口径８cm前後のよく似た法量のもので、白っぽい色調も共通している。457～473は皿である。体部は内湾して立ち上がるものが多い。463・464・467の外面には粘土紐接合痕が見られる。これら皿類は13世紀代のものと考えられる。474は土師器甑であろうか。体部はにぶい橙色を呈し、摩耗が著しい。475～477は鍋である。475は11～12世紀代の可能性が考えられ、476・477は13世紀代のものと考えられる。475はやや立ち上がり気味の口縁部を持ち、口縁端部は内側に折り返されて丸く収まる。外面にはススの付着が見られる。476は器壁が薄く、口縁端部は内側に折り返し強くナデ付けられて肥厚する。体部外面にはススの付着が見られる。477はやや大型で、体部は緩やかに立ち上がり大きく外反する口縁部と滑らかに接続する。口縁端部は内側に



第66図　調査区７遺物実測図①（１：４、405は１：８）

折り返し強くナデ付けられ肥厚する。

ＳＤ304出土遺物（第67図478～481）　478～480は中世南伊勢系土師器皿である。478は土師器小皿で、479・480は土師器皿である。

481は近世～近代の施釉陶器碗である。見込みには「信」という文字が見られる。高台は削り出されており、底部外面を除くすべての部位に施釉されている。

③ピット出土遺物

Ｔ７Pit２出土遺物（第67図482）　482は土師器小皿である。器高は低く、底部は厚い。

Ｔ７Pit４出土遺物（第67図483）　483は土師器皿である。体部は底部との境で屈曲して立ち上がる。底部は薄い。13世紀代のものと思われる。

Ｔ７Pit５出土遺物（第67図484）　484は土師器皿である。体部は緩やかに内湾して立ち上がる。13世紀代のものと思われる。

Ｔ７Pit12出土遺物（第67図485）　485は、灰釉陶器模倣のロクロ土師器碗である。器壁は薄く、極めて丁寧なつくりである。口縁部下のヨコナデが強く、２段階に内湾し、口縁端部はナデによりやや直立気味となる。底部外面は薄くヘラケズリした後に整った三日月形の高台が貼り付けられている。高台は1.2cmと高く、９世紀のＫ90号窯式のものによく似ている。類例の少ない形態であり、ロクロ土師器の生産・流通を考えるうえで重要な資料であるといえる（第Ⅶ章参照）。

Ｔ７Pit13出土遺物（第67図486）　486は土師器小皿である。器壁は厚く、口縁端部はヨコナデにより面をなす。外面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。

Ｔ７Pit16出土遺物（第68図487～489）　487・488は土師器である。487は小皿である。体部は緩やかに内湾する。13世紀代に位置づけられるものと思われる。488は鍋である。緩やかに立ち上がった体部に、大きく外反した口縁部がつく。口縁端部は内側に折り返しナデ付けられ肥厚する。13世紀代のものと考えられる。

489は青磁碗である。外面には鎬蓮弁文が施される。龍泉窯のもので13世紀中頃以降のものと考えられる。

Ｔ７Pit22出土遺物（第68図490）　490は土師器小皿である。体部と底部との境は緩やかに内湾する。

④撹乱（第68図491・492）

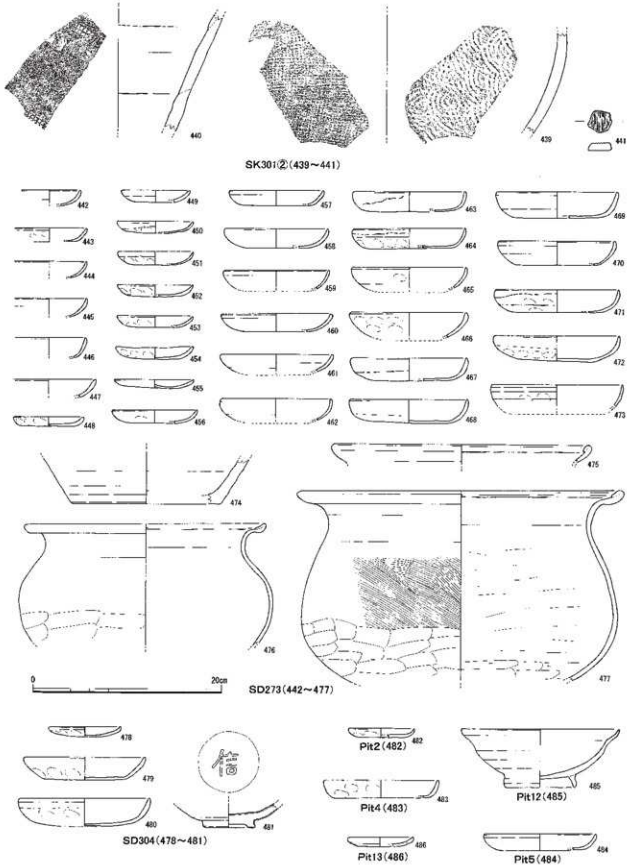
491は天目茶碗である。黒褐色の鉄釉が施されており、体部内面には重ね焼き時の窯道具痕が残る。

492は剝片である。灰色チャートの転石を素材としたもので、一部に自然面が残る。主剝離面には打点付近に二次加工痕らしい剝離も見られるが、側縁には調整は見られない。重量は31.48gである。

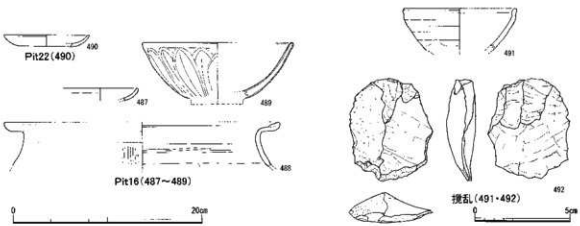
註

１）地元の人の話では、この辺りは壁土の素材として良質な粘質土が採取できる場所として知られており、昭和30年代まで各所に大きな穴が掘られていたという。いつの時期から採取が始まったのかは不明であるが、この遺構が19mもの規模を持つ理由が粘質土の採取であった可能性は高い。

２）こうした遺物は、土師質土器、須恵系土師質土器、回転台土師器とも称されるが、ここではロクロ土師器と呼ぶことにする。



第67図　調査区７遺物実測図②（１：４）



第68図　調査区７遺物実測図③（１：４、492は１：２）

第５節　調査区８

（１）遺構

①土坑

ＳＫ261（第69図）　調査区北西部で検出された長径３m以上、深さ0.15mの不整形な浅い土坑である。調査区壁面にかかるため全体の形状は不明である。平面では確認できなかったが、遺構北部には東西方向に溝状に掘り込まれた箇所が見られる。この掘り込みはＳＤ260と平行して形成されており、別遺構であった可能性も考えられる。遺構下の地山層は基本的には花崗岩バイラン土であるが、一部にラテライト性土壌に似た赤黄色土が見られた。埋土からは土師器片が数点出土したが、細片のため図化できなかった。鎌倉時代の遺構と思われる。

ＳＫ263（第69図）　調査区中央部で検出された径約１m、深さ約１mの土坑である。細片で図化できなかったが、埋土からは内面に黒色物が付着した山茶碗が認められた。鎌倉時代の遺構と考えられるが、性格は不明である。

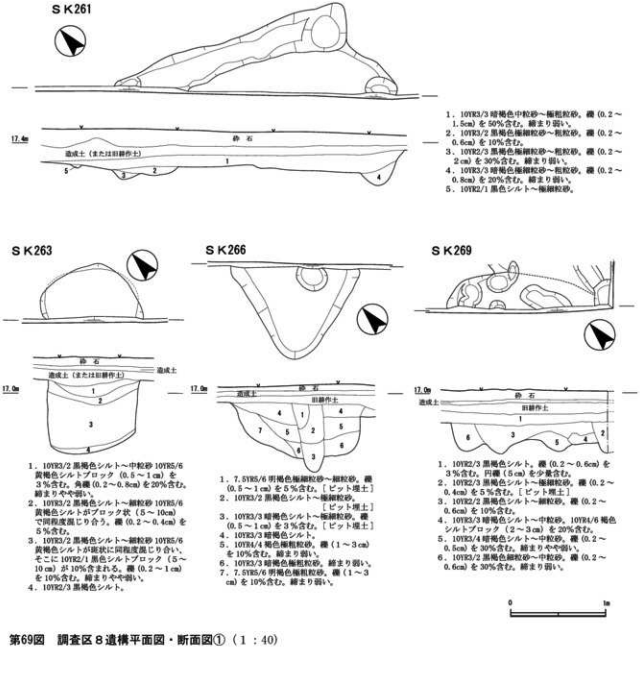
ＳＫ264（第60図）　調査区中央部で検出された径約3.8m、深さ0.1mの浅い土坑である。細片で図化できなかったが、埋土からは中世の土師器鍋の底部片、土師器皿が出土した。鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＫ266（第69図）　調査区の南東部で検出された径約１m、深さ0.5mの不整形な土坑である。この土坑が廃絶した後にＴ８Pit18が形成されている。埋土からは土師器鍋が出土しており、室町時代の遺構と考えられる。

ＳＫ267（第70図）　調査区南東部で検出された径約３m以上の土坑である。隅丸方形の様相を見せるが、遺構の大部分が調査区壁面にかかっているため全体の形状把握は難しい。近世土坑ＳＫ268に切られる。埋土からは土師器、山茶碗、青磁、天目茶碗などが出土したが、埋土への混入物として古墳時代の土師器高坏の脚部も認められた。室町時代の遺構であると考えられる。安全勾配を超えたため完掘できなかったが、井戸である可能性が高い。埋土中に見られる大～巨礫は井戸の石組みが崩れたものではないかと考えられる。

ＳＫ268（第70図）　ＳＫ267を切る形で検出された径３m以上の土坑である。調査区西壁面にかかる遺構で、溝である可能性も考えられる。下層には径0.1～0.4mの大礫から巨礫が多数確認された。これらの礫は、ＳＫ267に沿うように南北方向に並んでいる。出土遺物から近世の遺構であると考えられる。

ＳＫ269（第69図）　調査区の南東部に検出された径1.6m以上、深さ0.3mの土坑である。大部分が調査区北壁にかかっており、全体の形状は不明である。ＳＤ270との重複関係から、ＳＤ270の埋没後に形成された遺構とみられる。出土遺物としては13～14世紀代の土師器皿片があるが、細片であるために図化



第69図　調査区８遺構平面図・断面図①（１：40）

できなかった。中世の土坑であると考えられるが、詳細な時期は不明である。

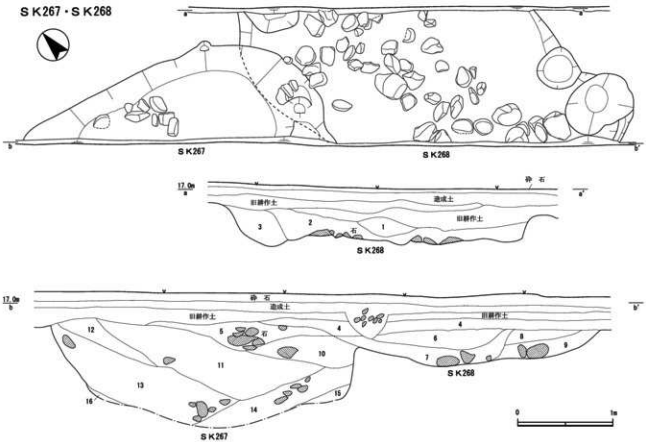
ＳＫ271（第60図）　調査区南東部で検出された径1.3m、深さ0.7mの不整円形の土坑である。埋土からは13～14世紀の土師器鍋の頸部が出土したが、細片のため図化できなかった。中世の土坑であると考えられるが、詳細な時期は不明である。

②溝

ＳＤ259（第71図）　調査区北西端で検出された北東－南西方向にのびる幅２m、深さ0.4mの溝である。ＳＤ260との重複関係から、ＳＤ260の埋没後に形成された遺構とみられる。埋土からは多数の遺物が出土し、瓦質土器の風炉、青磁、羽釜、擂鉢、鍋、山茶碗と多種である。こうした出土遺物からみて、室町時代の遺構であると思われる。

ＳＤ260（第71図）　調査区北西部、ＳＫ261に沿うような形で検出された東西にのびる幅0.5m、深さ0.2mの溝で、室町時代のＳＤ259に切られる形で形成されている。埋土からは土師器小皿、鍋が出土しており、鎌倉時代の溝であると考えられる。

ＳＤ262（第71図）　調査区の中央で検出された南北方向にのびる溝である。幅は0.4～0.5mであるが、



1．10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂。10YR6/4 にぶい黄橙色シルトブロック（3cm）を5％含む。［SK268 埋土］
2．10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（3～5cm）を3％含む。［SK268 埋土］
3．10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂。礫（5cm）を3％含む。［SK268 埋土］
4．10YR2/3 黒褐色シルト。礫（0.2～0.6cm）を3％含む。大円礫（5cm）を少量含む。［旧耕作土］
5．10YR3/3 暗褐色シルト～中粒砂。10YR4/4 褐色～10YR3/4 暗褐色シルト～中粒砂ブロック（0.2～2cm）を20％含む。大礫を含む。［撹乱］
6．10YR3/2 黒褐色シルト～中粒砂。礫（0.2～1.2cm）を10％含む。木炭粒（1.5cm）を少量含む。［SK268 埋土］
7．10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂。10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～2cm）を10％含む。礫（0.2～1cm）を20％含む。大礫を含む。［SK268 埋土］
8．10YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 褐色シルト～細粒砂ブロック（1cm）を3％含む。礫（0.2～0.5cm）を3％含む。［SK268 埋土］
9．10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂ブロック（～1cm）を5％含む。大礫を含む。［SK268 埋土］
10．10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂と 10YR2/1 黒色シルト～細粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～中粒砂が同程度ブロック状（2～3cm）に混じり合う。7.5YR5/8 明褐色極細粒砂～細粒砂ブロック（3cm）を1％未満含む。礫（0.2～2cm）を10％含む。大礫を含む。［SK267 埋土］
11．10YR2/1 黒色シルト。10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～2cm、礫混じり）を20％含む。礫（0.2～1cm）を3％含む。［SK267 埋土］
12．10YR2/3 黒褐色極細粒砂～中粒砂。10YR4/6 褐色と 10YR2/1 黒色が混じり合ったシルトブロック（1～2cm）を40％含む。［SK267 埋土］
13．10YR4/4 褐色シルト～細粒砂と 10YR2/1 黒色シルト～中粒砂が同程度ブロック状（2～3cm）で混じり合う。礫（0.5～2cm）を10％含む。大礫を含む。締まりやや弱い。［SK267 埋土］
14．10YR4/6 褐色細粒砂～中粒砂と 10YR2/1 黒色細粒砂～中粒砂が同程度斑状に混じり合う。大礫を含む。締まり弱い。［SK267 埋土］
15．10YR4/6 褐色中粒砂～粗粒砂。礫（0.2～0.4cm）を10％含む。締まり弱い。［SK267 埋土］
16．10YR3/4 暗褐色中粒砂～粗粒砂。締まり弱い。［SK267 埋土］

第70図　調査区８遺構平面図・断面図②（１：40）

深さが約0.05～0.12mと浅い。埋土からは土師器鍋が出土した。室町時代末～江戸時代前期の遺構であると考えられる。

ＳＤ265（第60図）　調査区の中央で検出された北東一南西方向にのびる幅１m、深さ0.15mの溝である。埋土からは土師器片が出土したが、細片のために図化できなかった。時期は不明である。

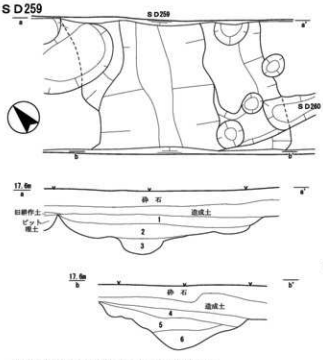
ＳＤ270（第71図）　調査区の南東端で検出された南北方向にのびる幅１mの溝である。埋土からは土師器片が出土したが細片で図化できなかった。ＳＫ268との重複関係から近世以前の遺構と考えられる。

（２）遺物

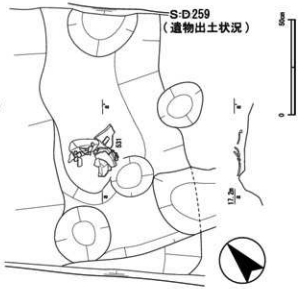
①土坑出土遺物

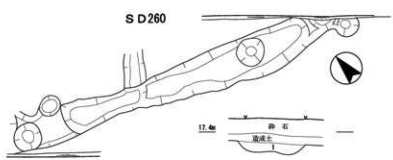
ＳＫ267出土遺物（第72図493～499）　493は弥生土器甕もしくは鉢の底部であると考えられる。体部内面はユビナデが確認できるが、外面は摩耗および剥離が著しく調整が確認できない。底部外面にはユビナデが見られる。

494～497は土師器である。494は高坏の脚部である。外面にはユビナデとユビオサエが、内面にはユビナデが施されている。６世紀代に位置づけられよ

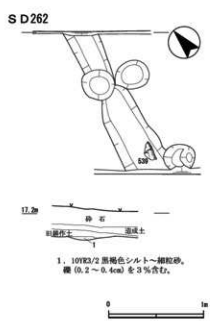


1．10YR2/2 黒褐色極細粒砂～中粒砂、10YR4/6 褐色シルトブロック（～1cm）を5％含む。礫（0.2～1.5cm）を30%含む。締まりやや弱い。
2．10YR2/2 黒褐色極細粒砂～中粒砂、10YR4/6 褐色～10YR8/3 にぶい黄褐色のシルトブロック（～3cm）を10%含む。礫（0.2～2cm）を10%含む。
3．10YR2/3 黒褐色シルト～中粒砂、10YR5/6 黄褐色シルトブロック（～2cm）を5％含む。締まりやや弱い。
4．10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂と 10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂がブロック状（5～10cm）で同程度混じり合う。角礫（0.2～2cm）を20%含む。締まりやや弱い。
5．10YR2/3 黒褐色極細粒砂～中粒砂、礫（0.2～3cm）を30%含む。締まり弱い。［2または3に相当か］
6．10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂、10YR4/4 褐色シルトブロック（2cm）を5％含む。礫（0.2～0.8cm）を5％含む。

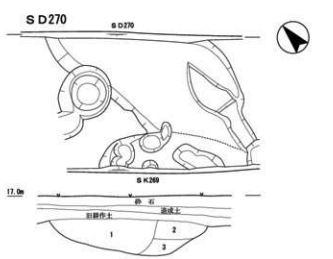




1．10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂。
礫（0.2～0.4cm）を5％含む。



1．10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂。
礫（0.2～0.6cm）を3％含む。



1．10YR3/3 暗褐色シルト。礫（0.5～1cm）を10%含む。
2．10YR3/4 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂。角礫（0.5～3cm）を50%含む。
3．10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂。角礫（0.5～3cm）を50%含む。

第71図　調査区８遺構平面図・断面図③（１：40、ＳＤ259遺物出土状況は１：20）

う。495は小皿である。器壁は厚く、摩耗が著しい。496は皿で、体部は内湾する。13世紀代のものと思われる。497は皿である。器高が低く、器壁は厚い。

498は山茶碗である。底部と体部との境は滑らかに接続し、底部外面には断面が台形の高台が貼り付けられている。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

499は天目茶碗である。内面はロクロナデが施され、外面にはロクロケズリが見られる。内外面ともに鉄釉が施されている。16世紀末の瀬戸・美濃産のものと思われる。

ＳＫ268出土遺物（第72図500）　500は擂鉢である。ロクロナデによって調整された体部の内面には、擂り目が見られる。内外面ともに灰色の泥漿が施されているものの、口縁端部は摩耗が激しく、素地が露出している。16世紀末の瀬戸・美濃産のものと思われる。

他にも、図化できなかったが近世の土師器鍋類、陶器、磁器が出土した。

②溝出土遺物

ＳＤ259出土遺物（第72図501～534、第72図535・536）

501～531は土師器である。501～503は小皿である。501の器壁は薄く、体部は緩やかに内湾する。502の器壁は厚く、口縁端部は丸く仕上げられている。口縁端部には内外面とも炭化物が付着している。503の器壁は薄く均一で、体部は平坦な底部との境から屈曲し、口縁端部に至るまで2段階に内湾している。16世紀前半に見られる形態の皿である。504は皿である。歪みが大きく、肥厚した体部には摩耗と剥離が見られる。505は鉢の底部であると考えられる。内外面のユビオサエが特徴的である。506は茶釜の蓋である。器壁は薄く均一であるものの、やや歪みが見られる。中央部を欠損しているため、摘まみの形態は不明である。14～15世紀代のものと考えられる。507～510は茶釜である。507は肩部から緩やかに屈曲し内傾する口縁部を持つ。口縁端部内面はヨコナデにより面をなす。508は肩部から大きく屈曲する口縁部を持ち、口縁端部をわずかに外反させている。509は外傾する口縁部を持ち、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。510は肩部から直立するように屈曲する口縁部を持つ。器壁は厚く、口縁端部は外側に折り返して摘まみあげられ、水平な面をなす。511は羽釜である。鍔は体部の上部に設けられ、鍔の直上に口縁部がつく。口縁端部は水平な面をなす。鍔の下面以下にススが確認できる。15～16世紀代に位置づけられると考えられる。512～531は鍋である。16世紀代のものがほとんどであるが、一部に13世紀代のもの（517・521）が混在する。522・523・531は半球形体部を持つ。16世紀代の南伊勢系土師器鍋であると考えられる。

532は山茶碗である。底部は厚く、底部外面には糸切り後にユビナデが施され、断面が台形の高台が貼り付けられる。13世紀代のものと考えられる。

533は近世の陶器碗または皿と思われる底部の破片である。高台は削り出されており、底部外面にも釉が施されている。施釉が厚く、一部は剥離している。加工円盤あるいは加工円盤の未完成品の可能性も考えられる。

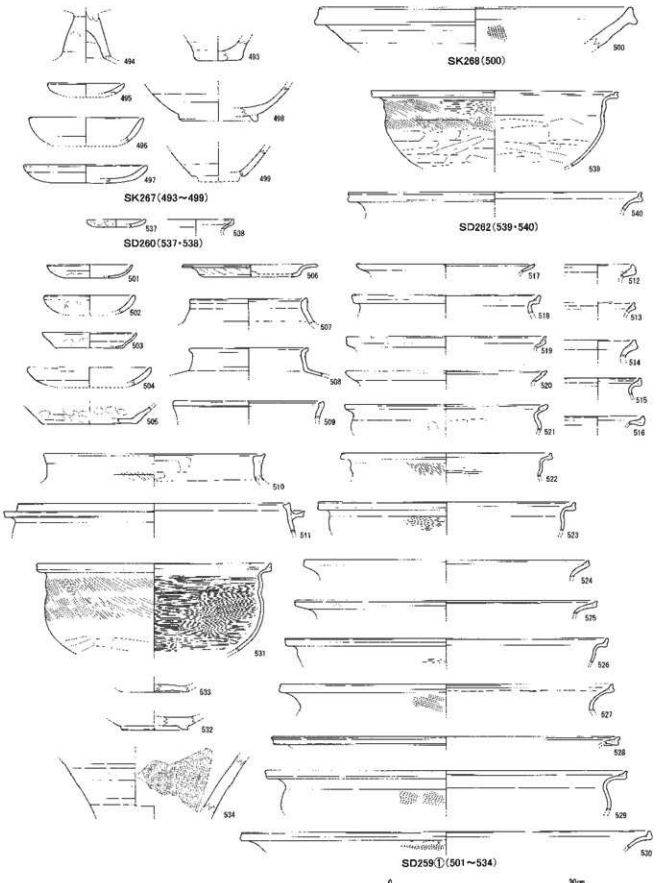
534は陶器擂鉢である。内面には擂り目が見られる。16世紀代の瀬戸・美濃産のものと思われる。

535は加工円盤である。近世の天目茶碗の底部が転用されたもので、高台は削り出されており、内外面には鉄釉が施されている。最大径4.4cmである。

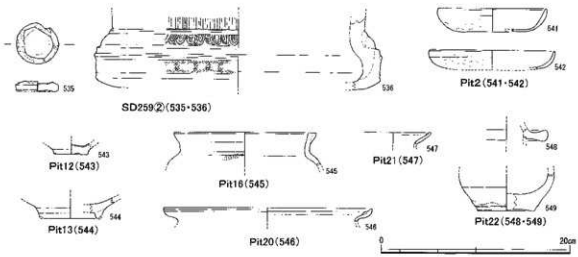
536は瓦質土器風炉である。胴から底にかけての破片が出土した。装飾の特徴としては、木枠型を使って施された連子文、スタンプによって施された花菱文・蓮弁文が見られ、大和産の瓦質土器と思われる。胎土はやや軟質でにぶい黄橙色を呈する。風炉の中でも手の込んだもので、奈良火鉢の発展期あたる15世紀前半に作られた可能性が高い[1][2][3]（第Ⅶ章参照）。

ＳＤ260出土遺物（第72図537・538）　537・538は土師器である。537は小皿である。口径が6.2cmと小皿の中でもかなり小さい。538は鍋である。器壁は薄く、口縁端部は内側に折り返し強くナデ付けられ、摘まみあげながらヨコナデされている。16世紀代のものと思われる。

ＳＤ262出土遺物（第72図539・540）　539・540は土師器鍋である。いずれも口縁端部は内側に折り返して摘まみあげられ、16世紀代の鍋の特徴を呈する。539は半球形体部を持つ南伊勢系土師器鍋である。



第72図　調査区８遺物実測図①（１：４）



第73図　調査区８遺物実測図②（１：４）

③ピット出土遺物

Ｔ８Pit２出土遺物（第73図541・542）　541は土師器皿、542は土師器坏である。いずれも底部から内湾して体部が立ち上がる。13世紀代のものと考えられる。

Ｔ８Pit12出土遺物（第73図543）　543は天目茶碗である。高台は削り出されており、底部外面には糸切り痕が残る。内面には鉄釉が施されている。加工円盤あるいは加工円盤の未完成品の可能性も考えられる。

Ｔ８Pit13出土遺物（第73図544）　544は山茶碗の底部片である。高めの高台が貼り付けられているが、高台畳付の部分が摩耗しており、本来の形状は不明である。12世紀～13世紀前半のものと考えられる。

Ｔ８Pit16出土遺物（第73図545）　545は茶釜である。あまり張らない肩部から口縁部が立ち上がる。口縁端部は外側に折り返され、上部には水平な面をもつ。

Ｔ８Pit20出土遺物（第73図546）　546は土師器鍋である。頸部で大きく屈曲し、口縁端部は内側に折り返し強くナデ付けられて肥厚する。13～14世紀代のものと考えられる。

Ｔ８Pit21出土遺物（第73図547）　547は土師器鍋の口縁部の破片である。口縁端部は内側に折り返されて丸く収まる。13世紀代のものと思われる。

Ｔ８Pit22出土遺物（第73図548・549）　548は土師器羽釜の鍔部片である。鍔の端部は肥厚させている。

549は陶器壺である。体部内外面には自然釉がかかる。削り出しによって低い高台が作られており、高台畳付付近には砂粒が付着する。16世紀後半のものと思われる。

註

1）水澤幸一2009「瓦器の相貌」『中近世土器の基礎研究22　瓦質土器の出現と定着』日本中世土器研究会

2）立石堅志ほか1995『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

3）近江俊秀1997「広域に流通した中世大和の土器　－大和産、大和系瓦質土器の分布について－」『中世土器の基礎研究 ＸⅡ』日本中世土器研究会

第３表　との山・アレキリ遺跡第２・３次調査出土遺物一覧表

【凡例】
※掲図番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。
※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。
※胎土・釉薬の色調は『新版　標準土色帖』に拠る。
※土器・陶器等の残存度については、復元される口縁部ないし底部を12分割したうちの残存度を記している。「小片」としたものは、細片のため残存度が示せなかったものである。

掲図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
208	002-06	5-③	SK210	土師器	甕	頸部径 16.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	頸部 1/12	
209	002-03	5-③	SK206	土師器	坏？	口径 13.0	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12	皿？
210	002-02	5-③	SK206	陶器	碗（山茶碗）	高台径 8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白2.5Y7/1	底部 4/12	灰釉陶器？
211	002-01	5-③	SK206	陶器	碗（山茶碗）	口径 15.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	褐灰10YR6/1	口縁部 1/12	
212	002-04	5-③	SK206	陶器	碗（山茶碗）	口径 16.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 1/12	
213	001-01	5-③	SK206	鉄製品	建具金物（受け金）	残存長 5.1			一部欠	
214	002-05	5-③	SK208	土師器	皿	—	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
215	002-07	5-③	SK211	土師器	皿	器高 1.8	外：ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
216	002-09	5-③	SK211	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	
217	002-08	5-③	SK211	陶器	碗（山茶碗）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白5Y7/1	口縁部 小片	
218	003-01	5-③	SK213	土師器	鍋	頸部径 24.0 体部径 26.6	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい褐7.5YR5/3	頸部 1/12	外面スス付着。内面炭化物付着
219	004-04	5-④	SK216	土師器	皿	口径 13.2 器高 2.7	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	橙5YR7/6	口縁部 8/12	
220	004-05	5-④	SK216	土師器	皿	口径 14.2 器高 2.7	外：工具ナデ・ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 10/12	底部外面に木の板の痕
221	004-02	5-④	SK216	土師器	鍋	口径 21.7	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	外面スス付着
222	004-03	5-④	SK216	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	
223	003-05	5-④	SK216	土師器	鍋	口径 21.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 4/12	外面スス付着
224	003-04	5-④	SK216	土師器	鍋	口径 22.5	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 5/12	歪みあり。外面スス付着
225	004-01	5-④	SK216	土師器	鍋	口径 28.8	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	外面スス付着
226	003-03	5-④	SK216	土師器	鍋	口径 37.0	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 4/12	
写真図版43	—	5-④	SK216	鉄滓		長さ 2.2 重量 3.9			完存	自然科学分析（第81図）
227	005-01	5-⑥	SK218	土師器	小皿	—	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 小片	
228	005-02	5-⑥	SK219	土師器	皿	—	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	
229	005-03	5-⑥	SK219	陶器	碗（山茶碗）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白10YR7/1	口縁部 小片	外面スス付着
230	005-04	5-⑥	SK221	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 小片	外面スス付着
231	005-05	5-⑥	SK226	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	
232	006-01	5-⑤	SK228	土師器	小皿	口径 8.8 器高 1.5	外：ユビオサエ 内：ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
233	005-06	5-⑤	SK228	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白N8/0	底部 1/12	
234	005-07	5-⑤	SK228	陶器	碗（山茶碗）	口径 16.1 器高 5.3 高台径 8.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白10YR7/1	底部 12/12	
235	006-02	5-⑤	SK229	土師器	皿	口径 12.4	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 2/12	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
236	006-03	5-⑤	SK229	陶器	碗（山茶碗）	口径 16.1 器高 5.3 高台径 7.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白N8/0	口縁部 4/12 底部 5/12	
237	006-04	5-⑤	SK229	銅製品	煙管雁首	残存長 3.8 最大径 1.3			一部欠	火皿を欠く
238	006-05	5-⑤	SK234	青磁	碗	—	外：ロクロナデ・鎬蓮弁文・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：灰白N8/0 釉：オリーブ灰5GY6/1	口縁部 小片	龍泉窯
239	007-01	5-⑦	SK236	土師器	甕	口径 23.4 器高 22.0 底径 13.4	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヘラケズリ・ヨコハケ・ヨコナデ 底：ヘラケズリ・ナデ	橙7.5YR6/6	口縁部 4/12 底部 5/12	
240	014-01	5-⑤	SK236	土師器	甕	口径 23.4 器高 28.9 底径 13.0	外：ヘラケズリ・タテハケ・ヨコナデ 内：ヘラケズリ・ナデ・工具ナデ・ヨコナデ 底：ヘラケズリ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 10/12 底部 10/12	
241	009-01	5-⑦	SK236	土師器	甕	口径 12.6 体部径 14.4 器高 14.8	外：ナナメハケ・タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内：ヘラケズリ・ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい橙5YR6/4	口縁部 9/12	被熱による器壁の荒れ、内面炭化物付着
242	009-02	5-⑦	SK236	土師器	甕	口径 13.0 体部径 17.2 器高 18.0	外：ナナメハケ・タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヘラケズリ・工具ナデ・ヨコナデ	にぶい橙5YR6/4	口縁部 11/12	底部外面ヘラ記号？ 内面炭化物付着
243	010-01	5-⑦	SK236	土師器	甕	口径 16.0 体部径 17.9 器高 19.3	外：ナナメハケ・タテハケ・ヨコナデ 内：オサエ・ヘラケズリ・ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12 体部 12/12	外面スス付着
244	006-06	5-⑦	SK236	土師器	甕	口径 18.0 頸部径 15.4	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
245	008-01	5-⑥	SK236	土師器	把手付鍋	口径 31.6 体部径 30.8 残存高 16.7	外：ナナメハケ・タテハケ・ヨコナデ 内：ヘラケズリ・ヨコハケ・ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 7/12	底部・体部に意図的な打ち欠きあり
246	012-01	5-⑥	SK236	土師器	長胴甕	口径 17.8 体部径 26.6 器高 39.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ナデ・ヘラケズリ・ヨコハケ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3 一部 灰黄褐10YR4/2	口縁部 12/12 体部 5/12	
247	011-01	5-⑦	SK236	土師器	長胴甕	口径 18.3 体部径 24.6 器高 35.5	外：ナナメハケ・タテハケ・ヨコナデ 内：ナデ・ヘラケズリ・ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 9/12 体部 5/12	
248	006-08	5-⑥	SK236	石製品	石鏃	長さ 1.5 幅 1.2 厚さ 0.25 重量 0.30	押圧剥離		完存	サヌカイト
249	006-07	5-⑦	SK236	石製品	剥片	長さ 3.7 幅 2.7 厚さ 0.5 重量 4.71			完存	チャート
250	015-01	5-①	SD201	陶器	碗（山茶碗）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白5Y7/1	口縁部 小片	
251	013-01	5-②	SD202	土師器	甕	口径 18.6 体部径 23.6	外：ナナメハケ・タテハケ・ヨコナデ 内：ヘラケズリ・ヨコハケ・ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部 11/12	外面にヘラ記号
252	015-02	5-③	SD205	土師器	皿	口径 11.2	外：ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
253	015-03	5-③	SD207	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.8	外：ロクロナデ 内：ナデ・ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白N8/0	底部 6/12	
254	015-04	5-③	SD209	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 小片	
255	015-07	5-③	SD209	須恵器	坏身？	屑部径 21.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰7.5Y5/1	屑部 2/12	坏蓋？
256	015-06	5-③	SD209	陶器	碗（山茶碗）	高台径 8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白N8/0	底部 1/12	
257	015-05	5-③	SD209	陶器	広口壺	口径 39.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	褐7.5YR4/3	口縁部 1/12	常滑産
258	015-08	5-④	SD215	土師器	皿	口径 11.4	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
259	015-09	5-⑥	SD220	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 小片	
260	015-10	5-⑥	SD220	陶器	壺	頸部径 8.0	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	浅黄2.5Y7/3	頸部 2/12	
261	016-01	5-⑥	SD222	陶器	碗（山茶碗）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	褐灰10YR6/1	口縁部 小片	
262	016-04	5-⑥	SD223	土師器	皿	口径 12.4 器高 1.7	外：ナデ？ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
263	016-03	5-⑥	SD223	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部小片	
264	016-02	5-⑥	SD223	土師器	羽釜	—	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ？	にぶい黄橙10YR7/4	鍔部小片	
265	016-05	5-⑥	SD223	陶器	椀（山茶椀）	高台径 8.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白2.5Y7/1	底部4/12	
写真図版47	—	5-⑥	SD223	青磁	椀	—	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・劃花文・施釉	胎：灰白7.5Y7/1 釉：オリーブ灰10Y6/2	体部小片	龍泉窯
266	016-07	5-⑥	SD225	土師器	鍋？	高台径 4.6	内：布目圧痕 底：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	底部12/12	台付皿？
267	016-06	5-⑥	SD225	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	
268	018-03	5-⑤	SD230	土師器	皿	口径 14.4 器高 2.0	外：ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部1/12	内外面スス付着
269	018-06	5-⑤	SD230	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰黄褐10YR5/2	口縁部小片	
270	019-03	5-⑤	SD230	土師器	鍋	口径 30.6	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	外面スス付着
271	019-02	5-⑤	SD230	土師器	鍋	口径 32.4	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	外面スス付着
272	016-10	5-⑤	SD230	陶器	椀（山茶椀）	高台径 8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白2.5Y8/1	底部3/12	
273	016-09	5-⑤	SD230	陶器	椀（山茶椀）	高台径 6.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白N8/0	底部8/12	
274	017-03	5-⑤	SD230	陶器	椀（山茶椀）	高台径 8.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・自然釉 底：糸切り・ナデ	灰白10YR7/1	底部3/12	
275	016-08	5-⑤	SD230	陶器	椀（山茶椀）	高台径 6.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰黄2.5Y6/2	底部12/12	
276	017-05	5-⑤	SD231	土師器	小皿	口径 10.0 器高 2.1	外：ナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部3/12	
277	018-01	5-⑤	SD231	土師器	小皿	口径 10.8 器高 2.5	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部5/12	
278	018-05	5-⑤	SD231	土師器	小皿	口径 11.8 器高 1.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12	
279	017-02	5-⑤	SD232	陶器	椀（山茶椀）	高台径 7.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	底部5/12	
280	018-07	5-⑤	SD232	土師質土器	目皿	—	表：ナデ・ヘラケズリ 裏：ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	一部欠	
281	017-01	5-②	TSPi12	陶器	椀（山茶椀）	高台径 7.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰黄2.5Y6/2	底部12/12	
282	019-01	5-②	TSPi12	瓦	平瓦	—	凹面：コビキ痕・布目 凸面：板ナデ	淡黄2.5Y8/3	小片	
283	018-04	5-③	TSPi13	土師器	小皿	口径 7.0 器高 0.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部5/12	
284	017-06	5-③	TSPi13	土師器	皿	口径 13.2	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	灰黄褐10YR5/2	口縁部8/12	
285	018-02	5-③	TSPi13	土師器	皿	口径 13.6 器高 2.4	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部4/12	
286	020-01	5-③	TSPi13	土師器	皿	口径 13.8 器高 2.6	外：ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部3/12	
287	017-04	5-③	TSPi13	陶器	椀（山茶椀）	高台径 4.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白10YR7/1	底部2/12	
288	022-01	5-③	TSPi13	陶器	椀（山茶椀）	口径 14.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y6/2	口縁部2/12	
289	021-03	5-③	TSPi13	陶器	椀（山茶椀）	口径 16.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/12	
290	020-02	5-③	TSPi14	土師器	小皿	口径 9.0 器高 1.3	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部1/12	
291	021-05	5-③	TSPi14	須恵器	甕	頸部径 26.0	外：擬格子タタキ・カキメ 内：同心円当て具痕	黄灰2.5Y5/1	頸部小片	
292	021-02	5-③	TSPi14	陶器	椀（山茶椀）	口径 17.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y6/1	口縁部2/12	
293	022-07	5-③	TSPi15	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部小片	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
294	021-04	5-③	T5Pit15	陶器	瓶（山茶瓶）	口径 15.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄褐10YR6/2	口縁部 3/12	外面重ね焼き痕あり
295	022-04	5-③	T5Pit16	土師器	鍋	口径 17.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	
296	001-02	5-③	T5Pit17	鉄製品	釘	残存長 3.0			先端部小片	
297	020-10	5-③	T5Pit18	土師器	小皿	口径 10.0 器高 1.1	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
298	020-04	5-③	T5Pit18	土師器	皿	口径 12.0 器高 2.3	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR6/6	口縁部 2/12	
299	022-03	5-③	T5Pit18	陶器	瓶（山茶瓶）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y6/2	口縁部小片	
300	020-08	5-③	T5Pit19	土師器	小皿	口径 7.0 器高 1.0	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部 2/12	歪みあり
301	022-02	5-③	T5Pit10	陶器	瓶（山茶瓶）	高台径 7.6	内：ロクロナデ 底：糸切り	灰黄2.5Y6/2	底部 3/12	
302	021-01	5-③	T5Pit16	石製品	砥石	—			一部欠	安山岩、被熱痕あり
303	022-05	5-④	T5Pit17	土師器	皿	—	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部小片	
304	020-07	5-④	T5Pit18	土師器	小皿	口径 8.0 器高 0.9	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	にぶい赤褐5YR5/4	口縁部 2/12	外面スス付着
305	020-03	5-④	T5Pit18	土師器	皿	口径 13.0 器高 2.3	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	
306	022-06	5-④	T5Pit18	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部小片	外面スス付着
307	020-09	5-④	T5Pit19	土師器	皿	口径 10.0 器高 1.7	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部 2/12	
308	023-01	5-⑥	T5Pit22	土師器	小皿	口径 6.8 器高 1.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
309	020-06	5-⑥	T5Pit22	土師器	小皿	口径 7.0 器高 1.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	
310	020-05	5-⑥	T5Pit22	土師器	小皿	口径 9.0 器高 1.7	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
311	022-08	5-⑥	T5Pit22	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部小片	
312	023-02	5-⑥	T5Pit25	土師器	小皿	口径 8.0 器高 0.8	外：ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	淡橙5YR8/4	口縁部 1/12	
313	023-03	5-⑥	T5Pit28	陶器	瓶（山茶瓶）	口径 16.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白N8/0	口縁部 1/12	
314	023-04	5-⑥	T5Pit32	陶器	瓶（山茶瓶）	高台径 7.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白10YR8/2	底部 11/12	見込みスス付着
315	023-07	5-⑥	T5Pit34	土師器	小皿	口径 8.6 器高 1.7	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙7.5YR8/6	口縁部 9/12	内面に工具痕
316	023-05	5-⑥	T5Pit34	土師器	鍋	口径 27.6	外：ナデ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	
317	023-06	5-⑥	T5Pit34	陶器	瓶（山茶瓶）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白N8/0	口縁部小片	
318	024-01	5-⑤	T5Pit37	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部小片	
319	024-02	5-⑦	T5Pit40	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部小片	口縁端部欠損
320	024-03	5-⑦	T5Pit42	土師器	小皿	口径 7.8 器高 0.9	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
321	024-04	5	表採	土師器	甕？	—	外：ナデ・ユビオサエ	浅黄橙10YR8/3	把手	剥離あり、鍋？
322	024-06	5	表採	陶器	片口鉢（山茶瓶）	高台径 15.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰N6/1	底部 2/12	見込み摩耗激しい
323	024-05	5	表採	青磁	瓶	高台径 6.0	外：ロクロケズリ・施釉 内：ロクロナデ・施文・施釉	胎：灰白N7/0 釉：オリーブ灰2.5GY6/1	底部	龍泉窯
324	025-03	6-②	SH237	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部小片	
325	027-03	6-②	SH237	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部小片	第4層、内面炭化物付着
326	026-03	6-②	SH237	土師器	甕	頸部径 12.0 体部径 12.8	外：タテハケ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい赤褐5YR4/4	頸部 2/12	第11層
327	025-02	6-②	SH237	土師器	甕	口径 18.0	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12	粘土紐の継ぎ目で剥離
328	025-01	6-②	SH237	土師器	甕？	—	外：ナデ・ユビオサエ 内：タテハケ	灰白10YR8/2	把手	剥離あり、鍋？

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
329	025-04	6-②	SH237	須恵器	坏蓋	口径 14.0 器高 3.5	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y5/1	口縁部 1/12	
330	025-07	6-②	SH237	須恵器	坏蓋	口径 14.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y6/1	口縁部 1/12	
331	025-05	6-②	SH237	須恵器	坏蓋	口径 15.8 器高 4.3	外：ロクロナデ・ヘラケズリ 内：ロクロナデ	外：黄灰2.5Y6/1 内：黄灰2.5Y5/1	口縁部 1/12	第10層
332	025-06	6-②	SH237	須恵器	坏身	—	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ 底：ヘラ切り	外：赤灰2.5Y4/1 内：褐灰10YR4/1	底部 小片	
333	025-08	6-②	SH237	須恵器	坏身	受部径 16.4	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	灰5Y6/1	受部 2/12	第4層
334	026-01	6-②	SH239	土師器	壺？	口径 18.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：明赤褐5YR5/6	口縁部 2/12	褒？
335	026-04	6-②	SH239 P111	須恵器	坏蓋	肩部径 13.0	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	灰5Y6/1	天井部 1/12	
336	026-06	6-②	SH240 P111	土師器	甕	口径 15.0	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部 1/12	
337	027-02	6-②	SH240	土師器	甕	口径 18.6	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
338	026-02	6-②	SH240	土師器	甕	口径 18.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	
339	026-05	6-②	SH240 P111	須恵器	坏身	受部径 12.0	外：ロクロケズリ・ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰7.5Y5/1	受部 1/12	調査時はSH240ｐ1Aと呼称
340	027-04	6-②	SK238	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	灰黄褐10YR6/2	口縁部 小片	
341	028-01	6-②	SK241	土師器	坏	—	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部 小片	
342	027-01	6-②	SK241	土師器	甕	口径 22.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	
343	027-06	6-②	SK241	土製品	管状土錘	残存長 3.1 最大径 1.2	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	一部欠	
344	027-05	6-②	SK241	土製品	管状土錘	残存長 4.4 最大径 0.9	ナデ・ユビオサエ	浅黄橙10YR8/4	一部欠	
345	028-02	6-①	SK243	土師器	甕	—	外：ナデウ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙5YR7/6	口縁部 小片	
346	028-03	6-①	SK243	土製品	管状土錘	残存長 3.2 最大径 1.2	ナデ・ユビオサエ	にぶい黄橙10YR6/4	一部欠	
347	028-04	6-①	SK245	陶器	碗（山茶碗）	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1	口縁部 小片	
348	028-05	6-①	SK246	土師器	甕	口径 14.4	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙2.5YR7/4	口縁部 1/12	
349	028-06	6-①	SK246	土師器	甕	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 小片	
350	028-07	6-①	SK246	須恵器	甕	—	外：平行タタキ・タテハケ 内：ナデ	黒褐2.5Y3/1	体部 小片	
351	028-08	6-①	SK247	土師器	甕	口径 16.0	外：タテハケ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	灰褐7.5YR4/2	口縁部 1/12	
352	029-02	6-①	SK249	土師器	鍋	口径 16.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙2.5Y7/4	口縁部 2/12	
353	029-01	6-①	SK249	陶器	碗（山茶碗）	口径 16.4 器高 4.7 高台径 7.1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白5Y7/1	口縁部 7/12 底部 6/12	
354	029-03	6-①	SK249	土製品	管状土錘	残存長 2.1 最大径 1.0	ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	半欠	
355	029-05	6-①	SD244	土師器	甕	口径 12.0	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ	橙5YR6/6	口縁部 1/12	
356	029-04	6-①	SD244	土師器	甕	口径 12.3 体部径 12.5	外：ナナメハケ・タテハケ・ヨコナデ 内：ヘラケズリ・工具ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12 体部 3/12	
357	030-02	6-①	SD248	土師器	小皿	口径 7.0 器高 1.1	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
358	030-03	6-①	SD248	土師器	皿	—	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	橙5YR7/6	口縁部 小片	
359	030-01	6-①	SD248	土師器	甕	口径 14.3	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
360	031-02	6-①	SD250	土師器	坏	口径 12.0	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	撹乱溝より南側
361	030-05	6-①	SD250	土師器	甕	口径 12.2	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 4/12	撹乱溝より南側

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）		文様・調整	色調	残存度	備考
362	031–03	6–①	SD250	土師器	甕	–		外：タテハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：橙5YR7/6	口縁部 小片	攪乱溝より南側
363	031–01	6–①	SD250	土師器	甕	口径　15.8		外：ヨコナデ・タテハケ 内：ヨコナデ・工具ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	攪乱溝より南側 内面炭化物付着
364	030–04	6–①	SD250	土師器	甕	口径　18.6		外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12	攪乱溝より南側
365	031–04	6–①	SD250	須恵器	坏蓋	–		外：ロクロナデ・ロクロケズリ・ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白N8/0	天井部 小片	攪乱溝より南側
366	031–05	6–①	SD250	須恵器	坏身？	–		外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	外：灰白N8/0 内：灰白N7/0	底部 小片	坏蓋？ 攪乱溝より南側
367	001–03	6–②	T6P117	鉄製品	釘	残存長　2.8				一部欠	
368	031–06	6–②	T6P119	土師器	甕	–		外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 小片	
369	031–07	6–②	T6Pi111	ロクロ土師器	小皿	底径　6.0		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	浅黄橙10YR8/3	底部 1/12	
370	031–08	6–②	T6Pi116	土師器	小皿	口径　6.8 器高　0.95		外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
371	031–09	6–②	T6Pi116	土師器	坏	口径　13.2		外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
372	032–01	6–②	T6Pi120	緑釉陶器	椀	高台径　6.0		外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・圏線・施釉	胎：灰白2.5Y8/2 底部外面：橙7.5YR6/6 釉：緑	底部 1/12	トチン痕あり
373	032–02	6–②	T6Pi121	土師器	坏	口径　12.0		外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
374	032–03	6–①	T6Pi122	土師器	坏	口径　15.0 器高　2.9		外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3 灰黄褐10YR5/2	口縁部 3/12	
375	032–04	6–①	T6Pi123	土師器	皿	–		外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 小片	
376	032–05	6–①	T6Pi125	土師器	甕	–		外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 小片	
377	032–07	6–①	T6Pi127	土師器	小皿	口径　7.3 器高　2.0		外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	橙5YR7/6	口縁部 11/12	歪みあり
378	032–08	6–①	T6Pi127	土師器	小皿	口径　7.3 器高　1.7		外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	橙5YR7/6	口縁部 9/12	歪みあり
379	032–09	6–①	T6Pi127	土師器	小皿	口径　7.7 器高　1.0		外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	橙5YR7/6	口縁部 4/12	
380	033–08	6–①	T6Pi127	土師器	皿	口径　9.2 器高　1.0		外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	灰白2.5Y8/2	口縁部 1/12	
381	032–06	6–①	T6Pi127	須恵器	坏身？	底径　6.8		内：ロクロナデ 底：ロクロケズリ	灰N6/1	底部 6/12	坏蓋？
382	033–07	6–①	T6Pi133	土師器	鍋？	口径　13.0		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	坏？
383	033–02	6–②	表土	灰釉陶器	椀	高台径　7.8		内：ロクロナデ 底：ロクロケズリ	灰白10YR7/1	底部 2/12	
384	033–06	6–①	掘乱溝	土師器	皿	口径　12.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
385	033–05	6–①	掘乱溝	土師器	坏	口径　11.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
386	033–04	6–①	掘乱溝	土師器	坏	口径　13.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
387	034–05	6–①	掘乱溝	土師器	坏	口径　15.4 器高　3.3		外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
388	034–01	6–①	掘乱溝	土師器	鉢	口径　16.8		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	
389	034–04	6–①	掘乱溝	土師器	甕	–		外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 小片	内面炭化物付着
390	034–02	6–①	掘乱溝	土師器	甕	口径　20.4		外：ヨコハケ・ヨコナデ 内：ナナメハケ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
391	034–03	6–②	掘乱溝	土師器	甕	口径　21.6		外：ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
392	033–03	6–①	掘乱溝	須恵器	坏身	受部径　13.0		外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	褐灰10YR5/1	受部 1/12	
393	033–01	6–①	掘乱溝	陶器	椀（山茶椀）	高台径　7.2		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り	灰白10YR7/1	底部 3/12	
394	035–01	7–②	SK252	土師器	皿	–		外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 小片	
395	035–02	7–②	SK254	灰釉陶器	皿	口径　12.8		外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	灰白N8/0 灰N5/2.5Y5/1	口縁部 1/12	
396	035–04	7–②	SK255	土師器	甕	口径　16.2		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	外面スス付着
397	035–05	7–②	SK255	土師器	甕	口径　16.6		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
398	035-03	7-②	SK255	土師器	甕	口径 19.1	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	
399	035-08	7-②	SK255	須恵器	壺	頸部径 5.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1	頸部 3/12	
400	035-06	7-②	SK255	須恵器	壺	高台径 9.1	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ 底：ロクロナデ	灰白N8/0	底部 1/12	
401	035-07	7-②	SK255	灰釉陶器	段皿	高台径 7.0	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	灰白N8/0	底部 1/12	
402	036-01	7-②	SK256	土師器	鍋	口径 20.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	
403	036-02	7-②	SK256	土師器	鍋	口径 40.5	外：ヨコハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	
404	036-03	7-②	SK256	青磁	碗	口径 14.6	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・劃花文・施釉	胎：灰白N8/0 釉：オリーブ灰10Y6/2	口縁部 1/12	龍泉窯
405	036-04	7-②	SK256	陶器	甕	口径 72.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
406	037-02	7-②	SK257	土師器	小皿	口径 6.8 器高 0.7	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	
407	037-08	7-②	SK257	土師器	小皿	口径 7.0 器高 0.9	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
408	037-07	7-②	SK257	土師器	小皿	口径 7.0 器高 1.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
409	037-06	7-②	SK257	土師器	小皿	口径 10.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
410	037-04	7-②	SK257	土師器	小皿	口径 9.6 器高 2.1	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
411	037-03	7-②	SK257	土師器	小皿	口径 10.3 器高 2.0	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
412	037-05	7-②	SK257	土師器	皿	口径 12.3 器高 2.2	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
413	037-01	7-②	SK257	土師器	鍋	口径 26.4	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
414	038-02	7-①	SK258	土師器	甕	口径 18.6	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
415	038-01	7-①	SK258	須恵器	坏身	口径 13.2 受部径 15.7 器高 4.8	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ナデ・ロクロナデ	灰5Y4/1	受部 2/12	
416	038-03	7-③	SK274	土師器	皿	口径 11.2	外：ナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	
417	038-04	7-③	SK277	土製品	管状土錘	残存長 5.5 最大径 1.7	ナデ・ユビオサエ	にぶい橙7.5YR7/4	一部欠	
418	045-04	7-④	SK301	ロクロ土師器	皿	高台径 2.9	外：ロクロナデ・ナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	黄橙10YR8/6	底部 12/12	
419	046-02	7-④	SK301	土師器	小皿	口径 7.6 器高 0.7	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	灰黄褐10YR6/2	口縁部 1/12	
420	044-06	7-④	SK301	土師器	皿	口径 11.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
421	038-06	7-④	SK301	土師器	茶釜	—	外：ハケ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 小片	
422	040-05	7-④	SK301	土師器	茶釜	口径 13.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：橙7.5YR6/6	口縁部 1/12	
423	040-04	7-④	SK301	土師器	羽釜	口径 27.4	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
424	039-07	7-④	SK301	土師器	羽釜	—	外：ヨコナデ 内：ナデ・ユビオサエ	にぶい橙5YR7/4	鍔部 小片	
425	040-06	7-④	SK301	土師器	羽釜	鍔部径 45.8	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ナデ・ユビオサエ	にぶい黄橙10YR7/4	鍔部 1/12	
426	038-07	7-④	SK301	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 小片	外面スス付着
427	039-06	7-④	SK301	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	外面スス付着
428	038-05	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 14.4	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
429	038-08	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 18.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	外面スス付着
430	039-01	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 21.8 体部径 21.2	外：ヘラナデ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	外面スス付着
431	038-09	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 23.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	外面スス付着
432	039-05	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 28.0 体部径 26.2	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	外面スス付着
433	040-01	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 26.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	外面スス付着

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
434	040-02	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 28.5	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰褐7.5YR4/2	口縁部 1/12	外面スス付着
435	039-04	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 32.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	外面スス付着 内面炭化物付着
436	040-03	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 32.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	外面スス付着
437	039-03	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 37.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 1/12	外面スス付着
438	039-02	7-④	SK301	土師器	鍋	口径 39.1	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
439	041-01	7-④	SK301	須恵器	甕	—	外：撥格子タタキ 内：同心円当て具痕	灰N5/1	体部 小片	
440	046-01	7-④	SK301	陶器	甕	—	外：ロクロナデ・押印文・施釉 内：ロクロナデ・施釉	外：褐灰5YR4/1 内：にぶい黄褐10YR5/3	体部 小片	
441	045-05	7-④	SK301	陶器	加工円盤	最大径 2.5	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・櫛目・施釉	胎：にぶい黄橙10YR7/3 釉：灰褐5YR4/2	完存	瀬戸産描鉢転用
442	044-08	7-③	SD273	土師器	皿	—	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	第3層
443	049-02	7-③	SD273	土師器	皿	—	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 小片	第4層
444	044-07	7-③	SD273	土師器	皿	—	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	第3層
445	048-10	7-③	SD273	土師器	皿	—	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	第4層
446	048-09	7-③	SD273	土師器	皿	—	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 小片	第4層
447	049-01	7-③	SD273	土師器	皿	—	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 小片	
448	047-02	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 7.2 器高 1.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙7.5YR8/4 にぶい黄橙10YR7/2	完存	第4層、 外面スス付着？
449	044-05	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 7.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	第3層
450	047-09	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 7.8 器高 1.3	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 6/12	第4層
451	047-10	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 7.9 器高 1.4	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 5/12	
452	047-11	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 8.0 器高 1.3	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 4/12	第4層
453	049-03	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 8.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	第4層
454	047-03	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 8.0 器高 1.4	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 11/12	第4層
455	047-04	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 8.3 器高 1.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 9/12	第4層
456	048-08	7-③	SD273	土師器	小皿	口径 8.9 器高 1.9	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	第4層
457	048-04	7-③	SD273	土師器	皿	口径 9.9 器高 1.6	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	第4層
458	048-01	7-③	SD273	土師器	皿	口径 10.8 器高 2.6	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
459	045-03	7-③	SD273	土師器	皿	口径 11.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	第3層
460	048-07	7-③	SD273	土師器	皿	口径 11.4 器高 1.9	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	第4層
461	044-04	7-③	SD273	土師器	皿	口径 11.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	第3層
462	048-03	7-③	SD273	土師器	皿	口径 11.5	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	第4層
463	044-03	7-③	SD273	土師器	皿	口径 11.6	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	灰白2.5Y8/2	口縁部 2/12	第3層
464	047-08	7-③	SD273	土師器	皿	口径 11.7 器高 2.1	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	外：浅黄橙10YR8/4 内：浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	第4層
465	048-05	7-③	SD273	土師器	皿	口径 11.9	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	第4層
466	048-02	7-③	SD273	土師器	皿	口径 11.9	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12	第4層
467	044-02	7-③	SD273	土師器	皿	口径 12.1 器高 2.4	外：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 12/12	第4層
468	047-01	7-③	SD273	土師器	皿	口径 12.5 器高 2.6	外：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 9/12	第4層

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量(cm・g)	文様・調整	色調	残存度	備考
469	047-05	7-③	SD273	土師器	皿	口径 12.6 器高 2.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	第4層
470	047-07	7-③	SD273	土師器	皿	口径 12.2 器高 2.5	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
471	047-06	7-③	SD273	土師器	皿	口径 13.0 器高 2.4	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	第4層
472	044-01	7-③	SD273	土師器	皿	口径 13.2 器高 2.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 10/12	第4層
473	048-06	7-③	SD273	土師器	皿	口径 13.7	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	第4層
474	045-02	7-③	SD273	土師器	脚？	底部径 15.4	外：ヘラケズリ？ 内：工具ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	底部 1/12	第3層
475	045-01	7-③	SD273	土師器	鍋	口径 27.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	外面スス付着
476	043-01	7-③	SD273	土師器	鍋	口径 25.0	外：ヘラケズリ・ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 7/12	第3層、外面スス付着
477	042-01	7-③	SD273	土師器	鍋	口径 34.0	外：ヘラケズリ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヘラケズリ・工具ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 10/12	第3層、外面スス付着
478	049-05	7-④	SD304	土師器	小皿	口径 7.4 器高 1.1	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 7/12	
479	049-06	7-④	SD304	土師器	皿	口径 12.6 器高 2.5	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 4/12	
480	049-04	7-④	SD304	土師器	皿	口径 13.7 器高 3.0	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	
481	051-05	7-④	撹乱溝	陶器	碗	高台径 5.2	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・押印？・施釉 底：ロクロケズリ	胎：灰白2.5Y7/1 釉：灰オリーブ5Y5/3	底部 12/12	見込みに「信」の押印？
482	049-07	7-②	T7Pit2	土師器	小皿	口径 6.9 器高 1.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
483	049-08	7-②	T7Pit4	土師器	皿	口径 12.0 器高 1.9	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	
484	050-03	7-①	T7Pit15	土師器	皿	口径 11.8 器高 1.8	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
485	050-01	7-①	T7Pit12	ロクロ土師器	坏	口径 16.8 器高 6.2 高台径 7.2	外：ロクロケズリ・ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：ロクロケズリ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12 底部 7/12	
486	050-02	7-①	T7Pit13	土師器	小皿	口径 6.8 器高 1.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
487	051-02	7-①	T7Pit16	土師器	小皿	—	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 小片	
488	050-04	7-①	T7Pit16	土師器	鍋	口径 28.8	外：タテハケ・ヨコナデ 内：ケズリ？・ヨコナデ	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
489	051-01	7-①	T7Pit16	青磁	碗	口径 15.8	外：ロクロナデ・鎬蓮弁文・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：褐灰10YR6/1 釉：オリーブ灰10Y6/2	口縁部 2/12	線県窯
490	051-03	7-③	T7Pit22	土師器	小皿	口径 9.0	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
491	051-06	7-④	撹乱	陶器	天目茶碗	口径 11.6	外：ロクロナデ・ロクロケズリ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：灰白N8/0 釉：黒褐7.5YR3/2	口縁部 1/12	
492	051-04	7-③	撹乱溝	石製品	剥片	長さ 5.3 幅 4.4 厚さ 1.5 重量 31.48		灰10Y5/1 （灰白7.5Y8/1の長石の脈あり）	—	チャート
493	055-03	8	SK267	弥生土器？	甕？	底部径 4.4	外：不明 内：ナデ 底：ナデ	にぶい橙5YR6/4	底部 2/12	鉢？
494	055-01	8	SK267	土師器	高坏	—	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	橙7.5YR7/6	脚部 2/12	
495	055-05	8	SK267	土師器	小皿	土師器 8.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	
496	055-04	8	SK267	土師器	皿	口径 12.0	外：ナデ？・ヨコナデ 内：ヨコナデ	褐灰10YR5/1	口縁部 1/12	第2層
497	055-06	8	SK267	土師器	皿	口径 13.0 器高 1.9	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	
498	055-02	8	SK267	陶器	碗（山茶碗）	高台径 7.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量（cm・g）	文様・調整	色調	残存度	備考
499	055-07	8	SK267	陶器	天目茶碗	高台径 5.6	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉 底：ロクロケズリ	胎：にぶい黄橙10YR7/2 釉：褐7.5YR4/4	底部 3/12	瀬戸・美濃産
500	054-02	8	SK268	陶器	擂鉢	口径 33.0	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・擂り目・施釉	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	瀬戸・美濃産
501	058-06	8	SD259	土師器	小皿	口径 9.0 器高 1.4	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
502	058-07	8	SD259	土師器	小皿	口径 9.4	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12	
503	058-08	8	SD259	土師器	小皿	口径 9.8 器高 1.6 底径 7.0	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	底部 3/12	
504	058-03	8	SD259	土師器	皿	口径 12.8	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
505	058-05	8	SD259	土師器	鉢？	底部径 10.0	外：工具ナデ・ユビオサエ 内：ナデ・ユビオサエ 底：工具ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	底部 2/12	
506	058-04	8	SD259	土師器	茶釜蓋	口径 14.0 器高 1.3 底径 9.8	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 2/12	
507	057-03	8	SD259	土師器	茶釜	口径 12.3	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12	内外面炭化物付着
508	057-01	8	SD259	土師器	茶釜	口径 12.4	外：ナデウ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	灰白7.5YR8/2	口縁部 2/12	
509	058-02	8	SD259	土師器	茶釜	口径 15.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 1/12	
510	057-02	8	SD259	土師器	茶釜	口径 23.2	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
511	057-04	8	SD259	土師器	羽釜	口径 28.6 鍔部径 31.7	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	外面鍔以下スス付着
512	061-08	8	SD259	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	外面スス付着
513	062-03	8	SD259	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰黄褐10YR6/2	口縁部 小片	外面スス付着
514	062-01	8	SD259	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 小片	
515	056-06	8	SD259	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい褐7.5YR5/4	口縁部 小片	外面スス付着
516	057-05	8	SD259	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 小片	外面スス付着
517	056-04	8	SD259	土師器	鍋	口径 18.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	外面スス付着
518	056-02	8	SD259	土師器	鍋	口径 19.8	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	内外面スス付着
519	062-04	8	SD259	土師器	鍋	口径 21.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい褐7.5YR5/4	口縁部 1/12	外面スス付着
520	056-03	8	SD259	土師器	鍋	口径 21.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	外面スス付着
521	056-01	8	SD259	土師器	鍋	口径 21.2 体部径 20.1	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12	外面スス付着
522	053-03	8	SD259	土師器	鍋	口径 22.0	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 3/12	外面スス付着
523	054-03	8	SD259	土師器	鍋	口径 27.0 体部径 24.8	外：ヨコハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	外面スス付着
524	060-03	8	SD259	土師器	鍋	口径 30.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい橙7.5YR6/4 内：にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	
525	056-05	8	SD259	土師器	鍋	口径 31.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	外面スス付着
526	054-01	8	SD259	土師器	鍋	口径 34.0	外：ヨコハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12	外面スス付着
527	053-02	8	SD259	土師器	鍋	口径 35.0	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR5/3	口縁部 3/12	外面スス付着
528	058-01	8	SD259	土師器	鍋	口径 36.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	外面スス付着
529	052-02	8	SD259	土師器	鍋	口径 38.0 体部径 34.8	外：ナナメハケ・ナデ・ヨコナデ 内：工具ナデ・ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 2/12	外面スス付着
530	052-01	8	SD259	土師器	鍋	口径 43.0	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 2/12	内外面スス付着
531	052-03	8	SD259	土師器	鍋	口径 24.6 体部径 23.0	外：ケズリ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ヨコハケ・ヨコナデ	橙7.5YR6/6	口縁部 5/12	外面スス付着
532	059-01	8	SD259	陶器	甕（山茶碗）	高台径 7.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰黄褐10YR6/2	底部 4/12	
533	059-02	8	SD259	陶器	甕？	底径 6.0	内：ロクロナデ・施釉 底：ロクロケズリ・施釉	胎：にぶい黄橙10YR7/2 釉：灰白2.5Y8/2	底部 2/12	皿？

挿図番号	実測番号	調査区	出土遺構	種別	器種	法量(cm・g)	文様・調整	色調	残存度	備考
534	059-04	8	SD259	陶器	擂鉢	—	外：ロクロナデ・櫛り目・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：にぶい黄橙10YR7/4 釉：褐灰10YR4/1	体部 2/12	瀬戸・美濃産
535	059-03	8	SD259	陶器	加工円盤	長さ　4.4 底径　4.0	内：ロクロナデ・施釉 底：ロクロケズリ・施釉	胎：にぶい黄橙10YR7/3 釉：赤灰2.5Y5/1、黒N1.5/1	底部 7/12	天目茶碗転用
536	053-01	8	SD259	瓦質土器	風炉	底部径 30.0	外：連子文・花菱文・蕨手文 内：ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	底部 1/12	
写真図版60	—	8	SD259	青磁	碗	—	外：ロクロナデ・施釉 内：ロクロナデ・施釉	胎：灰黄2.5Y7/2 釉：オリーブ7.5Y5/2	体部 小片	
537	061-07	8	SD260	土師器	小皿	口径　6.2 器高　0.8	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
538	062-05	8	SD260	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：灰褐7.5YR4/2 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 小片	外面ス ス付着
539	060-01	8	SD262	土師器	鍋	口径　26.0 体部径 23.2	外：ケズリ・ナナメハケ・ヨコナデ 内：ケズリ・工具ナデ・ヨコナデ	外：黄灰2.5Y5/1 内：にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 6/12	
540	060-02	8	SD262	土師器	鍋	口径　31.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：褐灰7.5YR5/1 内：にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 1/12	
541	061-06	8	T8Pit2	土師器	皿	口径　11.4 器高　2.5	外：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	
542	061-05	8	T8Pit2	土師器	皿	口径　13.2	外：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙10YR8/3	口縁部 5/12	
543	061-02	8	T8Pit12	陶器	天目茶碗	高台径　3.4	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ・施釉 底：糸切り・ロクロケズリ	外：灰黄2.5Y7/2 内：褐灰7.5YR4/2	底部 7/12	
544	061-03	8	T8Pit13	陶器	碗（山茶碗）	高台径　5.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	黄灰2.5Y6/1	底部 2/12	
545	061-04	8	T8Pit16	土師器	茶釜	口径　15.0	外：ナナメハケ・ヨコナデ 内：ナデ？・ヨコナデ	にぶい橙5YR7/4	口縁部 1/12	
546	060-04	8	T8Pit20	土師器	鍋	口径　22.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	
547	062-02	8	T8Pit21	土師器	鍋	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 小片	外面ス ス付着
548	062-06	8	T8Pit22	土師器	羽釜	—	外：ナデ 内：ナデ	浅黄橙10YR8/3	鍔部 小片	
549	061-01	8	T8Pit22	陶器	壺	底径　6.0	外：ロクロナデ・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉 底：ロクロケズリ？	褐灰10YR6/1	底部 4/12	

第４表　との山・アレキリ遺跡第２・３次調査遺構一覧表

遺構名	種別	調査区	規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	時期	備考
ＳＤ201	溝	調査区Ｓ－①	1.0 × —	0.4	土師器、山茶椀、陶器	鎌倉時代	
ＳＤ202	溝	調査区Ｓ－②	0.8 × —	0.5	土師器	飛鳥時代～奈良時代前半	ＳＤ203を切る
ＳＤ203	溝	調査区Ｓ－②	0.6 × —	0.15	土師器	飛鳥時代～奈良時代前半	ＳＤ202に切られる
ＳＤ204	溝	調査区Ｓ－②	0.5 × —	0.17	山茶椀	鎌倉時代	ＴＳＰ114に切られる
ＳＤ205	溝	調査区Ｓ－③	0.5 × —	0.1	土師器	鎌倉時代	ＳＫ206を切る
ＳＫ206	土坑	調査区Ｓ－③	1.5 × —	0.6	土師器、山茶椀、建物金具	鎌倉時代	風倒木痕の可能性あり
ＳＤ207	溝	調査区Ｓ－③	0.9 × —	0.25	山茶椀	鎌倉時代	
ＳＫ208	土坑	調査区Ｓ－③	1.5以上 × —	0.2	土師器	平安時代	
ＳＤ209	溝	調査区Ｓ－③	0.8 × —	0.1	土師器、須恵器、山茶椀、陶器	鎌倉時代	ＴＳＰ116を切る
ＴＳＰ116	土坑	調査区Ｓ－③	2.0 × 0.8	0.4	磨石	縄文時代？	
ＳＨ210	竪穴建物	調査区Ｓ－③	2.8以上 × —	0.3	土師器	飛鳥時代～奈良時代	
ＳＫ211	土坑	調査区Ｓ－③	1.8以上 × —	0.55	土師器、山茶椀	鎌倉時代	
ＳＤ212	溝	調査区Ｓ－③	0.8～1.7 × —	0.1	土師器	時期不明	
ＳＫ213	土坑	調査区Ｓ－③	1.0 × —	0.25	土師器	鎌倉時代	
ＳＤ214	溝	調査区Ｓ－③	0.8 × —	0.5	土師器	鎌倉時代	
ＳＤ215	溝	調査区Ｓ－④	0.1～0.6 × —	0.4	土師器	鎌倉時代後期	
ＳＫ216	土坑	調査区Ｓ－④	1.2 × —	0.15	土師器	鎌倉時代後半	
ＳＤ217	溝	調査区Ｓ－⑥	0.8 × —	0.2	土師器、陶器	江戸時代	
ＳＫ218	土坑	調査区Ｓ－⑥	1.6 × —	0.1	土師器	平安時代末～鎌倉時代	
ＳＫ219	土坑	調査区Ｓ－⑥	1.4 × —	0.7	土師器、須恵器、山茶椀	鎌倉時代	
ＳＤ220	溝	調査区Ｓ－⑥	1.0 × —	0.2	土師器、灰釉陶器	室町時代	
ＳＫ221	土坑	調査区Ｓ－⑥	0.6 × —	0.35	土師器	室町時代	ＳＤ222を切る
ＳＤ222	溝	調査区Ｓ－⑥	0.4 × —	0.2	山茶椀	平安時代末～鎌倉時代	ＳＫ221に切られる
ＳＤ223	溝	調査区Ｓ－⑥	1.2 × —	0.35	土師器、山茶椀、青磁	鎌倉～室町時代	
ＳＤ224	溝	調査区Ｓ－⑥	1.2 × —	0.3	土師器、山茶椀	鎌倉～室町時代	ＳＤ225を切る
ＳＤ225	溝	調査区Ｓ－⑥	0.8以上 × —	0.15	土師器	鎌倉～室町時代	ＳＤ224に切られる
ＳＫ226	土坑	調査区Ｓ－⑦	1.1 × —	0.05	山茶椀	鎌倉時代以降	
ＳＤ227	溝	調査区Ｓ－⑤	1.0 × —	0.2	土師器	平安時代末～鎌倉時代	
ＳＫ228	土坑	調査区Ｓ－⑤	0.95 × —	0.35	土師器、山茶椀	鎌倉時代	
ＳＫ229	土坑	調査区Ｓ－⑤	1.0 × —	0.4	土師器、山茶椀、煙管	平安時代	ＳＤ230に切られる
ＳＤ230	溝	調査区Ｓ－⑤	0.6 × —	0.2	土師器、須恵器、山茶椀	鎌倉時代	ＳＫ229を切る
ＳＤ231	溝	調査区Ｓ－⑤	0.6 × —	0.3	土師器	室町時代	
ＳＤ232	溝	調査区Ｓ－⑤	0.8～1.2以上 × —	0.15	山茶椀、陶器	江戸時代	
ＳＫ233	土坑	調査区Ｓ－⑤	2.4 × —	0.1	土師器	時期不明	撹乱の可能性あり
ＳＫ234	土坑	調査区Ｓ－⑤	2.5 × —	0.1以下	青磁	鎌倉時代	
ＳＫ235	土坑	調査区Ｓ－⑤	1.6 × —	0.6	陶器、浮釘	近代	
ＳＫ236	土坑	調査区Ｓ－⑤⑥⑦	4.8 × —	0.55	土師器、石器、剥片	古墳時代後期～奈良時代前半	
ＳＨ237	竪穴建物	調査区Ｓ－②	3.6 × —	0.3	土師器、須恵器	古墳時代～飛鳥時代	
ＳＫ238	土坑	調査区Ｓ－②	2.2 × —	0.9	土師器	飛鳥時代～奈良時代前半	
ＳＨ239	竪穴建物	調査区Ｓ－②	4.8以上 × —	0.3	土師器、須恵器	古墳時代～飛鳥時代	
ＳＨ240	竪穴建物	調査区Ｓ－②	5.0以上 × 3.6以上	0.25	土師器、須恵器	古墳時代～飛鳥時代	
ＳＫ241	竪穴建物	調査区Ｓ－②	4.5 × 4.9	0.12	土師器、土錘	飛鳥時代～奈良時代前半	
ＳＫ242	土坑	調査区Ｓ－①	1.8以上 × —	0.3	土師器、須恵器、山茶椀	鎌倉時代	風倒木痕の可能性あり
ＳＫ243	土坑	調査区Ｓ－①	2.0以上 × —	0.3	土師器、土錘	古墳時代	
ＳＤ244	溝	調査区Ｓ－①	2.0× —	0.7	土師器	飛鳥時代	土坑の可能性あり
ＳＫ245	土坑	調査区Ｓ－①	1.4以上 × 1.0	0.45	土師器、山茶椀	鎌倉時代	
ＳＫ246	土坑	調査区Ｓ－①	2.6以上 × —	0.5	土師器、須恵器	古墳時代～飛鳥時代	ＳＫ247と接する
ＳＫ247	土坑	調査区Ｓ－①	1.8 × —	0.35	土師器	古墳時代～飛鳥時代	ＳＫ246と接する
ＳＤ248	溝	調査区Ｓ－①	1.0 × —	0.7	土師器	平安時代	
ＳＫ249	土坑	調査区Ｓ－①	1.8 × —	0.35	土師器、山茶椀	鎌倉時代	
ＳＤ250	溝	調査区Ｓ－①	4.0 × —	1.0	土師器、須恵器	飛鳥時代～奈良時代前半	２つの遺構の可能性も
ＳＤ251	溝	調査区Ｓ－①	6.6以上 × —	0.65	石	時期不明	竪穴建物の可能性あり
ＳＫ252	土坑	調査区Ｔ－②	3.5 × —	0.2	土師器、灰釉陶器（山茶椀）	平安時代末～鎌倉時代	
ＳＫ253	土坑	調査区Ｔ－②	3.2 × —	0.3	土師器	時期不明	溝の可能性あり
ＳＫ254	土坑	調査区Ｔ－②	1.1 × —	0.15	土師器、灰釉陶器、陶器、青磁	鎌倉時代	溝の可能性あり
ＳＫ255	土坑	調査区Ｔ－②	4.0 × —	0.6	土師器、須恵器、灰釉陶器	平安時代	
ＳＫ256	土坑	調査区Ｔ－②	7.2 × —	0.6	土師器、青磁、陶器	室町時代	
ＳＫ257	土坑	調査区Ｔ－②	2.2 × —	0.6	土師器、須恵器	室町時代	
ＳＫ258	土坑	調査区Ｔ－①	2.4以上 × —	0.4	土師器、須恵器	古墳時代～奈良時代前半	
ＳＤ259	溝	調査区Ｔ－①	2.0 × —	0.4	土師器、山茶椀、陶器、青磁	室町時代	
ＳＤ260	溝	調査区Ｓ－⑧	0.5 × —	0.2	土師器	鎌倉時代	
ＳＫ261	土坑	調査区Ｓ－⑧	3.0 × —	0.15	土師器	鎌倉時代	
ＳＤ262	溝	調査区Ｓ－⑧	0.5 × —	0.12	土師器	室町時代末～江戸時代前期	
ＳＫ263	土坑	調査区Ｓ－⑧	1.0 × —	1.0	山茶椀	鎌倉時代	
ＳＫ264	土坑	調査区Ｓ－⑧	3.8 × —	0.4	土師器	鎌倉時代	
ＳＤ265	溝	調査区Ｓ－⑧	1.0 × —	0.15	土師器	時期不明	
ＳＫ266	土坑	調査区Ｓ－⑧	1.0 × —	0.5	土師器	室町時代	
ＳＫ267	土坑	調査区Ｓ－⑧	3.0以上 × —	1.35以上	土師器、山茶椀、陶器、青磁	室町時代	井戸か、ＳＫ268に切られる
ＳＫ268	土坑	調査区Ｓ－⑧	3.0以上 × —	0.7	土師器、陶器、磁器	江戸時代	溝の可能性あり
ＳＫ269	土坑	調査区Ｓ－⑧	1.6以上 × —	0.3	土師器	中世	ＳＤ270を切る
ＳＤ270	溝	調査区Ｓ－⑧	1.0 × —	0.35	土師器	近世以前	ＳＫ268に切られる
ＳＫ271	土坑	調査区Ｓ－⑧	1.3 × 0.8	0.7	土師器	中世	
ＳＤ272	溝	調査区Ｔ－①	0.6～0.8 × —	0.2	土師器	中世以降	
ＳＤ273	溝	調査区Ｔ－②	0.7～1.0 × —	0.8	土師器、須恵器	鎌倉時代	
ＳＫ274	土坑	調査区Ｔ－③	0.8以上 × —	0.35	土師器	室町時代	
ＳＤ275	溝	調査区Ｔ－③	1.0～1.6 × —	0.8	土師器	古代以降	ＳＫ276を切る
ＳＫ276	土坑	調査区Ｔ－③	1.2以上 × —	0.8	土師器	古代以降	ＳＤ275に切られる
ＳＫ277	土坑	調査区Ｔ－③	0.8以上 × —	0.8	土師器、土錘	古代以降	
ＳＫ301	土坑	調査区Ｔ－④	19.0 × —	1.0以上	土師器、須恵器、陶器	近世以降	撹乱の可能性あり
ＳＫ302	土坑	調査区Ｔ－④	0.8 × —	0.5	土師器	室町時代	溝の可能性あり
ＳＨ303	竪穴建物	調査区Ｔ－④	3.6以上 × —	0.15	土師器	古代	
ＳＤ304	溝	調査区Ｔ－④	0.4 × —	0.3	土師器、陶器	近世	

※規模や深さについては代表的な数値を記入している。

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　分析の目的と分析方法

（１）分析の目的

との山・アレキリ遺跡の第１～３次発掘調査に伴って出土した遺物について自然科学分析を行った。今回行った分析は、主に蛍光Ｘ線分析による化学組成分析で、出土遺物の構成成分の定性・定量分析を実施することで出土遺物の性状を明らかにすることを目的とした。

なお、緑釉陶器および銭貨については、形状・技法・色調等の肉眼観察を中心とした同定が主になされてきたこともあり、これまで当センターにおける自然科学的な分析データは十分に蓄積されていない状況である。今回の分析によって得られたデータは、今後の調査・分析のデータと併せることで、産地同定や物品の流通に関する手がかりを得るための資料になると考えられる。

（２）分析方法

蛍光Ｘ線分析は、MieMu三重県総合博物館にて設置されている日立ハイテクサイエンス製のSEA1200VXを用いた。エネルギー分散型の高感度蛍光Ｘ線分析装置で、金属・ガラス・樹脂などの成分分析も可能な装置である。

管球ターゲット元素をロジウムRhとし、管電流を1,000μＡ、測定時間を45秒に固定した上で、フィルター、励起電圧等の条件を変えた４つの測定条件下で分析を行い、それらの結果をコンピュータ処理することによって元素定量値を得る方法をとっている。

第２節　分析結果および考察

（１）銭貨（遺物番号207）

蛍光Ｘ線分析箇所　第１次調査の前に行った分布調査によって表採された北宋の皇宋通宝である。今回の蛍光Ｘ線分析では、無文である銭背の緑青色部２箇所（分析No.１、No.２）、同じく背面の白色部１箇所（分析No.３）を分析した。

分析結果および考察　分析No.１～３の結果から、銅Cu・錫Sn・鉛Pbを主な成分とした銅・錫・鉛合金であることが分かった（第74～76図）。

基本的に、銅Cuと鉛Pbは比重・融点などの性質の違いから溶け合わないものとされ、合金には不向きな組み合わせである。また、鉛Pb単体をとってみても、その融点の低さから鋳造製品の仕上がりにバラつきが出やすいことが知られている。

今回の分析結果においても、鋳造時の素材のムラと思われる成分構成の差異が見られた。緑青色部の分析No.１とNo.２は、銅Cuが55～59%、鉛Pbが29～34%というように銅Cuが多く検出され、銅Cuが偏って存在する部位と言える。一方、白色部のNo.３は、銅Cu14%、鉛Pb73%の構成で、鉛Pbが偏って存在する部位と言える。

なお、この合金素材における鉛の混合比率に目を向けると、通常の渡来銭よりその比率が非常に高い点が指摘できる。一般的に、中国からもたらされた制銭の金属混合比率はおおむね銅Cu：錫Sn：鉛Pb＝７：１：２程度として認識されている[1]。また、皇宋通宝の蛍光Ｘ線分析による金属組成として、①銅Cu76.16%、錫Sn12.30%、鉛Pb11.07%、鉄0.15%、砒素0.00%②銅Cu68.44%、錫Sn14.12%、鉛Pb17.03%、鉄0.14%、砒素0.00%であるという分析データもある[2]。

外径は2.4cmで、その他の表面特徴も一般的な皇宋通宝と大差がないが、こうした組成分のデータと比較して、鉛Pbが非常に多く検出されていることに関して、この銭貨が模鋳銭である可能性についても否定できない[3]。

（2）煙管雁首（遺物番号237）

蛍光X線分析箇所　第2次調査において調査区5－⑤SK229より出土した煙管の雁首である。18世紀後半のものと考えられる。今回の蛍光X線分析では、煙草の脂の影響を受けにくい雁首外面中央の2箇所において分析した（分析No. 4、No. 5）。

分析結果および考察　分析No. 4・5の結果から、銅Cu約95%・亜鉛Zn約2%の比率で構成された真鍮であることが分かった（第77・78図）。亜鉛含有量が少なく銅の純度が高いこの材質は、やわらかく展延性に富む。この煙管雁首は叩き出し技法によって成形されたものであると考えられ、火皿や脂返しといった細かな部位の細工を可能にするため、展延性が高い高純度の真鍮素材が使われた、あるいは、仕上がりに赤みを持たせるために銅Cuの純度を高めたものと推測される。

（3）緑釉陶器（T6Pit20 遺物番号372）

蛍光X線分析箇所　との山・アレキリ遺跡第2次発掘調査において調査区6－②T6Pit20より出土した緑釉陶器片である。時期や産地については、小片のため比定が難しい。

今回の蛍光X線分析では、摩耗が激しく釉が遺存しない浅黄橙色の胎土部1箇所（分析No. 6）、厚く施釉されている1箇所（分析No. 7）を分析箇所とした。

調査結果および考察　施釉部である分析No. 7の結果から、緑釉の主成分は鉛Pbとケイ素Siで、微量元素としてヒ素As、鉄Fe、銅Cuを含むことが分かった（第79・80図）。分析結果には胎土部No. 6に含まれる硫黄S成分が検出されていないことから、X線分析の結果には施釉部を透過して得られた胎土部の成分は含まれていないことが分かる。

一方、胎土部である分析No. 6の結果から、ケイ素Siを主体としつつ鉄Fe12.43%、鉛Pb1.10%含まれていることが分かった。この鉄Feと鉛Pbの検出は、一般的な陶器の胎土でこれほど多く確認されることはなく、釉成分の影響が考えられる。肉眼では確認されなかったが、釉の超微細破片の付着・残留、もしくは胎土の吸水性由来による釉成分の含有が考えられる。

（4）鉄滓（SK216）

蛍光X線分析箇所　第2次調査において調査区5－⑤SK216より出土した質量3.90g、最大長2.2cmの小型の鉄滓である。全体的に黄灰色を呈し、表面には錆化した部分は見られない。着磁性は認められず、内部にまとまった鉄成分の存在は考えにくい。分析箇所は、凹凸の著しい表面の中でも極力平坦な箇所を選び、検出される成分に偏りがなくなるようX線が照射される範囲を広く設定（コリメータφ8.0mm）した（分析No. 8）。

分析結果および考察　分析No. 8の結果から、鉄Feが約50%を占め、その他カルシウムCaが約35%、カリウムKが約7%、チタンTiが約5%含まれていることが分かった（第81図）。

結果的には、この試料は①チタンTiを含む②ケイ素Siやアルミナ Alが検出されていない③カルシウムCaが多量に検出されるという3点で、一般的な鉄滓とは異なる遺物であることが分かった。

①からは、砂鉄が原料であると考えられる。砂鉄は花崗岩や橄欖岩に含まれるチタン磁鉄鉱であり、検出されたチタンTiは原料の砂鉄に由来するものと考えられる[4]。しかし、精錬鍛冶滓であれば、砂鉄を原料にしたものであってもチタン含有量は少なくなるため、この試料が精錬鍛冶滓であるとは考えにくい。

②については、炉や鍛冶場の付近でできた鉄滓であれば、通常、粘土や砂の混入によりケイ素Siやアルミナ Alが検出される。その点からも、鍛冶滓とは認めがたい。

③については、カルシウムCaが人為的に加えられた可能性は低く、鉱石や木炭灰から付加されたものと推測される。現代製鉄の視点から見ると、鉄鉱石から製錬・製鉄する際、酸化防止等のためにカルシウムCaを混入させることは可能である。その場合、熔鉱炉内の熔解鉄状に浮遊・分離してできるスラグ（鉱滓）であればカルシウムCaの高い含有も考えられる。しかし、大がかりな精錬・製鉄に関わる遺構や関係遺物はこの遺跡および周辺遺跡でも認められていないことから、精錬時のスラグであることも認

めがたい。

小型の試料1点のみの出土であるため関連の情報も乏しく、その性格に迫るまでには至らなかった[5]。

註

1）櫻木晋一2016『貨幣考古学の世界』　ニューサイエンス社

2）岩国市教育委員会2016『中津居館跡Ⅱ』

3）一般的に、模鋳銭は本物より一回り小さいが、そうしたサイズ差は認めがたい。

4）天辰正義ほか2017『たたら－日本古来の製鉄【増補改訂版】』JFE21世紀財団

5）鉄滓については、新日鉄住金テクノロジー㈱鈴木瑞穂氏のご教示を得た。鈴木氏によれば、原料系の考察に迫る貴重な鉄滓試料である可能性がある。

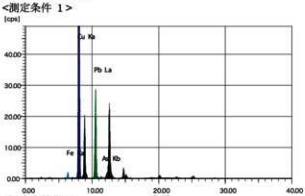
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 3/23 13:58
品名	との山遺跡
品番	銅銭①（遺物番号 207）
ﾛｯﾄ No.	
ｵﾍﾟﾚｰﾀ	
備考	

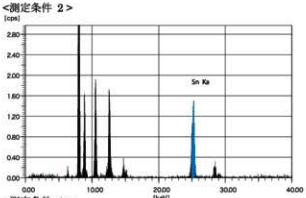
	測定条件 1	測定条件 2	測定条件 3	測定条件 4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	44	44	44	44
コリメータ	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	1000	1000	1000	1000
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

［X線スペクトル］

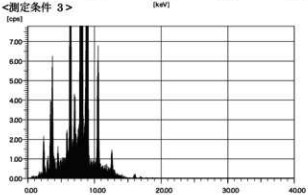
<測定条件 1>



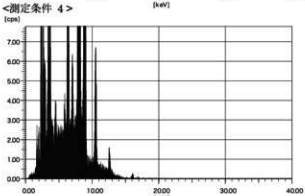
<測定条件 2>



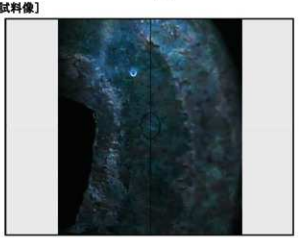
<測定条件 3>



<測定条件 4>



［試料像］



［定量結果］

Fe	1.68(wt%)	
Cu	59.44(wt%)	
As	0.71(wt%)	
Sn	9.48(wt%)	
Pb	28.69(wt%)	

第74図　蛍光Ｘ線分析結果①

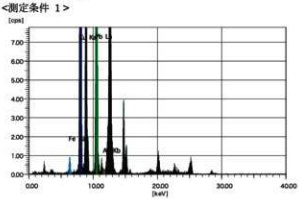
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 3/23 14:07
品名	との山遺跡
品番	銅銭②（遺物番号 207）
ロット No.	
オペレータ	
備考	

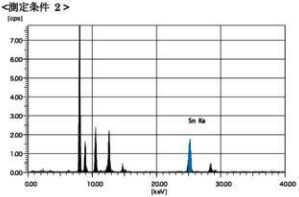
	測定条件1	測定条件2	測定条件3	測定条件4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	44	44	44	44
コリメータ	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	1000	1000	1000	1000
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

［X線スペクトル］

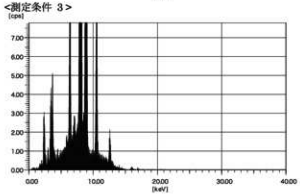
<測定条件 1>



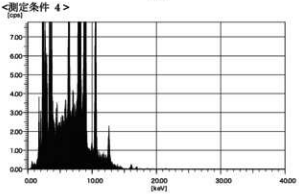
<測定条件 2>



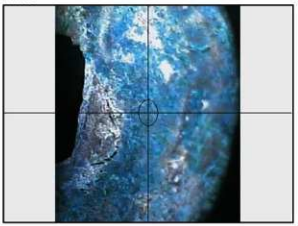
<測定条件 3>



<測定条件 4>



［試料像］



［定量結果］

Fe	0.64(wt%)	
Cu	54.33(wt%)	
As	0.78(wt%)	
Sn	10.63(wt%)	
Pb	33.62(wt%)	

第75図　蛍光X線分析結果②

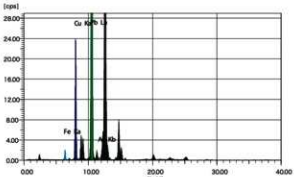
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 3/23 14:13
品名	との山遺跡
品番	銅銭③白色部（遺物番号 207）
ﾛｯﾄNo.	
ｵﾍﾟﾚｰﾀ	
備考	

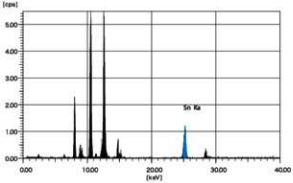
	測定条件1	測定条件2	測定条件3	測定条件4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	44	44	44	44
コリメータ	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	1000	1000	1000	1000
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

［X線スペクトル］

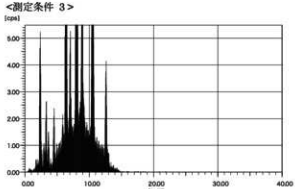
<測定条件 1>



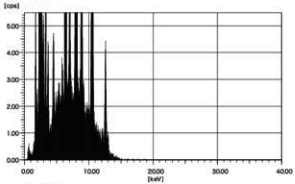
<測定条件 2>



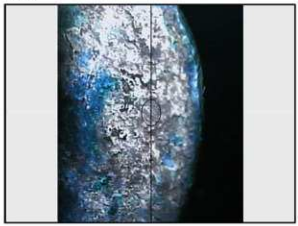
<測定条件 3>



<測定条件 4>



［試料像］



［定量結果］

Fe	2.71(wt%)	
Cu	14.01(wt%)	
As	1.22(wt%)	
Sn	9.46(wt%)	
Pb	72.60(wt%)	

第76図　蛍光X線分析結果③

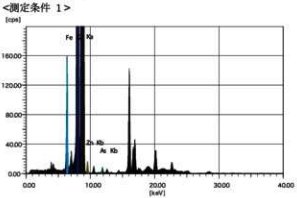
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 3/23 14:40
品名	アレキリ遺跡
品番	煙管①（SK229 遺物番号 237）
ロット No.	
ｵﾍﾟﾚｰﾀ	
備考	

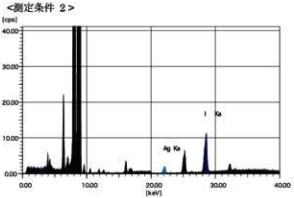
	測定条件1	測定条件2	測定条件3	測定条件4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	29	41	30	30
コリメータ	φ8.0mm	φ8.0mm	φ8.0mm	φ8.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	424	1000	186	152
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

［X線スペクトル］

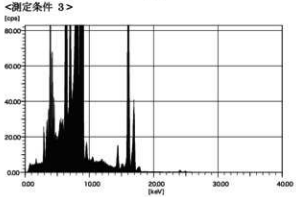
<測定条件 1>



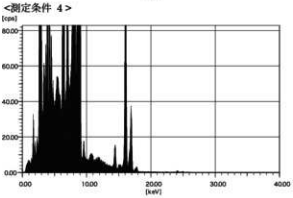
<測定条件 2>



<測定条件 3>



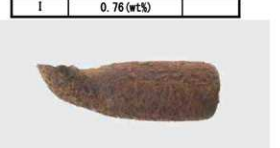
<測定条件 4>



［試料像］

［定量結果］

Fe	1.16(wt%)	
Cu	95.06(wt%)	
Zn	2.46(wt%)	
As	0.46(wt%)	
Ag	0.10(wt%)	
I	0.76(wt%)	



第77図　蛍光X線分析結果④

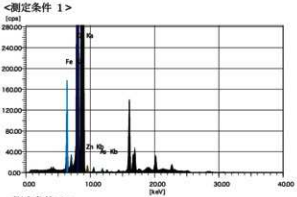
[測定条件]

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 3/23 14:50
品名	アレキリ遺跡
品番	煙管②（SK229 遺物番号 237）
ﾛｯﾄ No.	
ｵﾍﾟﾚｰﾀ	
備考	

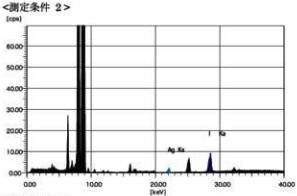
	測定条件 1	測定条件 2	測定条件 3	測定条件 4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	30	41	30	30
コリメータ	φ8.0mm	φ8.0mm	φ8.0mm	φ8.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	391	1000	177	145
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾟｰ	ｶﾊﾟｰ	ｶﾊﾟｰ	ｶﾊﾟｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

[Ｘ線スペクトル]

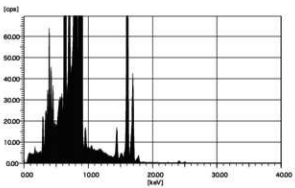
<測定条件 1>



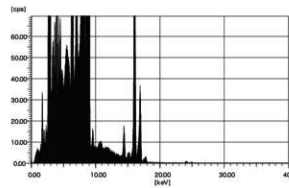
<測定条件 2>



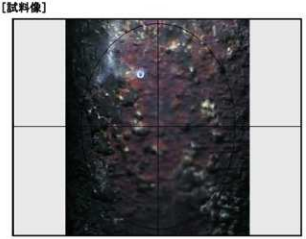
<測定条件 3>



<測定条件 4>



[試料像]



[定量結果]

Fe	1.26(wt%)	
Cu	95.56(wt%)	
Zn	2.12(wt%)	
As	0.39(wt%)	
Ag	0.09(wt%)	
I	0.58(wt%)	

第78図　蛍光Ｘ線分析結果⑤

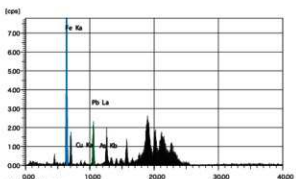
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 3/23 14:28
品名	アレキリ遺跡
品番	縁釉陶器①胎土 (T6Pit20 遺物番号372)
ﾛｯﾄNo.	
ｵﾍﾟﾚｰﾀ	
備考	

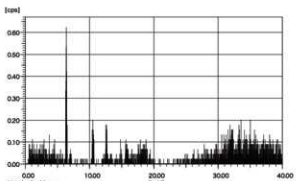
	測定条件1	測定条件2	測定条件3	測定条件4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	44	45	44	44
コリメータ	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	1000	1000	1000	1000
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

［Ｘ線スペクトル］

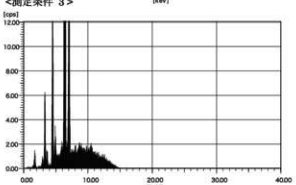
<測定条件 1>



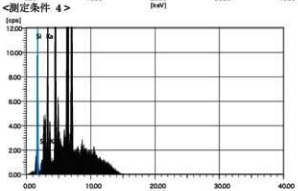
<測定条件 2>



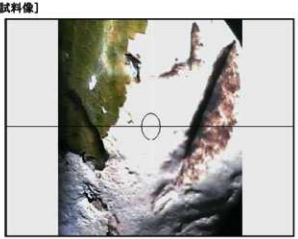
<測定条件 3>



<測定条件 4>



［試料像］



［定量結果］

Si	85.68(wt%)	
S	0.74(wt%)	
Fe	12.43(wt%)	
Cu	0.03(wt%)	
As	0.03(wt%)	
Pb	1.10(wt%)	

第79図　蛍光Ｘ線分析結果⑥

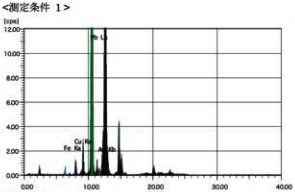
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 3/23 14:19
品名	アレキリ遺跡
品番	緑釉陶器②施釉部 (T6Pit20 遺物番号 372)
ロット No.	
オペレータ	
備考	

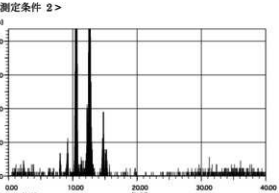
	測定条件 1	測定条件 2	測定条件 3	測定条件 4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	44	44	44	44
コリメータ	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	1000	1000	1000	1000
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

［Ｘ線スペクトル］

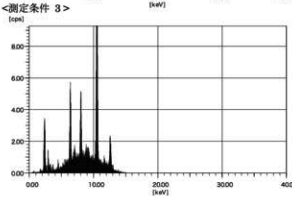
<測定条件 1>



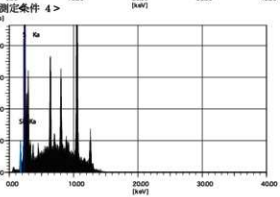
<測定条件 2>



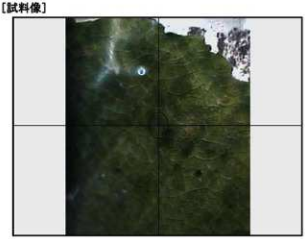
<測定条件 3>



<測定条件 4>



［試料像］



［定量結果］

Si	20.32(wt%)	
S	0.00(wt%)	
Fe	1.45(wt%)	
Cu	1.28(wt%)	
As	2.11(wt%)	
Pb	74.84(wt%)	

第80図　蛍光Ｘ線分析結果⑦

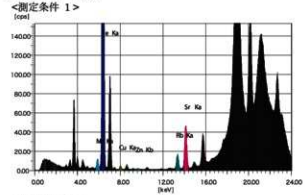
［測定条件］

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/ 4/12 14:13
品名	アレキリ 遺跡
品番	鉄滓 (SK216)
ロット No.	
オペレータ	
備考	

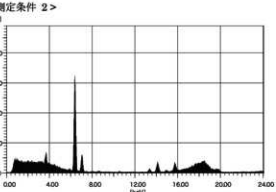
	測定条件 1	測定条件 2	測定条件 3	測定条件 4
測定時間（秒）	45	45	45	45
有効時間（秒）	38	43	31	30
コリメータ	φ8.0mm	φ8.0mm	φ8.0mm	φ8.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	1000	1000	1000	658
フィルター	Pb 用	Cd 用	Cl 用	OFF
マイラー	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ	ｶﾊﾞｰ
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ピーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

［X線スペクトル］

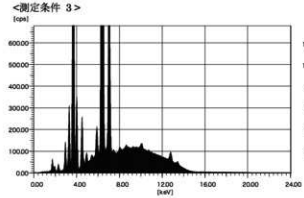
<測定条件 1>



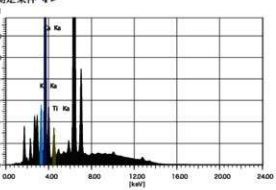
<測定条件 2>



<測定条件 3>



<測定条件 4>



［試料像］

［定量結果］

K	7.17(wt%)	
Ca	35.84(wt%)	
Ti	4.97(wt%)	
Mn	1.28(wt%)	
Fe	49.63(wt%)	
Cu	0.21(wt%)	
Zn	0.16(wt%)	
Rb	0.19(wt%)	
Sr	0.54(wt%)	

第81図　蛍光X線分析結果⑧

第Ⅶ章　調査のまとめと考察

第１節　遺構の分布と変遷

玉城町中角周辺の歴史的様相を整理するため、遺構の分布と変遷について各時代に分けて概説する。

①旧石器時代～縄文時代

旧石器時代　今のところ、との山・アレキリ遺跡では旧石器時代の遺物は確認されているものの、遺構は確認できていない。過去に見つかった石器は背面右側縁に衝撃し加工があるナイフ形石器・舟底形石器であった[1]。今回の調査では、２点のチャート製の剥片が出土したが、旧石器時代のものとは断定できず、新たな情報を得るまでには至らなかった。

旧石器時代の遺跡は宮川の台地縁辺部や櫛田川の台地周辺部に集中している。中でも、玉城町のカリコ遺跡、大台町の出張遺跡、伊勢市のママ田遺跡からは多くのナイフ形石器が出土しており、活発な活動が認められている。玉城町内にはナイフ形石器の出土が認められた遺跡が多く存在しており、との山・アレキリ遺跡周辺においても、との山・アレキリ遺跡の所在する中角台地の南に位置する岩出台地上では岩出遺跡群（旧蚊山遺跡）よりナイフ形石器16点、細石刃核１点が、宮川を挟んだ対岸の中位段丘に位置する佐八藤波遺跡（伊勢市）ではナイフ形石器３点が採集されている。中角台地周辺は旧石器時代における活動範囲の一部であったことが考えられる。

縄文時代（第82図）　縄文時代の遺物は、表面採集および古代の土坑の埋土に紛れ込んだ状態で数点が見つかっている。ただし、確認できた遺構は極めて少なく、確実なものは舌状の中角台地の先端部（遺跡の東先端部）に土坑２基が近接して見つかったのみである。出土した土器の量も少なく、いずれも縄文時代後期前葉のものであった。遺構の少なさや遺物の薄い散布状況から、この地で定住していたとは考えにくく、少人数の集団がキャンプサイト的にこの地を利用したものではないかと推測される。しかも、その期間はごく限られた期間であったと考えられる。

なお、との山・アレキリ遺跡の南東約750mには、縄文時代後期の拠点的遺跡であったと考えられる佐八藤波遺跡が位置する[2]。この遺跡から出土した後期の土器の中には、今回出土の土器とほぼ同時期の福田ＫⅡ式に併行するものも確認されている。佐八藤波遺跡で生活していた人々が、キャンプサイト的に利用する場所の一つとして、対岸の中角台地の舌状先端部まで足を延ばして活動していた可能性は十分に考えられる。

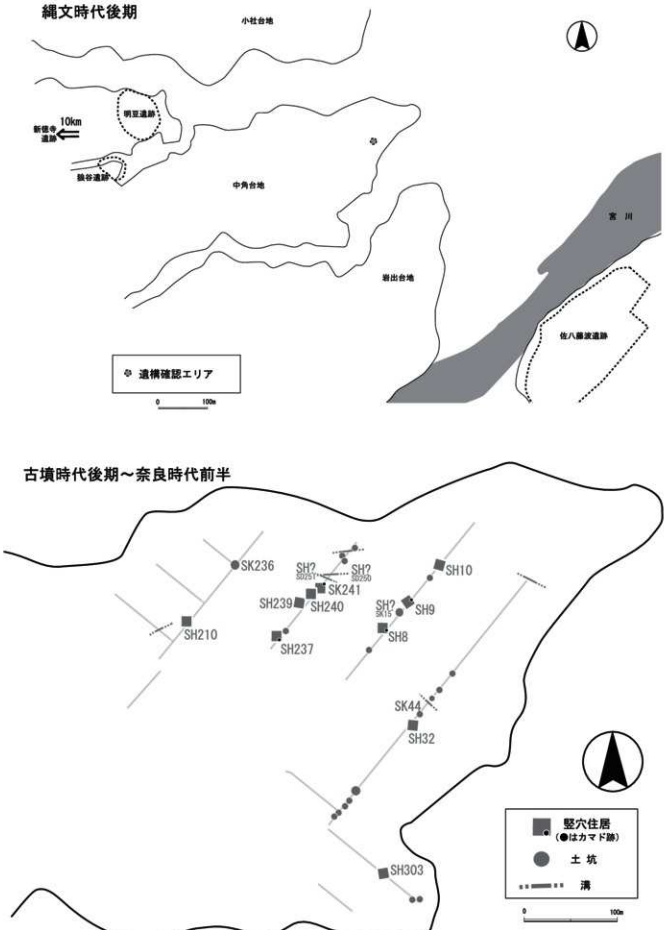
さらに、との山・アレキリ遺跡の西100～200m、中位段丘を浸食する谷に面した場所に、明豆遺跡（縄文時代中・後期）・狼谷遺跡（縄文時代後期）が確認されている。特に明豆遺跡は規模の大きい遺跡として知られており、距離的にも時期的にも明豆遺跡を中心にして中角台地を行動範囲にしていた可能性は高い。認められる後期の土器は、北白川上層式（縁帯文土器）に先行するものと、北白川上層式前半のものに大別される[3]。今回出土した縄文土器は福田ＫⅡ式に併行するもので、明豆遺跡とは時期的に近接するものと考えられる。

もう少し視野を広げてみると、との山・アレキリ遺跡の北西方向約10km、櫛田川中流沿いには新徳寺遺跡が存在し、縄文時代後期の竪穴建物６棟、埋設土器６基、土壙墓１基ほかが検出されている[4]。この新徳寺遺跡では、櫛状工具による条線文を施した福田ＫⅡ式に併行する縄文土器が出土しており、今回の調査で出土した縄文土器と同型式あるいは類似するものと思われる。２つの遺跡間は10kmあるが、新徳寺遺跡の集団との関係も考えられる。

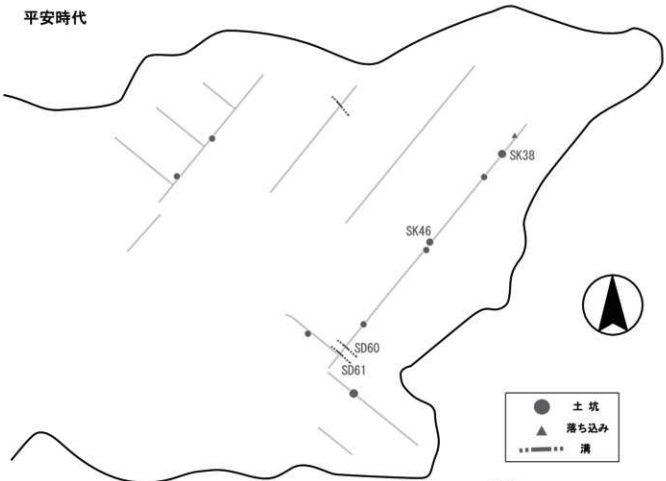
との山・アレキリ遺跡とこれら４つの遺跡との関係の解明については、今後の調査・研究による新たな発見が期待される。

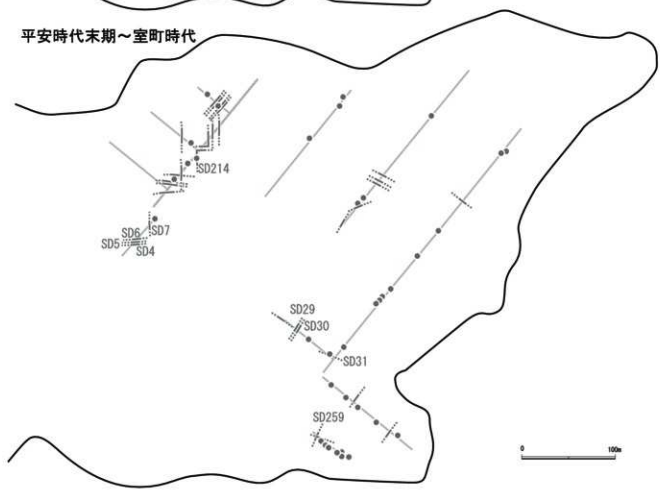
②弥生時代

弥生時代　中角台地の全域において、縄文時代晩期



第82図　時期別遺構状況①（縄文時代後期１：8,000、古墳時代後期～奈良時代前半１：4,000）





第83図　時期別遺構状況②（1：4,000）

から古墳時代中期にかけての生活痕跡は明確には見られなかった。表面採集にて弥生時代の遺物がわずかに認められてはいるが、弥生時代にこの台地上で人が居住していた様子は認めがたい。

中角台地の北に目をやると、小社台地上には小社遺跡があり、弥生時代終末期の竪穴建物22棟を含む大規模集落の跡が見つかっているが[3]、関係は考えにくい。

③古墳時代～平安時代後期

古墳時代・飛鳥時代・奈良時代（第82図）　古墳時代後期から奈良時代にかけて遺構・遺物が急増する。このことから、この時期に当地の利用が本格的に進んだものと考えられる。

竪穴建物に関しては合計10棟（その他、可能性が考えられる土坑・溝も存在）が認められ、台地上が居住域として利用されたことが分かる。竪穴建物の多くは主軸を南北におき、同時期の溝も住居の向きに合うものが多い。調査区２・６周辺で複数の竪穴建物が隣接して確認される一方で、調査区４や調査区８等に広く分散的に存在している様子も見られる。このことから、いくつかの居住単位が存在したことが分かる。こうした居住単位が複数集まってこの地に集落を形成していたものと推測される。

さらに、竪穴建物と同時期の大型土坑がいくつか認められた。特に、径約５ｍのＳＫ236では煮炊具一式８点が、径1.8ｍ以上のＳＫ44では９個体以上の土師器甕がまとめて廃棄されており、祭祀に関わるような特徴的な廃棄のパターンが考えられる。今回の調査では検出されなかったが、ＳＫ236土坑の周辺には未発見の住居跡が多数存在するものと考えられる。

なお、今のところ中角台地上には古墳は見つかっていない。中角台地の南に存在する岩出台地には、６世紀初頭～７世紀後半の古墳が合計23基見つかっており[4]、今回確認された居住域が展開した時期と重なるものと考えられる。

平安時代（第83図）　平安時代の遺構・遺物は、古墳時代後期から奈良時代にかけてのそれらと比して少なくなる。平安時代中期ごろまでは中角台地の全体は人間活動がやや希薄な時期にあったものと推測する。

検出された遺構は、土坑、溝、落ち込み、ピットである。土坑のうち大型のＳＫ38、ＳＫ46は奈良時代から平安時代にかけてのものであった。また、溝の中でもＳＤ60、ＳＤ61は深さ約0.8ｍのしっかりとした溝で、区画溝としての機能を持っていた可能性も考えられる。さらに、調査区２や調査区６では、平安時代のものと考えられるピットが、いくつか近接して存在する場合が見られた。ピットのいくつかは掘立柱建物の柱穴であった可能性も考えられる。

遺構の分布としては、平安時代前期の遺構は、中角台地の中央部の古墳～奈良時代の遺構に近接して存在している。活動が弱まりつつも連続性を感じさせる。一方で、平安時代末期ごろから鎌倉時代にかけての時期の遺構は、中角台地中央部から外れ、中角台地の南部に集中していく。中世以降の遺構の形成は、この時期を境に現在の集落に近い中角台地南部で活発化し、北西方向へと広がりを見せていく。現況に近い土地利用の区分が始まるのもこの時期である可能性が考えられる。

出土遺物についても緑釉陶器や灰釉陶器、ロクロ土師器等が見られたが、鎌倉・室町時代の遺物の量と比べてもそれほど多くない。施釉陶器の出土等からは有力者の存在も考えられるが、遺構・遺物量の少なさからその実態に迫ることは難しい。

④平安時代末期～近世

平安時代末期～室町時代（第83図）　平安時代末期から人の活動が中角台地南部で活発化し、北西方向へと広がっていく様子が見られた。

平安時代末から室町時代の遺構としては、柱列、土坑、溝、ピットで、見つかった遺構の多くは、台地の縁辺部および台地南西部の現在の集落地近隣（舌状台地と山林裾野との境界付近）にあり、付近に集落の存在が推定される。しかしながら、今回調査した範囲からは柱列が確認されたものの、居住に関する遺構の存在を確認することができなかったため、その集落の内容については不明な点が多い。ＳＤ４～７やＳＤ29～31、ＳＤ214といった溝は、平行または直交するように存在し、住居域の区画溝としての機能が考えられる。

遺物としては、土師器皿・鍋・茶釜・羽釜、灰釉陶器、山茶碗、鉄釘類等が見られた。中でも、最も岩出台地に近い場所にあたる調査区８の溝ＳＤ259において、茶道具の風炉１点のほか、茶釜３点、茶釜蓋１点がまとまって出土していることに注目したい。この場所は古い小字で「出屋敷」と呼ばれる場所にあたり、15世紀代には貴重品を含む多くの茶道具を所有する集落の有力者が調査区８付近に居住していた可能性を示唆する。

なお、調査区８に近い岩出台地ではこの時期における有力者の存在や集落の展開が明らかになっている。比較しながら中角台地の土地利用の特性を推測してみる。

岩出台地の中央部には、平安時代後期（11世紀初頭）～室町時代末期（16世紀前葉）までの約500年間、伊勢神宮の有力者である祭主大中臣氏の居館が存在していたとされる[7][8]。祭主の館が存在した岩出は、神三郡（飯野・多気・度会郡）の中でも際立って重要な場所であったと考えられている[9]。中角台地南部の活動の活発化と有力者の存在は、時期や距離から見て岩出台地の盛隆と関係していると考えるのが自然であろう。

また、同じ岩出台地の山林側に所在する蚊山遺跡左郡地区においても、中世集落の展開が明らかになっている。12世紀中葉に集落ができ始め、13世紀前葉に集落の原型がほぼ完成し、13世紀後葉に最盛期を迎え、14世紀中葉に急激に衰退して消滅したという様相が認められている[10]。これらの集落は祭主の館が存在した岩出台地の中央部を避けた山林側に形成されている。戦国時代に入り、祭主の館があったとされる場所に岩出城が築城される。

遺構形成の活発化する時期や類似した出土遺物の構成等から、中角台地における集落についても、岩出台地とよく似た展開があったものと考えられる。蚊山遺跡左郡地区では岩出城築城を前に集落自体が消滅しているが、中角台地南部では調査区８のように室町時代末から江戸時代へと活動が連続している様子も見られることから、活動が希薄になっていきながらも消滅までは至らなかったものと考えられる。

近世以降　近世の遺構・遺物は極めて少なかった。遺構は廃棄土坑や溝で、ほぼすべてが中世の遺構の多いエリアで確認された。それぞれの遺構には関係性は見うけられなかった。近世における活動自体が希薄なうえ、台地中央部に遺構が見られないことから、集落域・耕作域の区分がさらに固定され、現況に近い土地利用が行なわれるようになったものと考えられる。

なお、明治20年代後半の様子を示す当地の地図[11][12]を見てみると、現在の中角集落地から、周辺の主要集落を繋ぐ３本の道が存在している。現県道717号にあたる神積地を通って田丸城に続く道、山林部の裾野伝いに宮古集落に続く道、中角台地の縁辺部伝いに小社・山岡集落に続く道の３本である。かつてより要所であった集落を繋ぐ田丸－岩出、宮古－岩出の道の中間地であるこの地は、分岐点としての役割を持つ集落になり得る。この地図は、明治時代の地図ではあるが、近世あるいはそれ以前まで遡って同様の交通網が存在していたのではないかと推測される。

註

1）玉城町史編纂委員会1995『三重県　玉城町史』上巻
2）伊勢市2011『伊勢市史』第六巻 考古編
3）註１）に同じ。
4）三重県埋蔵文化財センター1997『新徳寺遺跡』
5）註１）に同じ。
6）三重県埋蔵文化財センター1996『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』
7）伊藤裕偉1998「中世岩出の機能と位相」『Mie History』vol. 9　三重歴史文化研究会
8）岡田荘司1993「中世の大中臣祭主家」『大中臣祭主藤波家の歴史』藤波家文書研究会
9）註７）に同じ。
10）三重県埋蔵文化財センター1993『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　第６分冊　蚊山遺跡左郡地区』
11）大日本帝国陸地測量部1894『沼木村（20,000分の１）』
12）大日本帝国陸地測量部1898『田丸町（20,000分の１）』

第２節　遺物について

今回、当遺跡において特徴的な遺物がいくつか認められた。それらの遺物は量的には少ないものではあるが、遺跡の性格等を示す貴重な素材となる。ここではこうした遺物の位置づけを行い、当地の歴史的背景や生活の実態を探る一助としたい。

（１）灰釉陶器模倣ロクロ土師器椀（第67図485）

遺構の概要と遺物の出土状況　Ｔ７Pit12よりロクロ土師器椀が出土した。ピットの規模は径0.３m、深さ0.３mで、共伴する遺物はなくこの遺物のみが大型の破片で出土した。

このピットは古墳時代から奈良時代の遺構が集中するエリアに存在し、1.４m離れた古墳時代の土坑ＳＫ258と奈良時代の土坑ＳＫ55の間に位置する。平安時代の遺構としては、東３～６mに区画溝と思われるＳＤ60、ＳＤ61がある。周辺には同様のピットはそれほど多くなく、Ｔ７Pit12との関連が考えられるものは今のところ見当たらない。遺構からの時期の推定は難しいと言える。

形態的特徴（第67図485）　このロクロ土師器椀について改めてその特徴を示す。

①　法量は口径16.８cm、器高6.２cm、高台径7.２cmである。

②　胎土は土師器としては非常に密で、粗粒砂の混入はほとんど見られない。しかし、灰釉陶器の胎土ほどの細密さはなく、あくまで土師器用の粘土を利用したものと思われる。

③　全体的に浅黄橙色を呈する。比較的高温の酸化焔焼成によるものである[1]。土器の底部の破断面の中心部には、灰色～暗灰色を呈する部分がある。

④　器壁は非常に薄く、口縁部付近の厚さはおよそ２㎜であり、丁寧なロクロナデによる調整が見られる。特に、口縁部内面に強いナデが施されるため、体部は２段階に内湾する。口縁部の形態は、11世紀の灰釉陶器の百代寺窯式のいわゆる玉縁椀に似た印象も持つ。

⑤　底部外面はロクロケズリで丁寧に調整されており、糸切り痕は見られない。

⑥　高台は高めで1.２cmあり、いわゆる「三日月形」のものが貼り付けられている。その形態は９世紀後半の灰釉陶器のＫ90号窯式のものに近い[2]。

⑦　遺存状態がよく、内面・外面ともに使用に伴う摩耗は見られない。

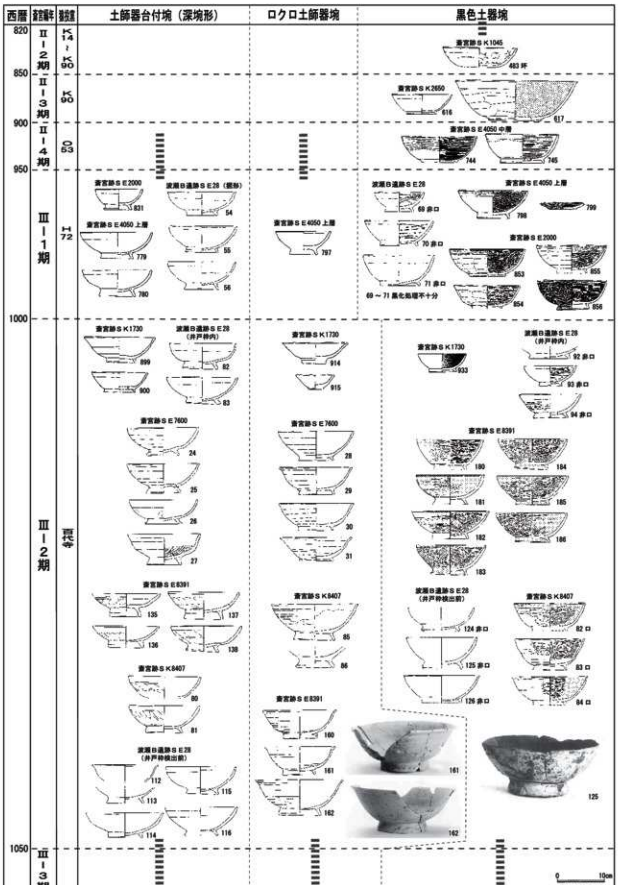
①～⑥の特徴から、灰釉陶器の影響を強く受けた土器であると考えられる。

県内では、伊藤裕偉氏が雲出島貫遺跡出土例をもとに[3]、濱辺一機氏が塚原遺跡出土例をもとにロクロ土師器を分類しており[4]、伊藤氏の分類では椀ｂ、濱辺氏の分類では椀ａにあたる。

製作時期の推定（第84図）[5]　まず、斎宮跡出土遺物および斎宮編年（斎宮歴史博物館2000）との比較において時期の推定をしてみたい[6]。

斎宮編年では、斎宮第Ⅲ期第１段階（950～1000年）は、灰釉陶器H72号窯式に相当する。この時期において土師器に「灰釉陶器などの椀の模倣したものや新たにロクロ土師器の出現」が認められている。灰釉陶器などの椀の模倣したものとは、非ロクロ製の深椀形土師器台付椀のようで、標識遺構ＳＥ4050上層でロ径15cm前後の土師器台付椀（779・780）が、ＳＥ2000でロ径10cmの小型の土師器台付椀（831）が出土している。また、新たに出現するロクロ土師器の中で、高台を有する椀形のものについてはＳＥ4050上層よりロ径11.４cmの小型のロクロ土師器椀（797）が１点出土しているのみである。これらについては、椀形という形態以外に灰釉陶器を直接的に模倣した要素は見られない。なお、この時期のロクロ土師器は底部外面に糸切り痕が残る小皿、台付皿、台付小皿が大半を占める。

続く斎宮第Ⅲ期第２段階（1000～1050年）は、灰釉陶器百代寺窯式期に相当する。この時期の標識遺構ＳＫ1730では、灰釉陶器模倣と思われるロ径約15cmの非ロクロ製の土師器台付椀（899・900）が出土している。ロクロ土師器椀については、口径８cmの小型品（915）と口径14cmの大型品（914）が認められるが、底部が厚く柱状をなす。なお、同じく標識



第84図　との山･アレキリ遺跡周辺の土師器台付埦・ロクロ土師器埦・黒色土器埦の出現と消滅（1：8）

遺構のＳＫ1074では、土師器台付埦、ロクロ土師器埦ともに出土は見られない。

そして、斎宮第Ⅲ期第３段階（1050～1100年）以降は土師器台付埦・ロクロ土師器埦の出土はほとんど見られなくなる。

こうした土師器の動向から、との山・アレキリ遺跡出土のロクロ土師器埦の製作時期は、斎宮第Ⅲ期第１段階（950～1000年）～斎宮第Ⅲ期第２段階（1000～1050年）に相当する可能性が高い。

しかしながら、この時期の標識遺構には灰釉陶器模倣と思われる土師器台付埦、ロクロ土師器埦の出土例が少なく、検討が難しい。そこで、さらに時期を絞って具体例をあたり類例との比較検討を行ってみたい。

斎宮跡発掘調査ではＳＥ7600、ＳＫ8407およびＳＥ8391が、斎宮第Ⅲ期第２段階当時の様相を示す良好な遺構となっている。

＜ＳＫ8407およびＳＥ8391（第133次調査）[71]＞

ＳＫ8407は斎宮第Ⅲ期第２段階に比定できる土坑で、口径15～18cmのよく似た形態の土師器台付埦（80・81）、黒色土器埦（82～84）、ロクロ土師器埦（85・86）が出土している。ロクロ土師器埦は灰釉陶器模倣とみられるが、口縁部形態および高台の形態がとの山・アレキリ遺跡のものと共通するものは見られない。

ＳＥ8391は斎宮第Ⅱ期第４段階～第Ⅲ期第１段階に機能していたと思われる井戸で、井戸廃絶段階のものとして斎宮第Ⅲ期第２段階の土器類が出土している。良く似た法量・形態の土師器台付埦（135～138）、黒色土器埦（180～186）、ロクロ土師器埦（160～162）、灰釉陶器碗が出土している。ロクロ土師器埦は、口径約15cmのもの（160・161）と約19cmのもの（162）が出土している。いずれも極めて丁寧な作りのもので、灰釉陶器を模倣したと思われる。中でも、162が当該遺物にもっとも近い。ただし、口縁部が外反したり、高台が外方に開く点が異なる。

＜ＳＥ7600（第113次調査）[*1]＞　土師器台付埦（24～27）、ロクロ土師器埦（28～31）がともに認められる。土師器台付埦（24～27）については、口径15cm前後で体部は内湾気味に立ち上がり、「八」字形の高台が貼り付けられている。土師器台付埦（27）は体部内面に暗文状のミガキを施す。また、ロクロ土師器埦は、口径15.5cm前後で、口縁端部が外反しないもの（28）と外反するもの（29～31）がある。高台の断面は、「八」字形（28～30）と三日月形（31）があり、糸切り無調整である。胎土は細砂を含むが密で浅黄橙色である。形態にばらつきはあるが、形態・調整からみていずれも灰釉陶器模倣と思われる。

こうした出土遺物の中でロクロ土師器埦（31）が、最も当該遺物と近いと言える。相違点としては、糸切り無調整である点と、口縁端部が外反する点が挙げられる。

近隣の類例について（第84図）　近隣の遺跡にて出土した土器類との比較検討も行ってみたい。

＜波瀬Ｂ遺跡[9]＞　波瀬Ｂ遺跡はとの山・アレキリ遺跡の北西300mに所在する遺跡である。この遺跡では平安時代後期の井戸ＳＥ28より良好な資料が出土しており、それらの中には土師器台付埦がいくつか認められる。出土遺物は、井戸枠掘形、井戸枠内、井戸枠検出前に分けられている。

○井戸枠掘形出土遺物（10世紀後半）　土師器台付埦（54・55・56）が出土している。いずれも口径が14.4cmほどで、高台径もほぼ等しい。高台についても同形でいずれも「八」字形に貼り付けられる。54は器高が浅く口縁端部が外反するが、55・56は器高が深く、体部は半球形に内湾して立ち上がる。

なお、黒色土器埦（69～71）が共伴している。いずれも黒化処理が不十分で灰色を呈する。また、H72号窯式期の灰釉陶器碗、K90号窯式期の灰釉陶器皿も出土しており、井戸の形成時期を10世紀後半、斎宮第Ⅲ期第１段階併行期とみることができる。

○井戸枠内出土遺物（11世紀前半）　土師器台付埦（82・83）が出土している。82は器高が浅く、体部が内湾して立ち上がる。高台は高く「八」字形に貼り付けられている。83は器高が高く、体部はゆるやかに内湾して口縁端部はわずかに外反する。高台は台形高台が「八」字形に貼り付けられている。

共伴遺物として、百代寺窯式期の灰釉陶器碗

が出土している。井戸の機能期間が11世紀前半までであったと考えられる。

○井戸枠検出前出土遺物（11世紀前半）　土師器台付椀（112～116）が出土している。112は器壁が非常に薄く[18]、口縁部が外反する。灰釉陶器模倣とも考えられる。113～116は高めの高台が「八」字形に貼り付けられている。体部が緩やかに内湾して立ち上がる。

なお、ここでも黒色土器椀（124～126）が出土している。125は高台が三日月形に近く、灰釉陶器との関係も考えられるかもしれない。また、百代寺窯式期に併行する灰釉陶器椀が共伴している。この井戸が11世紀前半、斎宮第Ⅲ期第２段階併行期に廃絶したことを示す。

＜東海・濃飛の地域性＞　東海・濃飛地方における中世食器の地域性については、尾野善裕氏が明らかにしている[19]。尾野氏によれば、10世紀後半～11世紀前半において食膳具に深椀形のロクロ土師器が認められるのは、東海・濃飛地方の中で三重中部（南伊勢・志摩）のみであることが把えられている。つまり、灰釉陶器模倣の深椀形ロクロ土師器の出現は、斎宮を中心としたこの地域ならではの土器構成の特徴を示していると考えられる。これは同時に、この種の土器が在地生産かつ在地消費である可能性も示唆している。

このロクロ土師器椀の問題点　以上のことから、灰釉陶器の影響が土師器等に表れるのは10世紀後半～11世紀前半であることが分かるが、との山・アレキリ遺跡出土のロクロ土師器椀を10世紀後半～11世紀前半の灰釉陶器模倣とした場合、大きく以下の２点が問題点として挙げられる。

①底部外面のロクロケズリ調整……灰釉陶器は、おおむね10世紀中ごろから底部外面に糸切り痕を残すことが多くなり、ロクロケズリによる丁寧な調整が省略される傾向にある。

②K90号窯式に似た三日月形の高台……灰釉陶器は、おおむね10世紀中ごろから高台の高さが次第に低くなり、高台の断面形態も三日月形から三角形へと変化していく傾向にある。

上記のような、底部外面のロクロケズリや高台の形態といった古い時期の灰釉陶器の特徴が見られる点のほか、体部から口縁部にかけて２段階に内湾する形態も灰釉陶器としては珍しい。時期的に近いH72号窯式や百代寺窯式の灰釉陶器と比較しても違和感が残る。こうしたことから、灰釉陶器工人による製作ではない可能性が高いと考えられる。灰釉陶器工人以外の手によって、特定の灰釉陶器碗の個体を手本とせずに作られたものであると推測されよう。

工人の存在　一方で、このロクロ土師器椀に関しては、ロクロ成形技術をはじめ、灰釉陶器工人が持つような知識や技術が用いられている。これは、この周辺にこうした知識・技術を持つ工人集団が存在していた可能性をうかがわせる。

しかしながら、当地近隣に灰釉陶器の生産地は見当たらない。10世紀前後の東海地方は、灰釉陶器生産の最盛期で、三重県内では愛知・岐阜の生産地に近い北勢地域に集中し、桑名市・七和２号窯（10世紀代）、四日市市・岡山３号窯址（11世紀代）がそれにあたる[20]。灰釉陶器生産が盛行する一方で、10世紀前後には東海地方での須恵器生産は終焉を迎える。つまり、窯業としては須恵器から灰釉陶器への転換期に該当する。

そこで、この地域周辺の生産・流通の在り方について考えてみた場合、灰釉陶器工人の存在だけではなく、須恵器工人の知識・技術の利用の可能性についても考えておく必要がある。

との山・アレキリ遺跡の西約５kmには、「外城田窯跡群」とされる須恵器の生産地が見られる。それぞれの窯跡について時期を追って整理してみる。

○古墳時代・飛鳥時代以降の窯跡……池ノ谷３号窯（古墳時代）、池ノ谷１・２号窯（飛鳥時代以降）、長安寺１・２号窯（飛鳥時代以降）、南山西１・２号窯（飛鳥時代以降）、原古窯址群１～９号窯（飛鳥時代以降）が存在する。

○７～８世紀の窯跡……中尾山古窯址（７世紀前半）[21]、明気窯跡群（７世紀中葉）[16]、原古窯址群11号窯（７世紀末）、市寄古窯跡（７世紀末～８世紀初頃）、原古窯址群10号窯（８世紀前半）が存在する。

７世紀前半、中尾山古窯址、明気窯跡群が操業していた時期には、伊勢南部には外城田窯跡群、大仏八端窯跡群（玉城町）、根後窯跡群

（松阪市）の３箇所で須恵器生産が行われている[15][16]。７世紀末に入ると須恵器生産は外城田窯跡群に集約されるようになる[17]。原古窯址群・市害古窯跡一帯は７世紀末～８世紀初頭にかけての須恵器の大生産地で、当時急速に整備されていた斎宮への供給を担っていた可能性が指摘されている[18]。製品は大阪府南部窯跡のものと類似しており、いわゆる「中央窯」の須恵器を規範として生産されたと考えられている[19]。

○９世紀の窯跡……外城田窯跡群には、この時期にあたる須恵器窯跡は見られない。斎宮跡においても須恵器の出土が少ない時期でもある。

○10世紀以降の窯跡……泉貢窯跡が10世紀前半ごろに操業していたとされる。窯体は１基のみで、多量の須恵器甕と若干の須恵器坏が出土している[20]。これらは日常的に使われるもので、在地消費を目的として生産されたものと考えられる。須恵器甕には大きく２種類が存在し、工具の痕跡や甕の形、胎土の違い等から、全く異なる２つの須恵器製作工人集団が１つの窯を使用して須恵器を焼いていたことが想定されている[21]。

このように、外城田窯跡群においては９世紀を除いて継続的に須恵器生産がなされている。最盛期には同時期に複数の窯が稼働していた可能性もあるが、８世紀後半以降は衰退し、生産が再開された10世紀には、生産の内容も変化していることが分かる。

推測されるロクロ土師器碗の時期と重なる操業期にある窯跡としては、泉貢窯跡が考えられる。県内では10世紀前半ごろの須恵器生産自体が珍しく類例がないうえ、また、この泉貢窯跡の後に続く窯跡の存在は確認されていないことから、泉貢窯跡の操業期以降は工人の知識・技術が途切れる時期とも考えられる[22]。

10世紀前後は、斎宮跡において、灰釉陶器の形態に類似した須恵器碗が灰釉陶器碗と共存して利用されている時期にもあたる。須恵器生産の衰退と灰釉陶器生産の隆盛が重なる時期ともいえ、須恵器生産を行わなくなった須恵器工人が、ロクロ成形技術を転用して灰釉陶器碗模倣形の土師器碗を製作した可能性は十分に考えられる。

需要と用途　南伊勢地域で確認される灰釉陶器模倣のロクロ土師器碗の類例はそれほど多くはないものの、複数例が見られることから、そこには一定の需要があり、日常生産体制はないながらも、臨時的な需要に対応できる工人集団が存在していた可能性は高いと考えられる。

また、その需要のもととなるロクロ土師器碗の主な用途に関しては、波瀬Ｂ遺跡、斎宮跡ともに井戸枠、井戸枠掘形から主に出土していることから、祭祀に用いられた印象を強く受ける。地域性や時期の違いもあるため単純には比較できないが、鈴木康之氏は草戸千軒町遺跡（広島県）出土の土師質土器供膳形態について、その使用痕・出土状況・変遷過程等から、日常の食事に使われた食器ではなく、遺構を埋め戻す際の儀式の一環として埋められた土器であったものと指摘している[23]。また、瀬戸内地方に分布する土師質焼成の中世土器は、技術的な系譜としてそれぞれの地域の須恵器生産の中から派生したものと考えられており[24]、当該地域での状況と重なる可能性がある。当該地域においても瀬戸内地方と同様に、須恵器生産から派生した供膳形態のロクロ土師器碗が祭祀の際に使用された可能性は十分に考えられる。

灰釉陶器碗を模倣することについては、在地での生産が可能なロクロ土師器を灰釉陶器の代替品として使用した可能性も考えられる。井戸の廃絶時の祭祀等では、多種・多量の土器類が必要となり、その一部をロクロ土師器碗が担っていた可能性がある。また、Ｔ７Pit12のようなピットでの出土状況からは、建物等の重要な構造物の廃絶時の祭祀に用いられたことも考えられる。

まとめ　今回出土したロクロ土師器碗はややイレギュラーな遺物であり、また近隣で灰釉陶器模倣のロクロ土師器碗の出土例が豊富にあるわけではないため、今回の検討においてこの種のロクロ土師器碗の性格を解明することは難しい。しかしながら、この遺物の重要性の一端を示すことができたであろう。

註

１）仮に、窯で焼かれた灰釉陶器の不良品であったとしても、不良品の需要や流通に関して憶疑的にならざる

を得ない。

2）愛知県みよし市2013『愛知県猿投山西南麓古窯址群 黒笹90号窯跡』

3）三重県埋蔵文化財センター2000『嶋抜Ⅱ』

4）北勢町教育委員会2002『塚原遺跡』

5）表中の胴年代については、斎宮歴史博物館2001『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』による。

6）斎宮歴史博物館2001『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』

7）斎宮歴史博物館2003『史跡斎宮跡 平成13年度発掘調査報告概報』

8）斎宮歴史博物館1997『史跡斎宮跡 平成8年度発掘調査報告概報』

9）三重県埋蔵文化財センター1992『波瀬B遺跡発掘調査報告』

10）註9）では非ロクロ製であることが示されているが、出土している遺物は口縁部小片が表面の摩耗が著しく、ロクロ製である可能性が高い。

11）尾野善裕1997「4 東海・濃飛 中世食器の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館

12）三重県埋蔵文化財センター1992『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告 第2分冊 泉真窯跡 山神城跡』

13）通称「中尾窯跡」。

14）水橋公恵1999「南伊勢地域の須恵器編年に関する一考察－大仏八端窯跡群出土須恵器を中心に－」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター

15）淺生卓司2005「伊勢南部の須恵器生産－外城田窯址群の検討－」『Mie History』vol.16 三重歴史文化研究会

16）宇河雅之1997「中・南勢（窯跡）」『7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器5-1 古代の土器研究会

17）註15）に同じ。

18）宇河雅之ほか1994「市寄窯跡群出土の須恵器について」『Mie History』vol.7 三重歴史文化研究会

19）註15）に同じ。

20）註12）に同じ。

21）玉城町史編纂委員会1995『三重県 玉城町史』上巻

22）県外には中世須恵器として須恵器の生産が認められる例があるが、県内ではおおむね10世紀には須恵器生産が終了するものと考えられる。

23）鈴木康之1995「土師質土器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会。鈴木氏はロクロ土師器という名称を用いず、土師質土器という名称を用いている。

24）註23）に同じ。

（2）瓦質土器風炉（第73図536）

遺構の概要と遺物の出土状況　調査区8のSD259より瓦質土器の風炉が出土した。SD259は調査区北西端で検出された、北東—南西方向にのびる室町時代以降の溝である。埋土からはこの風炉のほかに青磁、羽釜、擂鉢、鍋、山茶碗と多種・多量の遺物が出土した。特に、土師器鍋類は20個体以上が確認されている。

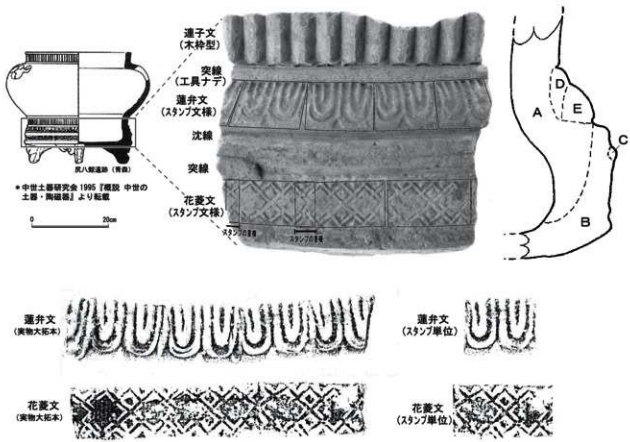
形態的特徴　この風炉について、その特徴を以下に示す。

- 連子文や蓮弁文、花菱文の装飾・スタンプ文様が見られ、大和産の瓦質土器の特徴を示す。
- 胎土は、にぶい黄橙色でやや軟質である。
- 尻八館遺跡（青森市）で出土している風炉と同形のものとみられ、今回出土の破片は、胴部から底部にかけての部分にあたる（第84図）。
- 完形品であれば、広口の短頸壺形で、円筒型の口縁部を持つ。肩部には火窓（眉）が、底部外縁辺には3本の猫足が設けられる[1]。器高30cm、最大径38cmほどの法量になると推測される。

成形・調整の工程（第85図）　一つの風炉に対していくつもの文様が施されており、どのような工程を経ながら成形・調整されるのか、観察によって得られた情報をもとに考えてみたい。

今回出土した風炉は、胴部から腰部にかけての破片である。破断面からこの部分だけで5つの工程で粘土を継ぎ合わせて成形されていることが分かった。それぞれの工程の成形単位を、部位A～Eと呼ぶことにする。

まず、連子文の部分を作るのが部位Aにあたる。連子文の装飾を詳しく観察してみると、連子文は幅8㎜で均質かつまっすぐに整っており、スタンプをずらして重ねたような跡も見られない。各連子文の盛り上がりが2.5㎜と大きいこともあり、粘土にスタンプをずらしながら押し付けて得た装飾というより、連子文が彫られた木の型枠に粘土を押し当てて施文されたように見える。連子文の谷の部分に木目の跡が見られるのも、根拠の1つとなるだろう。なお、連子文の山の部分には粘土が乾いた跡に擦れてできた傷が見られる。



第85図　風炉の部位別文様（拓本１：１、実測図１：10、写真・断面図は縮尺不同）

次に、部位Aの下に繋ぎ合わせられるのが、花菱文を施された部位Bである。部位Aの粘土が乾ききらないうちに接合させる必要があるため、部位Aの連子文が乱れることを避けて連子文から距離をとった形で部位Bの粘土が繋げられ、花菱文が施されたのであろう。この花菱文は連続スタンプによって施された文様である。１つのスタンプの単位[21]は、内側に花文があったとみられる大きな菱文２つの間に小さな菱文２つを挟み込むような配置で形成されている。花文の文様はスタンプの擦切れあるいは目詰まりによって不鮮明になっている。スタンプであるために、押し当てる力のムラによって文様の鮮明さに差があったり、スタンプとスタンプの間にわずかな間隔や重複が生じたりしている。スタンプの重複が見られる場合は、およそ４分の１をずらして菱文の頂点同士を重ねるように押し当て、花菱文の規則的配置を乱さないようにしている。また、平面のスタンプを円形の胴部に押し当てているため、２つのスタンプ間には器面に若干の屈曲が見られる。

そして、花菱文の直上部には幅約６㎜の突線が施されている。この突線は、部位Bの粘土が乾かないうちに溝を刻み、そこに紐状に細く加工した部位Cの粘土を当てはめ、その後ナデによって貼り付けられている。部位Cの大部分が剥離しているため、専用の工具によるナデがあったかどうかは確かではないが、後に示す部位Dの突線と幅がほぼ等しいことから、半円形の回部を持つ工具を仕上げに用いている可能性が高いと考えられる。

さらに、部位Bの底部には部分的な剥離が見られ、その部分には黒斑が認められる。これは猫足とも呼ばれる脚部が取れた時のものであると考えられる。脚部は部位Bに貼り付ける形で成形され、ナデによって接合面を滑らかに調整されたものと思われる。つまり、猫足の装飾が施された脚部はあらかじめ別に成形されていたものと考えられる。

その後、部位Aと部位Bとを繋いでいる窪みの上部、部位A側との境に部位Dの粘土が付けられたものと考えられる。おそらく、部位Dを付ける段階に

は、部位Aの粘土は乾燥してきており、乾いた連子文との境界際まで調整できたのだろう。乾いた部位Aに部位Dの粘土を押し付けたため、両者の繋ぎ目は明瞭になっており、最大1㎜の隙間が見られる。なお、最終的には、部位D自体が幅約6㎝の突線になるが、その突線の最終調整は次の部位Eの粘土を貼り付け、加飾された後に行われている。

そして、部位Dと部位Bとの間にできている窪みをすべて埋める形で部位Eの粘土を充填している。なお、この作業は、部位Dの粘土が十分に乾燥する前に行われている。この部位Eには上部に蓮弁文、下部に沈線が施されている。蓮弁文は連続スタンプによって施されたもので、1つのスタンプの単位[2]は、2本の沈線で表現された蓮弁文2つとその間に三角形の文を配置して形成されている。そのため、2つの蓮弁文ごとに角度のズレやスタンプの重なりが見られ、器面には若干の屈曲も見られる。部位Dと部位Eとの境界際にまでスタンプが押し当てられているため、境界部には最大0.5㎜の隙間が生じている。

最後に、部位Dの突線を最終調整したと思われる。突線の表面は滑らかで、半円形の凹部を持つ工具でナデたものと思われる。この部位Dと部位A・Bとの境界を見てみると、十分に乾燥した部位Aには工具の当たった痕は見られないが、まだ乾いていない部位Eには工具の当たった痕や、工具ナデによって蓮弁文上部の粘土が動いた痕が見られる。この工程には、作業中に部位Dについてしまった蓮弁文スタンプの当たり痕を消す目的もあったものと考えられる。

こうした5つの工程によって胴部から底部にかけての部位を成形した後、大きく張り出した肩部、短頸の広口状の口縁部を成形させていったと推測される。部位Aの上方に見られる剥離面は、部位Aと肩部との接続面であったものと思われる。

なお、こうした成形技法は同じものをある程度まとまった数量を生産するために生まれたものと思われ、一定の需要があったことを裏付けるものである。

風炉の生産された年代　鎌倉時代後期以降の瓦質土器を特徴づけるのは、さまざまな器形とその表面を飾るスタンプ等の意匠である[4]。また、16世紀代になると多様な小型品が出現する傾向が見られる。

今回出土した風炉は、スタンプ文様を用いた丁寧な装飾が見られ、風炉の中で手の込んだ高級品であったとされる。猫足や獣足・乳足を有し、五徳を使わずに直接茶釜を口に掛ける形の風炉は、現在の茶道においても高級なものとされている。水澤幸一氏による分類[5]では風炉Ⅳ類に該当する。奈良火鉢の発展期あたる15世紀前半に作られた可能性が強い[6][7]。SD259の共伴遺物とも時期的な齟齬はない。

風炉を有した人物　風炉は通常の土器流通ルートに乗らず、人的な結合によって流通した可能性が指摘されている[8]。また、風炉は京や堺等、都市的な生活様式に伴う器物で、地方では城館・寺院・湊等、集散地で出土するものの、一般的な村落には見られないという。特に支配階級が求めて使用したと考えられている[9]。

こうしたことからも、今回出土した風炉を有していた人物は、当時この地で高い地位にあった有力者で、風炉の産地である大和との物流ネットワークを持っていたことが推測される。この地の当時の有力者としては、伊勢神宮の祭主大中臣氏とのつながりは切り離せないだろう。祭主は伊勢神宮に奉仕する職員の中で最高位にあり、その祭主家には祭務にあたる職員や警固の武士等、多くの家人を抱えていたという[10]。この「出屋敷」における有力者は、この祭主大中臣氏の生活を支えた重要家人、あるいは、その後の南北朝期までこの地に影響力を持っていた、祭主大中臣氏との関係の深い荒木田氏一族・一門等が考えられるだろう。

なお、南北朝期以降は戦国大名として北畠氏が地位を確立していくことになる。この伊勢の地においても、茶の湯や作庭といった京の代表的な芸能や文化が定着して広まっていくことになるが、こうした大和からの物流ネットワークがすでに存在していたこともその定着の一助となったことだろう。

註

1）菅原正明1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集　国立歴史民俗博物館

2）スタンプ単位の検証にあたっては、花菱文の頂点間

の計測により、長さが一致するものを１単位とした。
3）スタンプ単位の検証にあたっては、２つの連弁文の中心突線の先端部の間隔を計測し、長さが一致するものを１単位とした。
4）水澤幸一2009「瓦器の相貌」『中近世土器の基礎研究』22　日本中世土器研究会
5）註４）に同じ
6）立石堅志1995「10.瓦質土器　〔１〕奈良火鉢」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
7）近江俊秀1997「広域に流通した中世大和の土器－大和産、大和系瓦質土器の分布について－」『中世土器の基礎研究』ＸⅡ　日本中世土器研究会
8）佐藤亜聖2011「中世後期の流通と瓦質土器」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院
9）註４）に同じ。
10）玉城町史編纂委員会1995『三重県　玉城町史』上巻

（３）土師器把手付鍋（第47図245）

遺構の概要と遺物の出土状況　調査区５－⑤⑥⑦の３つの調査区に渡って確認された径4.8m、深さ0.55mの円形土坑ＳＫ236の西部より、土師器煮炊具８点が集中して出土した。その中の１つとして、特徴的な再加工が施された土師器把手付鍋が認められた。煮炊具８点の内訳は、甕２点、長胴甕２点、小型の甕３点、および当該遺物である。

ＳＫ236からの遺物出土状況においては、次のような特徴が見られる。

・　８点の煮炊具はいずれも遺存状態がよい。中でもこの遺物はほぼ原形をとどめた状態で確認されている。
・　共伴遺物が乏しく、同時期の土師器皿・坏、須恵器等が一切見られない。

形態的特徴　ほぼ原形で復元されたこの土師器把手付鍋について、改めてその特徴を示す。

・　底部が意図的に径24cmの円形に打ち欠かれ、その断面は口縁部と約17cmの間隔で平行をなす。
・　口縁部から体部にかけてＵ字形に大きく打ち欠かれる。打ち欠かれた部分は口縁部で28cm、高さは13.6cmに渡り、底部の円形の打ち欠き断面まで約３cmを残す。
・　体部内面には、ススの付着や被熱痕は見られない。

遺構・遺物の性格　このような形態的特徴等から、逆位で使用する移動式竈として再加工された可能性が非常に高い。しかしながら、内面にはススの付着や被熱痕は見られないため、実際に火を用いて使用されたものとは考えにくい。そのため、移動式竈の形態をしつつも、その用途は調理ではなく祭祀であった可能性がある。これらの根拠となる条件について考えてみたい。

①甕類を掛けることが困難である　円形に打ち欠かれた部分を竈の掛口とした場合、同時に出土した小型甕は体部径が小さく、掛けることができない。また、長胴甕については掛口に掛けることは可能であるが、その場合、Ｕ字形の焚口では長胴甕の底部と地面の間には８cmほどの隙間しかなく、焚き木の挿入は難しい。さらに、Ｕ字形の打ち欠きが大きいため、長胴甕を掛けること自体が強度的にも難しいものと考えられる。つまり、この移動式竈は実際の使用を想定していないことを意味するだろう。

この点については、稲田孝司氏が三重・愛知県に分布する曲げ底系の移動式竈には専用の甕が確認されていないことを指摘している点が参考になる[11]。この移動式竈は曲げ底系のものではないが、同様の位置づけが考えられるのではないかと推測される。そして、祭祀のために、移動式竈を実際に製作して用意するのではなく、形式的・便宜的に移動式竈の形態を模すように把手付鍋を加工して代用した可能性が考えられる。

②特異な出土状況　ＳＫ236の出土状況は特徴的な廃棄パターンを示している。８点の煮炊具が遺存状態が良く出土している点や、土師器皿や須恵器坏等の供膳具が共伴しない点、掘り返しを示す埋土（第５・６・９層）から集中して出土している点等、単なる土器の廃棄土坑とするには不自然な点が多い。

特に、当該遺物に関しては、他の遺物すべてが埋土の中で割れた状況で出土している中、破損しやすい形態であるにも関わらず、原形をとどめる状況で出土しており、丁寧に取り扱われたような印象を受ける。また、当該遺物の北側には、甕（240）が長胴甕（246）の上に重なるように出土

しており、長胴甕の上に甑が積み上げられていたと考えられる。当該遺物の東側には、もう一対の甑（239）と長胴甕（247）が、積み上げられた後に倒れたような状況で出土している。そして、小型甕はいずれも当該遺物から非常に近い場所で出土している。このような出土状況から、土坑内に当該遺物を中心に据え、それを取り巻くように北側と東側に長胴甕・甑の対を配置し、北側と西側に小型甕３点を意図的に配置した可能性が考えられる。

こうした上器類の配置や出土状況等から、煮炊具の廃棄行為自体に意味があったものと推測される。一式の煮炊具を埋めるために土坑を再び掘り返し、その穴において実際に祭祀を行った、あるいは、違う場所で行った祭祀で用いた一式の道具を丁寧に廃棄・処分した、といった可能性が考えられる。

なお、今回の調査においては、径1.8m以上のＳＫ44においても９個体以上の土師器甕がまとまって出土しており、ＳＫ236で見られるような特徴ある廃棄パターンとして見ることができる。そのため、同様の祭祀に関わる可能性が考えられる。移動式竈は出土しなかったが、調査区外となった遺構部分に存在する可能性もあるだろう。

③造り付けカマドとの共存　今回の調査においては、確認された竪穴建物にカマドを有するものが４棟確認されている。当該地域の古代の竪穴建物には造り付けカマドを伴うものが一般的であったと考えられる。森泰通氏は、移動式竈が多く出土する理由を日常的な用途の中で理解することは難しいと指摘し、造り付けカマドを伴う竪穴建物内で移動式竈を用いなければならない必然性はないとしている[2]。さらに森氏は、江古山遺跡（愛知県豊田市）では６世紀後葉～８世紀後葉の複数の竪穴建物で強い被熱の痕跡を残さない移動式竈が複数出土していることに注目し、造り付けカマドとの共存や集落の成立条件から、古墳を前にした祖霊崇拝の祭祀で使用された可能性を指摘している。江古山遺跡と同時期のとの山・アレキリ遺跡においても、移動式竈を祭祀に用いた可能性は十分に考えられる。

註

1）稲田孝司1978「忌の竈と王権」『考古学研究』第25巻考古学研究会

2）森泰通1997「移動式カマドについての覚え書き－豊田市江古山遺跡出土例をもとに－」『三河考古』第10号三河考古学談話会

第３節　結語

との山・アレキリ遺跡が存在する玉城町では、これまで田石器時代から近世にかけての遺跡で広く調査が行われている。特に、近年の研究では、伊勢神宮との関わりが強いこともあり、文献史料に富む中世の田丸城に関する研究が進み、岩出城近くの中世集落の様相についても明らかになっている。しかしながら、田丸城周辺（小社台地周辺を含む）と、宮川付近の岩出台地周辺に関わる様相が明らかになりつつある中で、その２つの要所を繋ぐ道の途中に存在する中角台地での集落の様相とその当時の地域社会については、十分に明らかになっていなかった。こうした中にあって、今回のとの山・アレキリ遺跡の発掘調査成果は、地域史を豊かにするために貴重なものになったと言えよう。

調査によって得られた成果としては、縄文時代の生活痕跡の確認、古墳時代後期～奈良時代における集落の展開、平安時代末から室町時代にかけての土地利用の推移や有力者層の存在の推定等が挙げられる。

こうした成果からは、当該地域が居住域、耕作域という利用区分を固定化させていきながら現在の生活に適応した環境に整えていく過程も垣間見られ、現在の地域環境の形成について考えることもまた可能になろう。

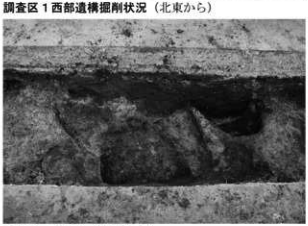
当該地域の地域史のさらなる充実のために、今回のとの山・アレキリ遺跡の発掘調査による成果が活用されれば幸いである。

写　真　図　版

調査区１西部遺構掘削状況（北東から）

ＳＫ１・ＳＤ４（北西から）

ＳＤ６（北西から）



ＳＫ１・ＳＤ５（北西から）

ＳＤ４西側肩部土層断面（北西から）

調査区２ＳＤ７付近遺構掘削状況（北東から）

写真図版２　第１次調査

調査区２Pit52付近遺構掘削状況（南西から）

ＳＨ８（北東から）

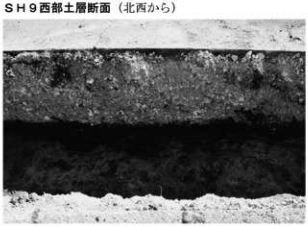
ＳＨ８カマド完掘状況（北西から）

ＳＨ８東部土層断面（南東から）

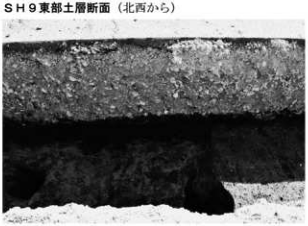
ＳＨ９（北東から）

ＳＨ９西部土層断面（北西から）

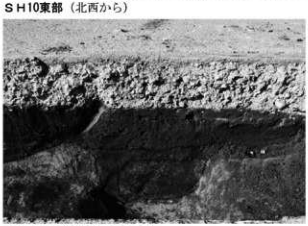
ＳＨ９東部土層断面（北西から）



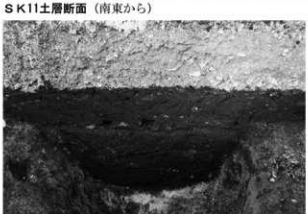
ＳＨ10東部（北西から）



ＳＨ10西部（北西から）



ＳＫ11土層断面（南東から）



ＳＫ16土層断面（南東から）

ＳＫ15（北東から）

写真図版４　第１次調査

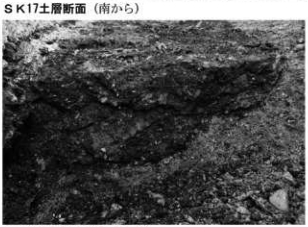
ＳＫ15東側肩部土層断面（北西から）

ＳＫ15土師器甕出土状況（西から）

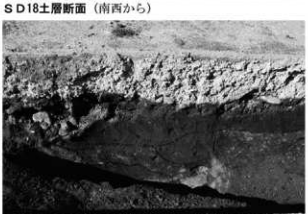
ＳＫ15土師器坏出土状況（南西から）

ＳＫ17土層断面（南から）

ＳＫ17（南西から）



ＳＤ18土層断面（南西から）



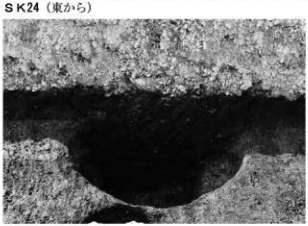
ＳＤ19土層断面（南東から）

ＳＤ22（東から）

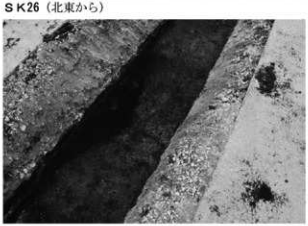
ＳＤ23（北から）

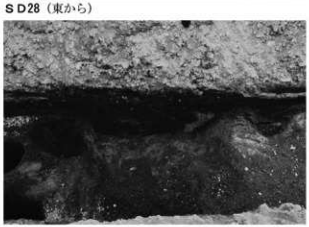
ＳＫ24（東から）

ＳＫ25（南西から）


ＳＫ26（北東から）

ＳＤ28（東から）


ＳＤ29（東から）


ＳＤ30（北東から）

写真図版６　第１次調査

調査区４西端付近遺構掘削状況（北東から）

調査区４ＳＫ38付近遺構掘削状況（北東から）

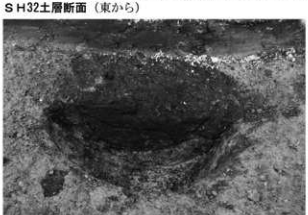
調査区４ＳＡ33付近遺構掘削状況（北東から）

調査区４ＳＫ49付近遺構掘削状況（北東から）

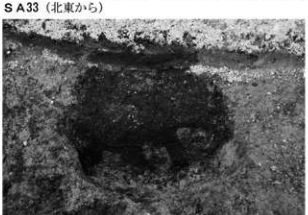
ＳＨ32（東から）

ＳＨ32土層断面（東から）

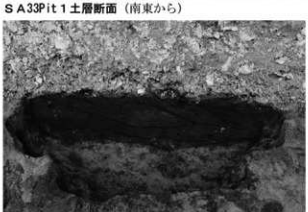
ＳＡ33（北東から）



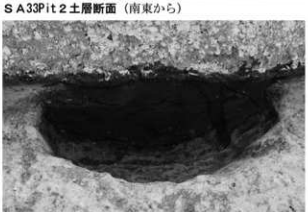
ＳＡ33Ｐｉｔ１土層断面（南東から）



ＳＡ33Ｐｉｔ２土層断面（南東から）



ＳＫ34（南東から）



ＳＫ35（北西から）

写真図版８　第１次調査

ＳＫ36（北西から）

ＳＫ38（西から）

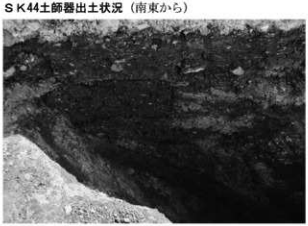
ＳＫ41西側肩部（南東から）

ＳＫ42（北西から）

ＳＫ44（北から）

ＳＫ44土師器出土状況（南東から）

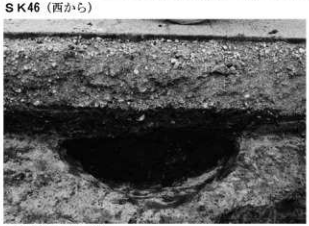
ＳＫ43（西から）



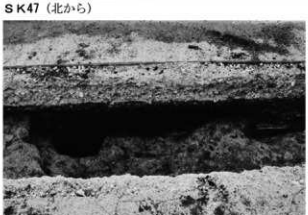
ＳＫ45土層断面（北西から）

ＳＫ46（西から）

ＳＫ47（北から）



ＳＫ48（北西から）



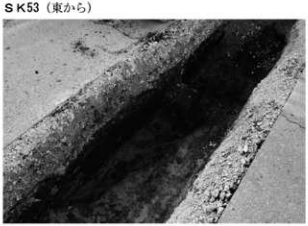
ＳＫ49・ＳＫ50（北西から）

ＳＫ51（北から）

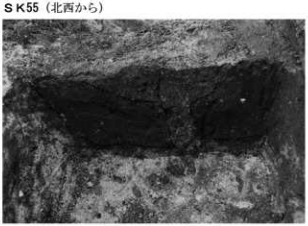
写真図版10　第１次調査

ＳＫ53（東から）

ＳＫ55（北西から）



ＳＤ56（北から）



ＳＤ56土層断面（南西から）

ＳＤ57（北西から）

ＳＤ58（北西から）

ＳＤ59（西から）

ＳＤ60土層断面（北西から）

ＳＫ54（手前）・ＳＤ60（奥）（北東から）

Ｔ４Pit17山茶碗出土状況（西から）

Ｔ４Pit52須恵器甕出土状況（南東から）

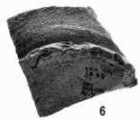
ＳＤ61（西から）

写真図版12　第１次調査出土遺物①

1

2

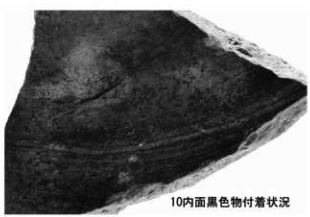
3


6

8

9

10


10内面黒色物付着状況

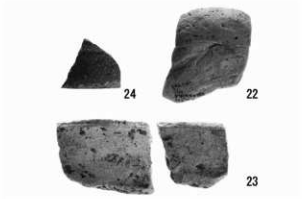
11

12

15

20

21


24
22
23

25

26

27

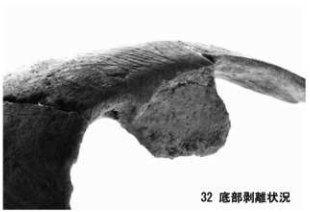
28
29

30

31

写真図版14　第１次調査出土遺物③

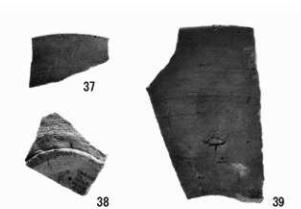
32



32 底部剥離状況

33

34



37

38

39

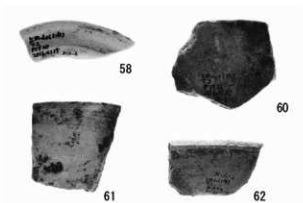
42

44

50

53

56


58
60
61
62

64

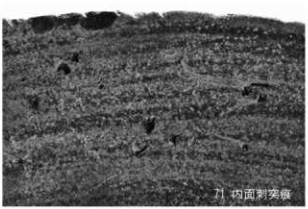
66

写真図版16　第１次調査出土遺物⑤

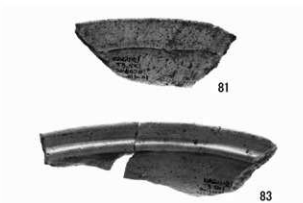
67

70

71


71 内面刺突痕

77

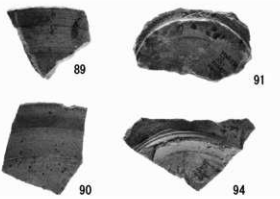

81

83

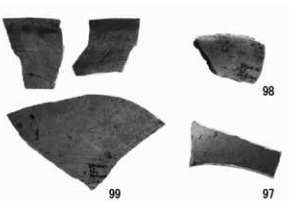
85

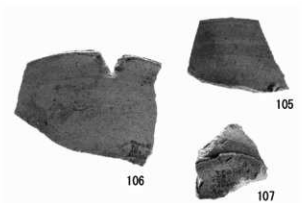
86

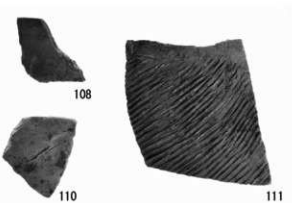
87

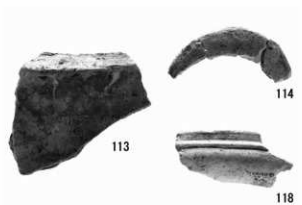

89
91
90
94

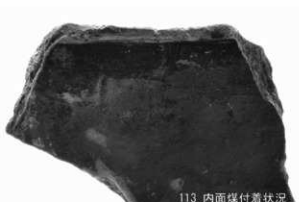
95


98
99
97


105
106
107


108
110
111


114
113
118

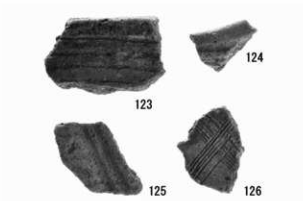

113 内面煤付着状況

写真図版18　第１次調査出土遺物⑦

119

121

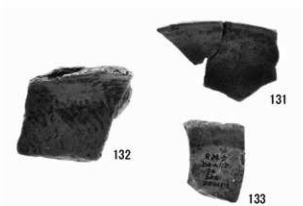
122


123
124
125
126

127

128
129

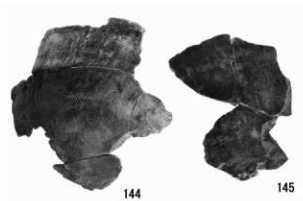
130


131
132
133

140

142

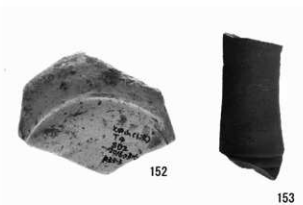
143


144

145

146

150


152

153

写真図版20　第１次調査出土遺物⑨

154

158

155

161

162

170

171

172

174

181

176

177

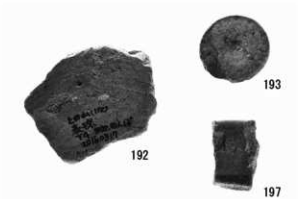
175

178

182

189

190


192

193

197

198

205

199

206

207

写真図版22　第２・３次調査

調査区５-①全景（北東から）

調査区５-③全景（北東から）

調査区５-②全景（南東から）

調査区５-④全景（北西から）

調査区５-⑤全景（北西から）

調査区５-⑥全景（南東から）

調査区５-⑤・⑦全景（南西から）

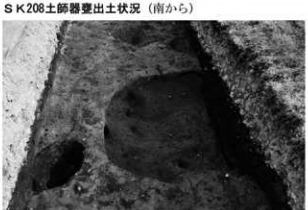
写真図版24　第２・３次調査

ＳＨ210（北東から）

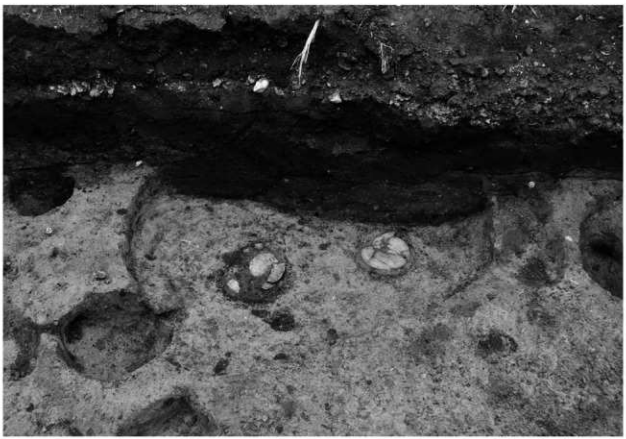
ＳＫ206・ＳＤ205（南西から）

ＳＫ208土師器要出土状況（南から）

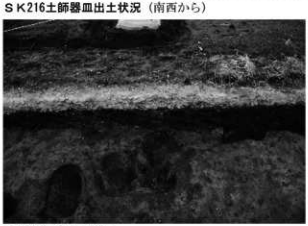
ＳＫ211（南西から）



ＳＫ213（南西から）

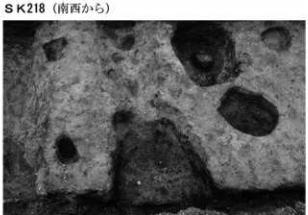


ＳＫ216土師器皿出土状況（南西から）



ＳＫ218（南西から）

ＳＫ219（南東から）



ＳＫ221（南西から）

ＳＫ226（南西から）

写真図版26　第２・３次調査

ＳＫ228（南西から）

ＳＫ229（南東から）

ＳＫ233（北東から）

ＳＫ235（北東から）

ＳＫ236土師器甕類出土状況（南から）

ＳＫ236土師器甕類出土状況（北西から）

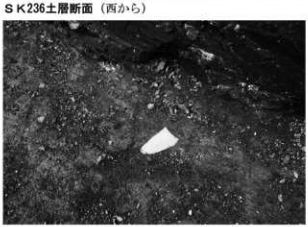
ＳＫ236土師器甕類出土状況（南東から）

ＳＫ236（北東から）

写真図版28　第２・３次調査

ＳＫ236土層断面（南西から）

ＳＫ236土層断面（西から）

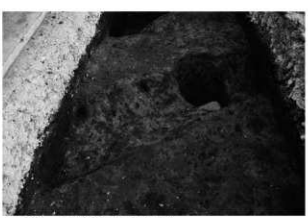


ＳＫ234青磁碗出土状況（東から）

ＳＤ201（北東から）

ＳＤ202土師器甕出土状況（北西から）

ＳＤ202（手前）・ＳＤ203（奥）（南東から）



ＳＤ204・Ｔ５Ｐｉｔ４（南西から）

ＳＤ207（奥）・Ｔ５Ｐｉｔ７（手前）（南西から）

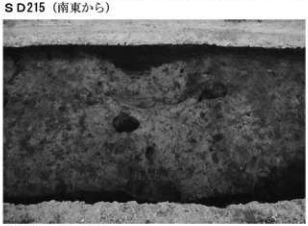
ＳＤ209（南西から）

写真図版30　第２・３次調査

ＳＤ212（南西から）

ＳＤ215（南東から）

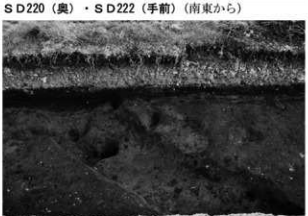
ＳＤ214（南西から）



ＳＤ217（南西から）

ＳＤ220（奥）・ＳＤ222（手前）（南東から）

ＳＤ224（奥）・ＳＤ225（手前）（南東から）



ＳＤ227（北西から）

ＳＤ230土師器鍋・山茶碗出土状況（東から）

ＳＤ230（南西から）

ＳＤ231（手前）・ＳＤ232（奥）（南西から）

Ｔ５Ｐｉｔ３土師器皿出土状況（北東から）

調査区６-①全景（北東から）

調査区６-②全景（北東から）

ＳＨ237（南西から）

ＳＨ237カマド跡（北西から）

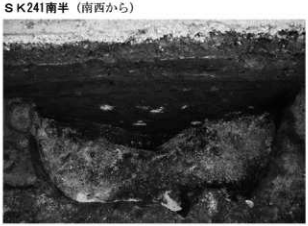
ＳＨ240土層断面（ｂ’－ｂ間）

ＳＨ239（北東から）

ＳＨ240（南西から）

写真図版34　第２・３次調査

ＳＫ241南半（南西から）

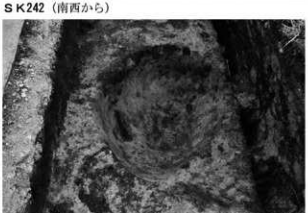


ＳＫ238（北西から）

ＳＫ243（奥）・ＳＤ244（手前）（南西から）

ＳＫ241北半（南西から）

ＳＫ242（南西から）



ＳＫ245（南西から）

ＳＫ246（左）・ＳＫ247（右）（南西から）

ＳＫ249土師器鍋出土状況（北東から）

ＳＤ248（南西から）

ＳＤ250（南西から）

ＳＤ251（南西から）

写真図版36　第２・３次調査

調査区７-①全景（南西から）

調査区７-②全景（北西から）

調査区７-④西部遺構掘削状況（北西から）

調査区７-④東部遺構掘削状況（南東から）

調査区７-③全景（南東から）

ＳＫ252（東から）

ＳＫ253（東から）

ＳＨ303（東から）

写真図版38　第２・３次調査

ＳＫ254（東から）

ＳＫ255（北西から）

ＳＫ256土層断面（東から）

ＳＫ257土師器鍋出土状況（北西から）

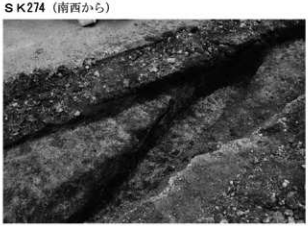
ＳＫ258（南西から）

ＳＫ257（南東から）

ＳＫ301西半（北西から）

ＳＫ302（東から）

ＳＫ274（南西から）


ＳＤ304（東から）

ＳＫ276（手前）・ＳＫ277（奥）（南西から）

ＳＤ272（南東から）

ＳＤ273土層断面（南西から）

ＳＤ273（南東から）

ＳＤ275（奥）・ＳＫ276（手前）（南東から）

写真図版40　第２・３次調査

調査区８全景（北西から）

調査区８全景（南東から）

ＳＫ261（左）・ＳＤ260（右）（南東から）

ＳＫ263（東から）

ＳＫ264（南東から）

ＳＫ266（左）・ＳＫ267（右）（北西から）

ＳＫ268（中央）・ＳＫ269（右奥）・ＳＤ270（奥）（北西から）

ＳＫ267土層断面（東から）

ＳＫ268土層断面（北東から）

ＳＤ259土師器鍋出土状況（北西から）

ＳＫ271（南東から）

ＳＤ262土師器鍋出土状況（北東から）

ＳＤ259（南から）

ＳＤ265（北西から）

ＳＤ262（北から）

210

213

213
X線透過

219

220

224

223
226

鉄滓①

222

221

231

写真図版44　第２・３次調査出土遺物②

232

234

236

237

238

240

239

240 内面

248 表

248 裏

249 表

249 裏

241

245

245

写真図版46　第２・３次調査出土遺物④

246

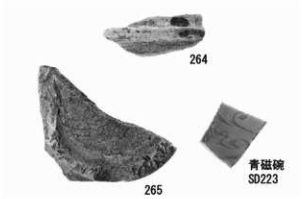
247

242

243

291

257


264
265
青磁碗
SD223

266

270

271

274

275

277

279

写真図版48　第２・３次調査出土遺物⑥

280

281

282 凹面

282 凸面

283

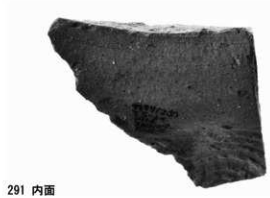
284

285

296

296
X線透過

291 外面



291 内面

302 A面

302 B面

314

315

316

321

写真図版50　第２・３次調査出土遺物⑧

322

323

327

328

329

330

331

332

333

334

337

338

342

343
344
346
354

350

351

写真図版52　第２・３次調査出土遺物⑩

352

353

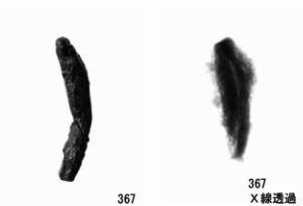
356

360

361

363

364


367

367
X線透過

369

372

374

377

378

379

381

383

写真図版54　第２・３次調査出土遺物⑫

392

396

399

400

401

402

403

404

405

414

415

417

418

436

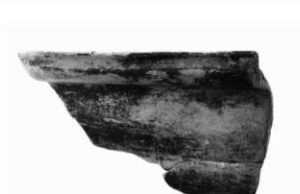
422

423

424

425

430


432

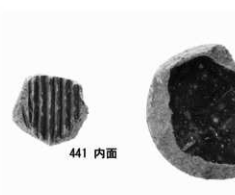
写真図版56　第２・３次調査出土遺物⑭

439 外面

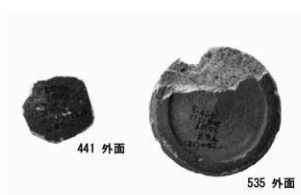
439 内面

440

448


441 内面

535 内面


441 外面

535 外面

450

455

452

464

454

467

468

472

476

477

479

481

480

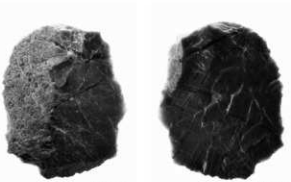
写真図版58　第２・３次調査出土遺物⑯

485 外面

485 底部外面

488

489



492 表

492 裏

493

494

498

500

505

506

507

508

511

529

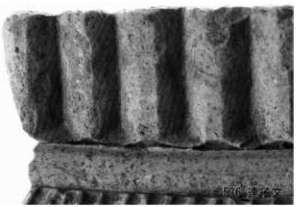
530

531

534

写真図版60　第２・３次調査出土遺物⑱

536



536
断面

青磁
SD259

539

545

報告書抄録

ふりがな	とのやま・あれきりいせき（だいいち～さんじ）ほっくつちょうさほうこく
書名	との山・アレキリ遺跡（第１～３次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３８１
編著者名	中井英幸 ・ 石井智大 ・ 谷口一彦
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　℡0596－52－1732
発行年月日	2018年　11月　30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 調査原因	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
との山遺跡	みえけんたきぐんめいわちょう 三重県度会郡 たきちょうたかつの 玉城町 中角	24461	135	34°28′14″	136°39′04″	＜第１次＞ 2015/11/26～ 2016/3/18	1,593	平成27年度特定農業用管水路対策事業
アレキリ遺跡			136	34°28′15″	136°38′51″	＜第２・３次＞ 2016/9/15～ 2017/1/23		平成28年度農業用施設アスベスト対策事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
との山遺跡 アレキリ遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	縄文土器・石鏃・剥片・磨石・敲石・台石	
		古墳時代 飛鳥時代 奈良時代	竪穴建物 土坑 溝	土師器・須恵器・土錘	
		平安時代 鎌倉時代 室町時代	柱列 土坑 溝	土師器・須恵器・ロクロ土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗・青磁・陶器・瓦・瓦質土器・釘・建具金物・銭貨	
		江戸時代	土坑 溝	土師器・陶器・磁器・土師質土器・煙管	

要約

縄文時代後期、古墳時代後期から江戸時代にかけての竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝などが検出された。

縄文時代の遺構・遺物は少なく、キャンプサイト的にこの地を利用したと考えられる。

竪穴建物は古墳時代後期から奈良時代にかけてのものが計10棟が認められた。いくつかの居住単位の存在も推測され、こうした居住単位が集まって集落が構成されたものと考えられる。また、竪穴建物と同時期と思われる大型土坑からは、煮炊具一式がまとまって出土した。

平安時代に入ると居住痕跡は見えにくくなるが、平安時代後期から再び人間活動が台地全域に広がる。中でも室町時代の遺構は現在の集落付近に多く存在し、有力者の存在を思わせる遺物も認められた。

三重県埋蔵文化財調査報告３８１

との山・アレキリ遺跡（第１～３次）発掘調査報告

－度会郡玉城町中角－

2018（平成30）年11月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　共立印刷株式会社